

三雲・井原遺跡

— 県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書 —

前原市文化財調査報告書

第92集

2006

前原市教育委員会

三雲・井原遺跡

— 県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書 —

前原市文化財調査報告書

第92集

2006

前原市教育委員会

序

前原市は、中国の史書「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の地であり、通か弥生時代より中国や朝鮮半島との交易をとおり、先進文化の受容窓口としての役割を担ってきました。中でも、三雲・井原遺跡一帯は伊都国の中枢にあたり、出土した国際色豊かな遺物や歴代の王の墓の存在が、伊都国の繁栄の様子や特殊性を今に伝えています。

今回ここに報告します三雲・井原遺跡からは、江戸時代に発見された後に所在が不明となっている井原鎌溝王墓に関連すると考えられる弥生後期の墓群が発見され、方格規矩四神鏡を含む鏡3面やガラス小玉が多数出土しました。このことは弥生時代後期における墓制のあり方を考える上で重要な発見となり、近い将来、井原鎌溝王墓の所在特定に結びつくものと期待するとともに、このような貴重な文化遺産を後世に伝えるため、遺跡の保存・整備に努めていきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり地元の方々には深いご理解とご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

平成 18 年 3 月 31 日

前原市教育委員会

教育長 菊竹 利嗣

例 言

1. 本書は県道瑞穂寺池田線道路拡幅工事に伴い、福岡県前原土木事務所より委託を受け、平成 16・17 年度に前原市教育委員会が行った三雲・井原遺跡の発掘調査の記録である。
2. 三雲・井原遺跡は前原市大字三雲、井原に所在し、約 2,144 m²にわたり遺構を確認、発掘調査を行った。
3. 遺構の実測にあたっては、平野隆之、西村康子、加藤優香、田中裕美、北海京子、神谷三枝子、川内真智子、江藤晴美、名取さつき、川淵恵子、井上智美の協力を得、江崎靖隆・榎崎直子が行った。
4. 遺構の写真は空中写真を(有)空中写真企画・櫻越夫氏に委託し、その他は江崎・榎崎が撮影した。
5. 遺物の復元・実測・製図にあたっては、江崎・榎崎の他に、平野、田中、西村、山口裕平、末益真奈美、川上辰子、石原美恵子、名取さつきの諸氏に多人なる協力を得た。
6. 遺物の写真は発掘の一部を有限会社文化財写真工房・岡紀久夫氏に委託し、他は江崎・榎崎が行った。
7. 科学分析として平尾良光、今西寿光、今津野生、比佐陽一郎の各氏に調査・分析を依頼し、報告書を執筆いただいた。また、ガラスの材質分析及び CR 撮影にあたり独立行政法人奈良文化財研究所の肥塚隆保、脇谷草一郎の両氏及び人賀克彦氏にご教示・ご協力いただいた。
8. 本書に掲載した遺構及び全体図で使用した座標は国土調査法第Ⅱ座標系に則っている。また、方位は座標北である。
9. 遺物・実測図・写真は伊都国歴史博物館にて管理・保管している。
10. 本書の執筆は江崎・榎崎が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
	Ⅰ. 調査に至る経緯	1
	Ⅱ. 調査の経過	1
	Ⅲ. 調査の組織	2
第2章	位置と環境	3
第3章	調査の概要	
	Ⅰ. 調査の概要	6
	Ⅱ. 三雲井の川 529-2 番地	
	1. 調査の概要	6
	Ⅲ. 三雲下西 526-1 番地	
	1. 調査の概要	9
	2. 中近世の遺構	9
	①溝、溝状遺構	9
	②土坑	9
	3. 弥生時代の遺構と遺物	10
	①竪棺墓	10
	②落込み	12
	Ⅳ. 三雲下西 533 番地	15
	1. 調査の概要	15
	2. 古墳・弥生時代の遺構と遺物	15
	①竪棺転用土墳墓	15
	②竪棺墓	15
	③出土遺物	19
	④上坑	22
	3. 小結	23
	4. 三雲下西 533 番地 市道確認調査	24
	①確認調査の概要	24
	②弥生時代の遺構と遺物	24
	Ⅴ. 三雲中川屋敷 478-1、479-1、537-2 番地	26
	1. 調査の概要	26
	2. 中世の遺構と遺物	26
	①大溝	26
	②土坑	26
	3. 弥生時代の遺構と遺物	27
	①落込み	27
	②溝	33
	4. 小結	34
	Ⅵ. 三雲中川屋敷 480-1 番地	35
	1. 調査の概要	35

2.	遺構と遺物	35
	①竪穴式住居跡	35
	②溝	40
3.	小結	40
VII.	三雲中川屋敷 471、482-1 番地	41
1.	調査の概要	41
2.	中近世の遺構と遺物	41
	①掘立柱建物	41
3.	古墳・弥生時代の遺構と遺物	42
	①竪穴式住居跡	42
	②土坑	45
	③掘立柱建物	46
4.	小結	46
VIII.	三雲ヤリミゾ 426 番地	47
1.	調査の概要	47
2.	遺構と遺物	47
	①包含層出土遺物	47
	②祭祀土坑	47
IX.	三雲ヤリミゾ 428、429 番地	50
1.	調査の概要	50
2.	近世の遺構と遺物	52
	①溝	52
3.	中世の遺構と遺物	52
	①土坑	52
4.	古墳時代の遺構と遺物	53
	①溝	53
	②土器溜り	53
5.	弥生時代の遺構と遺物	56
	①祭祀溝	56
	②瘞棺墓	59
X.	三雲ヤリミゾ 434 番地 (第3地点)	61
1.	調査の概要	61
2.	中世の遺構と遺物	61
	①掘立柱建物	61
3.	古墳時代の遺構と遺物	63
	①竪穴式住居跡	63
	②掘立柱建物	64
	③土坑	64
	④土墳墓	64
4.	弥生時代の遺構と遺物	65
	①瘞棺墓	65
	②土坑	65

	③溝	66
X I.	三雲ヤリミゾ 434 番地 (第 4 地点)	68
	1. 調査の概要	68
	2. 弥生時代の遺構と遺物	68
	①土坑	68
	②北側土層出土遺物	68
X II.	井原ヤリミゾ 2582、2583 番地	70
	1. 調査の概要	70
	2. 遺構と遺物	70
	①槨棺墓	70
	②木棺墓	84
	③石棺墓	106
	④七旗墓	108
	⑤土坑	111
	⑥祭祀土坑	112
	⑦大柱状遺構	126
	⑧攪乱等出土遺物	128
X III.	井原ヤリミゾ 2580、2581 番地	129
	1. 調査の概要	129
	2. 近世の遺構	129
	①近世水路	129
X IV.	三雲塚 282、283 番地、井原七夕遺跡 1095 番地	130
	1. 調査の概要	130
	2. 古墳時代の遺構と遺物	130
	①竊穴式住居跡	130
	3. その他の遺構と遺物	130
	①土坑	130
X V.	三雲井の川 530 番地	133
	1. 調査の概要	133
第 4 章	科学分析	135
	I. 青銅鏡	
	1. 福岡県前原市井原ヤリミゾ遺跡から出土した銅鏡の鉛同位体比	135
	原 彰吾、角川 茂、平尾 良光 (別府大学)	
	2. 青銅鏡の保存処理	140
	今西 寿光、越野 恵子 (株式会社京都科学)	
	II. 赤色顔料	
	福岡県前原市域出土土のイオウ同位体比	143
	今津 節生 (九州国立博物館)、南 武志 (近畿大学)	
	III. ガラス製玉類	
	前原市井原ヤリミゾ 2582、2583 番地出土ガラス玉の調査について	145
	比佐 陽一郎 (福岡市埋蔵文化財センター)	
第 5 章	総括	149

挿図目次

第1図	三雲・井原周辺遺跡分布図 (1/75,000) …… 3	第37図	S B 0 1・0 2実測図 (1/60) …… 42
第2図	三雲・井原遺跡周辺主要遺跡分布図 (1/75,000) …… 5	第38図	S B 0 3実測図 (1/60) …… 42
第3図	遺跡全体図及び東壁土層実測図 (1/150) …… 6	第39図	三雲中川屋敷 471 番地下層全体図 (1/120) …… 43
第4図	三雲・井原遺跡調査区全体図 (1/3,000) …… 7	第40図	住居跡実測図 (1/60) …… 44
第5図	1号溝状遺構実測図 (1/40) …… 9	第41図	住居跡出土遺物実測図① (1/4) …… 45
第6図	2号竪棺墓出土鏡実測図 (1/1) …… 10	第42図	住居跡出土遺物実測図② (1/4) …… 45
第7図	1号竪棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/10) …… 11	第43図	土坑及び出土遺物実測図 (1/30、1/4) …… 46
第8図	2号竪棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/10) …… 12	第44図	竪立柱建物実測図 (1/40) …… 46
第9図	落込み東壁土層断面実測図 (1/40) …… 12	第45図	三雲ヤリミゾ 426 番地全体図 (1/200) …… 47
第10図	落込み出土遺物実測図 (1/3、1/2) …… 13	第46図	包含層出土遺物実測図 (1/4) …… 47
第11図	三雲下西 5261・533 番地全体図 (1/150) …… 14	第47図	祭祀土坑実測図 (1/60) …… 47
第12図	竪棺乾川土壌墓及び棺体実測図 (1/20、1/10) …… 16	第48図	祭祀土坑出土遺物実測図① (1/4) …… 48
第13図	竪棺墓実測図① (1/30) …… 17	第49図	祭祀土坑出土遺物実測図② (1/4) …… 49
第14図	竪棺墓実測図② (1/30) …… 18	第50図	三雲ヤリミゾ 428、429 番地全体図 (1/150) …… 50
第15図	竪棺実測図① (1/8、1/12) …… 20	第51図	調査区第1地点北壁・南壁土層実測図 (1/60) …… 51
第16図	竪棺実測図② (1/12) …… 21	第52図	近世溝断面土層図 (1/30) …… 52
第17図	8号竪棺墓出土遺物実測図 (1/2) …… 22	第53図	土坑実測図及び出土遺物実測図 (1/60、1/4) …… 52
第18図	1号土坑出土遺物実測図 (1/3) …… 22	第54図	古墳時代土器掘り遺物出土状況実測図 (1/40) …… 53
第19図	2号土坑出土土器実測図 (1/3) …… 23	第55図	土器掘り遺物実測図 (1/4) …… 55
第20図	3号ピット、攪乱出土遺物実測図 (1/3) …… 24	第56図	祭祀溝実測図 (1/60) …… 56
第21図	トレンチ全体図、西壁土層断面実測図 (1/50、1/20) …… 25	第57図	祭祀土器出土状況実測図 (1/30) …… 57
第22図	三雲中川屋敷 4791、5372、4781 番地全体図 (1/200) …… 26	第58図	祭祀溝出土遺物実測図① (1/4) …… 57
第23図	大溝・土坑実測図 (1/60) …… 27	第59図	祭祀溝出土遺物実測図② (1/4、1/3) …… 58
第24図	土坑出土遺物実測図 (1/4) …… 27	第60図	1号竪棺墓実測図 (1/30) …… 59
第25図	落込み出土遺物① (1/4) …… 29	第61図	1号竪棺墓棺体実測図 (1/12) …… 59
第26図	落込み出土遺物② (1/4) …… 30	第62図	2・3号竪棺墓実測図 (1/30) …… 60
第27図	落込み出土遺物③ (1/4) …… 31	第63図	2・3号竪棺墓棺体実測図 (1/6) …… 60
第28図	落込み出土遺物④ (1/4) …… 32	第64図	三雲ヤリミゾ 434 番地 (第3地点) 全体図 (1/200) …… 61
第29図	落込み出土遺物⑤ (1/4) …… 33	第65図	S B 0 1実測図 (1/80) …… 62
第30図	S D 1 0・1 3実測図及び出土遺物実測図 (1/60、1/4) …… 34	第66図	S B 0 1出土遺物実測図 (1/4) …… 62
第31図	三雲中川屋敷 480-1 番地全体図 (1/200) …… 35	第67図	竪穴式住居跡実測図 (1/60) …… 63
第32図	住居跡実測図 (1/60) …… 36	第68図	竪穴式住居跡及び土坑出土遺物実測図 (1/4) …… 63
第33図	住居跡出土遺物実測図① (1/4) …… 38	第69図	S B 0 2実測図 (1/60) …… 64
第34図	住居跡出土遺物実測図② (1/4) …… 39	第70図	土坑墓実測図 (1/30) …… 64
第35図	S D 0 1出土遺物実測図 (1/4) …… 40	第71図	竪棺墓実測図 (1/30) …… 65
第36図	三雲中川屋敷 482-1 番地上層全体図 (1/120) …… 41	第72図	竪棺墓棺体実測図 (1/6) …… 65
		第73図	2号土坑実測図 (1/30) …… 66
		第74図	2号土坑出土遺物実測図 (1/4) …… 66

第75図	SD01 (V字溝) 実測図及び土層断面実測図 (1/60)	67	第110図	10号木棺墓実測図 (1/30)	103
第76図	SD01 (V字溝) 出土土器実測図 (1/4)	68	第111図	10号木棺墓出土土玉実測図 (1/1)	104
第77図	三雲ヤリミノ434番地(第4地点)全体図 (1/80)	69	第112図	12号木棺墓実測図 (1/30)	104
第78図	1号土坑出土土器実測図 (1/3)	69	第113図	12号木棺墓玉類出土状況実測図 (1/6)	105
第79図	第3・6層出土土器実測図 (1/3)	69	第114図	14号木棺墓実測図 (1/30)	106
第80図	1号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	70	第115図	1・2・3号石棺墓実測図 (1/30)	107
第81図	2号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/16、1/8)	71	第116図	4号石棺墓実測図 (1/30)	108
第82図	2号塚墓蓋墓坑内出土土器 (1/4)	72	第117図	1号土塚墓実測図 (1/30)	108
第83図	3号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	73	第118図	1号土塚墓玉類出土状況実測図 (1/6)	109
第84図	4・5号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	74	第119図	2号土塚墓実測図 (1/30)	110
第85図	6・7号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	75	第120図	1・2号土坑実測図 (1/30)	111
第86図	8号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	76	第121図	1・2号土坑出土遺物実測図 (1/2、1/4)	111
第87図	10・11号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/30、1/12、1/20、1/6)	78	第122図	3号土坑実測図 (1/30)	112
第88図	12号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/16、1/8)	80	第123図	1号祭祀土坑実測図 (1/20)	113
第89図	13号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/30、1/8)	81	第124図	大型甬出土状況実測図及び大型甬実測図 (1/30、1/6)	114
第90図	13号塚墓蓋出土土玉実測図 (1/1)	81	第125図	大型甬玉類出土状況実測図 (1/4)	115
第91図	13号塚墓蓋玉類出土状況実測図 (1/4)	82	第126図	1号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4、1/2)	117
第92図	14号塚墓蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)	83	第127図	2号祭祀土坑及び出土遺物実測図 (1/30、1/4)	118
第93図	1号木棺墓実測図 (1/30)	84	第128図	3号祭祀土坑実測図 (1/30)	119
第94図	1号木棺墓出土遺物及び鏡出土状況実測図 (1/4、1/6)	85	第129図	3号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4)	119
第95図	内行花文鏡実測図 (1/1)	87	第130図	上棚接合関係図 (1/40)	120
第96図	2号木棺墓出土土玉実測図 (1/1)	91	第131図	4号祭祀土坑及び出土土器実測図 (1/4、1/40)	121
第97図	2号木棺墓実測図 (1/30)	88	第132図	5号祭祀土坑実測図 (1/30)	123
第98図	2号木棺墓玉類出土状況実測図 (1/6)	89	第133図	5号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4)	124
第99図	4号木棺墓実測図 (1/30)	92	第134図	6号祭祀土坑実測図 (1/20)	125
第100図	5号木棺墓出土銅鏡実測図 (1/1)	93	第135図	6号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4、1/2)	125
第101図	5号木棺墓、銅鏡出土状況実測図 (1/30、1/4)	93	第136図	大柱状遺構出土土器実測図 (1/6、1/4、1/2)	126
第102図	6号木棺墓実測図 (1/30)	94	第137図	大柱状遺構実測図 (1/30)	127
第103図	6号木棺墓蓋及び玉類出土状況実測図 (1/8)	95	第138図	攪乱等出土遺物実測図 (1/4)	128
第104図	方格規矩四神鏡出土状況実測図 (1/4)	97	第139図	近世水路付近東堺土層図 (1/60)	129
第105図	方格規矩四神鏡実測図 (4/5)	98	第140図	三雲井282、283番地全体図、及び東堺土層図、及び出土遺物 実測図、及び井原七夕1095番地全体図 (1/150、1/4)	131
第106図	7号木棺墓実測図 (1/30)	99	第141図	出土土器実測図 (1/4)	133
第107図	内行花文鏡実測図 (1/1)	99	第142図	三雲井の川530番地(公民館)全体図 (1/150)	134
第108図	7号木棺墓蓋及び玉類出土状況実測図 (1/8)	101	第143図	三雲ヤリミノ地区調査地点及び三雲南土器位置図 (1/500)	152
第109図	8号木棺墓実測図 (1/30)	103	付図	井原ヤリミノ2582、2583番地及び2580、2581番地全体図 (1/150)	

表目次

第1表	褒棺墓一覧表	155	第4表	土槨墓一覧表	156
第2表	木棺墓一覧表	156	第5表	出土土器調査表	157
第3表	石棺墓一覧表	156	第6表	褒棺墓観察表	168

グラフ目次

グラフ1	三雲下西 533 番地 褒棺墓主軸方位	23	グラフ5	井原ヤリミノ 2582、2583 番地 ガラス玉類産数分布	153
グラフ2	井原ヤリミノ 2582、2583 番地 褒棺墓埋地角度	151			
グラフ3	井原ヤリミノ 2582、2583 番地 褒棺墓主軸方位	151			
グラフ4	井原ヤリミノ 2582、2583 番地 木棺墓主軸方位	151			

図版目次

図版1	井原ヤリミノ 2582、2583 番地出土ガラス玉類	図版8-4	13号褒棺墓出土玉類①
図版2	井原ヤリミノ 2582、2583 番地出土ガラス玉類	図版8-5	13号褒棺墓出土玉類②
図版3	井原ヤリミノ 2582、2583 番地全景	図版8-6	10号木棺墓出土玉類
図版4-1	1号木棺墓周辺遺構	図版8-7	12号褒棺墓出土玉類
図版4-2	3~5号祭祀土坑周辺遺構	図版8-8	1号土槨墓出土玉類
図版4-3	1号祭祀土坑周辺遺構	図版8-9	3号祭祀土坑出土玉類
図版4-4	6号木棺墓	図版8-10	3号土坑山土玉類
図版4-5	7号木棺墓	図版8-11	2号褒棺墓出土破鏡
図版5-1	1号木棺墓内朱塗積状況	図版9-1	三雲下西 526-1 番地全景
図版5-2	1号木棺墓内行花文鏡出土状況	図版9-2	1・2号褒棺墓
図版5-3	6号木棺墓方格鏡出土状況	図版9-3	1号褒棺墓
図版5-4	7号木棺墓内行花文鏡出土状況	図版9-4	破鏡出土状況
図版5-5	12号褒棺墓玉類出土状況	図版9-5	落込み
図版5-6	13号褒棺墓玉類出土状況①	図版9-6	三雲下西 533 番地全景
図版5-7	13号褒棺墓玉類出土状況②	図版9-7	三雲下西 533 番地全景
図版5-8	2号祭祀土坑土層	図版9-7	1号褒棺墓上褒
図版6	6号木棺墓出土方格鏡四神鏡	図版10-1	褒棺転用土槨墓
図版7-1	6号木棺墓出土玉類	図版10-2	2・3号褒棺墓
図版7-2	1号木棺墓出土内行花文鏡	図版10-3	4号褒棺墓
図版7-3	7号木棺墓出土内行花文鏡	図版10-4	5号褒棺墓
図版7-4	7号木棺墓出土玉類	図版10-5	6号褒棺墓
図版7-5	2号木棺墓出土玉類	図版10-6	7号褒棺墓
図版7-6	4号木棺墓出土玉類	図版10-7	8号褒棺墓
図版8-1	5号木棺墓出土銅鏡	図版10-7	石戈出土状況
図版8-2	12号木棺墓出土玉類	図版11-1	9号褒棺墓
図版8-3	1号祭祀土坑大型壺出土玉類	図版11-2	10号褒棺墓

- 図版11-3 三雲下西533番地 市道確認調査地点全景
- 図版11-4 三雲中川屋敷478-1,479-1,537-2番地全景
- 図版11-5 三雲中川屋敷478-1,479-1,537-3番地全景
- 図版11-6 土器溜り
- 図版11-7 土器溜り
- 図版11-8 SD10・13
- 図版12-1 三雲中川原敷480-1番地全景
- 図版12-2 住居群北
- 図版12-3 住居群南
- 図版12-4 3号住居跡
- 図版12-5 4号住居跡
- 図版12-6 5号住居跡
- 図版12-7 8号住居跡
- 図版12-8 10号住居跡
- 図版13-1 三雲中川原敷471,482番地全景
- 図版13-2 SB01・02
- 図版13-3 SB03
- 図版13-4 1号住居跡
- 図版13-5 2号住居跡
- 図版13-6 3号住居跡
- 図版13-7 4号住居跡
- 図版13-8 掘立柱建物
- 図版14-1 三雲ヤリミノ426番地全景
- 図版14-2 祭祀土坑
- 図版14-3 祭祀土坑出土土器近景
- 図版14-4 三雲ヤリミノ428,429番地全景
- 図版14-5 第1地点全景
- 図版14-6 第2地点全景
- 図版14-7 第1地点土器溜り土篩器出土状況
- 図版14-8 第1地点鉄刀出土状況
- 図版15-1 第1地点祭祀溝遺物出土状況
- 図版15-2 第2地点1~3号竪棺墓
- 図版15-3 1号竪棺墓
- 図版15-4 2号竪棺墓
- 図版15-5 3号竪棺墓
- 図版15-6 三雲ヤリミノ遺跡434番地(第3地点)全景
- 図版15-7 SB01
- 図版15-8 1号住居跡
- 図版16-1 1号土坑
- 図版16-2 1号土坑墓
- 図版16-3 4号竪棺墓
- 図版16-4 2号土坑
- 図版16-5 SD01(V字溝)
- 図版16-6 三雲ヤリミノ遺跡434番地(第4地点)全景
- 図版16-7 北壁土層
- 図版16-8 1号土坑
- 図版17-1 1号竪棺墓
- 図版17-2 2号竪棺墓
- 図版18-1 8号竪棺墓
- 図版18-2 12号竪棺墓
- 図版19-1 13号竪棺墓
- 図版19-2 3号竪棺墓
- 図版19-3 4号竪棺墓
- 図版19-4 5号竪棺墓
- 図版19-5 6号竪棺墓
- 図版20-1 7号竪棺墓
- 図版20-2 11号竪棺墓
- 図版20-3 14号竪棺墓
- 図版20-4 近世水路
- 図版20-5 1号木棺墓
- 図版21-1 4号木棺墓
- 図版22-1 5号木棺墓
- 図版22-2 10号木棺墓
- 図版23-1 12号木棺墓
- 図版23-2 14号木棺墓
- 図版23-3 1号石棺墓
- 図版23-4 2号石棺墓
- 図版23-5 3号石棺墓
- 図版23-6 4号石棺墓
- 図版23-7 1号土坑墓
- 図版23-8 2号土坑墓
- 図版24-1 1号祭祀土坑① 人型甕出土状況
- 図版24-2 1号祭祀土坑②
- 図版24-3 2号祭祀土坑
- 図版24-4 3~5号祭祀土坑
- 図版24-5 6号祭祀土坑
- 図版25-1 大柱
- 図版25-2 1,2号土坑
- 図版25-3 3号土坑
- 図版25-4 井原ヤリミノ2580,2581番地全景
- 図版25-5 三雲埜282,283番地全景
- 図版25-6 東壁土層
- 図版25-7 竪穴式住居跡
- 図版25-8 住居内高環

第1章 はじめに

I. 調査に至る経緯

平成16年4月9日付けで、福岡県前原土木事務所から前原市大字三雲・井原地内の県道瑞梅寺池田線の道路拡幅工事約4,000mに関して埋蔵文化財発掘の通知(文化財保護法第57条第3項、現在第94条第1項)が前原市教育委員会に提出された。平成16～17年度の計画では、全体計画延長1,830mのうち840mが対象となっていた。これを受けて、前原市教育委員会では、申請地が重要遺跡である三雲・井原遺跡を南北に縦断するため、確認調査の必要性を認めた。

確認調査は、工事が最初に行われる北側からはじめ、約2週間かけて行った。その結果、谷部が認められたため調査から除外した三雲ヤリミゾ436、437番地以外の対象地において、弥生時代～中世にかけての遺構が密に分布していることが明らかになった。

この確認調査の結果を踏まえて、福岡県前原土木事務所と協議を重ねた結果、5月に発掘調査委託の合意が得られたので、約2,144㎡の記録保存のための発掘調査を行った。

II. 調査の経過

県道瑞梅寺池田線道路拡幅工事は、総延長840m、路線幅6mで、三雲・井原遺跡を南北に縦断する形で計画され、谷部を除けばそのほとんどが調査対象地となった。しかしながら、対象地の現況は、耕作地や未買収地が点在しているため、発掘調査の可能な条件が整った箇所から行うことで合意に至った。そこで、調査対象地を便宜的に1～10区に振り分けて、4区から先行して調査を実施した。なお、本報告では、既刊の三雲・井原遺跡報告書に従って区名表記ではなく遺跡名で表記を行うが、遺物の管理は区名で行っている。

区名	遺跡名	区名	遺跡名
1	三雲下西526-1番地	6	三雲ヤリミゾ426番地
2	三雲下西533番地	7	三雲ヤリミゾ428、429番地(第1・2地点) 三雲ヤリミゾ434番地(第3・4地点)
3	三雲中川屋敷478-1、479-1、537-2、番地	8	井原ヤリミゾ2582、2583番地(北) 井原ヤリミゾ2580、2581番地(南)
4	三雲中川屋敷480-1番地	9	三雲堺282、283番地
5	三雲中川屋敷471、482-1番地	10	井原七夕1095番地

Ⅲ. 調査の組織

平成 16 年度から平成 17 年度にかけて実施した三雲・井原遺跡の調査組織は以下の通りである。

道路建設関係 福岡県前原土木事務所

道路課建設係長	宇都宮道明
同 主任技師	山崎淳一郎

発掘調査（平成 16、17 年度）

調査主体 前原市教育委員会

三雲遺跡等調査指導委員会

（平成 16 年度）

委員長	西谷正
委員	工業普通、町田章、柳田康雄、橋口達也、小西龍三郎

（平成 17 年度）

委員長	西谷正
委員	工業普通、田辺征夫、柳田康雄、橋口達也、小西龍三郎

総括	教育長	菊竹利嗣
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信

文化課長補佐	
兼文化振興係長	中村鉄弥
文化課文化財係長	岡部裕俊

庶務	同 主事	中野幸功
調査	同 主事	江崎靖隆、横崎夏子

本調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々をはじめ多くの方々からの御助言、御支援をいただいた。明記して深謝いたします。

西谷正、武末純一、高倉洋彰、大塚初軍、相山林繼、藤田等、石野博信、宮本長二郎、土生田純之、榎宜口佳男、工業普通、樋口隆康、藤丸昭八郎、西健一郎、溝口孝司、寺澤薫、下條信行、森田稔、桃崎祐輔、肥塚隆保、脇谷草一郎、大賀克彦、小松謙、常松幹雄、宮井善朗、久住猛、菅波正人、仁田坂聡、溝上貴穂（敬称略、順不同）

なお、柳田康雄氏（前九州歴史資料館副館長、歴史学博士）には、ご多忙中にも関わらず調査中に幾度も現場に足を運んでいただき、多大なるご指導ご鞭撻を賜りました。心より感謝申し上げます。

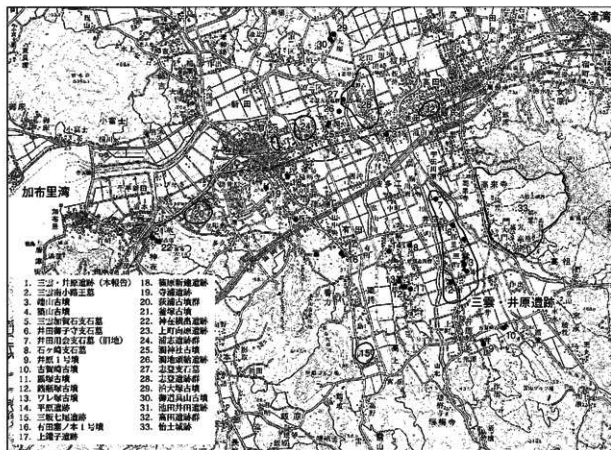
第2章 位置と環境

三雲・井原遺跡は、市街地の南西約7 kmに位置する。瑞梅寺川水系の瑞梅寺川と川原川に挟まれた標高30～44 mの肥沃な扇状地上にあり、遺跡の範囲は東西約500 m、南北約700 mに及ぶ。

地質は扇状地独特の様相を呈しており、地山の質が場所によって変化に富むのが特徴である。今回の南北に長い調査区においても、やはり地点によって地山の変化が著しく、とくに層層と褐色土の混成上や黒褐色土から切り込む遺構の検出は大変難しかった。

さて、三雲・井原遺跡は、過去の調査により縄文時代から中世までの集落遺跡であることが確認されているが、なかでも弥生時代の遺構・遺物については、「魏志倭人伝」に登場する伊都国の拠点的地域としての繁栄を物語る資料として特に注目されている。

まず、「伊都国」成立以前の状況を見ると、三雲・井原遺跡の中でも北側において最初に集落の形成がうかがえる。川原川の氾濫源に近い井田用会、井田御子守、石ヶ崎、三雲加賀石の近接する地域に集中的に支石墓が分布しているが、過去の加賀石(1-9,22,23)¹⁾、仲田(1-14)²⁾地区の調査では、支石墓、雲梯墓の東側に住居群が確認されており、支石墓を中心とした集落展開が想定される。この地域の支石墓は、上石が巨大であり、また単体で存在することが特徴のひとつであるが、井田用会支石墓で碧玉製管玉22点、朝鮮系磨製石鏃1点が、また三雲加賀石支石墓から朝鮮系磨製石鏃8点が出土しており、早い時期から朝鮮半島系の副産品を有することは特に重要である。恐らく、この頃すでに朝鮮半島との交易が行われ、渡来人との交渉の中で先進文化を急速に受容していったのであろう。その先進性こそが、以下に述べるように伊都国が王都として発展し、対外交渉の拠点となっていく基盤となったと考えられる。



第1図 三雲・井原周辺遺跡分布図(1/75,000)

伊都国が最初に文字で登場する『魏志倭人伝』では、3世紀頃の伊都国について次のように記している。

〔略〕東南陸行五百里にして伊都国に至る。官を爾支と曰い、副を漚誤柄栗魁と曰う。千（方か）余戸有り。世々土有るも、皆女王国に統属す。郡使の往来、常に駐まる所なり。〔略〕女王国以北には特に一大車を置き、諸国を檢察せしむ。諸国之を畏服す。常に伊都国に治す。〔略〕

このように、当時の伊都国は中国常都との往来、つまり国家間の公的な往来の際には必ず通らなければならない地であり、しかも諸国が畏まるほどの権力をもった交易検査機関……大率が存在したことで、他の国々から一目置かれる特別な国であったことがうかがえる。瑞梅寺川の下流に今津湾、雷山川の下流に加布里湾と、糸島半島の東西に入り江を擁する地理的にも恵まれた環境と、縄文時代以来培われてきた航海技術をもって、中国・朝鮮半島との往来が頻繁に行われていた光景が目に浮かぶ。

そして特筆すべきは、この地に歴代の王が君臨していた事実である。「世々土有り」の記述は伊都国にのみ見られるもので、実際に発掘調査により三雲南小路王墓と平原王墓の所在が明らかとなっている。

三雲南小路下墓の発見は江戸時代文政5（1822）年に遡り、前漢鏡35面をはじめ、銅剣、銅戈、朱が入った小壺、ガラス甕等が発見されている。また発見当時の記録から、推定2m以上の盛土を有する墳丘墓であったことが想定されている。後の昭和49・50年度の福岡県教育委員会の調査により、所在地および1号棺と2号棺が確認され、また平成6年度以降の前原市教育委員会の調査で周溝を検出、推定で31×32mの大きさを誇る墳丘墓と判明した。時期は今から約2,000年前の弥生時代中期末葉とされている。

平原王墓は三雲南小路下墓の北西約1.4kmの曾根丘陵上に位置する。昭和40年の畑開墾中に偶然発見された。これを受けて原出大六・人神邦博氏を中心に緊急調査が実施された結果、方形周溝墓中央に設置された割竹形木棺墓の棺内外から、超大型の内行花文鏡5面を含む計40面の銅鏡を筆頭に、素環頭大刀1本や多数のメノウ管玉、ガラス管玉、ガラス連玉など、下の絶対性を示す華やかな副葬品が出土した。時期は今から約1,800年前の弥生時代後期終末と考えられる。

そして、三雲南小路下墓と平原下墓との空白の200年の間に存在したと推定されているのが、江戸時代の天明年間（1781～1788）に発見され、その後所在不明となっている片原鐘溝王墓である。これは当時、農民によって偶然発見されたものであるが、江戸時代文政年間（1819～1828）に記された黒田藩の国学者・青柳種信の聞き書きによると、干ばつにより水田への水の供給が滞った頃、怡土郡片原村の農民・次市が、三雲村との村境にあった鐘溝で溝の修理をしていたところ、その岸から壺が発見された。その壺を掘り出したところ、中からは大量の朱とともに、銅鏡片や鍔のようなもの、刀剣の類が見つかったという。恐らくこの壺というのは、弥生時代後期に糸島地域で採用された壺を用いた裏棺墓のことであろう。種信が当時散逸していた銅鏡片を集めて拓本に採っているが、21面分と推定されるすべての銅鏡が後漢鏡である方格規矩鏡であり、壺棺墓に朱とともに副葬されていたことがわかる。この他、種信は巴形銅器の拓本もあわせて記録している。

この片原鐘溝王墓の時期を巡っては諸説ある。というのは、現在これら出土品は全て所在不明であり、壺（壺）の形態も定かではない。そのため時期を推測する上で唯一の資料が種信の記録となっており、その解釈の仕方により様々な想定がなされているのである。通説では方格規矩鏡の文様から、弥生時代後期初頭～前葉とされているが、柳田康雄氏は方格規矩鏡の中で1枚新相の鏡が含まれることを指摘し、弥生時代後期中葉に想定、また高橋龍彦氏は巴形銅器の幅巾を行い、弥生時代後期後葉～終末と想定している。

前原市教育委員会では、このヴェールに包まれた井原鐘溝王墓の所在と時期を確定するために、精力的に発掘調査を行ってきたが、これまでに十分な成果を得ることができなかった。しかし、この度の県道拡幅に伴う発掘調査により、まさに旧三雲村との境である井原ヤリミノ地区を調査する機会を得、南北100mの間で30丘を超える数の弥生時代後期の墓群を検出することができた。その中には、方格規矩鏡4面、銅鏡1面のほか、内行花文鏡2面、7,500個を超えるガラス玉など、貴重な副葬品をもつ木棺墓、裏棺墓が含まれる。このことは、直技的な井原鐘溝王墓の発見には至らなかったものの、当時の集落の中での墓域のあり方、墓の構成、副葬品の状況等がわかる重要な発見となり、肝心の王墓の発見にむけて大きく前進したといえよう。

1 発掘調査報告 1980 『三雲遺跡』福岡県文化財研究所報告第58号、福岡県教育委員会
 2 発掘調査報告 1981 『三雲遺跡』福岡県文化財研究所報告第60号、福岡県教育委員会



第2図 三雲・井原遺跡周辺主要遺跡分布図 (1/7,500)

※白抜き部分は遺跡推定地
■今回報告する調査箇所

第3章 調査の概要

I. 調査の概要 (第4図)

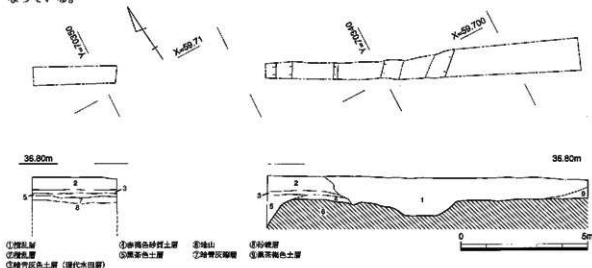
今回の調査は、結果的に三雲・井原遺跡を縦断する幅4mのトレンチ調査を行うような形態となった。これまで、部分的なトレンチ調査に限られた資料の中で地形や集落構造の復元を行い、かなりの部分で推測の域内によるものであったが、今回の南北に長い調査によって各時期における遺構の広がりや旧地形がある程度復元できるようになり、貴重な考古学的成果をもたらしたといえる。

主な調査成果を北から南に観察すると、まず瑞梅寺川の氾濫原に位置する三雲井の川 529-2 番地では北端で北へ落ち込む地形の肩部を検出した。続く三雲下西 526-1、533 番地は墓域で、時期は弥生時代中期中葉、および古墳時代前期である。533 番地で南への落ち込みを確認し、続く三雲中川屋敷 479-1、537-2、478-1 番地で落込み及び日台地を検出し、落込み範囲が概ね判明した。旧台地上の三雲中川屋敷 480-1 及び 471、482-1 番地には弥生時代終末～古墳時代前期の集落が展開する。続く三雲ヤリミノ 426 番地以南では弥生時代中期中葉の環溝墓群と中期後葉～末葉の祭祀遺構やV字溝が検出され、南小路王墓との関連がうかがえる。井原ヤリミノ 2582、2583 番地では100mの間に弥生時代後期の墓跡が多数見つかったが、その北は谷状の地形を呈し、南は遺構が存在しないことから、墓域の南北域を想定することができた。

II. 三雲井の川 529-2 番地

1. 調査の概要 (第3図)

本調査は、平成15年度に行われた渠道瑞梅寺池田線道路拡幅工事に伴う発掘調査である。当該地の東隣地である三雲井の川遺跡 530 番地（現在三雲公民館）では、遺構の存在が確認されたことに加え、北側には瑞梅寺川の氾濫原が存在することが想定されたため本調査を行った。発掘調査は平成15年9月から重機を投入、A、B 2ヶ所のトレンチを設定した。調査面積は16㎡である。その結果、A地点では土層図で示しているように、すでに公民館建設の際の盛土造成によって遺構面が大きく削られている。（第1層）また、既存の道路によっても削平を受けており、遺構は皆無の状態であった。弥生時代の遺構面は第4層の茶褐色砂質土層で、標高35.580mであった。調査区北側では落込み部分を確認でき、谷の始まりと考えられる。埋土からは弥生時代中期の土器が出土している。B地点では砂礫層が検出されており、瑞梅寺川の氾濫原となっている。



第3図 遺跡全体図及び東壁土層実測図 (1/150)

Ⅲ. 三雲下西 526 - 1 番地

1. 調査の概要

本調査は、三雲井の川遺跡（現在三雲公民館）の南隣地に位置する。三雲下西遺跡の 526-1 番地と 533 番地は隣地であったが、境界にブロック塀があったことから、別々の調査を行っている。主な遺構は、弥生時代中期初頭～前葉の落ち込み、古墳時代の墓棺墓 2 基、中近世にかけての溝 1 条、溝状遺構 1 基、土坑 3 基を検出した。当該地はすでに盛土造成が行われており、遺構面は、現地表面から約 1 m 前後であった。調査期間は平成 16 年 8 月～10 月まで行われ、調査面積は 63 m²である。

2. 中近世の遺構

中近世の遺構は中世の溝状遺構 1 基、近世の溝 1 条、土坑 3 基を検出したが、近世の遺構は紙面の都合上全体図に表示し、その出土遺物に関しては割愛する。

①溝、溝状遺構

1号溝状遺構（第5図）

調査区北端で検出された遺構で、長さ 2.8 + a m、幅 0.64 m の長方形の掘り方に柱穴と考えられる掘り方が 2 基検出されたため、布掘り状の掘立柱建物の一部と考えられるが、調査区の関係上その広がりについては、確認できなかったため、溝状遺構として報告する。1号柱穴は長さ 0.92 m、幅 0.52 m の歪な楕円形で、深さ 40 cm を測る。2号柱穴は、検出長 0.64 m、幅 0.28 m の円形で、深さ 50 cm を測る。柱間寸法は約 1.3 m を測る。出土遺物が全く無いが、埋土の色調等から中世と考えられる。

1号溝

調査区の東側で検出された L 字に曲がる溝である。幅約 20 cm、深さ約 20 cm で調査区外に延びる。土師皿、陶磁器などが出土している。

②土坑

土坑については 3 基確認されたが、いずれも近世に属し廃棄土坑として使用されたと考えられる。

1号土坑

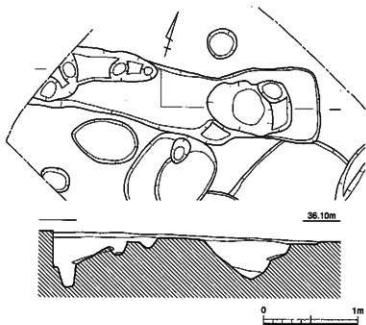
落込み状遺構を切って造られた土坑で、長さ 2.2 m、幅 1.6 m、深さ 32 cm の歪な楕円形を呈する。共に、埋土は灰褐色土で、土師皿、陶磁器、播鉢などが出土している。

2号土坑

1号土坑同様、落込み状遺構を切る土坑で、長さ 2.62 m、幅 1.52 m、深さ 18 cm を測る。歪な楕円形を呈し、やはり土師皿、陶磁器、播鉢などが出土している。

3号土坑

1号墓棺墓と切っている土坑である。長さ 2.94 m、幅 1.9 m、深さ 15 cm を測る。土師皿、陶磁器が出土している。



第5図 1号溝状遺構実測図(1/40)

3. 弥生時代の遺構と遺物

① 塚棺墓

1号塚棺墓 (第7図) (図版 9-2・3)

調査区のほぼ中央に位置する大形単棺である。後世の削平によって棺の半分を破壊されている。墓壇は、1.3 m × 0.83 m で、棺体ぎりぎりに掘削され、楕円形を呈する。27°の埋葬角度で挿入される。口縁部には木蓋の痕跡があり、木蓋の外側には黄褐色粘土による目張りとなされている。棺内に充填した崩落土からは赤色顔料が認められたが、棺底には付着は無く、副葬品も確認できなかった。主軸方位は N-11°-E。

1号塚棺 (第7図) (図版 26)

く字に口縁が外反する長胴形の大形棺。口縁の屈曲は弱く、胴部から底部にかけて強くすぼまる。底部は平底状に見えるが、作り自体が粗く、強い指頭圧感によって凹凸が著しい。器面調整は内外共に細かい刷毛目が使われており、同一工具である。外面は頸部～底部にかけて縦・斜方向の刷毛目、内面は口縁部～底部にかけて、縦・斜方向の刷毛目と横方向の刷毛目を交互に施している。頸部～底部にかけて、6条の扁平な突帯を貼付し、多条化している。突帯自体は、ヘラ状工具によって縦に形成され、厚さがなく痕跡的であり、歪みも大きい。

2号塚棺墓 (第8図) (図版 9-2・3)

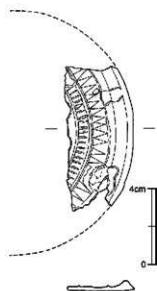
1号塚棺墓と東側に隣接して造られた塚棺墓である。墓壇は、1.6 m × 0.55 m の長方形プランを呈する。二重口縁帯を分割して、口縁部～胴上位 (B) と在地系の大形塚棺 (A) とを組み合わせて、残った胴中位～底部 (C) に呑口式で三連棺のように組み合わせている。中央には、東西に後世の掘削が塚棺を破壊していたが、その北側に目張りの黄褐色粘土が確認できたため、ここが A と B の合口箇所であったと考えられる。副葬品は破鏡が1面出土している。鏡は鏡面を上に向けた状態で、C 棺底から 1 cm 程度浮いた状態で検出されており、棺内には崩落土が充填していた。また、鏡出土位置から南に 18 cm の棺底には、赤色顔料が付着しており、本来鏡がこの位置にあったと考えられる。主軸方位は N-26°-W である。

2号塚棺 (第8図) (図版 26)

上棺 棺に使用された大型二重口縁帯で、底部は欠損する。蓋の上部と下部は接合点が見当たらないが、復元すると、長胴形で器高は 60 cm 以上ある。肩が張り、頸部から直立、口縁部が外反する。口縁端部は、指押さえによりわずかに凹状となる。器面調整は、外面胴部は縦方向の刷毛目、胴下位は刷毛目の後ナデを施す。内面は、口縁～頸部にかけて強いヨコナデ、胴部はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げる。

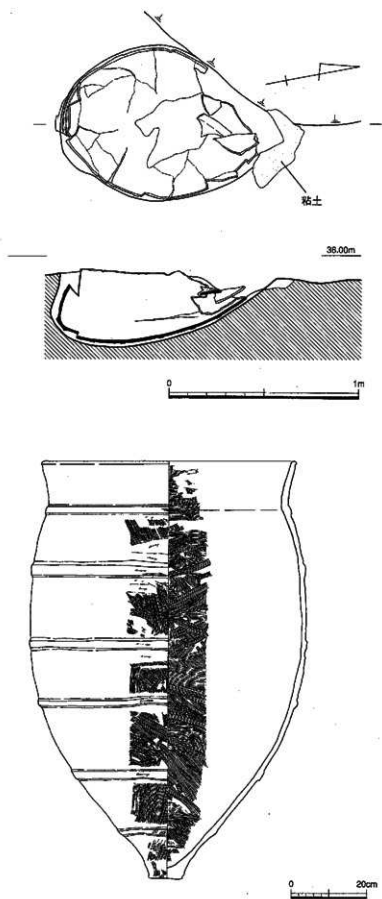
下棺 胴上位～中位にかけて残存する大型塚。胴上位に扁平突帯を貼付するが、ヘラ状工具で粗く成形され、表面にヘラ工具による刻目が不規則に施される。器面調整は、外面胴上位から斜め方向の刷毛目、中位で横方向の刷毛目、内面は斜め方向の刷毛目の刷毛目が施される。刷毛目は、粗いもので内外同一工具である。

出土遺物 (第6図、図版 9-4) 下棺内床面から出土した銅鏡片で、鏡面を上にして副葬されている。外区の 1/4 程度の残存で、復元直径 6.6 cm の小型鏡である。鏡の文様構成は、外側から幅 0.6 cm の三角縁、幅 0.4 cm の鋸歯文帯、幅 0.3 cm の直交櫛歯文帯となる。鏡の割口は研磨され、「手ずれ」によって、三角縁や三角縁の破面は丸みが生じている。鋸歯文帯の内側には、穿孔の痕跡が確認でき、破鏡として使用されている。鋸歯文帯、櫛歯文帯にはベンガラが付着している。鏡式は、三角縁で鋸歯文帯、直交櫛歯文帯を持つものに飛禽鏡の可能性はあるが、断定はできない。

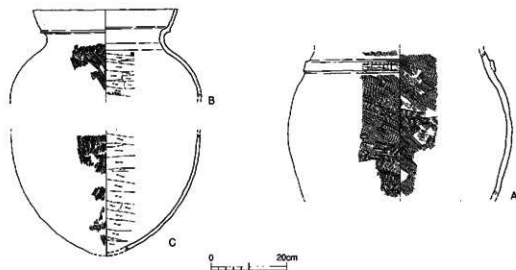
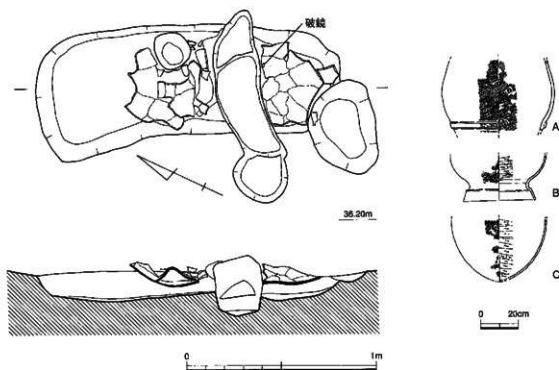


第6図 2号塚棺墓出土鏡実測図 (1/1)

※アミ部分は赤色顔料付着



第 7 图 1 号嬰棺墓及C棺体夹测图 (1/20、1/10)



第8図 2号槨棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/10)

②落込み (第9図、図版9-5)

調査区中央から南側にかけては、黄褐色の地山が緩やかに下がって落込み状となっており、弥生中期初頭～前葉の遺物が主体として包含していた。調査区南東端で検出された南から東へと曲がる立ち上がりは、調査区外に延びていたが、南隣地の三雲下西遺跡 (533 番地) の調

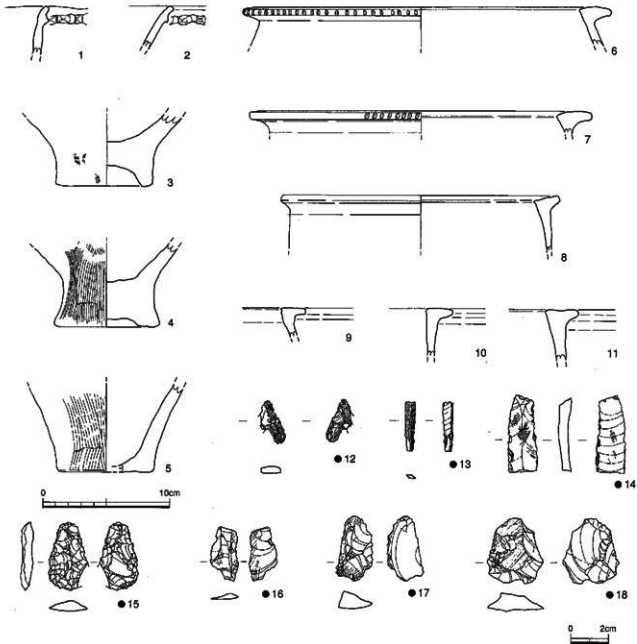


第9図 落込み東壁土層断面実測図 (1/40)

査において、黄褐色粘質土の地山が調査区北端まで及んでいたため、533番地と526-1番地間での立ち上がりが想定できる。深さは32cmと浅いが、周囲の小児甕棺墓は上面が削平されている状況からすると深さはまだあったのであろう。東壁の土層観察では、3～7、9層（茶褐色粘質土層～茶褐色砂礫層）が落ち込みの埋上であり、落ち込み自体は、自然堆積による埋没状況を示している。3層は弥生時代中期中葉の遺構面であり、周辺の甕棺群はこの埋没後に営まれている。落ち込みからの出土遺物のほとんどが細片で図示できるものは少ない。

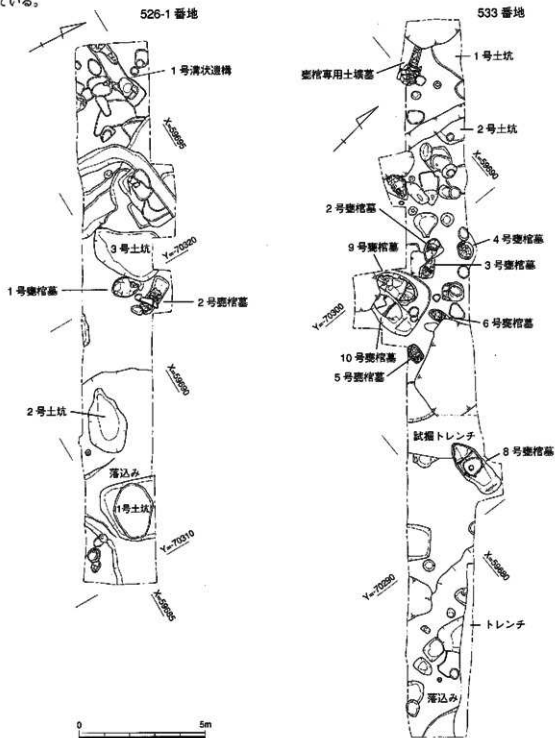
出土遺物（第10図1～18、図版26）

1, 2は口縁下に刻目突帯を1条巡らす甕である。細片であったため、径の復元まで至っていない。3～5は甕の底部片。3は上げ底状で、風化が著しく、刷毛目がわずかに残る。4は若干の上げ底状、5は平底である。6～8は、甕の口縁部片で、口径復元可能なもの。6は口唇部に刻目をもつ甕。口縁が逆L字状わずかに発達、内外面ともにナデ調整。7も口唇部に刻目をもつ甕。若干内傾する。9～11は甕の口縁部片で口径復元不可能なものである。12～18は石器。12は、凹基式の打製石鉄片、全面に調整刻痕が及ぶ。



第10図 落ち込み出土遺物実測図（1/3、●は1/2）

全長 1.3cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.84 g を測る。13 は石針で、残存長 2.6cm、幅 0.5cm、厚さ 0.2cm を測る。先端部を欠損している。両面の片側縁に調整を加え、刃部を作り出す。先端部にいくほど細くなっている。重さは 0.38 g。14 は縦長剥片。全長 4.1cm、幅 1.5cm、厚さ 0.6cm、重さ 3.56 g を測る。15 は匏状石器または撻器か。左右対称で下方に向けて広がっている。両面ともに下方に調整を加え、刃部を作り出す。全長 3.7 cm、幅 2.1cm、厚さ 0.7cm、重さ 4.02 g を測る。16 は縦長剥片。全長 2.9cm、幅 1.5cm、厚さ 0.3cm、重さ 1.08 g を測る。18 は石核で、一部自然面を残す。3 回の剝離調整が行われ、打点の調整の後剝離されている。全長 3.5cm、幅 3.0cm、厚さ 1.0cm、重さ 8.67 g を測る。石器は全て良質の黒曜石を使用している。



第 11 図 三雲下西 5261・533 番地全体図 (1/150)

IV. 三雲下西 533 番地

1. 調査の概要 (第 11 図、図版 9-6・7)

本調査は、平成 14 年度に方形の環濠を検出した三雲下西遺跡 (534 番地) の北側に位置し、三雲下西遺跡 526-1 番地は北隣地である。当該地は以前商店があり、その建築、解体の際に多くの遺構が破壊されていたが、塼棺などはかろうじて破壊を免れている状況であった。主な遺構は、弥生時代の塼棺墓 9 基、落ち込み (谷部)、古墳時代の塼棺転用土塚墓 1 基、土坑 10 基、ピット 13 基を検出した。落ち込みについては、三雲中川屋敷 (479-1、537-2、478-1 番地) にて検出されている土器だまりの北側の立ち上り部に相当する。遺構面は、現地表面から約 20cm 前後であった。調査期間は平成 16 年 7 月～8 月まで行われ、調査面積は 84 m² である。

2. 古墳・弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代中期中葉の墓群を確認した。塼棺墓の内訳は、小児棺 5 基、中形棺 1 基、大形棺 3 基である。塼棺墓の番号については調査時に従ったため、1 号については欠番としている。

① 塼棺転用土塚墓

1 号塼棺転用土塚墓 (第 12 図、図版 10-1)

塼棺を破砕した後、棺の底面や側面、上蓋に転用している土塚墓で、調査区北端から出土している。墓坑は、北側の現代井戸によって一部破壊されていた。1 次盛壊は、長さ 1 m、幅 0.82 m の半円状のプランまで検出したが、北側は削平を受けており、残存していない。二次墓坑は残存で長さ 1.6 m、幅約 35cm、深さ約 22cm を測る。北側へ傾が狭まることから、南頭位で、主軸は N-16°-W と取る。破砕した塼棺の破片は、塼棺の内面を上に向けて足元から階段状に並べられ、頭位を取り囲むように、頭上位から頭頭位へと配置している。残りの破片は、頭位を覆うように被せられている。

1 号塼棺 (第 12 図、図版 9-8・26)

肩が張り、口縁がくの字に反する大形長胴甕である。口縁～胴下位にかけて棺体約 1/2 が使われている。口縁部の屈曲はやや弱く、胴上部から底部に向けて直線的にすぼまる。頸部～胴下位には 4 条の扁平突帯が貼付されているが、突帯自体の厚みが薄い。器面調整は、内外共に粗い刷毛目を使用し、外面は口縁から、縦方向の刷毛目、縦方向の刷毛目、斜方向 (左上方向) の刷毛目、斜方向 (右上方向) の刷毛目、斜方向 (左上方向) の刷毛目が施され、突帯を境に刷毛目の方向が異なる。内面は縦・斜方向の刷毛目と横方向の刷毛目を交互に施している。棺自体の歪みが非常に大きい。

② 塼棺墓

2 号塼棺墓 (第 13 図、図版 10-2)

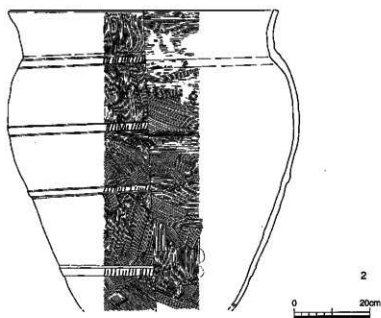
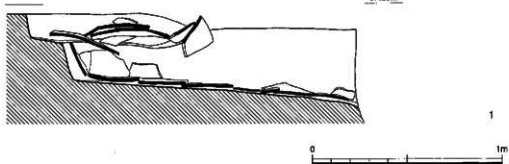
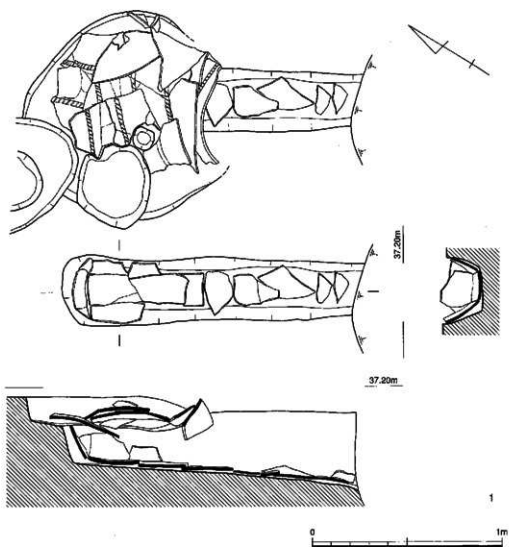
調査区の中央からやや北寄りて検出された壙+塼の二連棺墓。重機の掘削によって、下塼の胴下位～底部にかけて破壊されている。検出面標高で 36.900 m、床面標高で 36.500 m を測る。墓坑平面は歪な台形を呈し、東側に 1 段テラスを設け、段入り状となる。合口は呑口式で、下塼口縁部を打ち欠いて挿入する。主軸方位 N-19°-W と取る。

3 号塼棺墓 (第 13 図、図版 10-2)

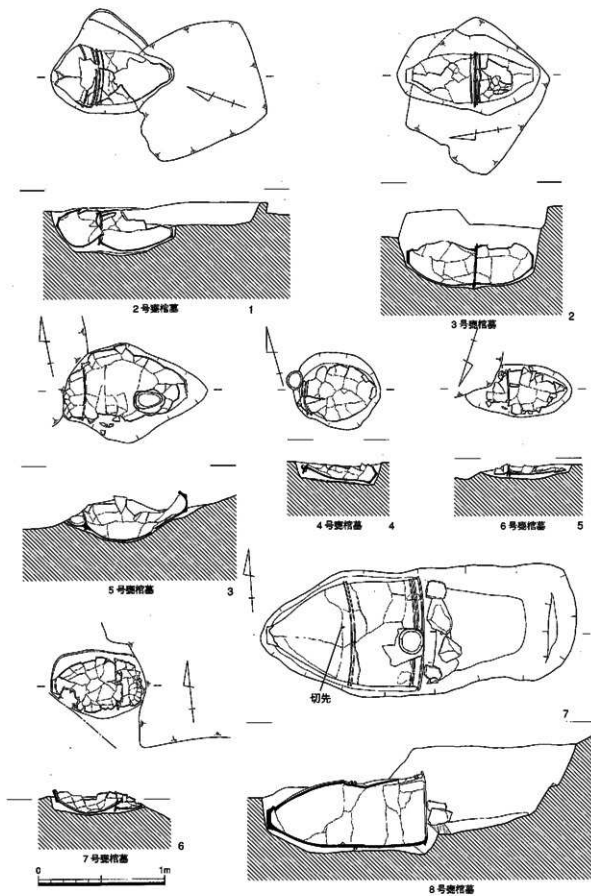
2 号塼棺墓に切られる形で検出された壙+塼の二連棺墓。やはり重機の掘削によって、上塼、下塼の胴部が破壊されている。墓坑平面は歪な棺形を呈し、水平に埋葬する。合口は接口式で、主軸方位 N-10°-W と取る。

4 号塼棺墓 (第 13 図、図版 10-3)

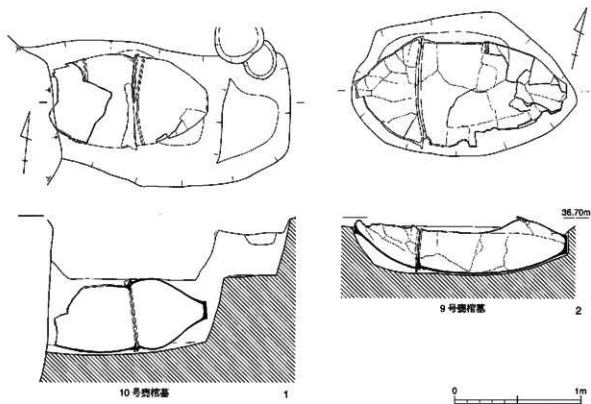
調査区の中央東寄りて検出された高杯+塼の二連棺墓。重機の掘削によって、上下棺の胴上位～底部にかけて破壊されている。墓坑平面は円形を呈する。合口は接口式で、主軸方位 N-75°-W と取る。



第 12 図 墓棺転用土壙墓及び棺体実測図 (1/20、1/10)



第 13 图 褒柩墓实例图① (1/30)



第 14 図 壘棺墓実測図② (1/30)

5号壘棺墓 (第13図、図版10-4)

調査区の中央の攪乱に破壊された形で検出された鉢+壘の二連棺墓。上下棺の口縁～底部にかけて約半分が破壊されている。墓壇平面は歪な楕円を呈する。合口は接口式で、主軸方位 $N-79^{\circ}-E$ をとる。

6号壘棺墓 (第13図、図版10-5)

調査区で検出された鉢+壘の二連棺墓。攪乱によってその多くが破壊されている。墓壇平面は楕円を呈する。合口は接口式で、主軸方位 $N-71^{\circ}-W$ をとる。

7号壘棺墓 (第13図、図版10-6)

調査区の中央の攪乱に破壊された形で検出された壘+壘の二連棺墓。上下棺の口縁～底部にかけて約半分が破壊されている。墓壇平面は歪な楕円を呈する。合口は唇口式で、主軸方位 $N-84^{\circ}-E$ をとる。

8号壘棺墓 (第13図、図版10-7)

調査区の中央より南側東端で検出された大甕の単棺墓。口縁部～胴上位にかけて、攪乱によって破壊されていた。墓壇平面は歪な楕円を呈し、南東側に大きく掘り込み、1段のテラスを設ける。木蓋の痕跡を示す黒色土が確認でき、その木蓋の下位に黄褐色粘土を貼めて固定し、その上に礫を詰めて更なる固定を図っている。壘棺の中央底面からは、石叉と考えられる切先が直立する形で検出されたが、棺内には崩落土が充填していたため、原位置が保たれていると断定できない。主軸方位 $N-86^{\circ}-W$ をとる。

9号壘棺墓 (第14図、図版11-1)

調査区の中央西端で検出された鉢+壘の二連棺墓で10号壘棺墓に切られている。上下棺の口縁～底部にかけて約半分が破壊されている。墓壇平面は歪な楕円を呈する。合口は接口式で、主軸方位 $N-77^{\circ}-E$ をとる。

10号壘棺墓 (第14図、図版11-2)

9号壘棺墓と切っている形で検出された鉢+壘の二連棺墓。攪乱によって下棺の胴下位～底部にかけて破壊されている。墓壇平面は歪な長方形を呈し、東側に1段のテラスを設ける。合口は接口式で、黄褐色の口張りの粘土が確認できる。主軸方位 $N-82^{\circ}-E$ をとる。

③出土遺物

1) 甕棺

2号甕棺(第15図、図版27)

上棺 口縁部を打ち欠いた小型甕。胴中位が膨らみ、底部に向かって大きく窄まる。胴中位にM字突帯を2条巡らす。器面調整は内外共にナデ調整。

下棺 若干内傾する口縁断面逆L字形の小形甕で、胴上位に最大径を持ち、平らな底部に向かって大きく窄まる。口縁下位には三角突帯を1条巡らしている。器面調整は口縁部内外が横ナデ、胴部外面に縦方向の刷毛目、他はナデ調整を施す。

3号甕棺(第15図、図版27)

上棺 若干内傾する口縁断面逆L字形の小形甕で、胴上位に最大径を持ち、平らな底部に向かって大きく窄まる。口縁下位には三角突帯を1条巡らしている。器面調整は口縁部内外が横ナデ、胴部外面に縦方向の刷毛目、他はナデ調整を施す。

下棺 若干内傾する口縁断面逆L字形の小形甕で、上棺に比べて口縁部の厚みが薄い。胴上位に最大径を持ち、口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は口縁部内外が横ナデ、胴部～底部外面に縦方向の刷毛目、他はナデ調整を施す。

4号甕棺(第15図、図版27)

上棺 ほぼ水平な鑄先状口縁を持つ丹塗り磨研の高杯で、口縁下位に三角突帯を1条巡らす。口縁平坦面には、3～5本一組の暗文が施されている。

下棺 若干内傾する口縁断面逆L字形の小形甕で、胴上位に最大径を持ち、口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は口縁部内外が横ナデ、胴部外面に縦方向の刷毛目、他はナデ調整を施すが、風化が著しい為、調整不明瞭。

5号甕棺(第15図、図版27)

上棺 若干内傾する逆L字形の口縁を持つ鉢で、胴下位～底部を欠損する。口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は内外共にナデ調整。

下棺 若干内傾する口縁断面逆L字形の丸みを帯びた甕棺。胴中位に最大径を持ち、口縁下位に三角突帯を1条、胴上位に2条巡らす。器面調整は、基本的にはナデ調整であるが、外面には刷毛目をわずかに残し、内面は、板状工具によるナデを残す。

6号甕棺(第15図、図版27)

上棺 わずかに外傾する逆L字形の口縁を持つ鉢で、胴下位～底部を欠損する。口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は内外共にナデ調整。

下棺 水平な口縁断面逆L字形を持つ小型甕で底部を欠損する。胴上位から若干下がったところに最大径を持ち、口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は、胴部外面は縦方向の刷毛目、胴部内面は、下位が板状工具によるナデを残し、上位はきれいにナデ消す。

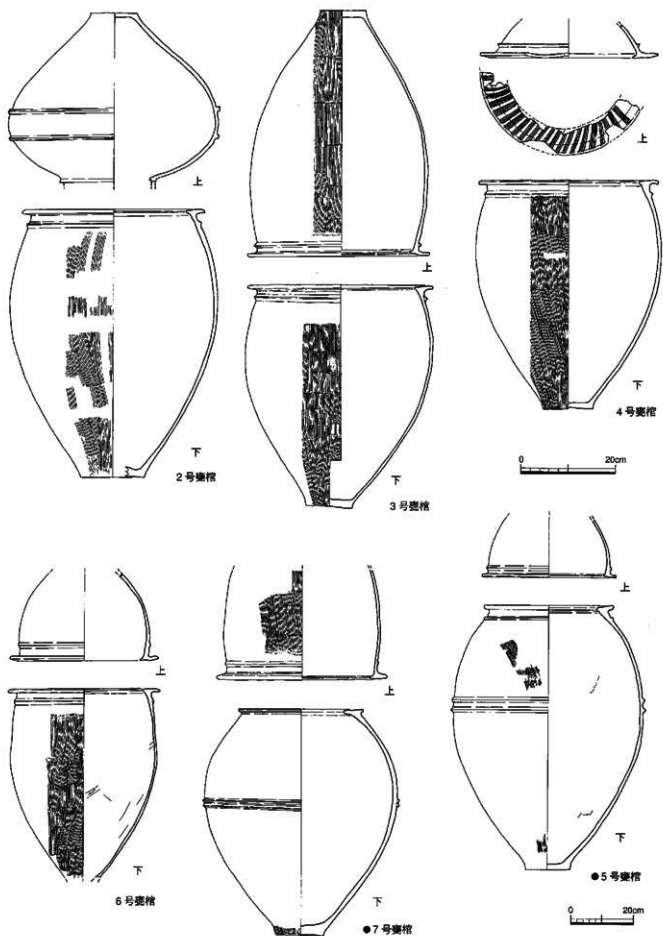
7号甕棺(第15図、図版27)

上棺 水平な鑄先状口縁を持つ小型甕で、胴下位～底部を欠損する。口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は胴部外面が縦方向の刷毛目、他の部分はナデ調整。

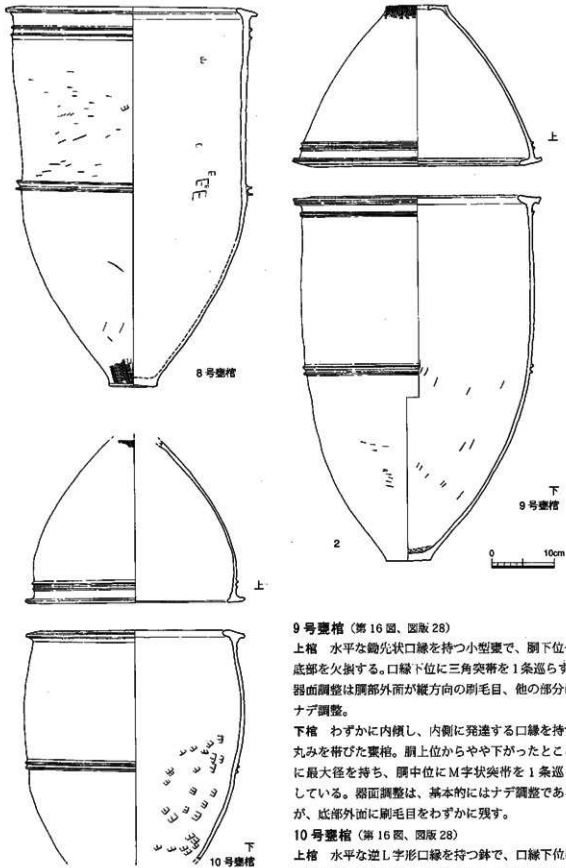
下棺 わずかに内傾し、内側に発達する口縁を持つ丸みを帯びた甕棺。胴上位からやや下がったところに最大径を持ち、胴中位にM字状突帯を1条巡らしている。器面調整は、基本的にはナデ調整であるが、底部外面に刷毛目をわずかに残す。

8号甕棺(第16図、図版28)

下棺 わずかに内傾し、内側に発達する口縁を持つ丸みを帯びた甕棺。胴上位からやや下がったところに最大径を持ち、胴中位にM字状突帯を1条巡らしている。器面調整は、基本的にはナデ調整であるが、底部外面に刷毛目をわずかに残す。



第 15 图 窆棺实测图① (1/8、●は 1/12)



9号壟棺 (第16図、図版28)

上棺 水平な鋤先状口縁を持つ小型型で、胴下位～底部を欠損する。口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は胴部外面が縦方向の刷毛目、他の部分はナデ調整。

下棺 わずかに内傾し、内側に発達する口縁を持つ丸みを帯びた壟棺。胴上位からやや下がったところに最大径を持ち、胴中位にM字状突帯を1条巡らしている。器面調整は、基本的にはナデ調整であるが、底部外面に刷毛目をわずかに残す。

10号壟棺 (第16図、図版28)

上棺 水平な逆し字形状口縁を持つ鉢で、口縁下位に三角突帯を1条巡らす。器面調整は共にナデ調整。

下棺 外形する内側に発達する口縁を持つ大型壟。

第16図 黄柏実測図② (1/12)

胴中位に最大径を持ち、胴中位に三角突帯を2条巡らしている。器面調整は、基本的にはナデ調整であるが、胴部内面には板状工具によるナデが残る。外面胴上部には2点支持黒斑が明瞭に残る。

2) 出土遺物 (第17図、図版10・8・28)

8号裏棺蓋の棺底から出土した切先片である。上刃が下刃より外側に開いていくため、石戈の可能性もある。長さ3.4cm(残存)、幅3.2cm(最大)、厚さ0.5mm(最大)を測る。斜方向の研磨痕跡が良く残っており、それによって穂及び刃部を作り出している。穂は先端から7mmのところまで二子に分かれるが、B面の穂はあまり明瞭ではない。材質は結晶片岩である。

④土坑(第11図)

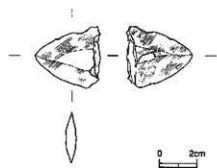
確認された10基中、1,2号土坑のみ出土遺物があった。他の土坑は出土遺物が無く時期が決め難いが、埋土から、3~6号土坑が弥生~古墳時代、8,9号が中世に属すると考えられる。今回は紙面の都合上、土坑については全体図で表示し、遺物のみ実測図を掲載している。

1号土坑

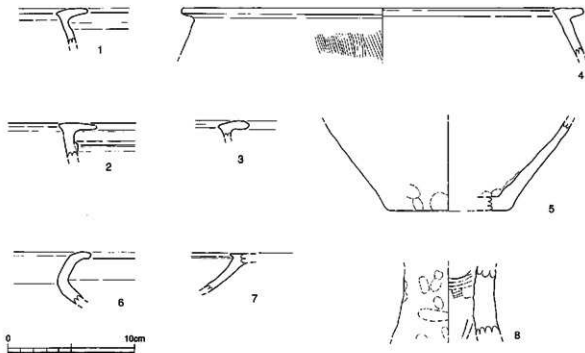
調査区北端で検出された土坑で、攪乱(現代井戸)に破壊されている。長軸1.31m、短軸1.17m、深さ約15cmを測り、調査区外へと続いている。基底面は略水平を呈する。出土遺物は細片が多く、図示に耐えないものが多い。

出土遺物(第18図1~8、図版28)

1~4は甕の口縁部片。1は逆L字形の口縁を持ち、若干内傾する。2は口唇部を欠損し、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。3は口縁部のみで、内外面ともヨコナデ。4は口縁部~胴上部まで残存し、水平なL字形口縁を持つ。器面調整は外面胴部が縦方向の刷毛目、他はヨコナデ。5は甕の底部片。平底で外面胴下に指頭圧痕が残る。6は甕の口縁部片で、口縁が外に広がる。内外面ともにヨコナデ。7は高環の口縁~

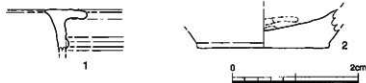


第17図 8号裏棺蓋出土遺物実測図(1/2)



第18図 1号土坑出土遺物実測図(1/3)

胴部片で口縁部を一部欠損している。内面片喰り磨研を施す。8は器台で、上・下部を欠損する。器面調整は外面指押さえ、内面へラ状工具によるサデが明瞭に残る。



第19図 2号土坑出土土器実測図(1/3)

2号土坑

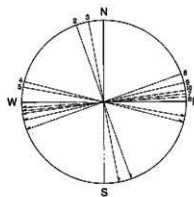
調査区北側で擾乱(現代排水溝)に破壊されている土坑で、検出長軸1.18m、短軸0.82m、深さ約11cmを測り、1号土坑と同様で調査区外へと続いている。出土遺物は細片が多く、図示に耐えないものが多い。

出土遺物(第19図1~2、図版28)

1は裏の口縁部片で風化が著しく、口縁下の三角突帯が丸味を帯びている。内外面ともヨコナデ。2は、底部片。内面に指頭圧痕が残る。

3. 小結(グラフ1)

下西地区の調査では、弥生時代中期初頭~古墳時代初頭、中近世の遺構を検出した。このうち、弥生時代中期の甕棺墓群は、小児棺5基、中形棺1基、大形棺3基 計9基を検出した。時期は弥生時代中期中葉~後葉(横口稲年のKⅢa~Ⅲbが主体、一部KⅡC)に比定される。9号、10号甕棺墓(大形棺)は墓塚が切り合い埋置され、2,3,6,7号甕棺墓(小児棺)はその大形棺に向かって挿入されていることから、1つのグループとして捉えることができる。次に主軸方位を見ていくと、大形棺である8,9,10号甕棺墓は、北西方向に埋置され、挿入方向も同じである。よって、埋地の位置と頭位方向については、ある一定の規制があったものと考えられる。



グラフ1 甕棺墓主軸方位

周辺の旧地形については、三雲・井原遺跡V(岡部・幸田編2006)で報告されているので詳細については省略するが、墓域の南限は、今回検出された落込みまでと考えられる。南西側には三雲下西遺跡(534番地)があり、方形区画溝が確認されているものの甕棺墓は全く検出されていない。西側においても三雲井の川遺跡(530番地)の調査で氾濫原が確認され、甕棺墓は検出されていない。東側については、調査例が無いため不明な部分であるが、現況で渠道の東側水田は一段下がっているため、今回の落込みが続くものと考えたい。この場合丘陵の先端部のごく限られた範囲に甕棺墓群が営まれていることが想定できるが、東、東北側の調査を待ち改めて検討したい。

一方、古墳時代の甕棺墓については、甕棺墓2基、甕棺転用上墳墓1基 計3基を検出し、1号甕棺墓からは赤色顔料、2号甕棺墓から破鏡が出土している。1号甕棺は非常に歪な平底状が古い様相であるが、底部を除けば博多遺跡群62次5630号遺構の甕棺と同形式と見られる。突帯の扁平化が進行し、その歪みも著しいことや突帯の多条化、くの字状口縁の外反が弱いことなど新しい様相が看取できる。横口稲年のKⅤf式と考えられる。2号甕棺は二重口縁溝と在地系甕棺との組み合わせで、在地系甕棺から二重口縁直への移行期として注目される。下棺の在地系甕棺は、突帯がやや1号甕棺に比べ、若干肥厚しているものの、器面調整、形態から1号甕棺と同型式の範囲内と考えたい。甕棺転用上墳墓は、1号甕棺よりさらに突帯が扁平で、口縁の外反も弱くなり、全体の歪みも大きいことから、KⅤf式より新しい可能性があり、横口稲年のIIa式前後と位置付けておきたい。

4. 三雲下西 533 番地 市道確認調査

三雲下西遺跡（533）番地と三雲中川屋敷遺跡（537・2番地）間には、県道瑞梅寺池田線につながる市道が通っている。平成 14 年度の三雲下西遺跡（534 番地）の調査では L 字に曲がる区画溝が発見されていたが、屈曲部分が明瞭に検出されなかったこと、この屈曲部から南側に延びる区画溝と西側に延びる区画溝とでは、横断面の形態および土器の出土状況が大きく異なっていたことから、この区画溝が L 字に曲がらずそのまま直線的に東に延びる可能性があった。今回の道路拡幅工事では、現市道部分も開発対象となっていたため、3m 真角のトレンチを設定し、区画溝の存在確認を目的に調査を行った。

① 確認調査の概要（第 21 図、図版 11-3）

土層観察の結果、市道建設に伴って標高 0.85 m までは、遺構面が大きく削平され、アスファルトやコンクリートのガラを入れた造成を行っていた。（1～5 層）この工事の際には、畑の排水のための上管が南北に埋設されている。加えてその後行われた下水道工事によってさらに深く掘削され、遺構面が破壊されている。（11 層）弥生時代の遺構面は 8 層の茶褐色粘質土層で、残りの良いところで標高約 36.900 m にあたる。この面では、弥生時代中期のピット 3 基、土坑 1 基が検出されたが、区画溝は検出されなかった。区画溝の底面の標高を考えると、存在しておれば検出されるはずであり、区画溝は南へ屈曲するものと判断された。ピットからの出土土器はいずれも細片である。

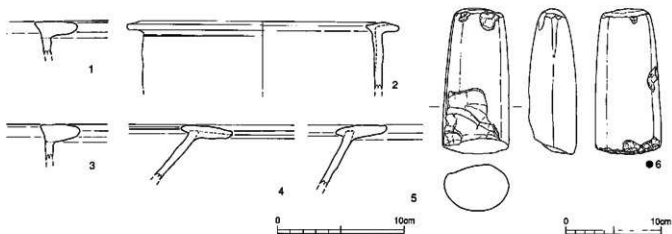
② 弥生時代の遺構と遺物

1 号土坑（第 21 図）

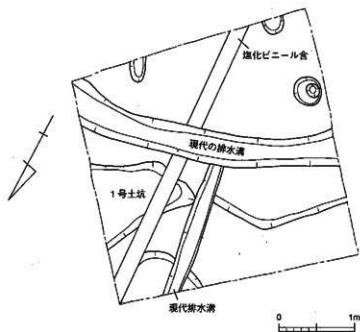
1 号土坑は、調査区の東端で検出され、長さ 1.2 m、幅 0.8 m の不正形を呈している。埋土は、自然堆積で、丹塗りの甕、高杯の口縁部片が出土している。祭祀土坑の可能性が高い。

出土遺物（第 20 図 1～6、図版 28）

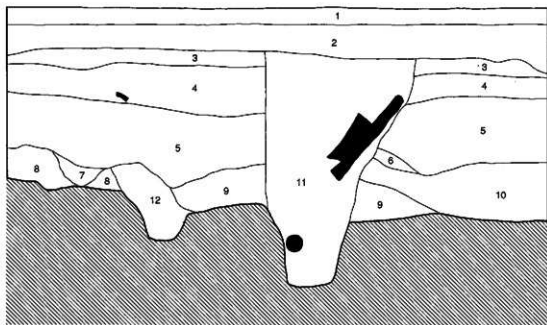
1～4 は 3 号ピットからの出土である。1～3 は甕。1 は口縁部片で、外面丹塗り。2 は口縁～胴上部片で、口縁上面が膨らむ。風化が著しい。3 は口縁部片、口縁が肥厚する。外面丹塗り。外面の風化が著しく調整不明。4、5 は高杯。4 は口縁～杯部片で、口縁が外傾する。内外面丹塗りであるが、外面は風化により一部残る程度である。5 も口縁～杯部片で口縁が外傾する。内外面丹塗りであるが、外面は風化により一部残る。6 は土管埋設に伴う攪乱から出土した蛤刃石斧である。刃部は欠損する玄武岩製で、現存長 15.4 cm、最大幅 6.9 cm、厚さ 5.0 cm、重さ 948.86 g を測る。



第 20 図 3 号ピット、攪乱出土遺物実測図（1/3、●は 1/4）



87.60m



- ①、アスファルト (道路舗装)
- ②、表成土 (棕色層)
- ③、茶褐色粘質土 (成成土)
- ④、黄褐色層 (土管埋設のための掘削、ガラスや土管が埋められている)
- ⑤、黄茶褐色層 (④層と同じ、土管埋設に伴う掘削、壁が大きい)
- ⑥、茶褐色粘質土 (⑤、⑥層にブロック状に入層)
- ⑦、灰色粘質土 (⑥、⑦層からのカクラン土)
- ⑧、暗茶褐色粘土 (遺構部、物室中間のビットがこの層から切り込む)
- ⑨、茶灰色層 (⑧層と同じく遺構部、⑧層の下にも入り込む)
- ⑩、茶褐色粘質土 (⑧、⑨層と同じく遺構部、ガチガチの層)
- ⑪、黄褐色層 (塩ビ管埋設のための掘削)
- ⑫、白茶褐色粘質土 (遺構埋土、ビット)

第 21 図 トレンチ全体図、西壁土層断面実測図 (1/50、1/10)

V. 三雲中川屋敷 478-1、479-1、537-2 番地

1. 調査の概要

三雲中川屋敷地区は現在の三雲集落のほぼ中央に当たり、約 30 年前まではほとんど住宅もなく水田が広がっていた場所である。本調査区は中川屋敷 I-7 から西に約 20 m、下西 II-10 から南西に約 30 m の地点に位置する。主な遺構は、中世大溝 1 条、上坑 1 基、弥生時代の溝 2 条、および土器溜りである。

調査区南側から中央にかけて、旧台地と落込みを検出し、落込みからは土器溜りを主体として多くの遺物が出土した。

旧地形は、調査区南側に中世の人溝と土坑を検出した黄褐色粘質土を地山とする台地が存在するが、大溝検出地点より北に約 15 m の地点で、一旦 43° の急勾配で北～北西へ落ち込み、徐々に勾配を緩やかにして低くなる。台地残存部では標高約 38 m であるのに対し、土器溜り付近の底面は標高約 37 m、最も低い場所は S D 10 および S D 13 付近で、標高 36.8 m である。

現代の床土が、旧地形の落込みに比例するように傾斜しているのも、落ち込みが埋没してから後、自然地形として北に緩やかに低くなっていたことの名残として捉えられよう。

調査期間は平成 16 年 6 月末～8 月初原、調査面積は約 140 m² である。

1-1 ■ 藤田謙雄・小池定博編 1982 『三雲遺跡』福岡県文化財調査報告書第 63 集 福岡県教育委員会

2. 中世の遺構と遺物

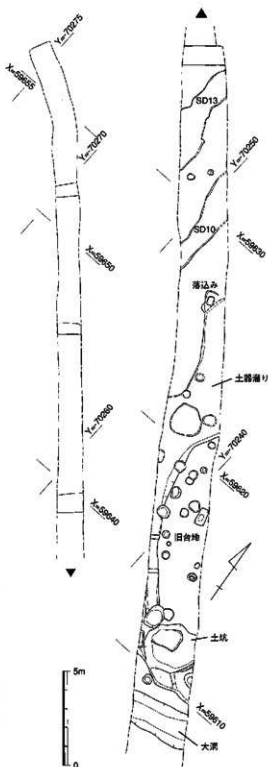
①大溝 (第 23 図、図版 11)

調査区南端で検出した。幅 1.7～2 m、長さ 3 m まで、東西とも調査区外へ続く。N-78°-E に軸をとる。深さは現況で 0.9 m、底面レベルは標高 37.35 m を測る。

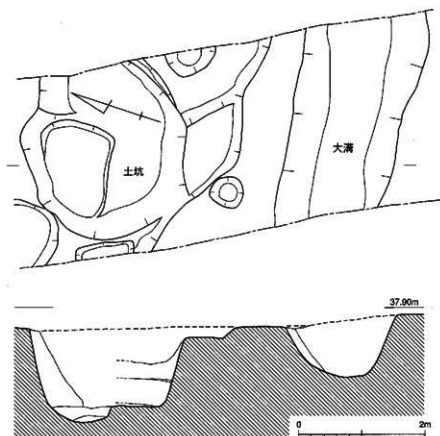
遺物は青磁の小片が出土したのみであるが、埋土は砂性を帯びた暗灰色粘質土であり、隣接する土坑とはほぼ同時期の遺構と思われる。土層堆積状況から空堀と推測され、何等かの区画溝であったと想定される。

②土坑 (第 23 図、図版 11)

調査区南端、大溝の北側で検出した。規模 2.6×2.6 m の歪な円形である。掘り形は南側に 0.7 m ほどのテラスを設け、北側底面を 0.2 m ほど掘り込んでいる。砂性を帯びた灰茶色粘質土および暗灰茶色粘質土の堆積が確認された。遺物は小片であるが、青磁片、白磁片および滑石製容器が出土している。



第 22 図 三雲中川屋敷 478-1、479-1、537-1 番地全体図 (1/200)



第23図 大溝・土坑実測図 (1/60)

出土遺物 (第24図、図版29)

1は滑石製で、底径14.8cmである。外面には煤が付着している。2は白磁片で、内外とも施釉されている。



第24図 土坑出土遺物実測図 (1/4)

3. 弥生時代の遺構と遺物

① 落込み (第22図、図版11)

調査の概要で述べたとおり、旧地形を復元すると、調査区南側の旧台地から北～北西に最大約1mの高低差のある落ち込みが存在する。落ち込み部分は底面から30～40cm程に土器を若干包含する砂と礫(細～大)が密に堆積し、その上30～40cm程に土器を多く包含する暗褐色系の粘質土が堆積する。

中でも旧台地から北に4m程の地点では、礫層中に深さ10cm程の窪地があり、土器溜り状におびただしい量の土器が集積していた。

含まれる遺物は弥生時代中期後葉が主体であり、ほとんどが落ち込み底面より40cm程の間に集中していた。その上層である暗灰茶色粘質土層からは新相の遺物が出土しており、後期中葉頃の埋没時期を示しているものと思われる。また、わずかではあるが土師器も混入しているが、これらは埋没後、窪地状に残った場所に流れ込んだものと考えられよう。

出土遺物 (第25～29、図版29・30)

壘 1～21、24は壘で、39、40、44、45、47～50が壘の底部である。1～19は逆L字形の口縁部

を有するもので、口縁内側に三角突帯を貼り付けて突出させる。1～3、11、12は外面口縁下に断面三角形の突帯をもたず、胴部外面には縦方向の刷毛目が残る場合が多い。内面はナデで削られている。4～10、13～18は外面口縁下に断面三角形突帯を1条巡らす。9はナデにより突帯状に盛り上がった感じである。口縁部は平坦部が水平なもの(1、4、5～7、9、11、12、14、16、17)と、やや外傾するもの(2、3、8、10、13、15、18)、内傾するもの(19～21、24)がある。13は平坦部に沈線が、18の口縁端部には刻みが施されている。概ね内外面ナデにより仕上げられるが、突帯以下に縦方向の刷毛目が残るものもみられる。19は外面に丹塗りを施すもので、口縁下に断面M字形の突帯を1条巡らす。20、21は口縁部が内傾して立ち上がるタイプで口縁下に突帯を有する。21は20より内傾度が強く直立に近くなる。24は内傾といってもくの字状に短く立ち上がるもので、20、21に比べて小型であり突帯を行さない。いずれも内外面ナデ調整である。

39は器壁が厚くボッタリした印象をもつ。直立気味に立ち上がり、胴部と底部の径の差が小さい。上半を欠損しているが、口縁部が短くくの字に屈曲するタイプであろうか。40、44、45および47～50は外面にタテハケが残る場合が多い。

壺 22、23、25～38、41～43、46は甕とその底部である。口縁部の形態が鋤先状のもの(22、25～27、29、30)、頸部から直角気味に屈曲するもの(28)、頸部から丸みを帯びながら屈曲するもの(31)、大きく外反して開くいわゆる広口甕(32、33)などがある。25は頸部を打ち欠いて切り離し、さらに口縁平坦部の対面2箇所を意図的に打ち欠いている。同様な行為は三雲ヤリミノ428・429番地祭祀溝出土土器(第59図)にもみられる。26、31～33は内外面に丹塗りが施され、外面頸部には縦方向のミガキ痕が暗文風に残る。34は肩が張り頸部がほぼ直角に立ち上がる。小型の広口壺であろうか。35、36は複合口縁部口縁部である。35は口径23.2cm、36は口径30.5cmである。37は胴下半～底部で丸みを帯びる。底部は若干レンズ状を呈する。外面に横方向のミガキを施す。38は底部穿孔を施す。

高杯 51～57は高杯である。口縁部がそのまま外反するもの(51～53)、逆L字状および鋤先口縁を有するもの(54、55)がある。51～53はいずれも杯部上部のみの残存である。51、53は外反して開き、さらに端部付近で開き、やや深めであるのに対し、52は直線的に開き、浅い。54は口径22.6cmの小型の高杯に復元できたもので、全体的に風化しているが内面にミガキの痕跡がある。内外とも淡灰黄色を呈し、砂粒のほかに黒雲母をやや含む。55は口縁部がやや外傾するもので、口径26cmを測る。風化して丹塗りを施していたかは不明である。56は脚部のみ残存で杯部および底部を欠損する。残存高は16.5cm。杯部内面に丹塗りを施す。脚部内面には絞りの痕跡あり。57は杯部に丸みを帯び、脚部は太い。

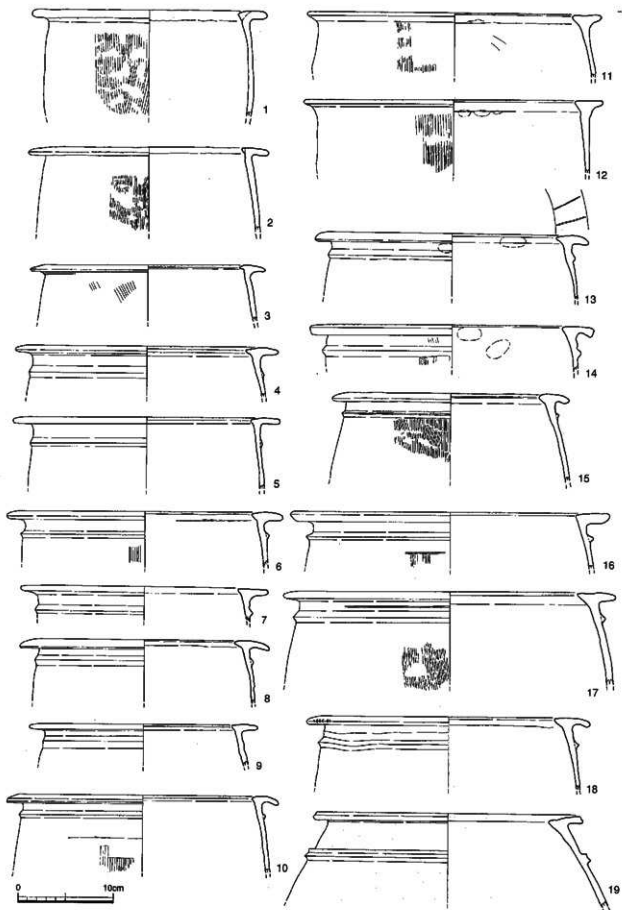
器台 58～63は器台である。59は他に比べて器壁が薄くスマートである。外面縦方向の刷毛目、端部内面は横方向の刷毛目を施す。61、62も比較的薄い器壁で、61は端部が平たく面を有する。58、59とも、屈曲部内面には僅かに稜が走る。60、63は比較的肉厚の器壁である。

二重口縁壺 64は山陰系二重口縁壺である。ナデ肩で口縁部は外傾する。外面肩部は横方向の刷毛目+波状文(沈線)、それ以外は斜め方向の刷毛目を施す。内面は横～斜めのヘラケズリを施す。

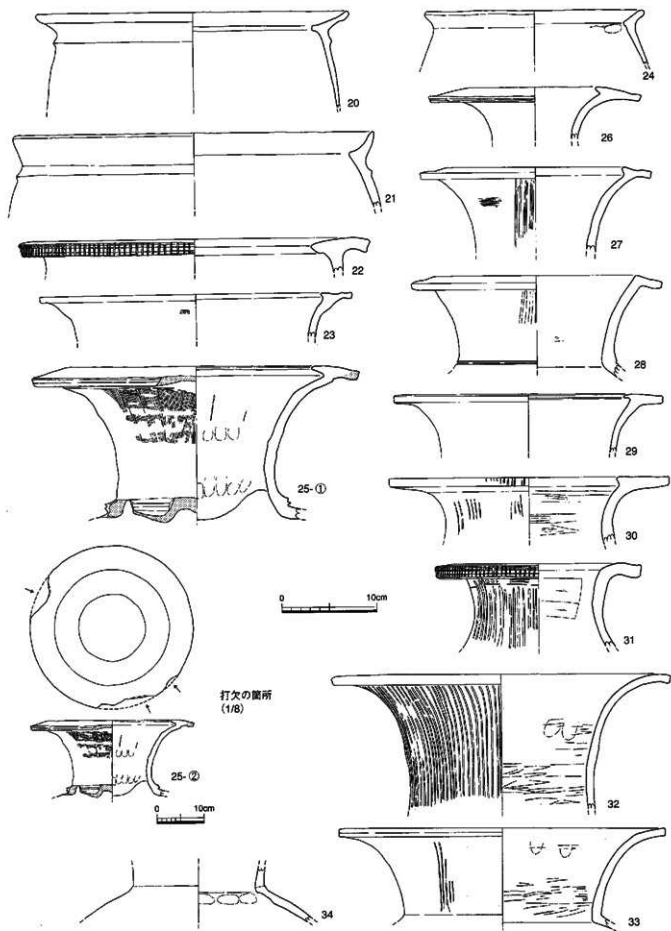
袋状口縁壺 65～67は袋状口縁壺であるがいずれも破片資料である。65は胴部で内外面ともヨコナデ+丹塗りを施す。最大径部に口唇状の突帯を1条巡らす。胎土は極めて精緻である。66も胴部の一部で内外面ヨコナデ調整。外面の一部に丹塗りの痕跡がみられる。口唇状の突帯を2条巡らす。67は口縁部付近か。内外面ヨコナデで、外面のみ丹塗りを施す。

椀 68は口径12.4cm、残存高3.8cmの椀。端部を丸く仕上げる。内面に一部斜め方向の刷毛目の痕跡がある。

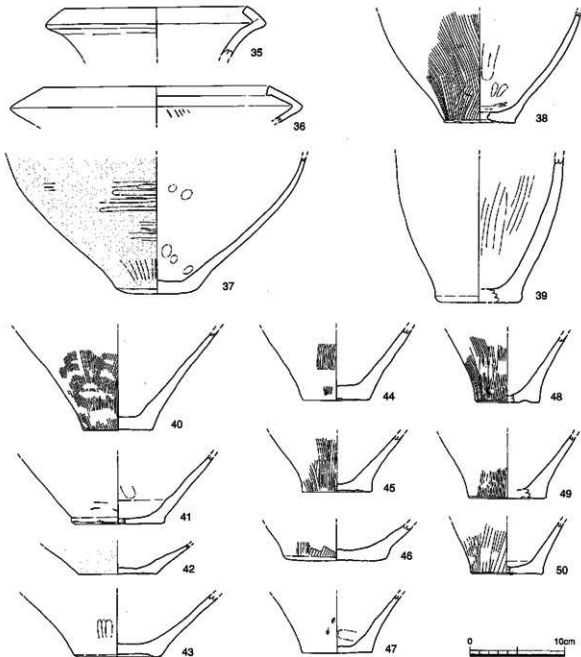
蓋 69～72は蓋で、大小2種がある。69～71はつまみを有するもので、中型膳用の蓋と思われる。69、70は椀に向かってほぼ直線的に開くもので、裾部径は69で26cm、70で29.4cmである。69には外面に縦方向の刷毛目が明瞭に残る。71は椀に向かって若干外反しながら開くもので、裾部径は28.4cmを測る。外面には縦方向の刷毛目が、内面には絞りが残る。つまみ頂部には窪みを有する。70に比べてつまみ部がすばまらずく、器高も低い。72は小型の短頸壺に対応すると思われる蓋である。裾部径



第 25 图 落込み出土遺物① (1/4)



第 26 図 落込み出土遺物② (1/4)

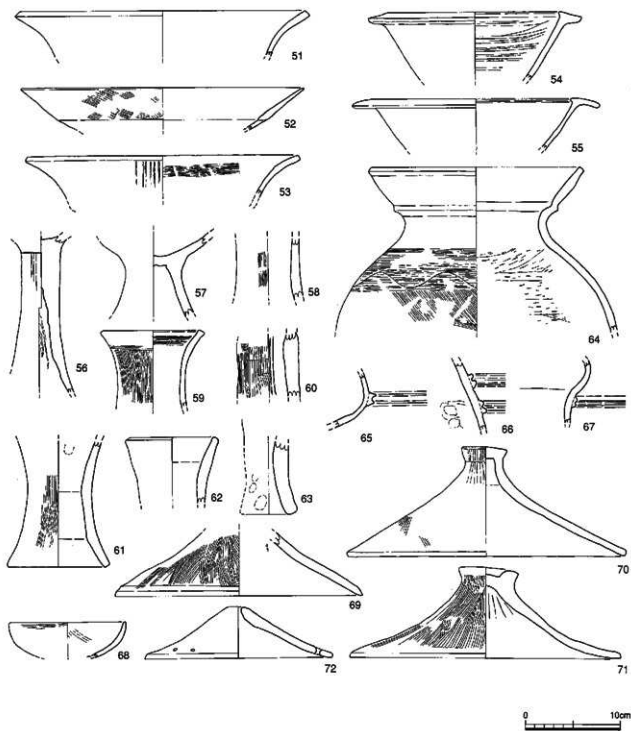


第 27 図 落込み出土遺物③ (1/4)

19.8cm、器高 5.5cm で、容器側との結束のために、径 4mm 程の孔が対面する 2箇所に 2個ずつ穿孔されている。また、頂部にも穿孔が施されているが、これについては用途不明である。

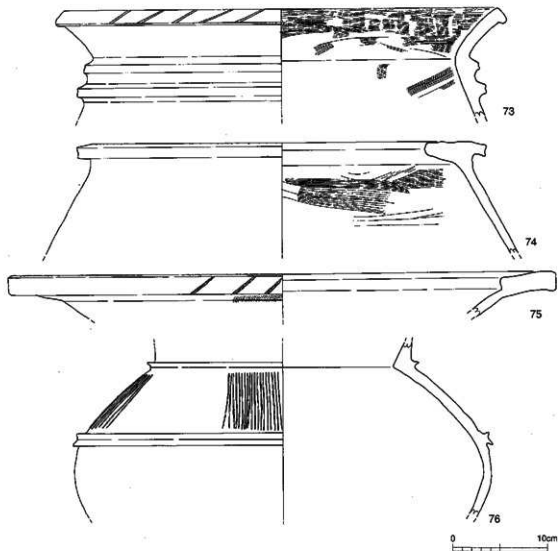
大型壺 73 は口径 45.8cm の壺で、口唇端部は平坦面を設けて、丸みを帯びて下にやや張り出す。外面には斜め方向の線刻を施す。頸部には、わずかに窪みをもつ断面台形状突帯を 2条巡らす。外面横ナデ、内面横方向への刷毛目による調整である。74 は口径 43.2cm で、口縁部が内側に厚く大きく張り出す。胴部に向かいハの字状に開く。外面は風化して調整が不明瞭であるが、内面には刷毛目が残る。

大型壺 75 は壺の口縁部である。やや内傾する平坦部を有し、端部外面に斜め方向の刻みを施す。76 は胴部が張る玉ねぎ状のもので、頸部に断面三角形突帯を 1条、および胴最大径やや上に口唇状突帯 1条を



第28図 落込み出土遺物④ (1/4)

巡らす。突帯面には17～19本単位の沈線が、暗文を模したように施される。内外面とも暗褐色を呈し焼成良好である。



第29図 落込み出土遺物⑤ (1/4)

②溝

SD10 (第30図、図版11)

弥生時代中期後葉の落込み埋土から切り込む溝で、幅1～1.6m、長さ3.1～mで東西調査区外へと続く。後期後葉の高杯が出土している。この時期の明確な遺構は他に検出していない。

出土遺物 (第30図1、図版31)

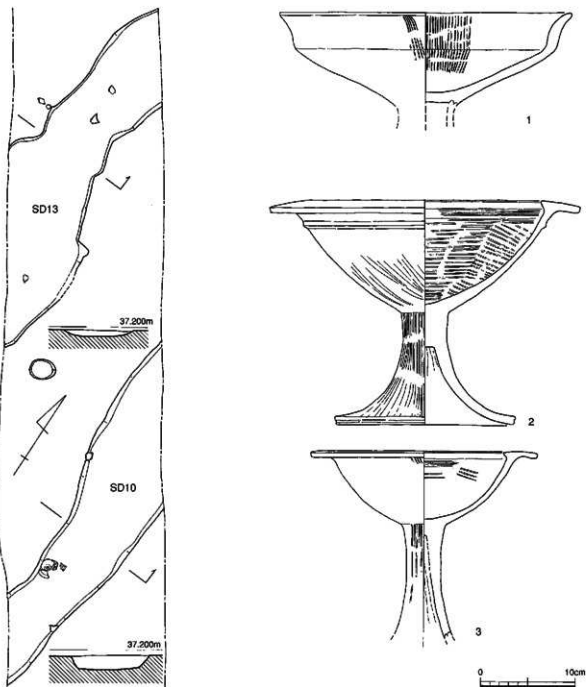
口径30.6cmの高杯で、杯部のみ残存する。杯はわずかに内湾しながら開き、中位より口縁端部にかけて外反させる。内外面とも表面が磨滅しているが、縦方向のミガキの痕跡が残る。

SD13 (第30図、図版11)

大礫を含む黄褐色粘質土から切り込む。不整形な溝で、幅0.7～1.4m、長さ2.8～mで、SD10同様に東西とも調査区外へ延びる。弥生時代中期後葉の高杯等が出土している。

出土遺物 (第30図2・3、図版31)

2は鋤先口縁を有し、杯部が半球形状に深い高杯である。口径32.6cmを測る。杯部は内外面丹塗りで外面がタテ方向のミガキ、内面は6回程に分けてミガキを施す。脚部は縦方向の刷毛目。一部丹塗り痕が残る。内面には絞り痕がある。3は口径23.8cmで2よりひと回り小さく、脚部は細く長い。杯部内面は丹塗りでミガキを施す。



第30図 SD10・13 実測図及び出土遺物実測図 (1/60、1/4)

4. 小結

今回検出した中世の溝の性格については、時期が明らかではないため明言はできないが、I-7地区で南北に軸をもつ中世溝が確認されており、屋敷地を区画する溝として機能していた可能性がある。しかし、I-7地区の南北溝は、今回の東西溝に比べて不規則で、底面レベルは不明である。また溝の内側から当該期の屋敷跡をうかがわせる遺構は皆無であったことなどから、可能性を示唆するに留め、今後の調査に期したい。また、成果のひとつとして、旧地形が新たに判明したことが挙げられよう。三雲下西533番地南端で南への自然の落ちが、また、三雲下西II-10地区南端では今回判明した落ち込みと時期的にも整合する自然の落ち（報告では住居状遺構）が確認されていることから、旧地形が断片的に復元できるようになってきている。

VI. 三雲中川屋敷 480-1 番地

1. 調査の概要

本調査区は、中川屋敷 478-1、479-1、537-2 番地の調査区に南接しており、1・2 号住居跡が 479-1 番地にかかるが、一連の住居群として本節にて報告する。

周辺における過去の調査では、東約 40 m に位置する中川屋敷 1-11 および 1-8' にて弥生時代後期中葉城と古墳時代初期頃の住居跡がそれぞれ検出されている。本調査区でも 10 軒の住居跡が確認され、台地の北端に集落が展開していたことがわかった。

調査期間は平成 16 年 5 月中旬～6 月末、調査面積は約 193 ㎡である。

1 榎田尚雄・小池史吾 1982 「三雲遺跡Ⅱ」福岡県文化財調査報告書第 63 集 福岡県教育委員会

2. 弥生時代、古墳時代の遺構と遺物

① 竪穴式住居跡

1 号住居跡 (第 32 図)

調査区北側の 479-1 番地で検出した。7 号住居跡を切り、3 号住居跡に切られる。西は調査区外へ続くが、規模は南北 3.4 m、東西 2.7 m である。床面中央で炉跡を検出した。

出土遺物 (第 33 図 1～2、図版 31)

1・2 は高杯である。1 は脚部以下を欠損する深めの杯である。外反部が下位より長い。内外面とも磨滅しているが、わずかに刷毛目が残る。

2 号住居跡 (第 32 図)

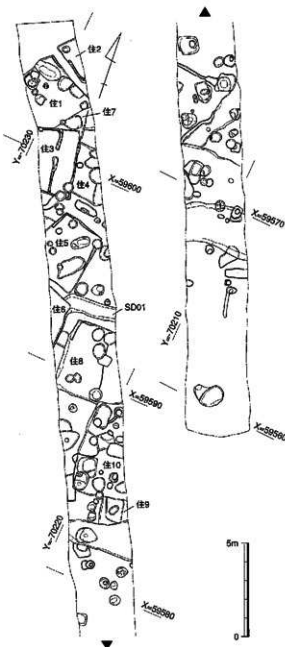
479-1 番地内、1 号住居跡の東で西側の一部のみ検出した。南北 2.5 m、東西 0.9 m である。西壁から南壁に沿って周溝が巡るが柱穴等は検出していない。遺物も出土しておらず時期は不明である。

3 号住居跡 (第 32 図、図版 12)

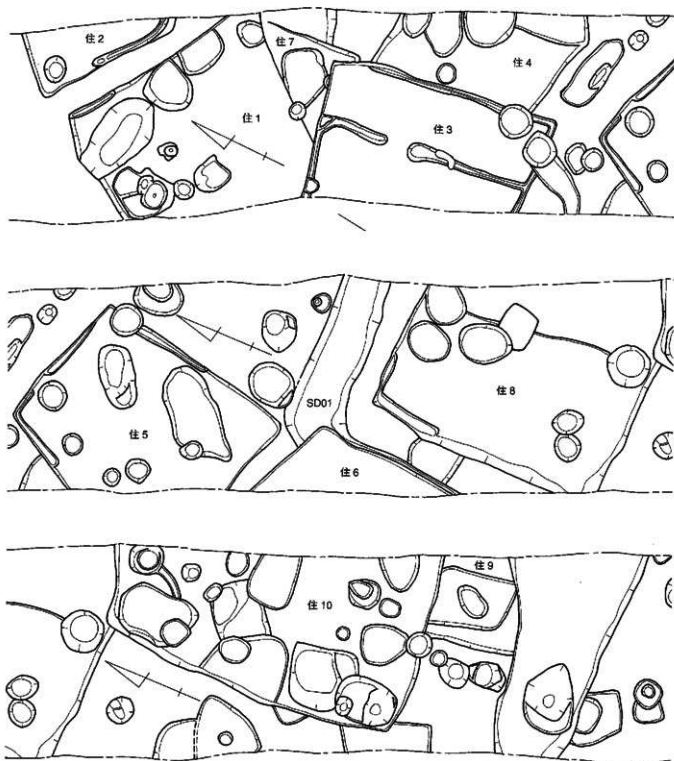
調査区北側で検出した。1 号、4 号、7 号住居跡を切る。南北約 3.5 m、東西 2.2 m まで、東側にベッドを設ける。周溝は東壁に沿い、北は途中ベッド下方向へ曲がり、南は壁沿いとベッド下方向へ分かれている。柱穴等は検出していない。本調査区内では最も多くの遺物が出上している。

出土遺物 (第 33 図 3～26、図版 31)

壺 (3、9) 3 は球形の胴部を有する壺である。胴下半に細かい斜め方向の刻みを入れた断面口の字状突帯を巡らす。内外面とも粗い刷毛目を施し、突帯以下の外面は横方向のヘラケズリおよび縦方向へのヘラナデを行う。9 は口縁部が短くくの字形に外反する壺で口径 30.4 cm である。



第 31 図 三雲中川屋敷 480-1、482-1 番地全体図 (1/200)



第 32 図 住居跡実測図 (1/60)

甕 (4~8、14~16) 4は外面にタタキ、内面は非常に細かい刷毛目を残す。口径17.8cmで口縁部は内湾せずにくの字状に立ち上がる。5は胴部より口縁部径が大きい小型甕で、外面下位はヘラケズリ、口縁部は刷毛目が残る。15、16は長胴甕で、わずかに尖り気味の丸底を有する。14は埋土から出土したものである。

椀 (11~13) 12は口径10cmの椀である。底部は平底を呈し、ヘラ記号を有する。13は口縁をわずかに欠損する椀で、底部に粘土を貼りし高台状を呈する。

高杯 (19~26) 19~22は杯部のみ資料である。外反部とその下部の長さがほぼ等しくなるものと、外反部の比率が高くあまり開かないものがある。20は外面に縦方向のミガキが暗文状に残る。24は脚部で裾部径14cmである。

4号住居跡 (第32図、図版12)

3号住居跡に切られる。南北約2.6mと小規模である。住居内にいくつかピットはあるものの柱穴は未確認である。灰跡等も検出していない。

出土遺物 (第34図27~30、図版31・32)

27はくの字に屈曲する口縁部と尖り気味の丸底を有する長胴甕で、口径21.1cm、器高31.7cmである。外面は細かい刷毛目調整の後工具によりナデているのに対し、内面は目の粗い刷毛目をそのまま残す。28口径15.6cmの甕である。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部を積み上げる。外面は非常に細かい横方向の刷毛目を施した後、肩に波状文をヘラ描きする。内面は右上がりにヘラケズリして器壁を3~5mmの厚さに仕上げる。29は深みのある高杯で下部より外反部のほうが長い。屈曲部内面に稜を有する。30は小型の椀で外面は指頂圧痕が、内面は刷毛目が残る。

5号住居跡 (第32図、図版12)

S D O 1の北で検出した。南北約3.4m、東西約2.8mのやや歪な長方形プランの住居跡である。北、東、西壁沿いに、断続的な周溝が巡る。

出土遺物 (第34図31~37、図版32)

いずれも破片資料で、31~34は甕および高杯の口縁部・杯部片である。32の外面に丹塗りの痕跡が残る。35は底径4.4cm、残存高2.7cm。36は高杯の脚部で内外面刷毛目を施す。

6号住居跡 (第32図、図版12)

S D O 1を切る住居跡で、北東コーナーのみ検出した。規模や柱穴等は不明である。遺物は平底の甕の破片が出土しているが、S D O 1との切り合いから古墳時代初頭~前葉頃と思われる。

7号住居跡 (第32図、図版12)

調査区北側で検出した。1号、3号住居跡に切られる。東壁の一部のみの検出で規模や柱穴等は不明である。遺物は高杯口縁部が出土している。

8号住居跡 (第32図、図版12)

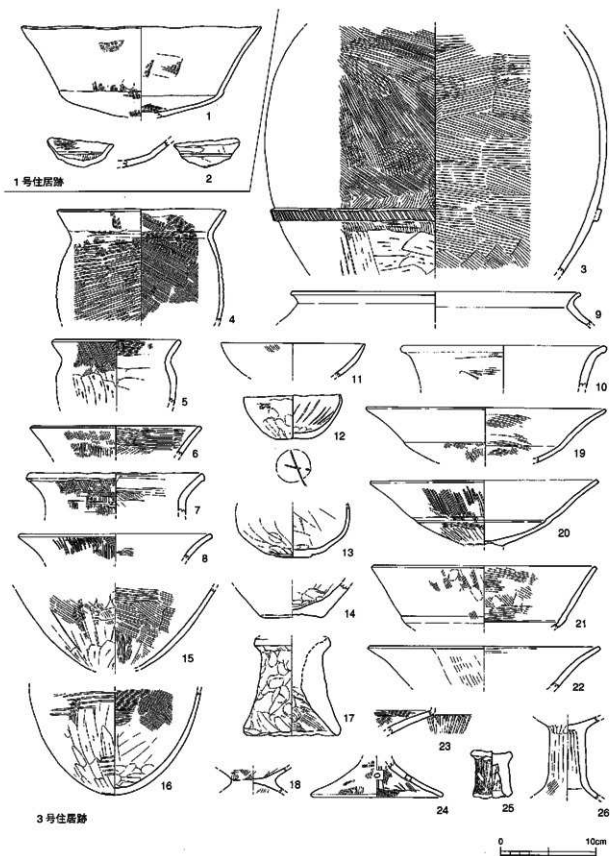
S D O 1の南で検出した。10号住居跡に切られる。南北約3.9m、東西3.2m〜である。北西コーナーに部分的に周溝が巡る。東側にベッド状遺構を設けており、遺物はベッド下南側に集中していた。S D O 1と軸を同じくしており何らかの関連がうかがえるが、明らかにすることはできなかった。

出土遺物 (第34図40~44、図版32)

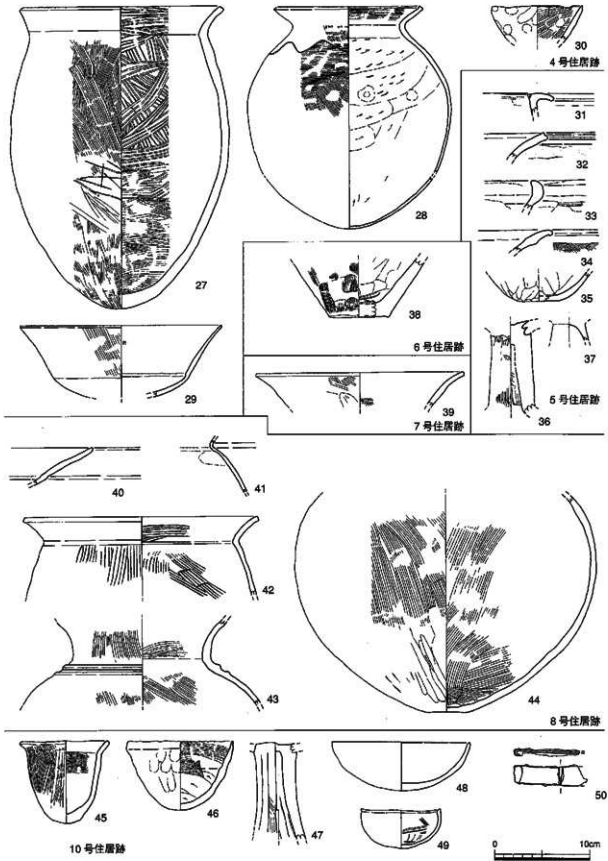
42は口径24.6cmの長胴甕で胴下半を欠損する。内外面とも粗い目の刷毛目調整を施す。43は甕で頸部下に低い突帯を2条巡らす。内外面刷毛目調整。44は埋土中からの出土で、球形の胴部を有する甕である。底部はわずかに平底が残る。内外面とも刷毛目調整を行い、外面底部付近を強くナデる。胴部最大径は30.4cmである。

9号住居跡 (第32図)

調査区中央で検出した。10号住居跡および多数のピットに切られる。南北約4.8mで東側は調査区外へ続く。遺物は出土していない。



第 33 图 住居跡出土遺物実測图① (1/4)



第 34 图 住居跡出土遺物実測図② (1/4)

10号住居跡 (第32図、図版12)

調査区中央で検出した。8号住居跡を切る。南北約5mで東側は調査区外へ続く。住居内で著しくピットが切りあっており、支柱穴等は明らかではない。

出土遺物 (第34図45～50、図版32)

45、46は鉢で、45はやや歪で、開きが弱く窄まった印象である。内外面とも刷毛目調整を施すが外面の目は粗い。46は内面下半を工具によりナデあげており、痕跡が明瞭に残る。48、49は碗で、49は口縁端部をわずかにつまみ出している。50は手鉢で、長さ2.2cm、幅7.6cm、厚さ0.25cmである。折り曲げ部分の片方を欠く。

②溝

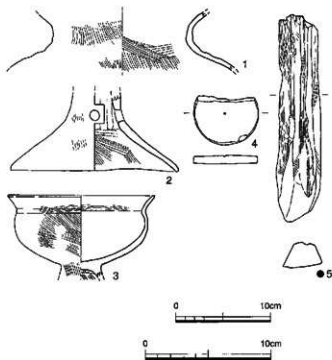
S D O 1 (第32図)

調査区北側の住居跡群内にあり、6号住居跡に切られる。幅約0.8m、深さ約0.4mで、6号住居跡下でほぼ直角に屈曲する。底面レベルはほぼ一定であるが、コーナー部分がわずかに下がり、標高40.65mである。

8号住居跡の0.5m程外にあり、あたかも住居を囲むかのようなものである。時期的にも接近しており、同時期に共存していた可能性が高いが、今回はその性格を明らかにできなかった。

出土遺物 (第35図1～5、図版32)

1は口頸部～胴上部のみ残存する壺である。内外面刷毛目調整を行い、外面は部分的にナデ消し、内面は頸部以上をナデ消す。2は高杯脚部で屈曲部に穿孔する。内外面刷毛目を施すが、外面はナデ消す。3は脚台付の椀である。口縁部は短く外反する。口径15.4cmである。4は紡錘車であるが穿孔途中の未成品である。5は粘板岩製の砥石である。断面は歪な台形状を呈し、頂部(短刃)に筋状の窪みがあるが、その他の面を砥面として使用している。



第35図 S D O 1出土遺物実測図(1/3、●は1/4)

3. 小結

本調査区では、狭い調査区で切り合い関係を把握するのは難しかったが、弥生時代後期終末～古墳時代前期の住居跡10軒分を検出できた。住居は南北30m弱の間に集中して建てられていた。北は弥生時代中期後葉の落ち込みがあり、その後も窪地状になっていたと推測されるため、住まいの場としては不向きであったと思われる。南は二雲中川屋敷482-1番地で弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡を確認しているが、その間約30mでは住居跡はみられないことから、別グループの集落として捉えられよう。西は谷が存在した可能性があり不明であるが、東は中川屋敷1-9'で弥生時代後期終末の住居跡が確認されている。集落構成は、旧地形との関連も含めて徐々に明らかになりつつあるといえよう。

1 新田康雄、小池史也編 1982 『三笠遺跡群』 福岡県文化財調査報告書第63集 福岡県教育委員会

VII. 三雲中川屋敷 471、482-1 番地

1. 調査の概要

本調査区は、480-1 番地に南接する地で、三雲中川屋敷の南端に当たる。近年までは牛舎があったが、現在は取り壊されてビニールハウスが設置されている。牛舎付附属施設建設時の昭和 55 年に、福岡県教育委員会が本調査区の約 40 m 西をトレンチ調査しているが、その際は、軟弱な池沼堆積土状の層、および砂利層地山が確認され、標高 39.23 m で弥生時代中期の遺構面が検出されている。

今回は、平成 16 年 8 月初旬に県道試幅部にトレンチを 2 箇所設定し試掘調査を行い、地表から約 0.5 m (青灰色粘土層下) で遺構面を検出したため、南北 44 m、幅 1.5 ~ 2.5 m の範囲に広げて調査を行った。遺構は中近世および古墳・弥生時代の上下 2 層からなる。検出レベルは上層が標高 39.4 m から、下層が標高 39.3 m である。

調査区は南北に長いが、上・下層とも遺構は北側 24 m の 482-1 番地に集中しており南側の 471 番地はわずかに弥生中期の土器が散布している状況であった。

2. 中近世の遺構と遺物

① 掘立柱建物

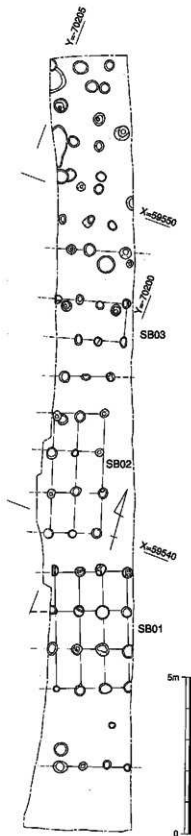
残存状況は悪いものの、上層において、暗灰色粘質土埋土の多数の柱穴を検出した。調査区の幅は 3 m 以下と悪条件ながら、少なくとも 3 棟分の建物跡と櫓列と思われる遺構を確認することができた。

SB01 (第 37 図、図版 13)

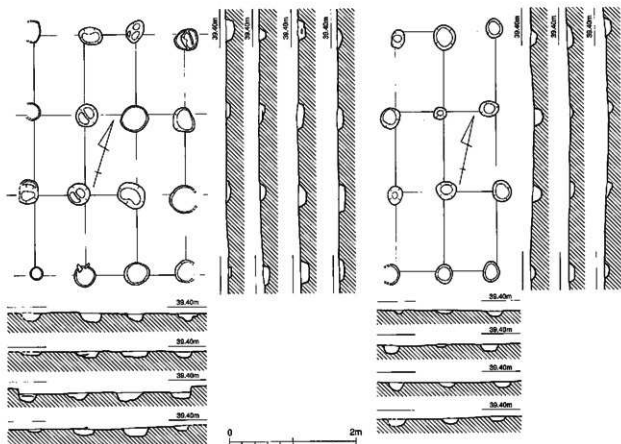
調査区南側で検出した。3 × 3 間の総柱建物で、規模は梁行き (南北) 3.75 m、桁行き (東西) 2.33 m を測るが、東西は調査区外に延びる可能性がある。柱間は芯々で梁行きがいずれも 1.25 m、桁行きは 0.75 ~ 0.8 m。掘り形は歪な楕円形を含むがほぼ正円に近く、径 40 cm 前後である。主軸方位は N - 15° - W をとり、約 2.5 m 南には軸を同じくする櫓列跡らしき遺構がある。

SB02 (第 37 図、図版 13)

SB01 の北で検出した。2 × 3 間の総柱建物で、規模は梁行き (南北) 3.75 m、桁行き (東西) 1.55 m を測るが、西側は調査区外に延びる可能性がある。柱間は芯々で梁行きがいずれも 1.25 m、桁行きは 0.75 m および 0.8 m で、SB01 と同一規格である。掘り形は径 30 cm 前後と SB01 より一回り小さい。主軸方位は N - 11° - W をとり、約 1.2 m 北には軸を同じくする櫓列跡らしき遺構がある。



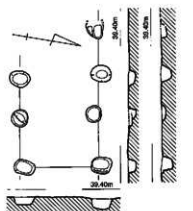
第 36 図 三雲中川屋敷 482-1 番地上層全体図 (1/120)



第37図 SB 01・02実測図 (1/60)

SB 03 (第38図、図版13)

SB 02の北で検出した。1×3間で規模は梁行き(東西)2.2m、桁行き(南北)1.25mを測るが、東西とも調査区外へ延びる可能性がある。柱間は芯々で梁行きが0.65～0.8m、桁行きが1.25mである。掘り形は径30cm前後である。主軸方位はN-80°-E(桁行きではN-10°-W)をとる。約1.6m北には軸を同じくする横列跡らしき遺構がある。



第38図 SB 03実測図 (1/60)

3. 古墳・弥生時代の遺構と遺物

① 竪穴式住居跡

1号住居跡 (第40図、図版13)

調査区北端で検出した。南側の立ち上がりを確認したのみで、他は調査区外へ続く。現況で2.4～4.5mを測る。南に幅0.4～0.7mの不規則なベッド状遺構を備える。ピットを数個検出できたが、柱穴は明らかではない。また、伊跡も検出できなかった。

出土遺物 (第41図1・2、図版32)

1は口縁部がほぼ直立する二重口縁甕で口径24.8cmである。2は脚付椀の脚部で底部径は9.4cmである。

2号住居跡 (第40図、図版13)

1号住居跡の南側で検出した。現況で2.4×6.0mを測り、東西は調査区外へ続く大型の住居である。北東部に幅1m強の、また南側に幅1.3mのベッド状遺構を備え、北側はベッドまで、南側はベッド沿いに周溝を巡らす。調査区西壁際には0.6×0.5mの炉跡が存在する。柱穴はP1・2が挙げられるがいずれも深さ10cmと浅い。P1・2と炉跡の間の床面には、赤色顔料が散布しているのが確認された。

また、P3内の掘り込みおよび南周溝内から同一個体の磁石が出土した。

出土遺物 (第41図3~12、第42図、図版32・33)

3~5、11は裏で、3、5は内外面刷毛目を施す。いずれも床面から出土している。

6は脚台付の鉢で、脚部を欠損する。内外面とも粗い刷毛目調整で、全体に雑な印象である。ベッド状遺構から出土。7は大型甕の頸部付近で屈曲部に断面コの字状突帯が巡る。外面突帯下は縦方向の刷毛目だが、頸部内面には横方向の粗い刷毛目が残る。

10はレンズ状の底部を有する甕で、著しく磨滅して調整不明である。胎土は細粒を多く含み粗い。

20は粘板岩製の磁石で、断面四角形を呈する。全面使用しているが、厚いところで2cm、使用度の高いところは8mmである。重さ132.45g

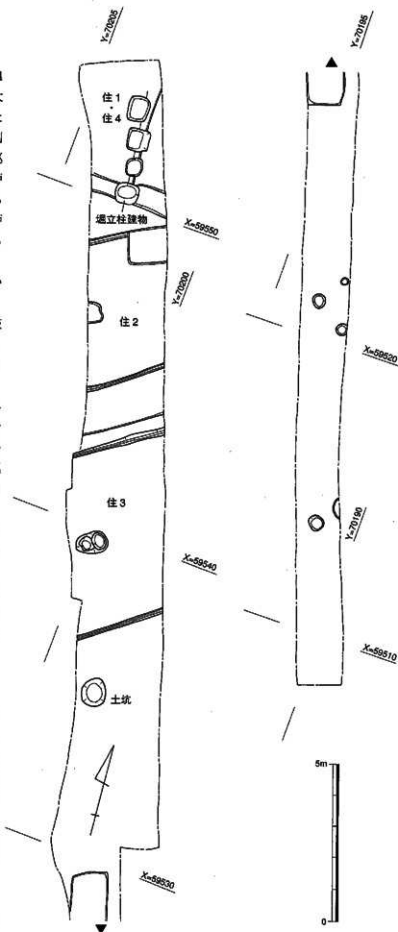
3号住居跡 (第40図、図版13)

2号住居跡の南側で検出した。2.4×5.7mを測り、やはり東西は調査区外へ続く。南北壁沿いに周溝を巡らす。中央部に0.7×1.0mの炉跡があり、炉内の2箇所の窪みに焼土が堆積していた。主柱穴はP1~3でいずれも深さ30cmである。

遺物は北東の周溝付近で甕が、炉跡から約70cm西で高杯脚部が、いずれも床面から出土している。4世紀後葉頃と思われる。

出土遺物 (第41図13~16、図版33)

13は裏で口径15.1cmである。口縁部の大きさの割にまで肩で小型である。15は口



第39図 三雲中川屋敷 471・482-1 番地下層全体図 (1/120)

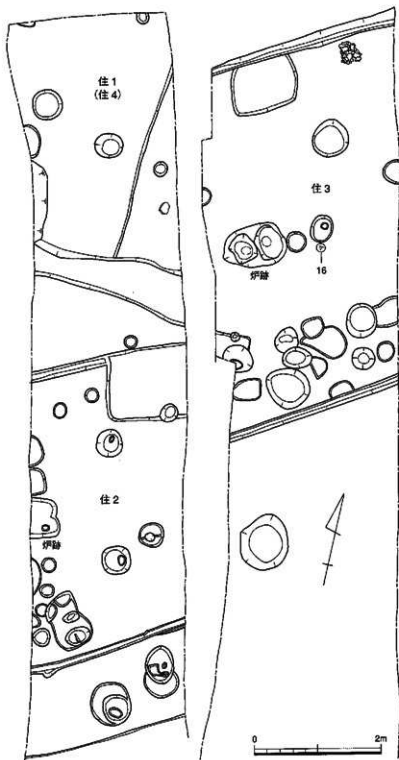
縁部と底部を欠く直口壺である。最大径 14.1cm で外面は刷毛目を施し口縁部はナデ消す。内面は胴部との境に稜を有するが、磨滅しており明瞭なケズリの痕跡はない。16 は高杯の脚部で杯部を欠損する。裾径 12.9cm、残存高 8.4cm である。緩やかな屈曲部 3 方に穿孔している。胎土は精緻である。

4号住居跡 (第40図、図版13)

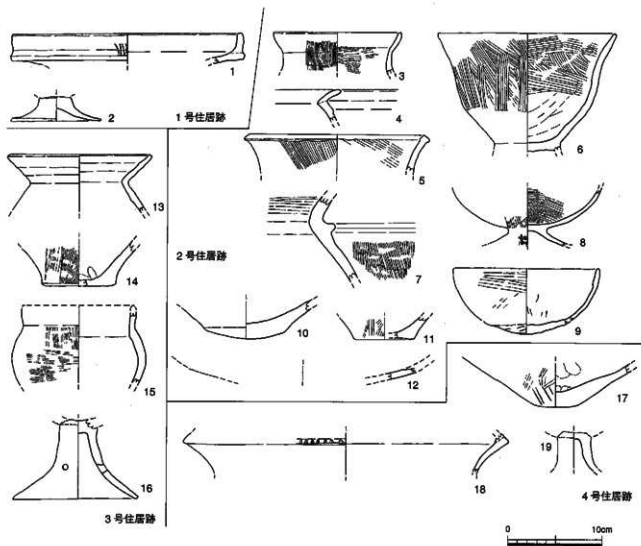
1号住居跡の下層で検出したが東壁の一部のみの検出であり詳細は把握していない。出土遺物も少量である。切り合い関係から、弥生時代終末以前、後期後葉頃と思われる。

出土遺物 (第41図17~19、図版33)

17 は壺の底部でレンズ状を呈する。外面は縦~斜め方向の粗い刷毛目を施し、内面は強くナデ上げる。床面からの出土である。19 は高杯の脚部で残存高は 4.1cm である。杯部との接合面には縦横に沈線状の傷を入れている。混人品か。



第40図 住居跡実測図 (1/60)



第41図 住居跡出土遺物実測図① (1/4)

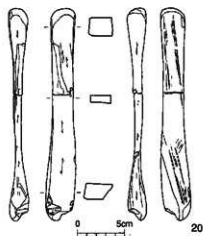
②土坑 (第43図)

調査区南側、3号住居跡から2m南の地点で検出した。標高33.25mから切り込み、掘り形は0.82×0.77m、深さ45cmでやや歪な円形を呈す。土坑は一旦埋まって再度20cm程度掘削されており、その際に何かを焼いたのか、壁には炭と焼土が多く見られた。最初の掘り形底面から椀が1点のみ出土している。

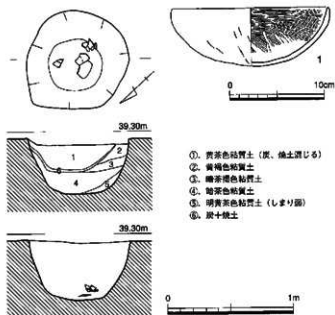
なお、この土坑以南は大～小礫の地山となり遺構は検出されなかった。

出土遺物 (第43図、図版33)

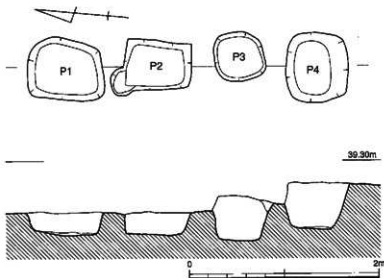
口径16.4cm、器高6.1cmの椀である。口縁端部は若干内湾しており、やや肥厚気味である。器面調整は外面口縁部付近をナデ、それ以下はヘラケズリの後ナデを施す。内面は斜め～横方向に細かい刷毛目を施し、底部近くはさらに工具によりミガキ風にナデ仕上げしている。淡橙色を呈し胎土は極めて精緻な精製品である。



第42図 住居跡出土遺物実測図② (1/4)



第 43 図 土坑及び出土遺物実測図 (1/30、1/4)



第 44 図 掘立柱建物実測図 (1/40)

たと想定しても間違いではないであろう。

下層では弥生時代後期後葉～古墳時代前期の住居跡が検出された。北側の 480-1 番地でもほぼ同時期の住居跡が検出されているが、480-1 番地の調査区南側には住居跡は展開せず、本調査区まで約 30 m の空間がある。また、本調査区南側においても遺構密度が低くなる傾向があり南北方向には集落が広がらないことがわかった。過去の試掘調査により、本調査区 471 番地の東西は沼地状あるいは谷状の地形であったと推定されているため、集落は限られた台地上に展開していたものと考えられる。

③ 掘立柱建物 (第 44 図、図版 13)

調査区北側で 1 号住居跡および 4 号住居跡に切られる形で検出した、桁行き 3 間、芯々距離で 2.65 m の建物跡である。

掘り形は P3 がやや丸みを帯びるが、他はいずれも方形に近い。断面形態も方形で底面の面積が広い。柱間は 0.8 m で、N-5°-W に主軸をとる。現況では梁行きは不明であるが、東側調査区外に延びている可能性が高い。遺物は土器細片が出土しており、弥生時代中期のものと考えられる。

4. 小結

上層で判明した掘立柱建物群について、検出した 3 棟のうち、S B 01 および S B 02 は倉庫跡あるいは何らかの特殊施設であったと思われる。各々に併行する槽列跡は、本来この倉庫 (特殊施設) を囲むものであったと推測される。また S B 03 北の槽列跡は、これら一連の建物群を区画するためのものと想定しておきたい。

ただ残念ながら遺物が出土しておらず、この建物群の時期の特定には至らなかった。しかし、埋上の状況から中世以降の遺構であることは明らかである。規則性のある建物配置と「中川屋敷」という字名から、この周辺に有力者層の居館あるいは何らかの施設があった

VIII. 三雲ヤリミノ 426 番地

1. 調査の概要

本調査区は、字境となる市道の南に位置する。渠道を挟んで東側は、昭和 56 年に福岡県教育委員会により住宅建築に伴う試掘調査が実施されている。小さなトレンチながら南西から北東へ傾斜する礫層が検出され、谷あるいは旧河道と予測されていた地である。

本調査区では、地表下は 40cm 程真砂土が、その下は約 50cm の耕作土の堆積があり、北側から地山である小礫層が延びていたが、調査区中央付近から南側は黄褐色土に変化した。標高 39.8 m で遺構面を検出したが、遺構密度は極めて低く、検出遺構は祭祀土坑 1 基のみである。調査期間は平成 16 年 10 月下旬～11 月中旬である。

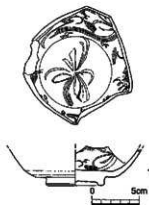
2. 遺構と遺物

① 包含層出土遺物 (第 46 図、図版 33)

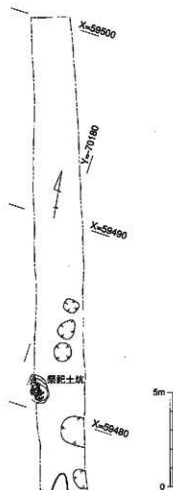
重機で遺構面まで掘り下げる途中、龍泉窯青磁焼片が出土した。出土層位を把握できなかったが、この時期の遺構は存在していない。ただ、北側の中川原敷 482 - 1 番地上層で時期不明の孤立柱建物群を検出しており、今後の周辺調査で何らかの时期的情報が得られれば、参考資料として意味をもつものと期待したい。遺物は胴下半部～底部のみが残存する。

② 祭祀土坑 (第 47 図、図版 14・2・3)

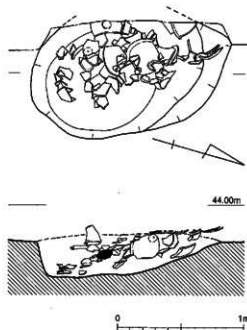
調査区南側で検出した。黄褐色土地山から切り込む。検出レベルは標高 39.8 m。規模は南北 1.48 m、深さ 25.5 m で、西側は調査区外へ続く。掘り形は歪な円形を呈し、北側は南側に比較して緩やかに立ち上がる。時期は弥生時代中期末葉であるが、本調査区内では壘棺墓等、関連遺構は検出していない。



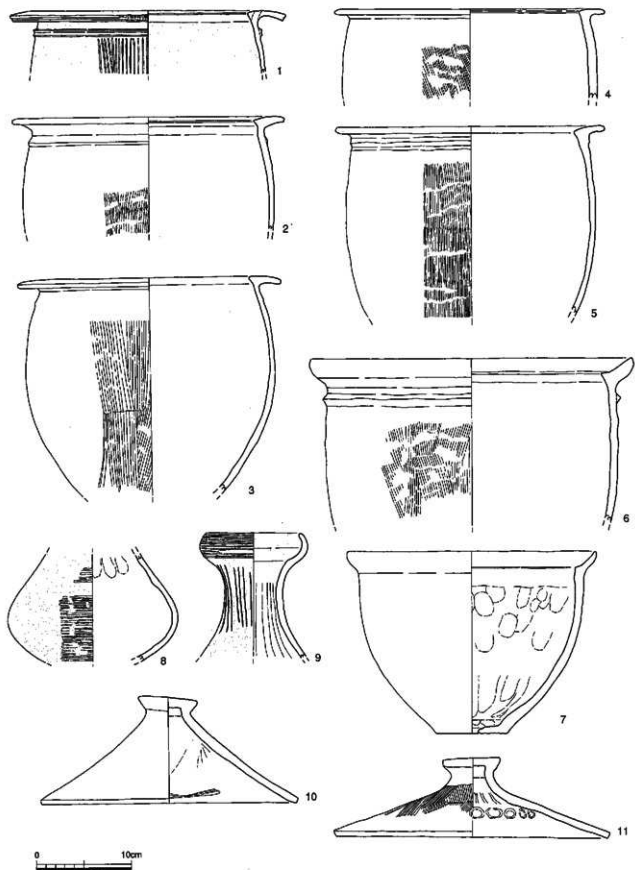
第 46 図 包含層出土遺物実測図 (1/4)



第 45 図 三雲ヤリミノ 426 番地全体図 (1/200)



第 47 図 祭祀土坑実測図 (1/60)



第 48 図 祭祀土坑出土遺物実測図① (1/4)

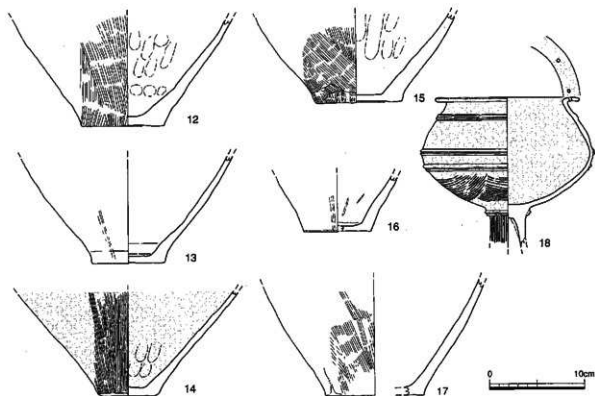
南に隣接する三雲ヤリミゾ 428、429 番地の調査区第 1 地点では、やはり弥生時代中期後葉～末葉の祭祀遺物を検出しているが、これに対応する墓跡は未検出である。このことについては、総括で検討を加える。

出土遺物 (第 48・49 図、図版 33・34)

第 48 図 1～7 は甕、8・9 は袋状口縁壺、10・11 は甕、第 49 図 12～17 は甕・壺の底部、18 は脚付壺である。

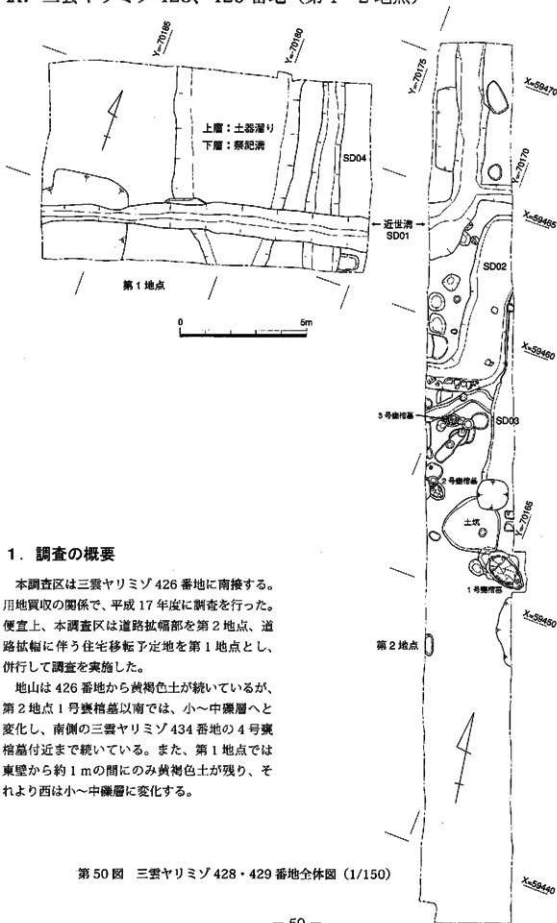
1～5 は逆し字形口縁を有する甕で、1 のみ内外面丹塗りで口縁部に刻み目を施す。口縁部下に M 字突帯を巡らし、突帯下には縦方向の暗文が残る。胎土は極めて精緻である。2～6 はいずれも内面横方向のナデ、外面は縦方向の刷毛目で口縁部近くはきれいにナデ消している。胎土は石英や長石の細粒をわずかに含む。3 は胴部にやや丸みを帯びる。6・7 は口縁部が内湾して立ち上がるタイプ。6 が他の甕と同様の調整であるのに対し、7 の外面は刷毛目を丁寧にナデ消し胎土も精緻である。底部穿孔を施す。胴部が短く鉢形に近い。8 は外面全面と口縁部内面に丹塗りを施す。外面はタテ方向のミガキ、口縁部はヨコ方向のミガキ。頸部内面に絞りが残る。9 は胴部でやはり外面全面を丹塗り+横方向のミガキで仕上げる。最大径は胴の下半にあり下膨れとなる。8・9 とも突帯はない。10 は器高 11.5cm を測り、内外面横方向のナデ。11 は器高 8.6cm と 10 に比べて扁平である。外面に刷毛目が残る。裾部端の内面には帯状に黒く変色しており、焼成時に別個体と接していたことがうかがえる。

12～14・16・17 は甕の底部である。14 のみ内外面丹塗りを施し、外面は丁寧に縦方向に磨いて仕上げている。それ以外は内面指押さえ+ナデ、外面は縦～斜め方向の刷毛目を施す。15 は壺の底部か。18 は短頸壺に脚台が付くタイプである。口縁平坦部に孔があり、本来は蓋とセットで使用されたものであるが対応する蓋は出土していない。口縁部下に 1 条、胴最大径付近に 2 条、脚台部との接合部に 1 条、計 4 条の M 字突帯を巡らす。風化が著しく胴上半部の調整は不明であるが、下半部は 4 分割して斜め方向のミガキ、脚部は縦方向のミガキを施す。磨滅が著しく痕跡しか残っていないが、本来は内外面丹塗りであったと思われる。



第 49 図 祭祀土坑出土遺物実測図② (1/4)

IX. 三雲ヤリミゾ428、429番地（第1・2地点）

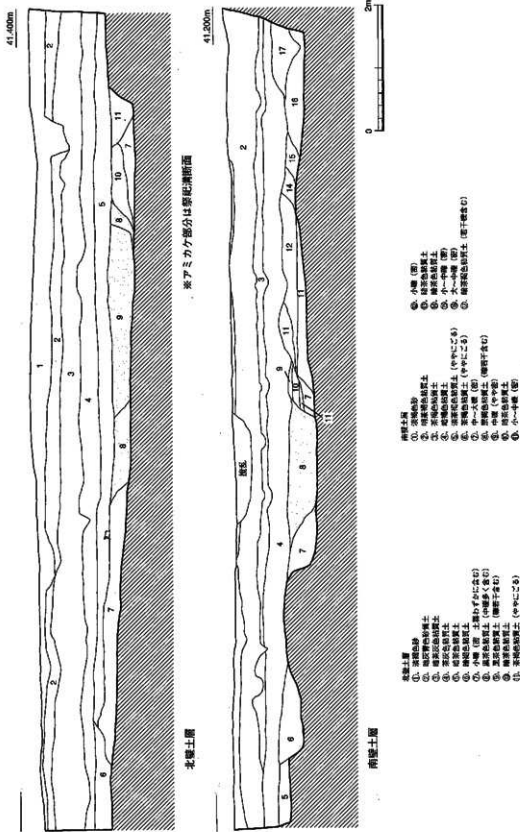


1. 調査の概要

本調査区は三雲ヤリミゾ426番地に南接する。用地買収の関係で、平成17年度に調査を行った。便宜上、本調査区は道路拡幅部を第2地点、道路拡幅に伴う住宅移転予定地を第1地点とし、併行して調査を実施した。

地山は426番地から黄褐色土が続いているが、第2地点1号検出溝以南では、小～中礫層へと変化し、南側の三雲ヤリミゾ434番地の4号東椀墓付近まで続いている。また、第1地点では東壁から約1mの間のみ黄褐色土が残り、それより西は小～中礫層に変化する。

第50図 三雲ヤリミゾ428・429番地全体図(1/150)



第 51 図 調査区第 1 地点北壁・南壁土層実測図 (1/60)

今回の調査においては、北側の 426 番地同様、三雲南小路土竊と非常に近接する時期の遺構を検出することができた。しかもそれが祭祀遺物のみを含む大規模な溝であることから、王墓との関連をうかがわせる新たな資料として重要な発見となった。

平成 17 年 5 月初頭に表土剥ぎを行い 6 月下旬に終了した。面積は 225 m² である。

2. 近世の遺構と遺物

① 溝 SD01・SD02 (第 52 図、図版 14)

調査区第 1・2 地点にまたがる溝で、第 1 地点では東西に延びるが第 2 地点で北側に屈曲する。弥生時代の祭祀溝を切る。幅約 1.5 m、深さ約 1.3 m で、埋土は弱粘性の灰褐色粘質土である。断面は東西方向で緩やかな V 字形を呈すが、南北方向では底部が広がり台形状となる。屈曲の状況から区画溝としての機能が推測されたが、溝の内側では関連遺構は検出できなかった。

遺物は瓦片、染付け片など、いずれも小片が出土している。

3. 中世の遺構と遺物

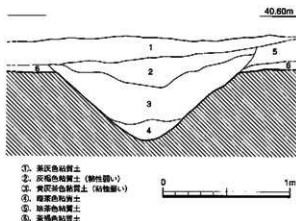
② 土坑 (第 53 図、図版 14-6)

調査区第 2 地点の中央 (1 号墳陪墓北側) で灰褐色粘質土埋土の土坑を検出した。規模は 2.22 × 2.16 m で歪な円形を呈し、深さ約 15 cm である。土坑内からは完形の鉄製刀子が出土しており、土坑墓あるいは木棺墓の可能性を疑ったが、プランや断面形態から墓坑とは考えにくく、刀子も床面から浮いて出土していることから確定には至らなかった。付近からは滑石製の石鏡片が出土しており、時期は 11 ~ 12 世紀代と考えられる。

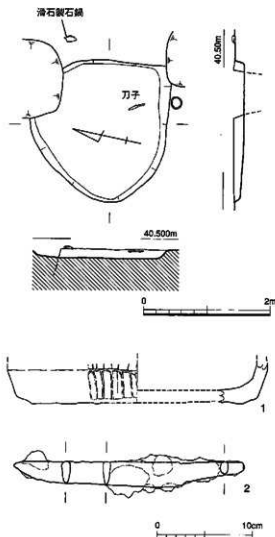
出土遺物 (第 53 図 1・2、図版 34)

1 は土坑から約 0.5 m 東から出土した滑石製石鏡の底部片である。底径は復元では 22.2 cm で、外面は盤により丁寧に面取り整形され、また内面は滑らかに仕上げられている。明灰色を呈する。

2 は鉄製刀子で長さは 24.2 cm、最大幅は 2.4 cm である。木質等は残存していなかった。



第 52 図 近世溝断面土層図 (1/30)



第 53 図 土坑実測図及び出土遺物実測図 (1/60、1/4)

4. 古墳時代の遺構と遺物

①溝 SD03 (第 51 図、図版 14)

調査区第 2 地点中央東壁沿いで検出した、幅 1m 以上の南北に走る溝である。北は調査区外へ、南は墳乱および中世土坑に切られており、その先は不明である。埋土から須恵器片が検出された。

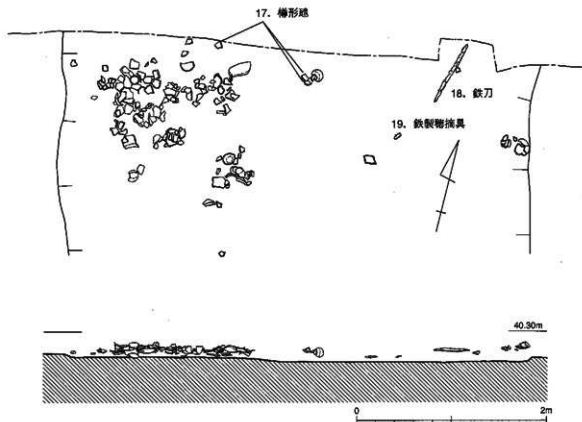
②土器溜り (第 54 図、図版 14)

調査区第 1 地点の北側中央で検出した。この遺構は、土器の出土状況から当初は住居跡である可能性が高いと思われたが、プランの検出は困難を極め、立ち上がりや柱穴の存在を明らかにできなかった。また、遺構の北側は調査区外に延びておりカマドの有無も未確認で、住居跡としての確証を得られなかった。

一方、土器の出土範囲は、下層で検出した祭祀溝の肩の幅とほぼ一致しており、消極的に住居跡の可能性を示唆するより、むしろ祭祀溝の埋没後に残った窪地状の地形に土器が一括廃棄されたものとして捉えられよう。よって今回は土器溜りとして報告する。

東西幅約 5m の範囲から、甕、椀、小型甕等の土器器群と樽形甕が共存して出土した。検出レベルはいずれも標高 40.4 m 前後ではほぼ一定している。西側の肩から約 2 m の範囲に最も土器が集中しており、東側の肩から約 1 m の地点から、完形の鉄刀および鉄製穂道具が出土した。

時期は、土器器の様相と樽形甕の存在から 5 世紀前葉に位置づけられる。



第 54 図 古墳時代土器溜り遺物出土状況実測図 (1/40)

5世紀前半といえ、三雲周辺では加賀石、八龍地区で住居跡が確認されているが、古墳時代前期まで繁栄していた集落がこの時期には急激に減少していく。しかし、近年の調査で南小路・ヤリミノ地区における住居跡の検出が相次いでおり、集落の中心が南に展開していく傾向がうかがえる。よって今回の土器溜りも、南下してきた集落の一部に相当するものとして捉えられよう。

出土遺物 (第55図1～19、図版34・35)

初期須恵器と土師器が共存する好資料であるが、土師器の器種は壺、椀、小型壺や把手と、椀を主体とする限られた器種で構成されており、高杯や器台を含まないのが惜まれる。

壺 1は口径20.4cm、残存高25.2cmの壺で、この一括資料では法量が一番大きい。胴部外面は縦方向の刷毛目の後、肩部に工具によるナデを3本施す。内面はヘラケズリ、口縁端部は丸くおさめる。2・3は1よりもひと回り小さい壺で、口縁部も狭めである。2は口径15.2cm、3は口径18.8cmである。

壺 6は壺で胴の最大径が下位にある。内面は荒いヘラケズリを施す。7は小型丸底壺で口径8.5cmの大きさである。内面は強くナデしており、底部はやや厚い。胎土はほとんど砂粒を含まない。8も小型の壺であるが頸部が強く締まる。外面下半はヘラケズリにより整形されており、肩部が最大径となっている。

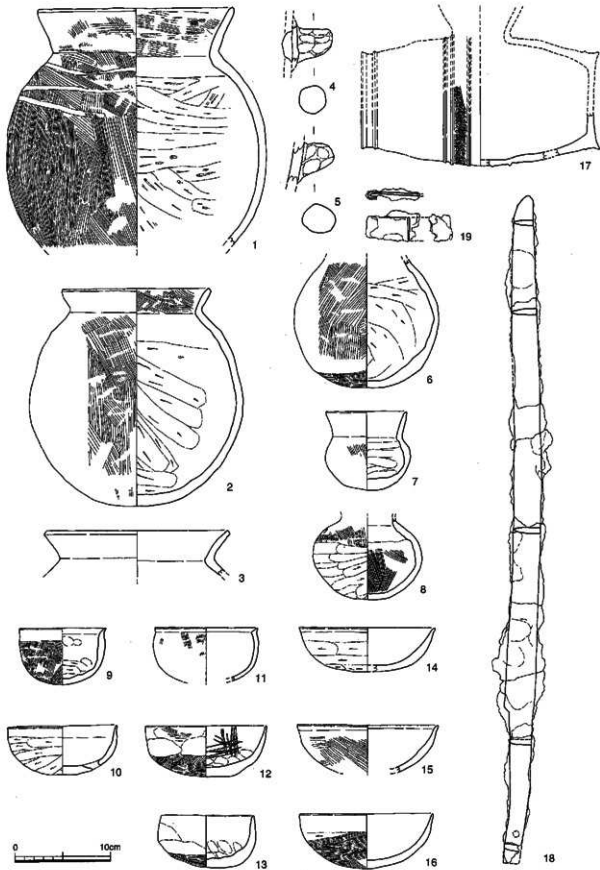
椀 7～14は椀で、口縁がわずかに外反するものとそのまま立ち上がるものがある。9は口径8.9cm、器高6.1cmと、口径は最も小さいが他の椀に比べて深いタイプである。外面は縦～斜め方向の刷毛目調整、内面は強い指ナデを施す。口縁下は外面を強くナデているため端部のみ細く外反している。11は9より若干大きく、他の椀より丸みを帯びる。口縁内面に稜ができる。その他の椀はやや平たいタイプであるが、外面をヘラケズりするものと、ハケをそのまま残すものがある。10は底部付近に外から内へ穿孔を施す。12は器壁が厚く歪で、内面には縦横に引っ掻き傷のような痕跡が見られる。これは製作時に故意に付けられたものであるが意図するところは不明である。

把手 4・5は把手で、いずれも長さ4cm弱と短く太い。壺に付くかどうかは不明。なお、ほぼ同時期と思われる三雲八龍地区1～18の1号住居跡はカマドをもたないが多孔式甕が出土しており、把手は細く長く、反りが大きいタイプであり、今回出土した把手とは様相を異にする。

樽形甕 土師器と共に3片に分かれて出土した。三雲・井原遺跡では初の出土例で、糸島地域では御床松原遺跡に次いで2遺跡3例目である。出土部位は側面および胴部の一部のみで、頸部～口縁部を欠く。胴部に3本、側面近くに1本の突帯が巡り、中央に近い2本の間に8条からなる波状文が彫掻きされている。胎土は一部大粒の砂を含むが甕々精練で、焼成も硬く良好である。内面にわずかではあるが自然釉が付着しており、焼成時に開口部から入ったものと思われる。胴部は歪な円形であり、復元には不安が残るが、推定で長さ25.0cm、器高(口縁部除く)13.0cmである。

鉄製種摘具 19は長さ2.5cm、幅9.1cm(推定)、厚さ0.3cmの大きさ。検出時は完形品であったが、清掃時に中央部の破片を紛失してしまった。

鉄刀 18は長さ70.1cm、最大幅2.8cmの完形品である。やや内湾するのが特徴である。関節は錆ぶくれが著しいが、透過X線によりその形態を確認している。また、目釘穴も肉眼では観察できなかったが、同じく透過X線によりその存在を確認することができた。土器群から若干離れて出土したが、レベル的には大差なく、他に伴うであろう遺構がなかったことから、これらは同一遺構のものとして判断した。



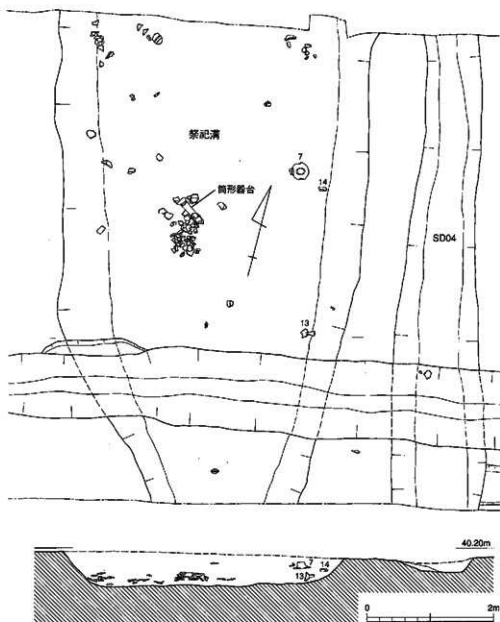
第 55 図 土器溜り遺物実測図 (1/4)

3. 弥生時代の遺構と遺物

① 祭祀溝 (第56・57図、図版15)

調査区第1地点の中央で検出した。幅は北壁付近で約4.85m(底面幅は約4m)、南壁付近で2.5m(底面幅は約1.9m)と、南壁近くで幅が約半分までに狭くなっている。深さは検出面から約40cmで、底面レベルは南北とも標高30.6mとほぼ一定である。南・北側は調査区外へ続くが、次章で報告する三雲ヤリミノ434番地では検出してない。

出土遺物は丹塗り土器片の割合が多く、祭祀性の強い遺構であるが、大型筒形器台の存在がそのことを明白にしている。大型筒形器台は溝のほぼ中央底面から出土した。現代の擾乱により一部欠損しているが、残存状況は比較的良好である。他の土器片はこの周辺に最も集中していた。また、大型筒形器台の東からは、口縁部打ち欠き土器のほか、精巧に作られた小型袋状鉄斧(手斧)が出土している。



第56図 祭祀溝実測図(1/60)

これら祭祀土器の出土は、周辺に墓柢墓群の存在をうかがわせるものであるが、本調査区ではこの時期の墓群は確認していない。しかし、前章に挙げた三雲ヤリミソ 426 番地で検出した祭祀土坑も含め、中期後葉～末にかけて三雲南小路王墓の北～北東に墓地が造営されていたものと推測できる。また、祭祀溝に平行して南北に走る溝 SD04 は黄褐色土山から切り込む茶褐色粘質土埋土の溝である。ここからは小片ではあるが丹塗り土器が出土しており、中期後葉前後に祭祀溝を意識して掘削されたものと推測される。

これらのことについては、周辺の調査および南小路王墓との関連として総括の中で検討することとする。

出土遺物 (第 58・59 図 1～14、図版 35・36)

筒形器台 鈎部口唇はやや肥厚させ、凹線を巡らす。口縁部は上面に平坦部を設けるが、端面内面が顕著に磨り減り、若干丸みを帯びる。外面脚部から胴部は残存部分で 6 回に分けて丁寧なタテ方向の丹塗り磨研、口縁部は 2～3 本 1 組の暗文を施す。内面は横方向のナデで口縁部のみ丹塗り。脚部中央やや上位に指頭圧痕が著しく残る。残存高 56.1cm、口径 13.8cm、鈎径 25.6cm。胎土は精緻で微量の石英、長石、金雲母を含む。口縁端面内面に見られる磨滅は器台として用いられた際の使用痕かと思われるが、祭器として使用される短期間に果たして磨滅が生じるものか疑問も残る。

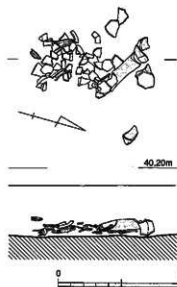
壘 第 59 図 1～5 は逆し字の口縁をもつ壘である。口縁部やや下に断面三角突帯を付すものとそうでないものがあり、前者は外面を丁寧にナデ消しているが、後者は刷毛目が残ったままである。4 は外面に丹塗りを施し胎土も精緻であるが、磨滅していてミガキが施されているか不明である。8・10・11 は壘の底部である。いずれも外面は縦～斜め方向の刷毛目を施す。11 のみ底部穿孔がみられる。

袋状口縁臺 6 は胴部のみ出土。しっかりした突帯が巡る。胎土は精緻で焼成も良好である。外面の一部に赤色顔料が付着している。

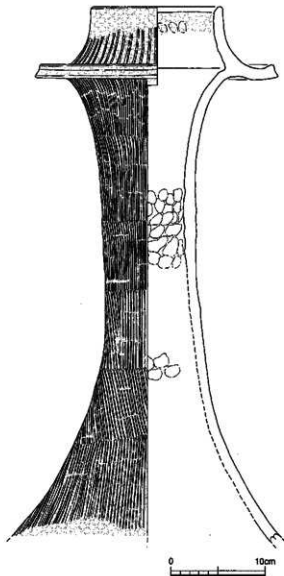
臺 7 は口径 28.1cm、残存高 9.3cm である。頸部から上下を故意に分割し、さらに口縁平坦部～端部を打ち欠いている。打ち欠き場所 2 箇所は模式図に示したとおり相対する。一種の祭祀的行為と解しておきたい。

9 は底部で底径 3.4cm を測る。外面に一部丹塗りの痕跡がうかがえるが風化していて詳細な調整は不明。明黄灰色で胎土は精緻、焼成はやや甘い。

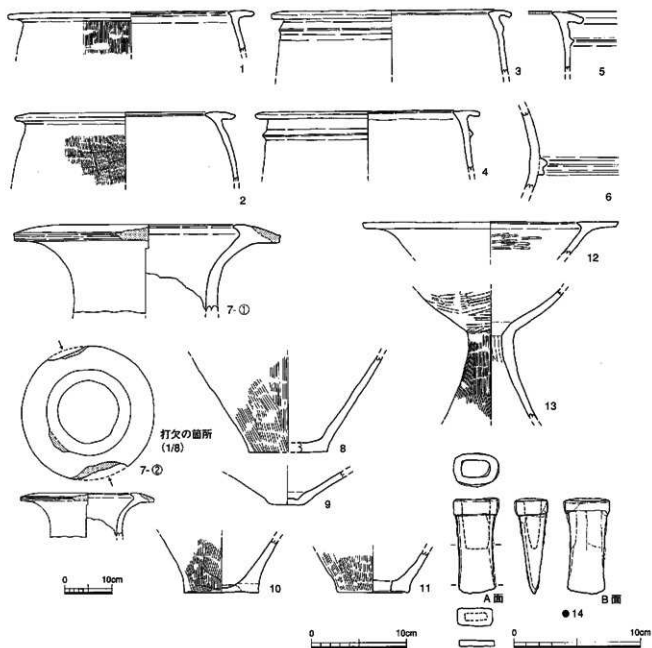
高杯 12 は口縁部～杯部上位のみ遺存する。内面は丹塗り+横方向のミガキ。口縁平坦部ののびが新しい要



第 57 図 祭祀土器出土状況実測図 (1/30)



第 58 図 祭祀溝出土遺物実測図① (1/4)



第 59 図 祭祀溝出土遺物実測図② (1/4、●は 1/3)

素をもつ。上層土師器土器溜りの直下から出土しており、埋没時期を示す資料といえる。13は残存高13.5cmで、外面全面に丹塗りを施す。脚部は縦方向の刷毛目、杯部は斜め～横方向のミガキ。脚部内面には絞りの痕跡がある。胎土は石英、長石の細粒をわずかに含むが概ね精緻である。脚部と杯部は貫通しているが、本来充填されていた円盤状粘土が剥落したものである。

袋状鉄斧(手斧) 14は長さ7.6cm、幅は袋部で3.6cm、刃部で2.9cmの大きさである。袋部端部は補強のため折り曲げられており突帯状の厚みをもつ。端部以下は、刃部にかけてわずかに内湾している。袋部は一見したところ铸造品と間違えそうな程に丁寧に接合されているが、B面中央に接合面らしい痕跡がうかがえる。刃は片刃で、A面が若干膨らみをもち、端部折り曲げも厚いのに対し、B面は平坦で端部折り曲げは薄く幅が狭い。先端は研ぎの具合からか、左右相対ではない。

② 褒棺墓

1号褒棺墓 (第60・61図、図版15・36)

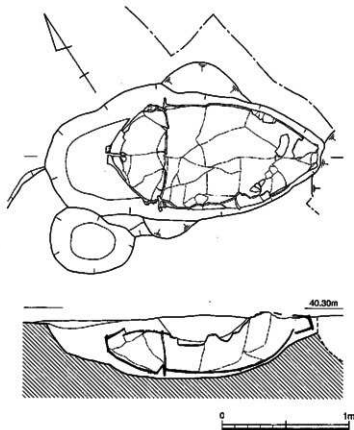
調査区第2地点中央東壁付近で検出した。検出レベルは標高40.27m、棺底は標高39.75mである。上棺は壺、下棺は褒で、上棺は口縁部～胴部上半を打ち欠いて使用している。現代の擾乱で上下棺とも半分以上が破壊されている。墓域は 2.18×1.07 mの楕円形を呈し、西側にテラスを1段設けている。合口は接口式である。主軸方位N-68°-Wをとる。

上棺 底径11.9cm、残存高39.0cm、胴最大径67.8を測る。最大径部に断面が口唇状に近い突帯を2条巡らす。胴上部は打ち欠かれており形態は不詳であるが、中期中葉に見られる胴部が玉ねぎ形を呈する壺であると思われる。調整は内外面ともナデ仕上げで、底部外面に一部刷毛目が残る。内外面とも明茶褐色を呈し、焼成良好である。

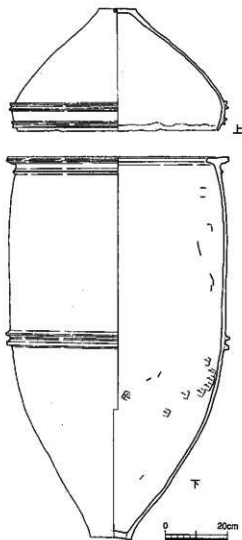
下棺 口径70.2cm、底径13cm、器高118.6cmを測る成人棺である。口縁部は平坦部が若干内傾して内側に張り出し、外面直下に1条の断面三角形突帯を巡らす。胴中に2条の断面台形突帯が巡るが、上位の突帯は頂部が丸みを帯びてシャープではない。内外面ナデ調整を施すが、内面に一部工具によるナデの痕跡が残る。内外面とも淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

2号褒棺墓 (第62・63図、図版15・37)

調査区第2地点中央西壁付近で検出した小児棺。検出レベルは標高40.45m。上下棺とも褒で、後世の削平、攪乱およびピットにより下棺の半分以上と上棺の大半が破壊されている。墓域は 1.02×0.64 mの楕円形を呈す。合口は接口式である。主軸方位はN-58°-Wをとる。



第60図 1号褒棺墓実測図 (1/30)



第61図 1号褒棺墓棺体実測図 (1/12)

上棺 口径31.7cm、残存高8.0cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、直下に1条の断面三角形突帯が巡る。内外面ナデ調整を施す。攪乱により胴部中位～底部を欠損し、残存状況は極めて悪い。

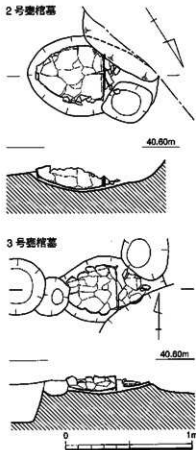
下棺 口径40.4cm、底径10.1cm、器高49.3cmを測る。口縁部はわずかに外傾する逆L字形で、内側にも突出させる。直下に1条の断面三角形突帯が巡る。外面は細かい縦方向の刷毛目、内面はナデ調整を施す。暗褐色を呈し、胎土は細砂を若干含む。焼成良好。

3号壺棺墓 (第62・63図、図版15・37)

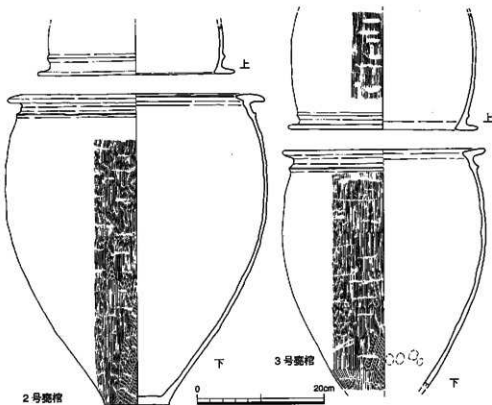
調査区第2地点中央で検出した小児棺。検出レベルは標高40.48m。後世の削平、ピット、溝に切られて上下棺とも大半が破壊されており、依存状態は極めて悪い。墓壇は推定で0.9×0.52mの楕円形を呈する。合口は接口式である。主軸方位はW-1°-Sをとる。

上棺 口径30.0cm、残存高18.9cmを測る。口縁部は逆L字形を呈し、直下に1条の断面三角形突帯が巡る。外面は細かい縦方向の刷毛目、内面はナデ調整を施す。ピットに切られ胴下半～底部を欠損する。

下棺 口径31.8cm、残存高37.9cmを測る。わずかに内傾する逆L字形の口縁部をもち、直下に1条の断面三角形突帯が巡る。外面は6段階に分けて細かい縦方向の刷毛目を、内面はナデ調整を施す。底部を欠損する。



第62図 2・3号壺棺墓実測図 (1/30)



第63図 2・3号壺棺墓棺体実測図 (1/6)

X. 三雲ヤリミノ 434 番地 (第 3 地点)

1. 調査の概要

本調査区は 428 番地に南接する場所で、県道を隔て東向かいに細石神社が鎮座し、また、西側 50 m の地点に三雲南小路王墓が位置している。

428、429 番地と同じく、用地買収の都合により、本調査区も平成 17 年度調査であり、県道拡幅に伴う建物の建替え予定箇所も合わせて、434 番地の東半部の調査を行うこととなった。

北側は 428 番地から小～中層厚地山が続いており、南側に暗茶褐色粘質土の遺構面が広がっていた。面積は約 290 m²、調査期間は平成 17 年 7 月上旬～下旬である。

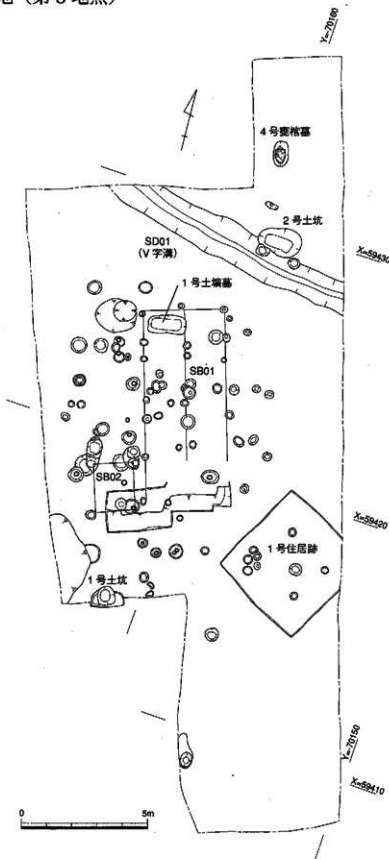
2. 中世の遺構と遺物

①掘立柱建物

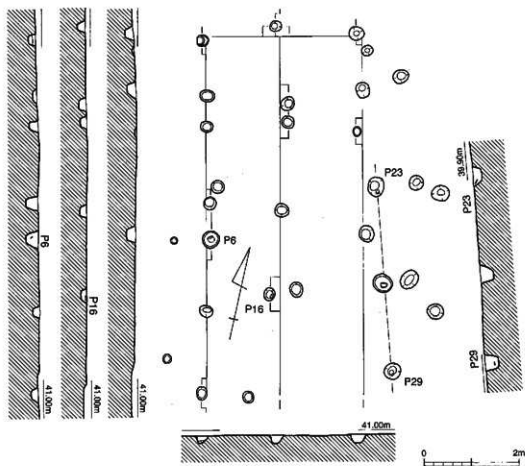
SB01 (第 65 図、図版 15)

調査区中央やや北側で検出した。暗灰色埋土からなる計 31 個のピット群で、うち 23 個が建物関連のものと思われる。現状で梁行 3.15 m、桁行 7.5 m を測る。柱列はいささかランダムで、柱間も 0.8 m～2.5 m の間でバラつく。柱穴は概ね径 30 cm である。主軸は $N-13^{\circ}-W$ をとる。三雲中川屋敷 471 番地の建物群 (第 38・39 図) に比して規則性に極めて乏しい。P6 および P16 からは意図的に打ち欠かれた土師皿・滑石製石鐙が出土している。地鎮的な行為であると思われる。

なお、建物に近接する東側に主軸 $N-17^{\circ}-W$ をとる 3 つの柱穴の並びが確認された。柱間はいずれも 2 m、柱穴は径 40 cm で、SB01 とは別の建物であろうが他に対応する柱穴は検出できなかった。P23 および P29 からも、土師皿・白磁碗が出土した。



第 64 図 三雲ヤリミノ 434 番地 (第 3 地点) 全体図 (1/200)



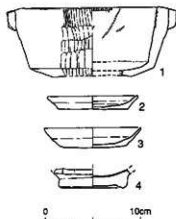
第65図 SB 01実測図 (1/80)

今回検出したSB01のように、建築基準が定かではない建物に関しても、一種の祭祀行為がみられることは、建物の性格あるいは中世における屋敷の概念を考えるうえで興味深い資料といえる。

出土遺物（第66図1～4、図版37）

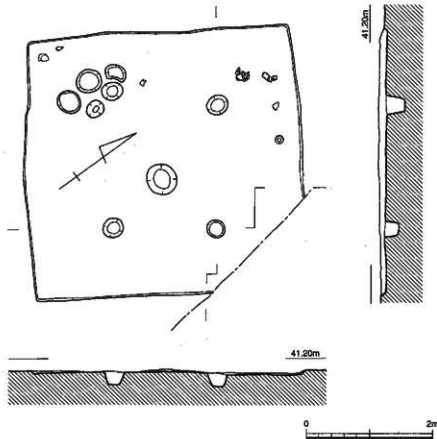
滑石製石鍋 1はP 16から出土した。復元口径16.2cm、器高7.3cmで、上端に把手を削り出す。外面は鑿を使用し丁寧な縦方向のケズリにより器面調整している。内面は横方向へのケズリで一部工具痕があるが滑らかな仕上げである。外面全体と口縁部付近の内面に煤が付着している。1/4程度残存する破片資料であるが、破断面および口縁端部内側に工具による非常に細かい刻みが施されている。これは明らかに破砕後の行為であり、建物建築に際しての祭祀行為とみられる。11世紀代のものか。

土師皿 2・3はいずれも土師皿で、それぞれP6、P23から出土した。2は口径9.6cm、底径8.4cm、器高1.4cmを測る。3は口径10.2cm、底径6.6cm、器高10.2cmを測る。底部に板状工具痕が残る。焼成は甘く軟質である。4は白磁碗で、高台より上位を丁寧に打欠き、平面円形を呈す。底径7.1cm、高台の削り出しは浅い。見込みは施釉される。



第66図 SB 01出土遺物実測図 (1/4)

3. 古墳時代の遺構と遺物



第 67 図 1号住居跡実測図 (1/60)

① 竪穴式住居跡

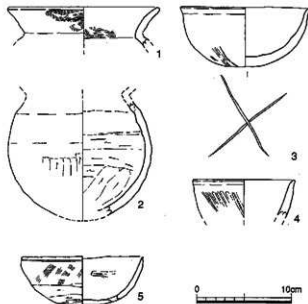
1号住居跡 (第67図、図版15)

調査区南側、東壁近くで検出した。住居内北側には植樹が残っていたため、遺構を傷付けないようカットしながらの作業となった。平面プランは 4.35×4.15 m を測る。残存状況は極めて悪く深さは約 5cm であるが、東壁土層では暗茶褐色粘質土包含層から切り込む深さ約 20cm の遺構であったことが判明した。直径約 30cm、深さ 20~30cm の主柱穴 4 本を持つ。炉跡は検出できなかった。

遺物は椀や甕などが、いずれも住居北西部から出土している。

出土遺物 (第68図1~4、図版37)

1は甕の口縁部である。口径16cmで型である。口縁端部は丸くおさめている。2は型の甕で口縁部および底部を欠く。内面中~下半はヘラケズリを施す。3は椀で口径16.0cm、器高6.4cmの大きさである。口縁部外面を強くナデ



第 68 図 竪穴式住居跡及び土坑出土遺物実測図 (1/4)

ており端部は外反する形となっている。外面は縦方向の刷毛目を施し、底部に「×」をへらにより線刻している。口縁部下の内面には、帯状に黒く変色している。焼成時のものか。4も椀であるが3より小型で深い。

時期は4世紀後葉～末葉と推定される。

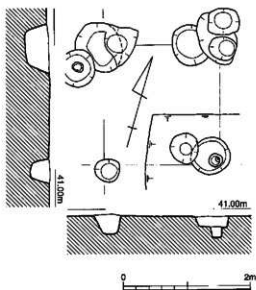
②掘立柱建物跡

S B O 2 (第69図)

調査区中央西側で検出した。現況で1×1間、南北1.9m、東西1.83mを測る。柱穴の掘り形は円形を呈し、径は45～75cmで大小あるが、底面レベルは標高40.6m前後で一定している。

桁行は西側調査区外へ延びる可能性がある。

遺物は土師器の細片が出土しているが時期は不明。馬辺の状況から4～5世紀代であろうか。



第69図 S B O 2 実測図 (1/60)

③土坑

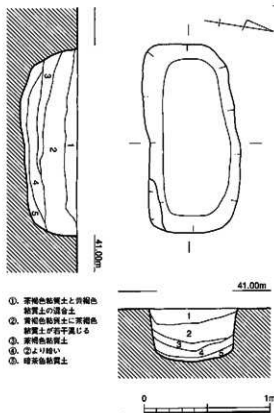
1号土坑 (第64図、図版16)

調査区南西壁際で検出した。東西0.7m、南北0.75m、深さ26cmを測る隅丸方形の土坑である。底面から10cm程の埋土中から、内面を上に向けた状態で完形の椀が1点出土した。椀の底部付近には穿孔が施されており、祭祀的な要素が看取される。遺構の性格が不明瞭であるが、掘立柱建物の柱穴であれば地鎮あるいは建物放棄に伴う祭祀行為が想定されよう。

出土遺物 (第68図5)

口径12.7cm、器高5.1cm、淡褐色の完形品で胎土も精緻である。外面は下半がへらケズリ、上半は斜め方向の刷毛目を施す。口縁部下に1条の沈線が巡る。また、底部やや上位に外から内の穿孔がみられる。内面は工具によるナデ調整。

時期は4世紀末～5世紀初頭であろう。



- ① 茶褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
- ② 黄褐色粘質土に茶褐色粘質土が若干混じる
- ③ 黄褐色粘質土
- ④ 黄褐色粘質土
- ⑤ 黄褐色粘質土

第70図 土坑墓実測図 (1/30)

④土坑墓

1号土坑墓 (第70図、図版16)

調査区北側中央で検出した。墓坑規模は1.48×0.71×0.45mで隅丸長方形である。埋土は茶褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層であり、堆積状況から木蓋の存在が想定できる。主軸方位N-81°-Eをとる。

遺物は出土していない。

4. 弥生時代の遺構と遺物

① 甕棺墓

4号甕棺墓(第71、72図、図版16・38)

調査区北端で検出した。検出レベルは標高41.1mを測り、南側の他の遺構面より20~30cmほど高位にある。墓壇は楕円形を呈し、暗茶褐色粘質土と小〜中礫の混合土である地山から切り込んでいる。上棺は高杯、下棺は甕で、上下棺とも棺体の半分は破壊されている。合口は接口式である。主軸方位N-18°-Wをとる。

時期は弥生時代中期末葉で当該期の墓跡は他になく、単独あるいは非常に散発的な印象を受ける。

上棺 口径32.6cmの高杯。裾部を欠損する。鋤先口縁で口縁部やや下に断面三角形の突帯が1条巡る。内面および口縁平坦部は丹塗り+斜め〜横方向のミガキを施す。脚部には絞り痕がある。外面杯部はナデ、脚部は縦方向のミガキ。

下棺 口縁部は内湾しながら立ち上がり、三角突帯を貼り付けて内側へ張り出させている。口縁直下に1条の断面三角形の突帯を貼付ける。最大径は胴部中央にあり、そこからやや下がった場所に径1.5cmの穿孔を外から内に施す。外面は丁寧な横ナデにより刷毛目をナデ消し、内面は底部近くを工具によるナデ上げ、それ以外は横ナデを施す。胎土も精緻で全体的に丁寧な造りである。

② 土坑

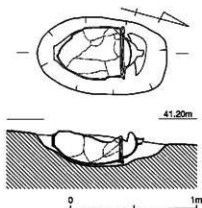
2号土坑(第73図、図版16)

調査区北側で検出した。SDO1(V字溝)の北壁を切る。東西1.7m、南北1.12m、深さ66cmの規模である。断面形態は逆台形状を呈する。底面から10cm程浮いて蓋および甕が出土した。4号甕棺墓に関連する祭祀土坑であろうか。

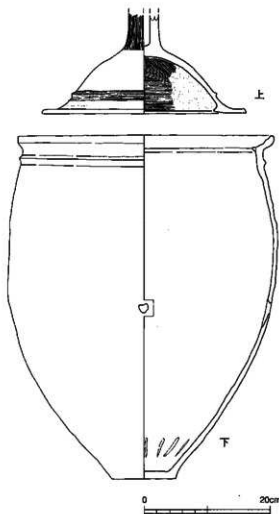
出土遺物(第74図、図版37)

1は甕である。口径22.8cm、残存高6.8cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がるタイプである。小型であり口縁下には突帯が巡らない。外面は縦方向の刷毛目、内面は斜め方向へナデ上げている。胎土中、わずかに細砂を含むが概ね精緻である。

2は小型の蓋で、密部径15.0cm、標高3.1cmを測る。外面は放射状に細かい刷毛目調整を行い、対面2箇所ずつに径5mmの孔を穿孔した後には丹塗りを施す。頂上部は磨滅しているが本来丹塗りと思われる。



第71図 4号甕棺墓実測図(1/30)



第72図 4号甕棺墓棺体実測図(1/6)

③溝

SDO1 (V字溝) (第 75 図、図版 16)

調査区北側で検出した。幅 1.4 ~ 1.7 m、深さ約 45 cm、現況で長さ約 9.4 m を検出した。底面は幅 15 ~ 20 cm と狭く、断面形態は V 字形を呈する。軸は N-80°-W で東西とも調査区外へと続いている。検出レベルは標高 40.85 m で、埋土は黒茶色粘質土(上層)・暗茶色粘質土(中層)・茶褐色粘質土(下層)の 3 層からなる。

溝の北側には小児楯 1 基の他に、三雲ヤリミノ 426 番地に当該期祭祀土坑が存在する一方、南側には遺構のない空間が広がっており、溝を堺に南北で様相が異なる。この溝が南小路王墓とどのような関係にあるのか、現時点では不明であるが、同時期に存在していれば工墓とそれ以外の墓地の区画として、また時期を異にするならば墓域の南端を示すための区画溝であったと解しておきたい。

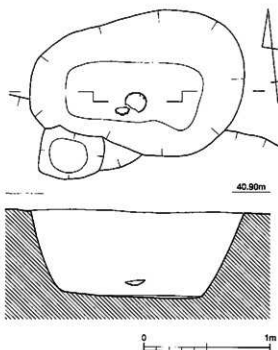
出土遺物 (第 76 図 1 ~ 11、図版 37)

壺 1・2・4 は逆 L 字形の口縁部を有する甕である。いずれも口縁部や下に突帯を巡らす。1 は上層、2 は中層、4 は下層から出土している。5 は胴部から直線的に立ち上がり口縁部が短く外反する。下層からの出土である。

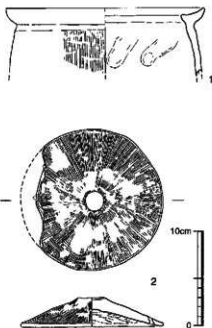
高杯 6 は口径 38.6 cm で内外面丹塗りとナデを施す。口縁平坦部が長く、下方に垂れる。口縁端部には約 2 cm ごとに刻みを入れる。出土層位は不明。7 は口径 25 cm で外面に丹塗りと横方向のミガキを施す。中層からの出土である。

袋状口縁蓋 8 は口径 10.4 cm で内外面ナデ。外面のみ丹塗りで、下層から出土している。9 は胴部最大径 21.2 cm で外面は丹塗りと内面は下位に工具痕、中位に爪跡、上位に指頭痕がある。

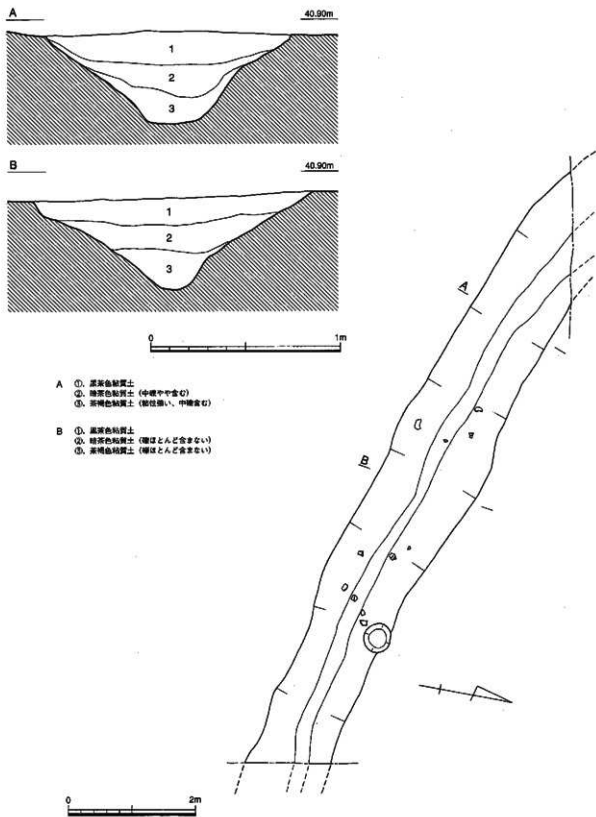
鉢 10 は胴部最大径 14 cm で外面丹塗りと横方向のミガキ、内面はナデを施すもので、中層から出土している。11 は口径 14.6 cm で内外面丹塗りと外面は風化して不明瞭ながら斜め方向のミガキを施す。出土土器の多くは丹塗りであり、時期は概ね中期末葉の範疇で捉えることができる。よって南小路王墓との関連が注意されるが、時期的に近接する遺構として三雲ヤリミノ 426 番地の祭祀土坑や 428・429 番地の祭祀溝も存在するため、王墓周辺の様相を知る上で、これら一連の遺構の性格づけは非常に重要である。このことは総括でまとめることとしたい。



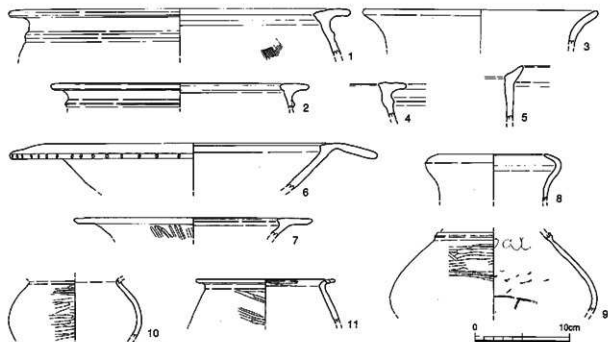
第 73 図 2 号土坑実測図 (1/30)



第 74 図 2 号土坑出土遺物実測図 (1/4)



第75図 SD 01 (V字溝) 実測図及び土層断面実測図 (1/20、1/60)



第76図 S D 01 (V字溝) 出土土器実測図 (1/4)

XI. 三雲ヤリミゾ 434 番地 (第4地点)

1. 調査の概要

本調査は倉庫新設に伴って行われた発掘調査である。その計画は、平成16年12月に前原市教育委員会に提出されたが、申請地が西隣地三雲435番地、東隣地に三雲ヤリミゾ434番地の調査地点があり、三雲南小路土器東側周溝の外側にあたるため確認調査の必要性を認めた。調査の結果、遺構としては弥生中期の築祀土坑1基、奈良期と思われるピット1基を検出した。北側土層の観察では、1,2層が表土、造成土、3層が中世の遺構面で、上面に硬交じりの硬化面が5cmほどある。弥生時代の遺構面は6~9層にかけてであり、三雲435番地の北壁土層の7層にあたる。標高は40.800mで、若干の水平面を形成している。調査区北側にはさらに下層を確認するためトレンチ(A)を設定した。その結果、調査区東端から36mのところまで30cm程度下がり、浅い落込み状となり、7~12層はその埋土である。8,11,12層は藁を多く含むほか、8,11層では弥生時代中期中葉の土器片が検出され、1号土坑はこの面から切り込む。

2. 弥生時代の遺構・遺物

①土坑

1号土坑 (第77図、図版16-8)

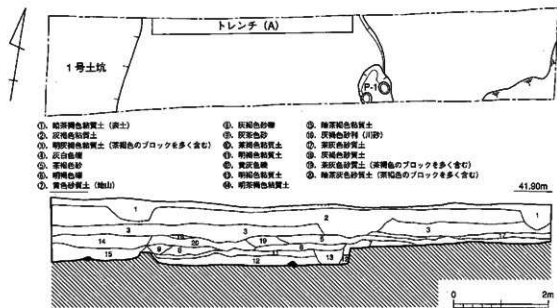
調査区西端で検出された遺構で、調査区の関係上、一部分を確認したのみであり、不明部分も多いのでとりあえず土坑として報告しておく。検出長軸2.12m、短軸1.94m、深さ約22cmである。底面は西側に向かって緩やかに下がっている。坑内からは土器片が出土している。

出土遺物 (第78図1~6、図版38)

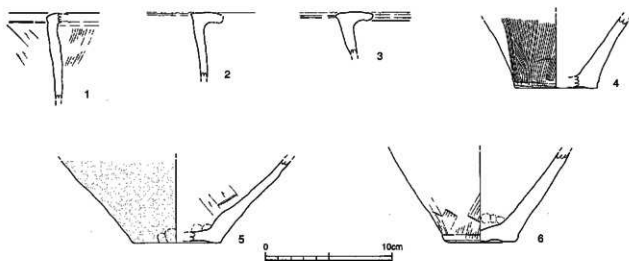
1~3は裏である。1は口縁部を欠損、外面縦方向の刷毛目の後ナデ、内面板状工具によるナデの後ナデである。2,3は口縁部片で、L字状口縁である。4,6は裏の底部片。外面に縦方向の刷毛目が残る。5は蓋の底部片で、外面丹塗りである。

②北側土層出土遺物 (第79図1~4、図版38)

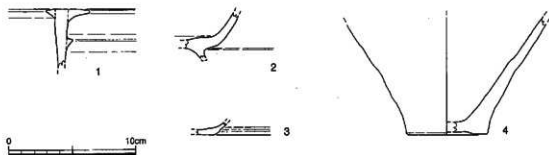
2,3が3層からの出土、1,4が6層からの出土である。2は高台付碗で、内外面とも回転ヨコナデ。3は土師皿片で底部は糸切りの痕跡を残す。1は水平な鋤先口縁を持つ雙の口縁部片。口縁下に三角突帯を1条巡らす。4は裏の底部片で、わずかに上げ底状となる。内外面ともにナデ。11~12世紀頃か。



第77図 三雲ヤリミソ434番地(第4地点)全体図(1/80)



第78図 1号土坑出土土器実測図(1/3)



第79図 第3・6層出土土器実測図(1/3)

XII. 井原ヤリミゾ 2582、2583 番地

1. 調査の概要

本調査区は、三雲と井原の大字境から南に 200 m まで、約 826 m² の調査で、現況では田として利用されていた。基本層序は上から順に黒色粘質土（現耕作土）、黄褐色砂質土（開場整備時造成土）が厚く堆積し、その下の茶褐色を基調とする層が弥生時代の遺構面である。調査区の西側半分は掘乱等によって黄褐色の基盤層まで掘削されており、遺構の残存が悪い。

なお、本遺跡は、弥生時代～近世にかけての複合遺跡であるが、弥生時代後期の墳墓群が主体を占める。弥生時代後期の遺構としては甕棺墓 13 基、木棺墓 10 基、箱式石棺墓 4 基、土壇墓 2 基、祭祀土坑 6 基、上坑 3 基を検出しており、井原縄文茅草と関連する墳墓群と考えられる。

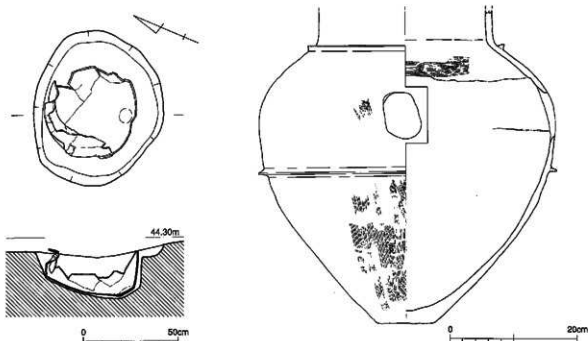
2. 遺構と遺物

① 甕棺墓

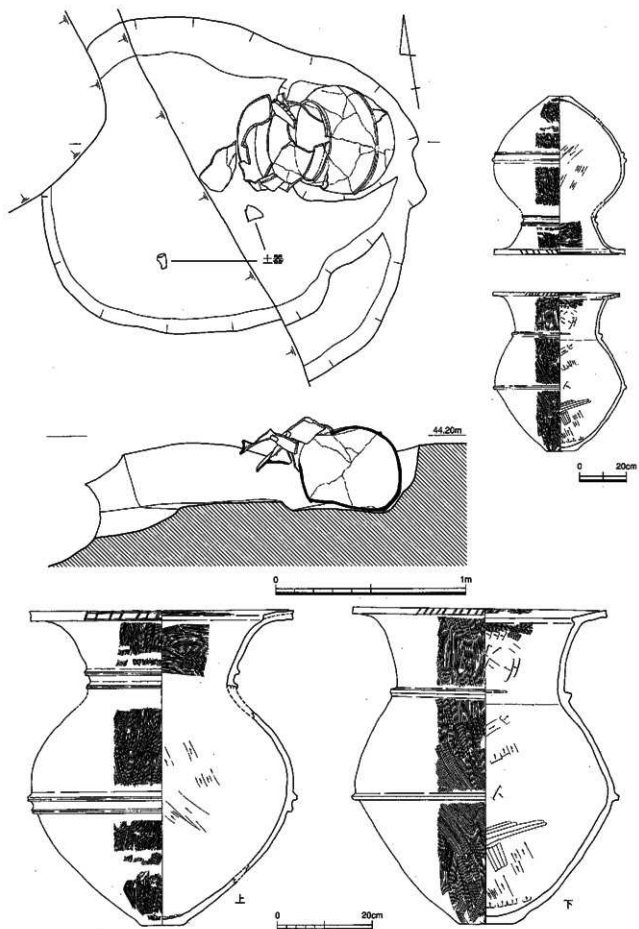
1 号甕棺墓（第 80 図、図版 17・39）

調査区ほぼ中央に位置し、5 号木棺墓と切りあい関係にある甕棺墓である。5 号木棺墓が造られた際、削平を受けているのか棺体の上半分が破壊され、欠損している。掘り形は、歪な楕円形を呈し、断面は棺体の形態に合わせて掘削されている。埋置角度は 53°、主軸方位は N-24°-W である。

棺体 口縁部を打ち欠いて使用された甕棺。胴上位に最大径があり、肩が張り、底部に向かって大きく窄まる。頸部と胴の境に三角突帯を 1 条、胴中位に厚みが少ない台形状突帯を 1 条巡らす。底部は平底であるが、底部と胴下位との境はあまり明瞭ではない。全体的に風化が著しいものの、器面調整は、外面胴部が縦方向の刷毛目、上位は風化の為不明瞭。内面は、胴上位に粘土の繋ぎ目の痕跡が見られ、頸部と胴上位の間に横方向の刷毛目を施し、他の部分はナデ調整である。胴上位には、20cm × 25cm の外側からの穿孔が認められる。



第 80 図 1 号甕棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/6)



第 81 図 2 号妻棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/16、1/8)

2号壺棺墓 (第81図、図版17・38)

1号壺棺墓の南隣に位置し5号木棺墓と切り合い関係にある壺棺墓で、6号木棺墓に向かって挿入する。後世の擾乱や5号木棺墓が造られた際、削平により、上棺の口縁～頸部以下、下棺の口縁～頸部の一部が破壊されている。また、土圧によって下棺下面が潰されている。掘り方は、歪な円形を呈し、南側には1段のテラスを設けるが、これも擾乱によって破壊されている。合口は接口式で、目張り粘土の検出に努力したが確認できなかった。埋置角度は 50° 、主軸方位は $N-19^\circ-W$ である。掘り形埋土中からは丹塗りの鉢形土器2片が検出されており、同一個体であった。鉢形土器は床面から10～15cm程度浮いており、下棺が安定する高さまで埋めた後、葬送儀礼に伴う祭祀行為が行われたと考えられる。

上棺 口縁上面に粘土帯を貼付して若干内傾する鉢先状口縁を作る大形壺で、胴上位と下位は欠損し、接合不可であった。胴中位に最大径があり、頸部と胴の境に台形状突帯を2条、胴中位よりやや下がったところに台形状突帯を2条巡らす。底部は平底であるが胴下位との境はあまり明瞭ではない。器面調整は、外面が縦方向の刷毛目を基調とし、突帯部分は横ナデによって消す。口縁部上面には横方向の刷毛目、口唇部には刻目を施す。内面は、頸部に横方向の刷毛目を施し、胴部は粗い板状工具によるナデを行っている。

下棺 上棺よりも鉢先状口縁が内傾する人形壺で、ほぼ円形であったが、全体の歪みかばげしい。肩があまり張らず、胴中位に最大径があり、頸部と胴の境に台形状突帯を1条、胴中位に台形状突帯を1条巡らす。底部は上棺同様平底であるが、胴下位との境はややあまり明瞭ではない。器面調整は、外面が縦方向の粗い刷毛目を基調とし、突帯部分は横ナデによって消す。口縁部上面には横方向の刷毛目、口唇部には刻目を施す。内面は、口縁下位に横方向の刷毛目を施し、頸部～胴部は粗い板状工具によるナデを行っている。

出土遺物 (第82図、図版41)

墓壇内から検出された丹塗り磨研の鉢形土器で、約1/2が残存し、底部に外から内への穿孔が認められる。口径復元16.4cm、器高7.0cm、底形で5.0cmを測る。器面調整は外面口縁～胴上位が横方向のミガキ、胴中位からは縦方向のミガキで、内面もほぼ同様の調整である。丹塗りは底部を除いて全面に至る。



第82図 2号壺棺墓墓壇内出土土器 (1/4)

3号壺棺墓 (第83図、図版19・39)

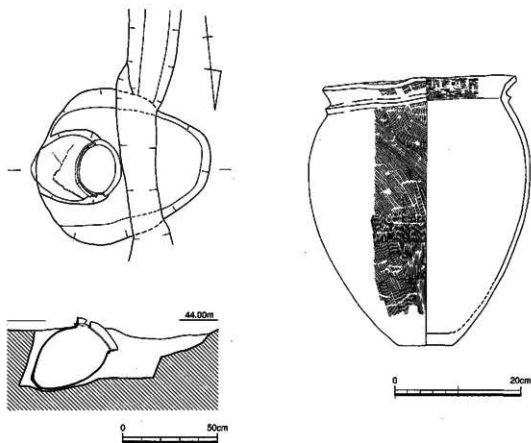
1号木棺墓の東南側に位置し、近世水路によって切られていたが、棺自体は破壊を免れていた壺棺墓である。掘り形は歪な倒卵形を呈し、楕の形態に合わせて掘りくぼめて 40° の埋置角度で東から西へ棺を挿入する。主軸方位は $N-84^\circ-W$ の東西方向である。

楕体 口縁断面の字形の小型楕である。ゆがみが大きく肩の張りが左右で異なるが、胴上位に最大径があり底部に向かって窄まっていく。口縁屈曲部に断面三角形突帯を1条巡らす。器面調整は胴下半部は細い縦方向の刷毛目、上半部はやや粗い斜め方向への刷毛目を施す。口縁部付近はナデ消しているが一部刷毛目が残る。内面は丁寧に板ナデにより刷毛目を消すが、口縁部内面は横方向の刷毛目がそのまま残る。口径28.1cm、器高41.6cm、底径8.4cm、暗茶褐色を呈し焼成良好である。

4号壺棺墓 (第84図、図版19・39)

1号木棺墓に南接する壺棺墓であるが、切り合い関係はない。西側を1号土壇墓に、南側を14号木棺墓に切られる。

掘り形は歪な倒卵形で、現状で長さ0.91m、幅0.27～0.52mで、槽設置場所はさらに一段掘り込んでいる。埋置角度は 45° で南から北へ挿入される。主軸は $N-1^\circ-W$ をとる。



第 83 図 3号壺棺蓋及び棺体実測図 (1/20、1/6)

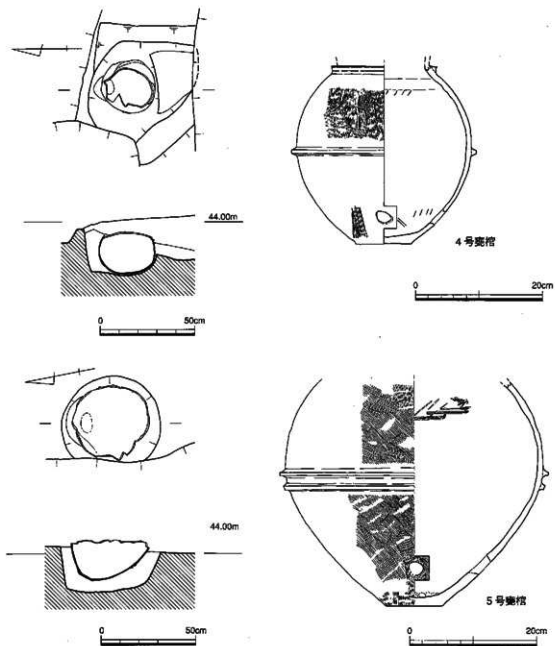
棺体 複合口縁壺を下棺として利用したもので、頸部以上を欠損する。残存高 28.3cm である。肩は強らず胴中位に最大径をもち、1 条の断面台形突帯を巡らす。頸部には断面三角形突帯を 1 条巡らす。両突帯間には細かい縦方向の刷毛目が残るが、突帯近くは貼り付け時にナデ消されており、頸部突帯下約 3cm まで丹塗りが施されている。胴下半は横方向にナデられているが、底部付近の一部に縦方向への刷毛目が残る。内面はナデで、一部工具痕が残る。底部から 4cm 程上で外→内へ穿孔される。底部は平底である。

5号壺棺墓 (第 84 図、図版 19・39)

1 号石棺墓の南西、近世水路の西で検出した。上位は著しく削平されており、残存状況は悪い。墓壁の西側の一部も攪乱により削平されている。規模は南北 0.52 m、東西 0.57 ~ m である。主軸は N-8°-E をとり、埋置角度 56° で南から北へ挿入する。

遺物は出土していない。

棺体 壺棺で頸部以上を欠損する。残存高 35cm、胴最大径 40cm を測る。胴最大径は中位にあり、しっかりとした断面台形突帯を 2 条巡らす。器面調整は外面下半は縦・斜め方向の刷毛目、上半は斜め方向の刷毛目を施す。内面は工具により丁寧にナデられているが、頸部付近に一部工具痕が残る。底面には指押さえの痕跡がある。また底部より 5cm 上で外→内へ穿孔されている。

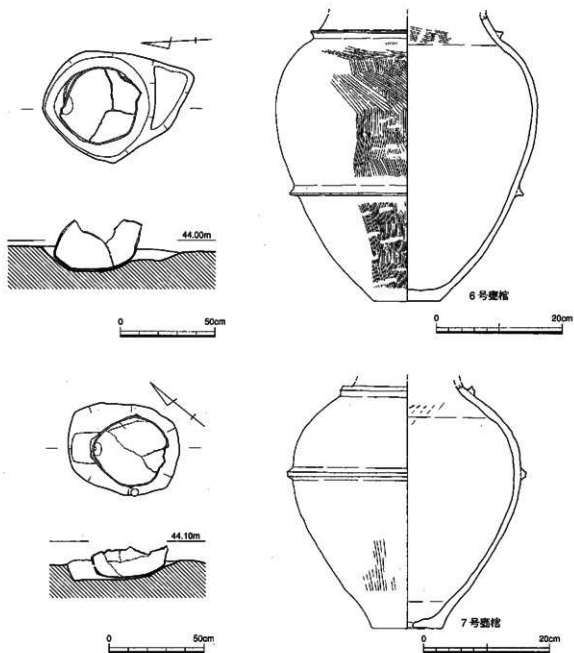


第84図 4・5号壘棺墓及び棺体尖測図 (1/20、1/6)

6号壘棺墓 (第85図、図版19・39)

1号石棺墓の南で検出した壘棺墓で、棺の上半は削平されている。掘り形は長さ約0.8m、幅0.1～0.6mの歪な倒卵形を呈し、南にわずかにテラス面を設け、さらに掘り窪めて楯を15°の角度で南から北へ挿入している。主軸はN-6°-Eをとる。

棺体 頸部以上を欠損する長胴タイプの壘棺である。肩が張るため胴最大径は上位にあり、41.3cmである。頸部および胴中位やや下に、丸みを帯びる断面三角形突帯を1条ずつ巡らす。前者は水平で、後者はやや垂れ気味である。胴下半突帯以下は比較的細かい縦方向の刷毛目であるが、胴上半は非常に粗い刷毛目を縦・斜め方向へ施す。内面は丁寧に横方向へナデているが、頸部付近に一部横方向への刷毛目が残る。底部は平底である。色調は赤褐色を呈する。

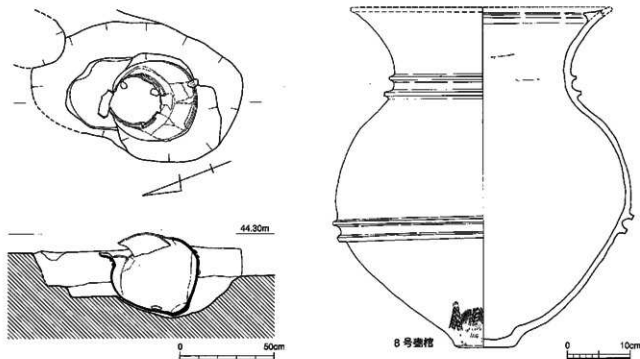


第 85 図 6・7 号壺棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/6)

7 号壺棺墓 (第 85 図、図版 20・39)

1 号石棺墓、5 号および 6 号壺棺墓の南で検出した。西側には近世水路が流れており、墓墳内に土留めの杭がかかっている。5・6 号壺棺墓同様、残存状況は悪い。壺形は隅丸方形を呈し、長さ 0.52 m、幅 0.46 m で主軸を N-3°-E にとる。埋地角度は 35° で南から北へ挿入している。

棺体 頸部以上を欠損する長胴タイプの壺棺である。肩が張り、肩上位に最大径をもつ。頸部および胴最大径部に、断面台形突帯を 1 条ずつ巡らす。いずれもナデにより頂部がわずかに窪む。内外面ともに丁寧にナデ調整されており、刷毛目は胴下半に若干残る程度である。内面頸部付近に工具痕が残る。底部は平底で、外→内へ穿孔している。残存高は 39.1 cm で比較的小型である。暗橙褐色を呈し、胎土は精緻である。



第86図 8号甕棺墓及び棺体実測図(1/20、1/6)

8号甕棺墓(第86図、図版18・40)

大柱状遺構に切られる形で検出された甕棺墓で、後世の擾乱によって、口縁の一部が破壊されている。掘り形は、歪な楕円形を呈し、北側に1段のテラスを設けている。上棺の存在については不明であるが、それと考えられる破片は調査・整理中全く出土していない。埋置角度 60° で北から南へ挿入する。主軸方位は $N-19^\circ-E$ である。

棺体 内傾する鋸先状口縁を持つ中形甕で、鋸先状口縁は、口縁上面に三角上の粘土帯を貼付して形成する。口縁端部は欠損している。肩が張らず、胴中位に最大径があり、頸部と胴の境に台形状突帯を2条、胴中位よりやや下がったところに台形状突帯を2条巡らしている。底部は平底であるが、碗状に形成した後粘土を輪積みしていくため、底部と胴下位に大きな段が残る。器面調整は、内外面共にヘラ調整をきれいにナデ消しており、底部のみ縦方向の刷毛目が残る。

10号甕棺墓(第87図、図版40)

調査区中央の大柱状遺構の西で検出した。上・下棺とも上半は削平されており残存状況は悪い。掘り形は歪な楕円形を呈し、長さ0.75m、幅0.39mを測る。上棺が下棺に被る覆口式である。上棺には頸部以上を打ち欠いた甕を、下棺には長胴の甕を使用している。 27° の角度で北から南へ挿入し、主軸を磁北に取る。遺物は出土していない。

上棺 頸部以上を打ち欠いた甕棺で胴下半を欠損する。45.8cmを測る最大径部に1条の断面台形突帯が巡るがシャープさに欠ける。突帯から上は丸く屈曲しており、肩が上位で張る長胴タイプの甕である可能性を示している。内外面ともに丁寧にナデ調整されている。

下棺 口縁部を欠損する長胴タイプの甕棺である。胴上位で肩が張り、頸部は一旦内湾した後、緩やかに外反して口縁部へ続く。最大径は胴上位にあり39.6cmである。最大径部に断面台形で頂部が若干窪む突帯を1条、頸部に断面三角形突帯を1条巡らす。器面調整は外面底部近くが斜め～縦方向への刷毛目、中～上半

は縦方向の刷毛目を、内面胴下半は縦方向の刷毛目、中位は斜め～横方向の刷毛目、頸部は横方向への刷毛目を施す。刷毛目は胴部と頸部で道具を使い分けており、頸部の調整にはより細かなものを使用している。内面頸部下のみナデが施されている。底部はわずかにレンズ状を呈する。

11号壘棺墓 (第87図、図版20・40)

調査区南側、2号木棺墓から南に2.4mの地点に位置する。棺の大半は削平されており残存状況は極めて悪い。掘り形は径約0.33mの円形を呈する。本調査区内で検出した壘棺中では最小である。主軸はN-8°-Eをとり、49°の埋置角度で北から南へ挿入されている。

棺体 胴上位に最大径をもつ小型壘である。最大径部に丸みを帯びた突帯を1条巡らす。器面調整は外面突帯以下は縦方向の細かい刷毛目、突帯以上は粗い縦方向への刷毛目を施す。内面は丁寧に横方向へナデ調整しており、一部工具痕が残る。底部は平底であるが胴部との境がやや不明瞭である。外→内に穿孔されている。

12号壘棺墓 (第88図、図版5・18・41)

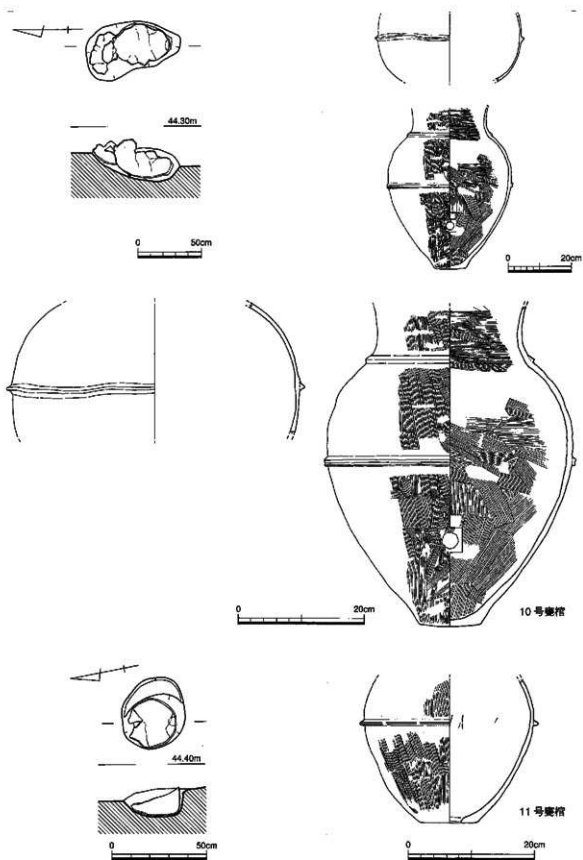
調査区北側で検出された中世溝と切りあい関係にある壘棺墓。中世溝が掘削された段階で上下棺共に破壊されており、その一部が棺内の埋土中から出土している。掘り形は歪な楕円形を呈し、南側は壘棺に合わせてスロープ状に掘削されている。棺内からはガラス小玉6個が検出された。うち、4個は棺底から出土し、2個は棺底から18cmのところ検出された。中世溝が掘削された際、副葬品が盗掘されたと考えられる。埋置角度は48°、主軸方位はN-1°-Eである。

上棺 丹塗磨研された鉢。若干内傾したくの字形口縁で、口縁下に三角状突帯を1条巡らす。底部は平底で胴部との境は明瞭である。器面調整は外面が口縁～突帯まで横ナデ、胴部が横ミガキ、下位は明瞭ではない。内面は口縁上面が横ナデ、胴上位及び下位が横ミガキ、胴中位が縦ミガキを施す。

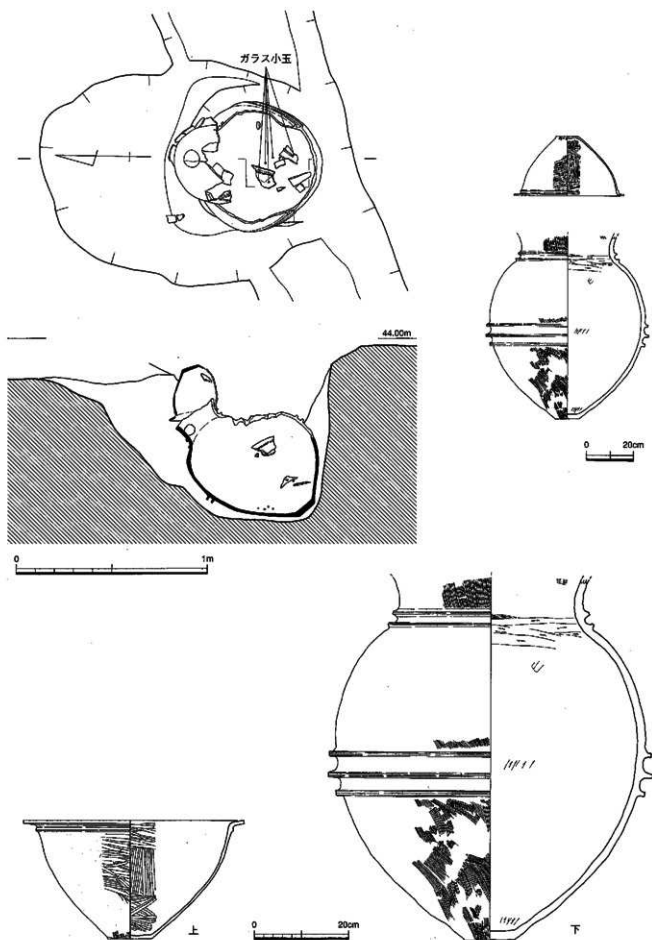
下棺 口縁部を欠損し、全体的に丸みを帯びた大形壘である。肩が弧らず、胴上位に最大径を持つもので、頸部と胴の境に台形状突帯を2条、胴中位に台形状突帯を3条巡らしている。底部は平底である。器面調整は、外面が細かい縦方向の刷毛日の後ナデ消しているが、頸部及び胴下位には刷毛目を残す。内面は頸部が横方向の刷毛目の後横ナデ、胴部が板状工具によるナデの後ナデ消すが、頸部と胴部の境に僅かに残す。胴下位に内→外への穿孔が認められる。

出土遺物 (図版8、グラフ5)

ガラス玉：カリガラスの小玉で、棺内から大小2種類6点が出土した。うち3点は径3.1～3.35mm、厚さ2.0～2.5mmの青紺色小玉、残りの3点は径5.0～6.05mm、厚さ3.1～5mmのやや大きめの青緑色小玉である。後者は形が歪で雑な作りである。



第87図 10・11号鍔棺墓及び棺体実測図(1/30、1/12、1/20、1/6)



第 88 图 12 号塚棺墓及び棺体実測図 (1/20、1/16、1/8)

13号壙棺墓(第89・91図、図版5・41)

調査区南端で検出した。現代の暗渠により、棺の上半は削平されていた。掘り形は南北に長い歪な楕円形である。南から北へ緩やかに傾斜しながら58°の埋置角度で挿入される。北側に一段小さなテラスを設ける。主軸はN-8°-Wをとる。

棺内埋土中からは、いわゆるガラス小玉とともに、丸玉、管玉、極小玉、連玉と多種多様なガラス製品が出土したが、暗渠設置時の削平により散逸しているものもあると思われる。

また、調査中は気付かなかったが、出土した玉類の一部に赤色顔料が付着していた。

棺体 頭部以上を欠損する丸みを帯びた大型壙である。最大径は胴上位にあり57.8cmを測る。突帯は最大径部分より1.5cm程下位に2条巡らせている。いずれの突帯も長く垂れ気味であり、断面形態は三角形が崩れ、頂部が丸みを帯びたりわずかに台形状に角ばったりと場所により形態が異なる。器面調整は外面に縦方向の刷毛目を施した後にナデ消しているが、突帯より上位および底部付近にわずかに刷毛目が残る。胴部下位には輪積みの痕跡がみられる。内面は刷毛目調整の後、工具によりナデあげており、底部付近に一部刷毛目、胴中～上位に工具痕が残る。底部より19cm上の外面に穿孔に伴う剥離痕があり、内→外へ穿孔されたと思われる。底部は平底であるが、胴部との境があいまいになりつつある。底径10.2cm、残存高55.0cmである。

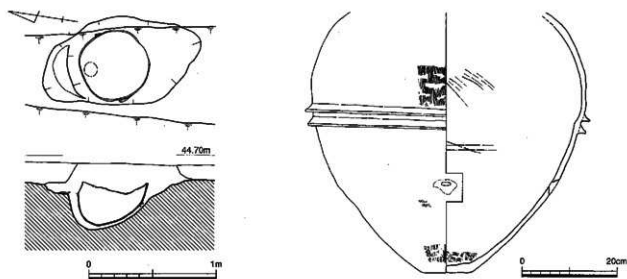
出土遺物(第90図、図版8、グラフ5)

ガラス連玉(1～9) 風化により乳白色を呈するが本来は淡緑色であったもので、鉛ガラスの可能性が高い。一見すると径約4.5mm、厚さ約1.5mmの小玉が融着しているようであるが、CR(透過X線)撮影により、孔の並びが規則的であることが判明した。平原遺跡1号墓で出土したソーダ石灰ガラス製の連玉が、元となるガラス管を両側からかしめて寸止めするのと異なり、今回の連玉は一旦切り離したものを再度何らかの形で接着させたものと考えられる。ただし、風化のため本来の接着面に平原出土連玉のような明瞭な痕跡を見出しにくい点で、連玉とするには不安も残る。4連が1点、3連が1点、2連が2点、単体が8点出土している。風化が著しく非常に脆いため、検出には細心の注意を払わなければならなかったが、検出当初に誤って数個破損し粉々にしてしまった。

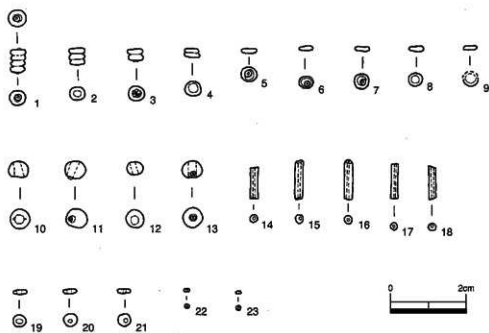
1は4連で、径(幅)4.3mm、長さ6.2mmである。両端には青紺色の極小玉が孔と平行に入り込んでいる。2は3連で、径(幅)4.3mm、長さ4.3mm、孔径2.1mmである。3・4は2連で、3は径4.6mm、長さ3.2mmで、青紺色の極小玉2個が連玉の孔と直角に陥入している。4は径4.6mm、長さ2.9mmである。5～9は単体で出土したものである。径は3.8～4.5mm、厚さは1.25～1.7mmである。5～7には青紺色の極小玉が孔と平行に入り込んでいる。9は破片資料であるが、辛い断面に未風化部分が残っていた。いずれの資料も残存状況が悪く、製作方法をうかがい知ることはできなかった。

ガラス丸玉(10～13) ソーダ石灰ガラスの黄色の丸玉で4点出土した。径5.0～5.5mm、厚さ3.5～4.3mm、孔径は2.0～3.1mmである。11の孔端に青紺色の極小玉が1点接しているが、孔内には入り込んでいない。13には同様の極小玉が孔から2mm程中へ陥入している。10～12の孔が下に対して斜めに開いている点や、気泡の配列が引き延ばしのように整然と並ばない点、また接合面らしい痕跡が見受けられることから、製作方法は巻き付けによるものと思われる。

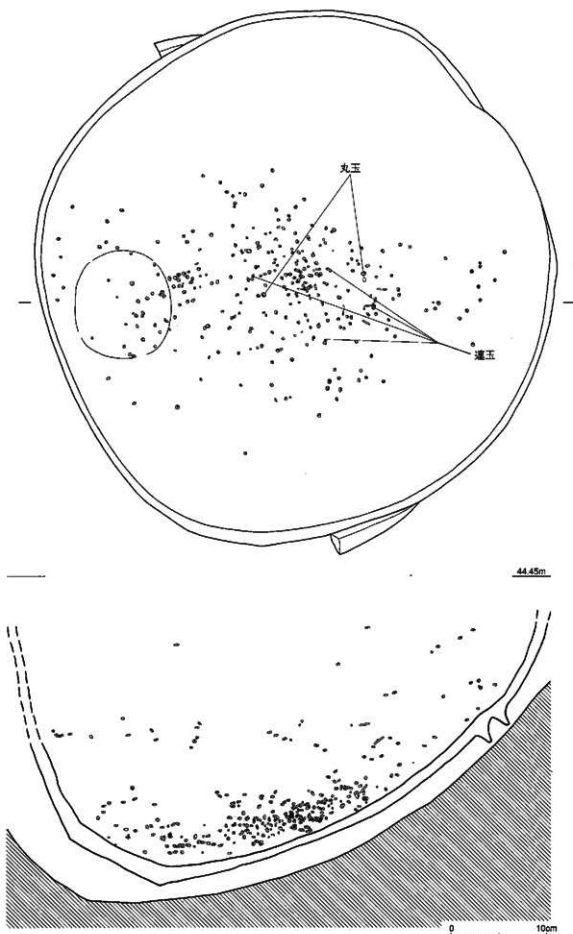
ガラス管玉(14～18) カリガラスからの青紺色の管玉で5点出土した。長さは14が8.3mm、15が10.2mm、16が10.4mm、17・18が9.4mmで、径はいずれも2.0～2.3mm、孔径は0.8～1.1mmである。いずれの資料にも孔と平行に無数の気泡が整然と列をなして配列しており、明らかに引き延ばしによる製作であることを示している。小口は切り離した後に調整されておらず平坦ではない。



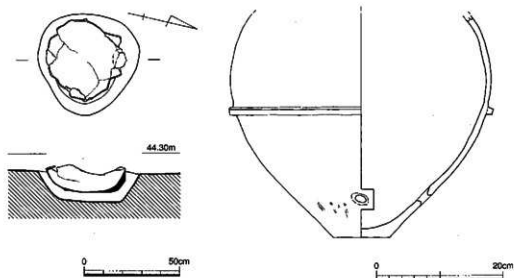
第 89 図 13 号褒棺墓及び棺体実測図 (1/30、1/8)



第 90 図 13 号褒棺墓出土玉類実測図 (1/1)



第91図 13号費栴墓玉類山土状況尖測図(1/4)



第92図 14号塚棺墓及び棺体実測図(1/20、1/6)

ガラス小玉(19~21) カリガラスの青紺色の玉である。計測可能な個体数は302点である。径は3.1~4.15mmを測るが、大半は3.5mm前後である。厚みは1.4~2.2mmで、大半は1.7mm前後である。製作方法は引き延ばし後に切り離して二次加熱したものであると思われるが、大きさは非常に均一的で作りも丁寧である。孔内に青紺色極小玉が陥入したものが数点ある。

ガラス極小玉(22~23) カリガラスの青紺色の玉である。計測可能な個体数は323点である。径は1.4~2.0mmで、大半は1.5mm前後である。厚みは0.7~1.4mmで、大半は0.8mm前後で1mmに満たない。通称粟玉の部類に入るが、定義が曖昧である現状では混乱を避けるためにいわゆる粟玉の中でも特に小さなものとして「極小玉」と仮称している。いずれも小玉同様大きさは均一的で丁寧な作りである。連玉、丸玉、小玉の孔内へ陥入しているものもある。

14号塚棺墓(第92図、図版41)

調査区中央、10号木棺墓北側で検出した。上半は削平されており、残存状況は悪い。掘り形は円形を呈し南北0.52m、東西0.6mである。主軸をN-6°-Wにとり、35°の埋置角度により南から北へ挿入される。遺物は出土していない。

棺体 頸部以上を欠損する丸みを帯びた壺棺である。胴上半に最大径があり、41.0cmを測る。最大径より5cm下に1条の断面コの字突帯を巡らす。突帯頂部はわずかに窪む。器面は内外面とも非常に丁寧にナデ調整されており、外面底部近くに工具痕がわずかに残る程度である。底部から8cmの場所に穿孔を施す。底径8.5cmで平底を呈す。残存高35.6cmで胎土は精緻である。

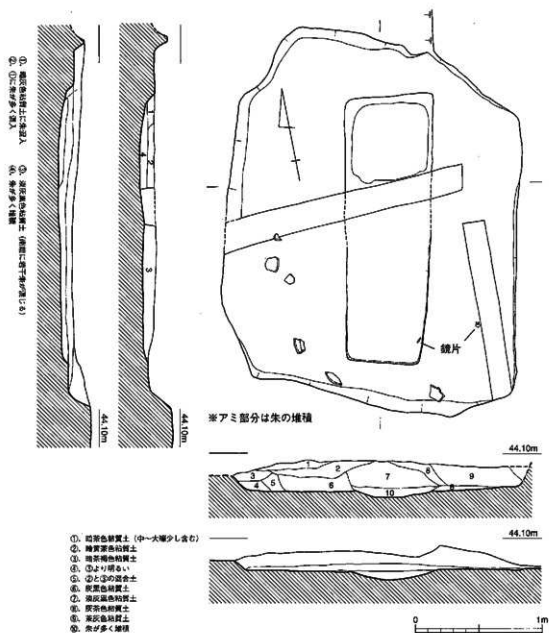
②木棺墓

1号木棺墓 (第93・94図、図版4・5・20)

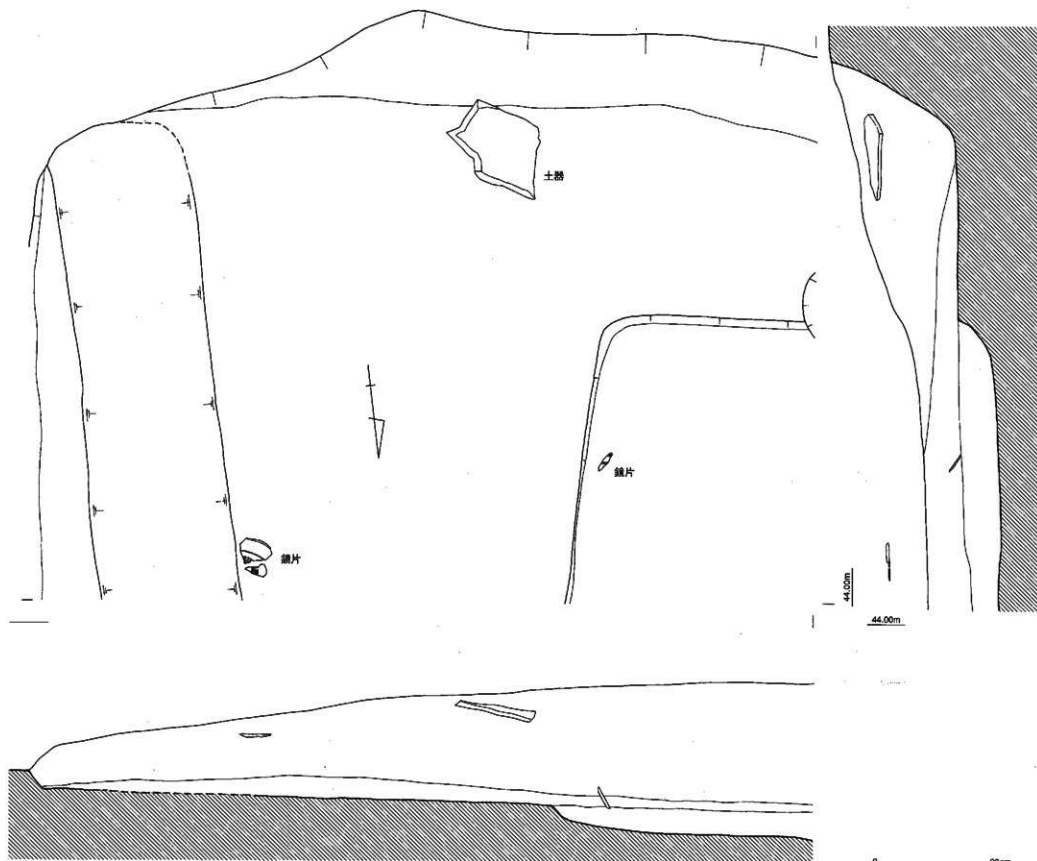
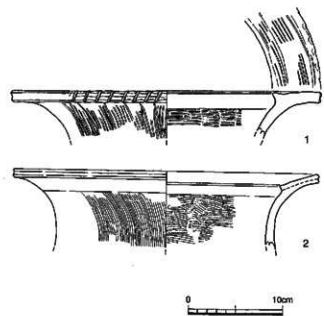
近世水路の西側で検出した。小児棺以外では最初に検出した遺構であり、当初は東側が調査区外へ続いていたこともあり、遺構の性格や主軸がわからないまま2本のトレンチを設定したところ、東西トレンチ内で朱の堆積が認められたことから木棺墓と気づき、急速調査区の幅を現水路ギリギリまで拡張して全容が判明した。

墓域規模は南北2.94m、東西2.33m、深さ0.16mで、棺の規模は長さ2.10m、幅0.69m、深さ0.05mで、本調査区内の墓室としては最大を誇る。1号土壌墓に南西コーナーの一部を切られる。

棺の北側には明瞭に朱が残っており墓域との区別が比較的わかりやすかったが、南側では棺の検出は難しく、朱の飛散状況を手がかりのひとつとしてプランの検出に努めた。墓域の大きさからみて棺が存在した可



第93図 1号木棺墓実測図 (1/30)



第94图 1号木棺墓出土遺物及び鏡出土状況実測図(1/4、1/6)

能性もあり土層で確認したところ、東西ベルトにおいて墓墳の西端から約 25cm 内側で暗灰黄色粘質土の立ち上がりを確認することができたが、東側に関しては削平を受けており不明である。南北方向においては棺と墓墳の間は 25～38cm と狭いため、明確に木柩墓と断定するには至っていない。棺底は丸底状になっており、削抜形木柩であったと思われる。

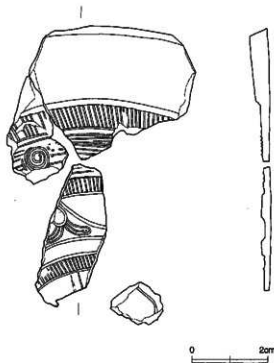
副葬品として、内行花文鏡片が 3 片出土した。うち 2 片は鏡縁部および渦文部である。墓墳南端より 65cm 北の墓墳と棺との中間である棺外から、10cm 程浮くものの水平な状態で、もう 1 片は棺の南端より 20cm 北の棺内から、3cm 程浮いて斜めに立つ状態で出土した。玉類は出土していない。

また、棺外から 2 個体分の壺の口縁部片が出土している。

出土遺物 (第 94・95 図、図版 7・41・44)

内行花文鏡 復元径約 17cm (推定) の、いわゆる「長直子孫」内行花文鏡である。鏡縁部から四葉座間の銘文の一部まで残存する。雲雷文は渦文 (右巻き) + 多条の斜線文で古相を呈する。連弧文間の葉状文は左右に長く曲線的にのびる。円圏帯、柳葉文帯を隔た四葉座間に「孫」もしくは「長」の字の一部が確認できるが、文字の横に部分的に現れるはずの四葉座がみられない。また、一般的には渦巻き・結目状文・四葉座が中心に向かって同じ線上に並ぶが、本鏡は渦文→結目状文→銘文となり 45° ずれているのが特徴である。岡村秀典氏の分類では 1 式に相当するもので、全体的に磨滅はなく、縁は面取り仕上げの丁寧な作りである。柳葉文帯および葉状文の一部には赤色顔料が付着している。出土状況および残存状態から、破砕鏡と考えられるが、このことについては総括で述べることにする。

臺 1 はほぼ水平な平坦面を有する鋤先状の口縁部で、口径 32.6cm である。口唇部に刻みを入れる。頸部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目、平坦面にも刷毛の跡が残る。いずれの刷毛目もひとつの目が太く、非常に粗い印象を受ける。2 は内傾する平坦部を有する鋤先状の口縁部で、口径 32.2cm である。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目であるが 1 に比べて目が細かい。口唇部の刻みは施されない。これら出土遺物から、木柩の時期は弥生時代後期中葉としておきたい。



※アミ部分は、朱が付着

第 95 図 内行花文鏡表測図 (1/1)

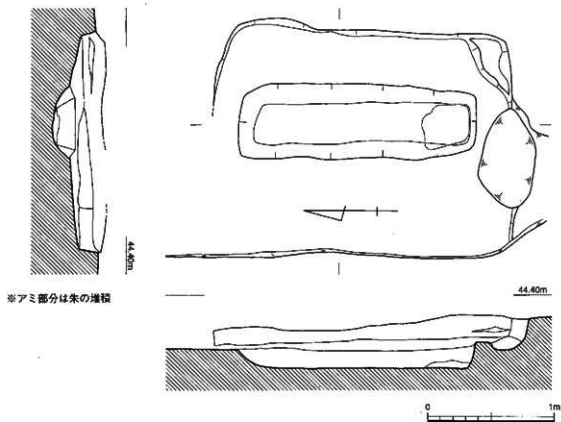
2号木棺墓 (第96・97図、図版21)

1号祭祀土坑の北、3～5号祭祀土坑の南側で検出した。墓壇規模は南北2.33m、東西1.75 + a m、深さ0.11mで、棺の規模は長さ1.86m、幅0.58m、深さ0.18mを測る。主軸はN-1°-Wをとる。南東コーナーにテラスを設ける。棺底はわずかに丸味を帯び、南はやや直立気味に、北は緩やかに立ち上がる。恐らく刳抜式木棺であったと思われる。

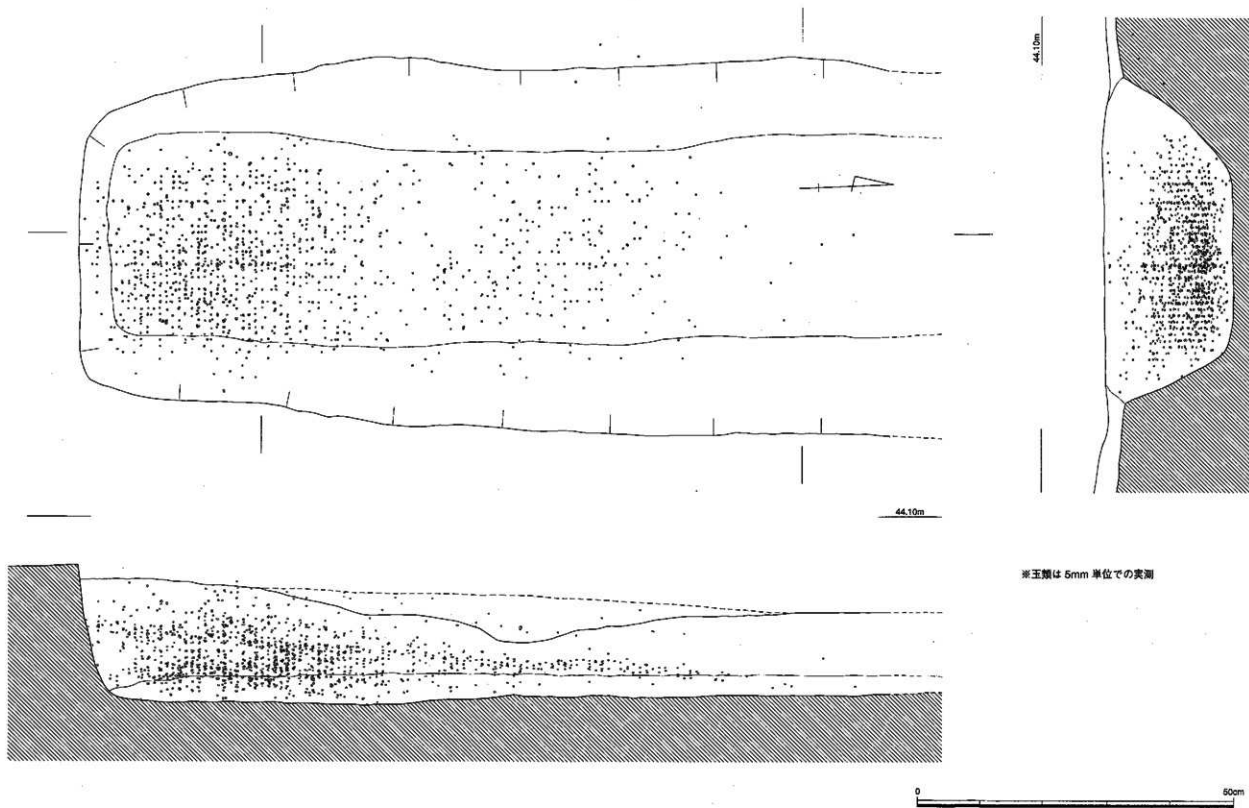
棺内からは、埋土中より破片も含めて3,600点に及ぶガラス玉が面的に出土した。ガラス小玉は特に棺内南側に集中しており、一部棺外に及ぶ。出土位置の比高差は約20cmあり、孔の向きや出土位置から規則性を見出すことはできない。このことは他の木棺墓におけるガラス玉の出土状況と共通するもので、装身具としての副葬というより、むしろ祭祀行為に関わるものであると推定される。なお、ガラス玉と共に碧玉製管玉2点が棺の中央付近で出土しているが、碧玉製管玉の出土は2号および10号木棺墓のみにみられるものである。棺の南端には、径38cm、厚さ約4cmの赤色顔料(水銀朱)が堆積しており、こちらが頭位であると思われる。

出土遺物 (第98図、図版7、グラフ2)

ガラス玉：棺内外よりおびただしい数のガラス玉が出土した。いずれもカリガラスである。計測可能な個体数だけで3,500点以上であり、今回の調査における副葬数では最多である。ガラス玉の大きさは2.5mm前後が主体で、色調は淡青色(2,053点以上)と青紺色(1,429点以上)、および青緑色(36点以上)がある。青緑色は2号木棺墓のみで確認された色調である。いずれも引き延ばしにより製作されたと思われるもので、一部不整形なものも含まれるが、大半は切断後の二次加熱により両端を丸く仕上げ、径、厚みとも非常に均一で整っている。頭位と推定される部分からは水銀朱の堆積に混じて出土したため、孔内に朱



第96図 2号木棺墓実測図 (1/30)



第 97 図 2 号木棺墓玉類出土状況実測図 (1/6)

が入りこんでいるものもある。詳細は比佐岡一郎氏による分析結果を参照されたい (P145)。

碧玉製管玉：棺内中央付近の腰位と推定される部分から出土した。1は青味のある碧玉製管玉。法量は、長さ4.85mm、径2.65mm、孔径1.2mmで、小形細身である。鉄製工具による両面穿孔を行う。2も青味のある管玉で、長さ4.6mm、幅2.55mm、孔径1.2mmを測る。端面は長軸に対して斜交する小形細身の管玉である。鉄製工具による両面穿孔。



第98図 2号木棺墓出土玉実測図 (1/1)

4号木棺墓 (第99図、図版21)

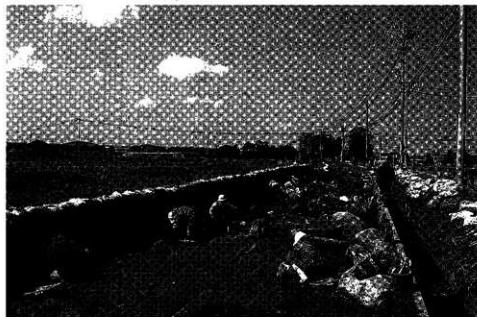
7号木棺墓を切り合い関係にある木棺墓で、両木棺墓とも埋土が黒褐色粘質土であったため、墓墳上の切り合いが不明瞭であるが、7号木棺墓の墓壇下場をわずかに切る部分を確認できたため、図面上は墓壇を共有する形であるが、7号木棺墓の墓壇を切る形で造られたものと判断した。

墓壇の西側は現代の損乱によって大きく削平を受けていた。墓壇平面形はやや歪な長方形で、長さ3.1m、幅1.4+αm、最大深で10cmを測る。棺は隅丸長方形を呈し、長さ30.3m、幅8.85m(最大)、深さ10~15cmを測る。床面は北側で一旦広がり、北小口付近で窄まっている。床面レベルは北側に若干下がっており、南頭位の可能性がある。棺内には、黒褐色粘質土および茶褐色土が北側から流入し、充填している。棺外は黄褐色砂質土を人為的に充填している。横断面の土層からは木棺墓の痕跡を認めることができなかったが、木棺の横断面形がU字形となることから割抜形木棺であろう。主軸方位はN-8°-Eである。

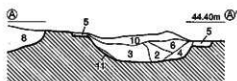
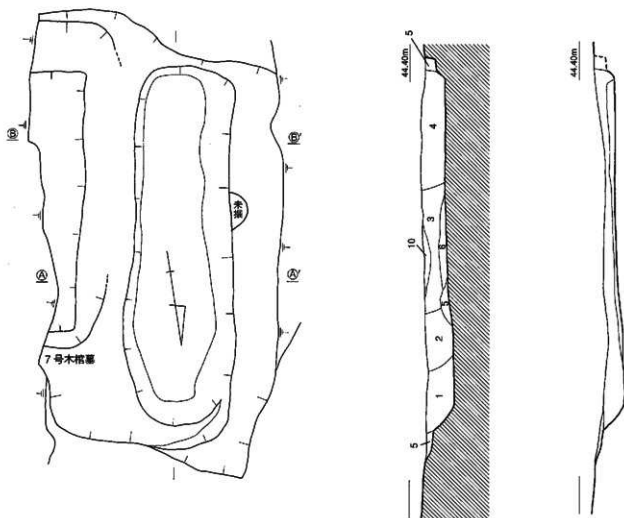
調査終了後、棺内の埋土を揺るったところ、ガラス小玉75点以上が出土している。

出土遺物 (図版7、グラフ5)

ガラス小玉：カリガラスの小玉で、青紺色37点以上、淡青色38点以上、計75点以上が出土した。青紺色小玉は2.5mm前後と小さいが、一方の淡青色小玉は4mm前後とひと回り大きい。いずれも引き延ばしの後、切り離して小口を加熱して整形したものである。



調査風景



- ①、硬質褐色粘質土
- ②、黄褐色粘質土（黄褐色の地山ブロックをわずかに含む）
- ③、灰赤粘質土（黄褐色の地山ブロックをわずかに含む）
- ④、赤褐色粘質土
- ⑤、赤褐色粘質土
- ⑥、赤褐色粘質土（地山ブロック）
- ⑦、黄褐色粘質土（7号木棺墓土）
- ⑧、赤褐色粘質土
- ⑨、赤褐色粘質土
- ⑩、赤褐色粘質土
- ⑪、赤褐色粘質土



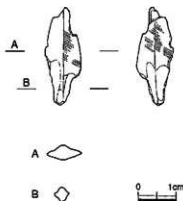
第99図 4号木棺墓実測図 (1/30)

5号木棺墓 (第101図、図版22)

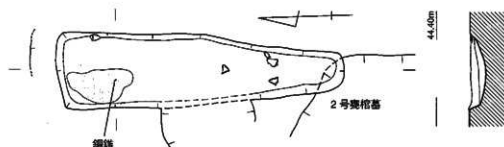
1、2号喪棺墓を切って造られた木棺墓で、残りが非常に悪く、墓塚も北側に一部残る程度である。棺は長さ2.21m、北側幅0.61m (最大)、南側幅0.32mで、南側に向かって狭まる。また、木棺の横断面形がU字形となることから、舟形木棺と考えられる。棺の北側床面では赤色顔料が52×27cmの範囲で検出されており、北頭位と想定できる。また、赤色顔料の直上から銅鏃が1点出土している。銅鏃は先端を南側に向けた状態であった。棺内には、自然な流土によって充填しており、5点の土器片が混入している。

銅鏃 (第100図、図版8)

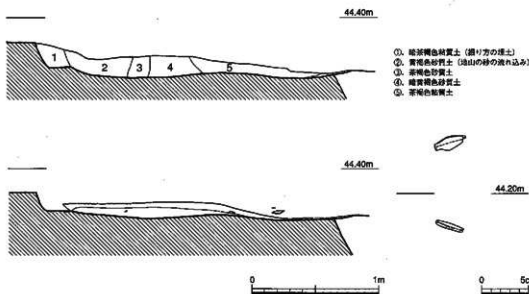
有茎式の銅鏃で、長さ2.6cm (残存)、幅0.95cm (最大)、鏃身1.9cm、茎身0.7cm、厚さ0.4cmを測る。斜方向の研磨痕が確認できるのは、両面刃部のみであるが、鏃は身から茎部にかけて通っている。先端部や刃部、茎部の一部が欠損しており、逆刺の遺りが不明であるが、逆刺の弱いタイプであろう。



第100図 5号木棺墓出土銅鏃実測図 (1/1)



※アミ部分は朱の堆積



第101図 5号木棺墓、銅鏃出土状況実測図 (1/30、1/4)

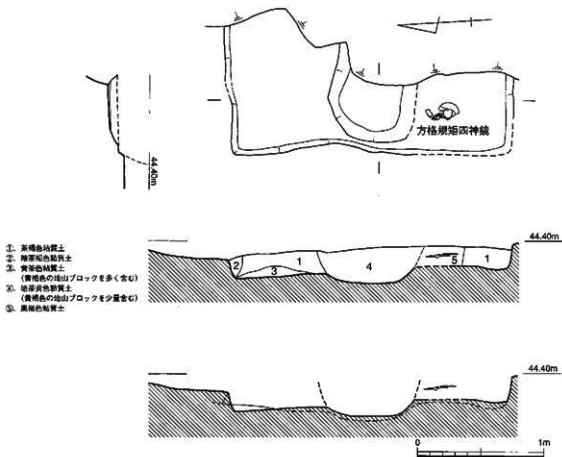
6号木棺墓 (第102～104図、図版4・5)

調査区ほぼ中央に位置し、墓墳が西側の水路によって破壊されている木棺墓である。この木棺墓は周縁に多数の木棺墓、竈棺墓が密集しており、一面黒色土が広がっている状態でありその遺構プランの検出自体が困難を極めた。当初、棺内の埋土は黒色粘質土に黄褐色上の地山を多く含む層であったこと、棺内におけるガラス小玉の出土高低差が31cmもあったことから木棺の掘り形ではなく攪乱と判断していた。ところが、本調査におけるガラス小玉を検出する木棺墓のなかには、同様の埋土で、ガラス小玉の高低差が比較的大きく出土するものがあり、最終的には攪乱ではなく棺そのものと判断した。また今回の調査ではガラス玉は頭位に供献されることが多いことから、西頭位と考えられる。

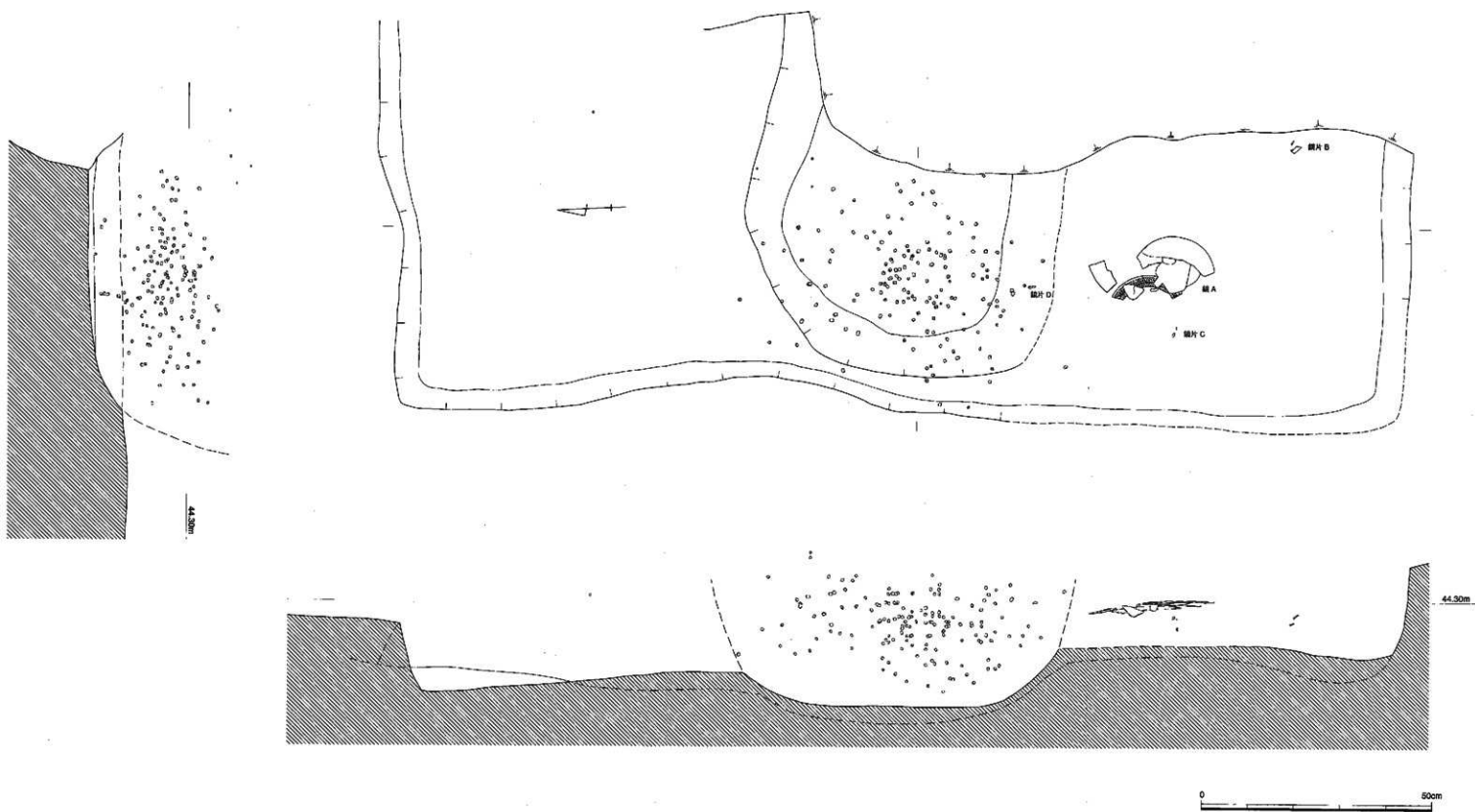
墓墳は幅2.8m、長さ1.02mまで残存しており、おそらく長方形プランと想定される。棺の規模は残存で幅0.69m、長さ0.68mを測り、小口部が歪な形となる。横断面がU字形であることから、刳抜形木棺であろう。

棺外からは床面から8cmのところまで方格規矩四神鏡を一面検出した。鏡Aは外区の一部が背面を上に向けて、その他は鏡面を上に向け、折り重なるように出土している。鏡片は棺内外に散乱しており、鏡片B、Cが棺外、鏡片Dが棺内からの出土で、鏡Aからの距離、床面からの比高差は、鏡片Bが南東側に30cmで床面から5.4～7cm、鏡片Cが西側に7.8cmで床面から3.5～6cm、鏡片Dが北側に12.8cm、床面から6.7cmである。鏡を意図的に破砕し、棺内外に供献していることから破砕鏡と考えられる。

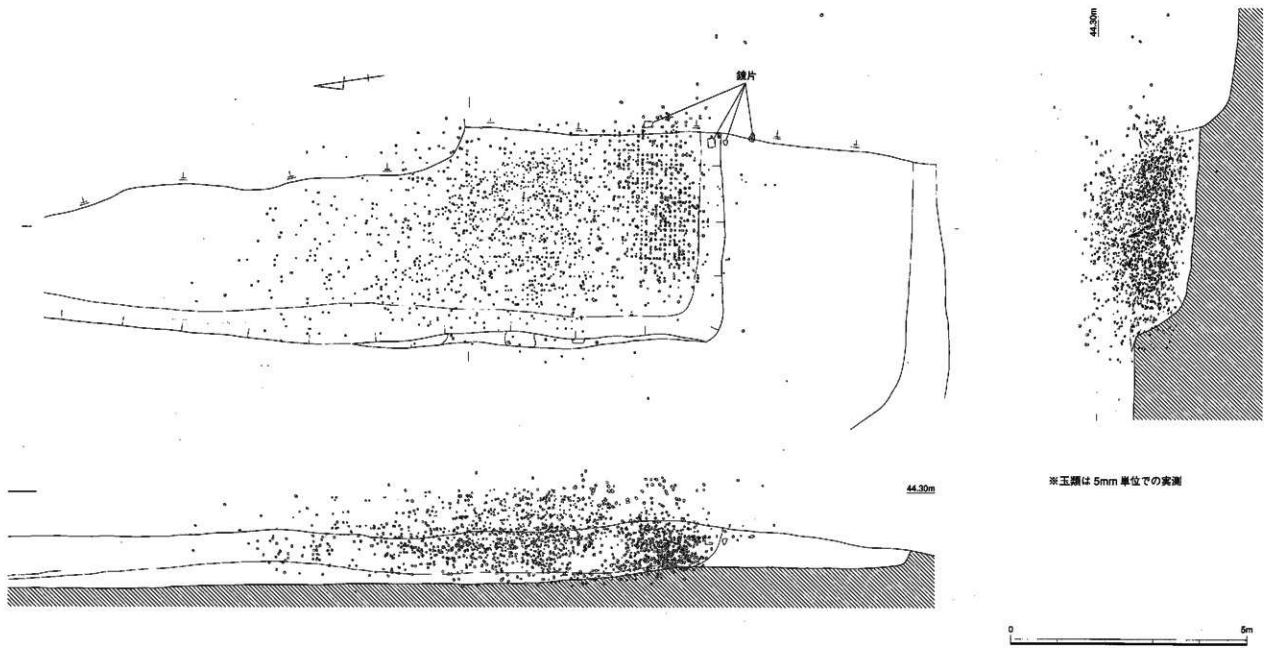
ガラス小玉は棺内を中心に分布し、一部棺外にも見られた。床面には赤色顔料の痕跡は無かったが、ガラス小玉検出時には赤色顔料の粒子が混じっていた。棺外のガラス小玉は方格規矩四神鏡とほぼ同じレベルから出土しており、方格規矩四神鏡の破砕時にガラス小玉も同じように供献された可能性が高いと考えられる。



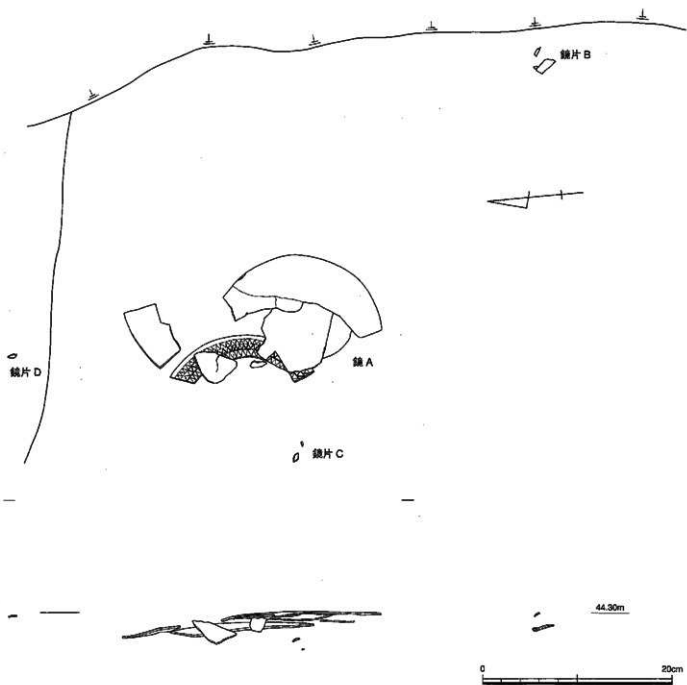
第102図 6号木棺墓実測図(1/30)



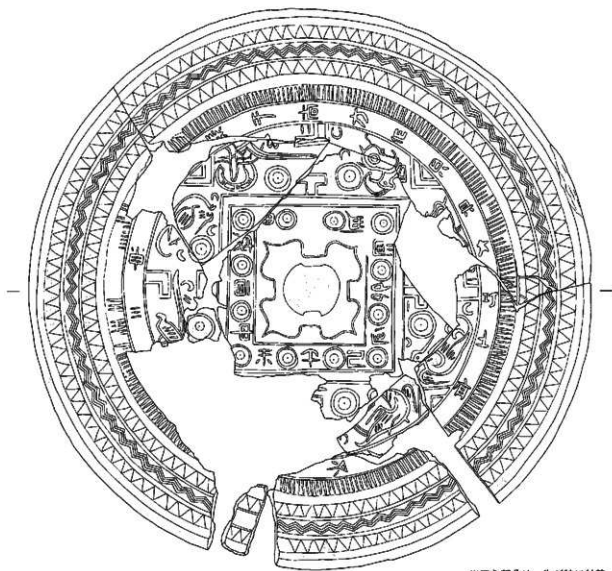
第 103 图 6 号木柙墓跡及び五輪山土状況実測図 (1/8)



第108図 7号木棺墓鏡及び玉類出土状況実測図 (1/8)



第104図 方格規矩四神鏡出土状況実測図(1/4)



※アミ部分は、朱が特に付着



第 105 図 方格矩四神鏡実測図 (4/5)

出土遺物

方格規矩四神鏡 (第105図、図版6・44)

面径18.6cmを測る中型鏡で、重量は欠損部分があるため全重量ではないが、残存で413.7gである。厚さは、鏡縁で2.4mm、内区部分で1mm前後を測り、内区が著しく薄く、また歪みも大きい。

遺存状況としては内区及び外区の一部が欠損する。内区については白虎・瑞獸部分、青龍部分、銘文の約半分が欠損している状態である。

文様構成は、半球状の鈕に、鈕座は四葉文と十二支銘の組み合わせで、鈕孔は「子」、「午」方向である。正文は8像配置+渦文となり、玄武と烏、青龍と一角獣、朱雀と鳳凰の対で、白虎については不明である。外区は内側から藪齒文、鋸齒文、複線波文となる。十二支、8像、銘文など正位置配置である。鈕は直径1.9cm、鏡面からの高さ1.3cmのやや尖った半球形を呈する。鈕孔は幅6mm、高さ4mmの円形である。鈕座は十二支の銘帯をもつ方格にもっとも簡素な四葉文が付き、鈕座内帯には十二支銘と12個の小乳が交互に配されている。「申」の両側にある小乳はきれいに鋳出されていない。十二支のうち「亥」「子」「丑」「寅」が錆びけにより不明瞭なほか、「巳」が蛇の形を保っている。

内区正文部の乳は、方格の鈕座につくT字の両側に2個ずつ配置され、6個の乳が確認でき、玄武横の乳の鋳出が悪い。玄武は蛇が時計回りとなり、顔の表現はあるが、目の表現が無い。また、対になる瑞獸が鳥になっている。青龍は胸、手足部分のみの残存で、騎鹿仙人の定位位置に一角獣が配され対になる。朱雀は鳳凰と向かい合いきれいに鋳出されている。百虎は、胴下半～尾の部分まで残存する。

銘文は真上から始まり、時計回りに22字が配されるが、確認できるのは14字で、「上」は真字となる。

「高方作鏡真大巧 上有〇人不〇〇 〇〇玉泉〇〇 嶺 干」

朱の範囲は鏡面、背面両方全体に広がっていたが、特に色濃く付着している部分を図示している。

鋳造関係では「干」方向から「巧」方向まで鈕座の四葉を含む範囲で錆びけしており不鮮明である。湯口は錆びけが著しい「寅」の方向にあり、馬蹄部に果が存在する。一方、方格やT L Vの溝や錆びけで丸くなった乳座にはケズリの痕跡を認めることができるが、周縁部側面のケズリはほとんど確認できない。

岡村編年に従えば、銀a 2、十二支銘a、四葉文C、正文B (渦文あり)の組み合わせで、銘文の字間が開くため句数が3句となっていることから、VA～VB式の範疇であり、漸移的な変遷の中に位置付けておきたい。

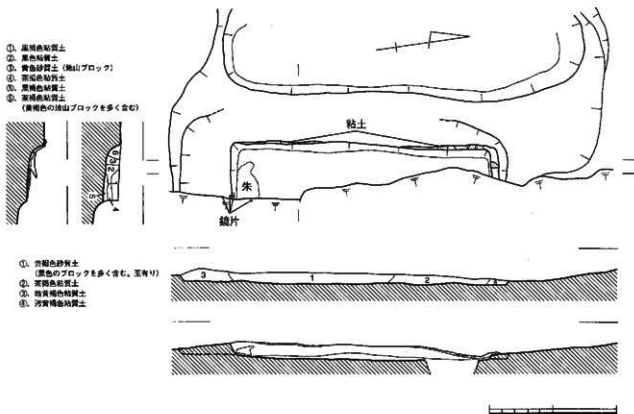
ガラス小玉 (図版7、グラフ5)

棺内外から、淡青色小玉176点 (うち完形153点)、極淡青色小玉1点が出土した。いずれの資料も径6～7mmで、他の遺構から出土した玉類が2～4mmを主体とするのに対し、その大きさが際立っている。淡青色小玉は一般的なカリガラスであるが、極淡青色小玉に関しては比佐氏の考察(P145)にもあるように、色調・成分とも弥生時代においては極めて稀な資料として注目される。

7号木棺墓 (第106・108図、図版4・5)

調査区ほぼ中央に位置し、墓壇が西側の水路によって破壊され、4号木棺墓と切られる木棺墓である。墓壇ラインは4号木棺墓との切りあいにおいて不明瞭であったが、精査によって残存で幅0.64m、長さ2.6m、深さ9cmまで確認することができた。棺の規模は残存で幅0.42m、長さ2.09mを測る長方形プランである。横断面がU字形であることから、朝杖形木棺と考えられる。棺内外からは内行花文鏡片、ガラス小玉、棺内からは朱が出土した。ガラス小玉、朱の分布から南頭位である。

内行花文鏡片は4片検出されており、鏡片A、Bが棺内、鏡片C、Dが棺外からの出土で、全て接合する。床面からの高さは鏡片A:14cm、鏡片B:13.2cm、鏡片C:10.7cm、鏡片D:12.1cmである。ガラス小玉の分布は、棺内では南側に集中する傾向を示し、その広がりも南小口から1.112mまでとおおよそ棺中央付近まで及んでいる。棺外のガラス小玉の出土は少量であるが、6号木棺墓と同様に内行花文鏡片と同じレベルにある。朱は棺内南端で検出されたが、棺内の比較的高い位置から朱の粒子が棺内流入土に混じるような状態で確認した。

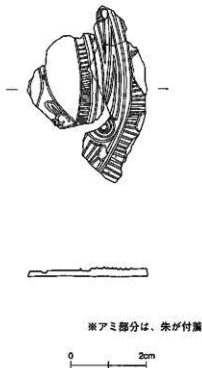


第106図 7号木棺墓実測図 (1/30)

出土遺物

内行花文鏡 (第107図、図版5・44)：推定面径約12cmを測る中型鏡で、重量は欠損部分があるため全重量ではないが、残存で6.1gである。厚さは柳歯文で2mm、鏡文で1.5mmを測る。遺存状況は円周から柳歯文の一部の破片のみである。把握できる文様構成は、内側から円周、逆弧文、逆弧文間の結目状文、柳歯文、雲雷文帯、柳歯文までである。雲雷文帯は右巻きの渦文に斜角線文の組合せである。朱は柳歯文や斜角線文間にわずかに残っている。鏡文の結目状文は渦巻きが一重であるが、渦文は渦巻き状と考えられ、多状の細線を打ち交えた斜角線文であることから、総合的に岡村編年の1式と位置付けておきたい。

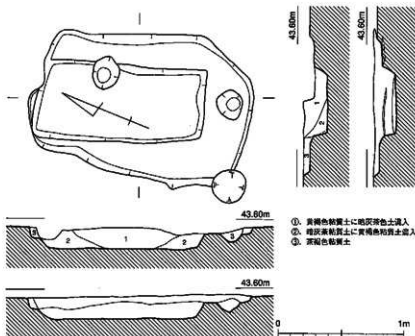
ガラス小玉 (図版7-4、グラフ5)：棺内からカリガラスの青紺色小玉1,083点以上、淡青色小玉1,602点以上、計2,685点以上が出土した。出土数では2号木棺墓に次ぐ多さであるが、棺の東半は攪乱されていたので、本来ならばもっと多量の小玉が副葬されていたはずである。2種の小玉の大きさは、青紺色小玉が径2～3mm、淡青色小玉が径3～4mmと後者がひと回り大きい。しかし方格規矩鏡を副葬していた6号木棺墓出土小玉に比べて小粒である。いずれも引き延ばしにより製作されたものであるが、加熱の具合で小口の形態はバラつきが見られる。



第107図 内行花文鏡実測図 (1/1)

8号木棺墓 (第109図)

調査区北側で検出した。木棺墓では最北に位置する。墓壇規模は南北1.78m、東西1.12m、棺は長さ1.33m、幅0.62mで、他の木棺墓に比べて小さい割に幅が広い。主軸はN-21°-Wである。副葬品は出土していない。

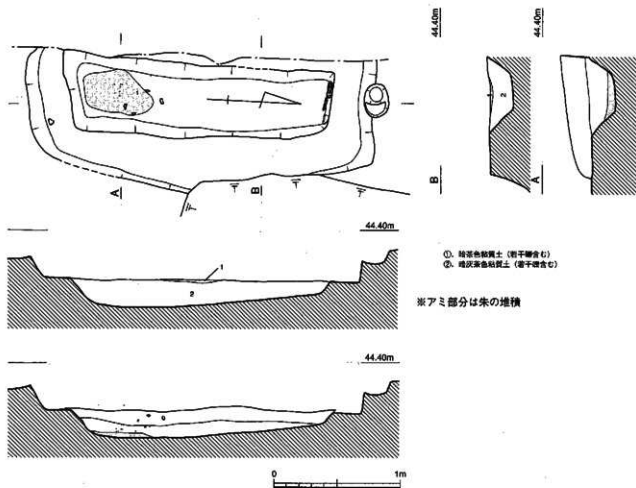


第109図 8号木棺墓実測図 (1/30)

10号木棺墓 (第110図、図版2)

2号塚墓の西側に位置する木棺墓で墓壇の一部が一部調査区外へ延びる。墓壇の平面はやや歪な長方形を呈し、規模は長さ2.7m、幅1.1+αm、深さ16cmを測る。棺は長方形の墓壇のほぼ中央に配置されている。

棺の規模は、中央軸で長さ



第110図 10号木棺墓実測図 (1/30)

2.08 m、幅 0.58 m、深さ 20cm を測る。棺の深さは南北で 11 cm ほどの高低差があり南側が深くなっているが、棺の幅は南端で 57 cm、北端で 49cm と北側が狭くなり、朱とガラス小玉が南側に検出されていることから、南頭位と考えられる。北小口部分には、木棺を安定するための板石を配する。朱は頭位側の 52cm ～ 34cm の範囲にかけて検出され、5cm 程度の堆積を確認した。朱の上面からは、ガラス小玉 24 個、碧玉製管玉 1 個が出上している。

出土遺物 (第 111 図、図版 8、グラフ 5)

ガラス玉：棺内より青紺色小玉 22 点、淡青色小玉 2 点が出土した。青紺色小玉が径 2～3mm、淡青色小玉が径 3～4mm で前者が後者より小さいことは、本調査区内出土ガラス玉の全体的な傾向と一致する。いずれもカリガラスで引き延ばしによる製作である。

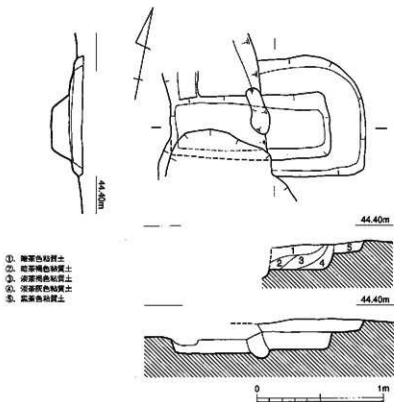
碧玉製管玉：淡緑色を呈する。法量は、長さ 6.45mm、径 3.75mm、孔径 2.1mm で、2 号木棺出土管玉よりも一回り大きい。両面穿孔である。



第 111 図 10 号木棺墓出土玉実測図 (1/1)

12 号木棺墓 (第 112・113 図、図版 23)

調査区北側で、水路状遺構および掘乱坑に切られる形で検出した。墓坑規模は東西 8 + a m、南北 0.94 m、深さ 0.1 m で、棺は長さ 1.27 m、幅 0.52 m、深さ 0.14 m でやや小規模である。N - 79° - W で、東西に主軸をもつ。

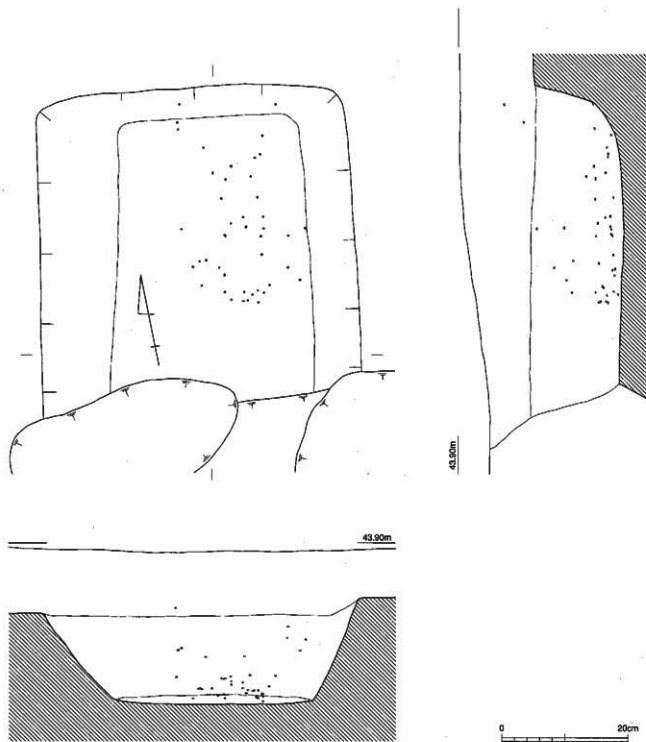


第 112 図 12 号木棺墓実測図 (1/30)

棺内東側の埋土中からは 55 個のガラス玉が出土した。いずれも他の木棺墓出土ガラス玉と同様に出土位置や孔の方向に規則性はない。東に頭位をもつと思われるが、赤色顔料は検出できなかった。

出土遺物 (図版 8、グラフ 5)

ガラス玉：棺内東側埋土中より出土した。計測可能な個体数は青紺色が 49 点、淡青色が 6 点である。大きさは径 3.1 ~ 4.3mm で、1 点のみ 2.15mm (淡青色) である。厚みは青紺色ガラスが 1.6mm 前後で



第 113 図 12 号木棺墓玉類出土状況実測図 (1/6)

扁平であるのに対し、淡青色ガラスは2mm以上、最大3.3mmと厚みがある。なお、比佐氏が指摘するように、両色小玉とも、他の遺構出土ガラス玉に比べて気泡が少なく形も整っているのが特徴的である。

数量的にはプレスレット程度であるが、出土位置や出土状況からは積極的に装身具としての要素を指摘し得えず、やはり祭祀行為に伴うものとして理解しておきたい。

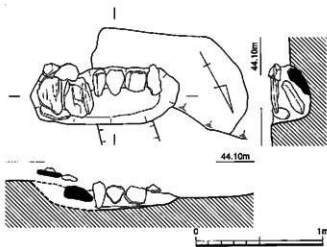
14号木棺墓 (第114図、図版23)

1号木棺墓から南に1mの地点で検出した。N-63°-Wで東西に主軸をもつ。長さ1.16m、幅0.45m、深さ0.15mで石組を有する。いわゆる1次墓塚が無く、棺のみの検出である。検出時は切り合い関係を図って4号墓棺墓を先に完掘してしまった。

石組は東側小口部および南側面に残る。南側面の石は壁に接しているが、いずれも棺底を掘り込むものではない。また、東側小口付近の石は、南北の側石の上に板石を乗せた形で他の側石列より数cmほど浮いており、その西側の最も大きく厚みのある石は、明らかに崩落したものである。よって石棺墓とは考えにくく、現状では木棺を安定させる棺台および標石としておきたい。

標石とした場合、木蓋土塚墓であった可能性もあるが、遺構保存を目的に石組を残したため、東・南側の掘り形は確認できず判断できなかった。副葬品は出土していない。

なお、14号木棺墓に切られる土坑状遺構を検出したがプランの確認に留まった。



第114図 14号木棺墓実測図(1/30)

③石棺墓

1号石棺墓 (第115図、図版23)

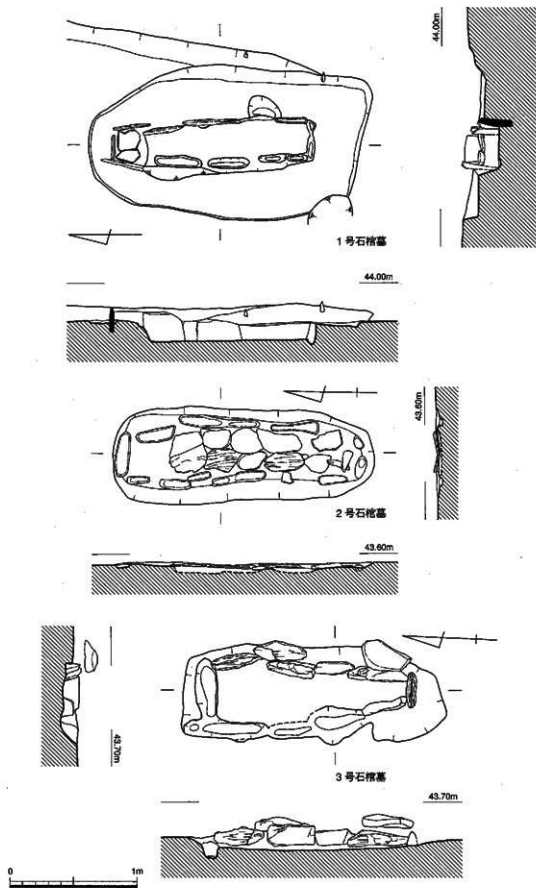
1号石棺墓の南約2mの地点に位置する。石棺墓4基のうち最も南に位置する。近世水路が遺構の真上に流れるため、石組の大半は捜索されていた。墓塚は長さ2.13m、幅1.21m、深さ0.12mで歪な楕円形を呈する。棺の内法で長さ1.5m、幅1.9~2.4mで、わずかに南側が幅広の構造であり、主軸はN-2°-Eをとる。

石の抜き跡から、側石として薄い板石(少なくとも5枚)を、床面をさらに掘り込んで設置しており、小口石を挟む構造であったと思われる。北端の底面には2枚の板石が並んでおり、本来は2号石棺墓と同様に板石が敷かれていたであろう。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、南東約1.6mの地点に調査区外へ続く弥生時代後期末~終末頃の祭祀土坑がある。当石棺墓との関連をうかがわせるが、限られた調査区内であるため、可能性の指摘に留めておきたい。

2号石棺墓 (第115図、図版23)

調査区北端で検出した。ほ場整備の際に削平を受けたようで、床面および側石の抜き跡しか残存していなかった。現状で墓塚は一段であるが、本来は二段掘り込みであった可能性がある。規模は長さ2.04m、幅0.45~0.72mで北側がやや幅広である。主軸はN-4°-Wをとる。



第115図 1・2・3号石棺墓実測図 (1/30)

石の抜き跡から構造を復元すると、小口には1枚の板石を、また側石には床面を掘り込んで幅狭な板石を5～6枚設置したものと推定できる。小口は両側石の外に出ていたようである。床面には、厚さ2cm前後の扁平な板石を2列に敷き詰めている。

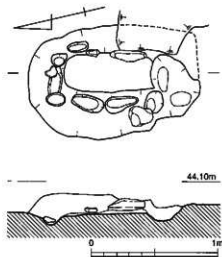
遺物は出上しておらず時期については不明である。

3号石棺墓 (第115図、図版23)

調査区北端、2号石棺墓の1m程北西に位置する。本調査区内では最北端に位置する墓跡であり、これより北は黒茶色埋土の落ち込みとなる。

2号石棺墓と同様、ほ場整備時に上面を削平されており、棺の南小口および東側石は残っていない。墓墳規模は現状で長さ2.06m、幅0.72m、棺の内法は長さ1.47m、幅0.11～0.39mで、北が幅広となり頭位と考えられる。主軸はN-8°-Eをとる。抜き跡から、小口には1枚の板石を、側石には4枚の板石を床面を浅く掘り込んで設置したものと推測される。南側の小口は両側石の外に設置している。

遺物は出土しておらず時期は不明である。



第116図 4号石棺墓実測図 (1/30)

4号石棺墓 (第116図、図版23)

1号木棺墓北側で検出した。墓墳規模は長さ1.34m、幅0.88m、深さ0.16m、棺の内法は長さ約0.7mであり小児用と思われる。主軸をN-10°-Eにとり1号木棺墓と主軸をほぼ同じくするが、両遺構が関連するかは不明である。

残存状況は極めて悪く、小口石および側石の大半は抜き取られており、痕跡のみであった。抜き跡から、南小口を3～4枚の側石で扶む構造であったことがわかる。

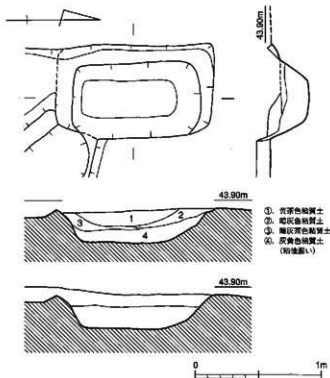
④土墳墓

1号土墳墓 (第117・118図、図版23)

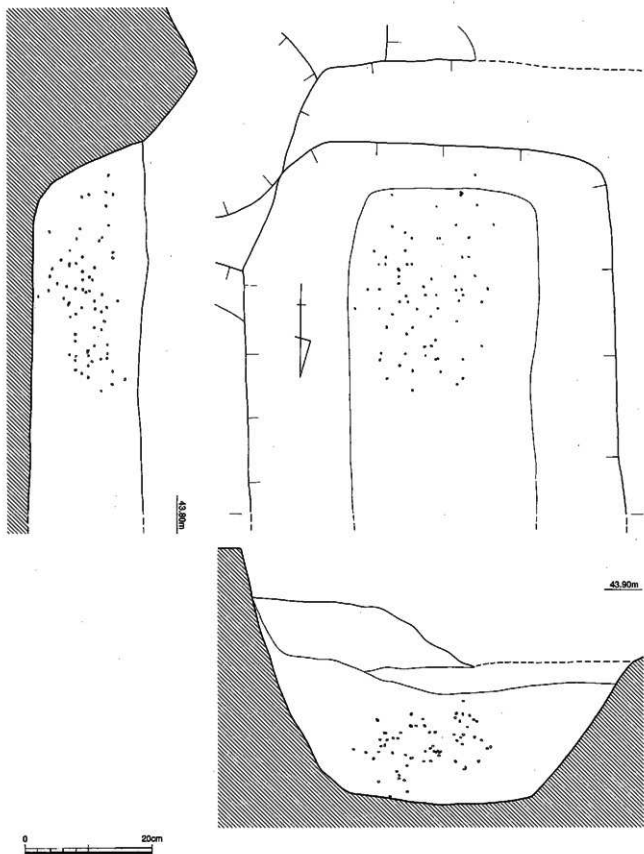
1号木棺墓の南西コーナーを切る土墳墓で、規模は長さ1.23m、幅0.73m、深さ0.29mであるが、底面は長さ0.65mと小規模であり、小児用と考えられる。主軸は磁北をとり、1号木棺墓より12°西に振れる。

墳内南側からは、ガラス玉が集中して出土した。出土位置は底面から14cm程の高低差をもち、孔の向きはやはり不規則である。他のガラス副葬木棺墓は、棺の幅いっぱいに散らばる傾向にあるが、当土墳墓内のガラス玉は比較的中央付近に集中している。

ガラス玉が集中する南側が頭位と考えられるが、その場合、4号墓棺墓と同方向、1号木棺墓と逆方向になる。



第117図 1号土墳墓実測図 (1/30)



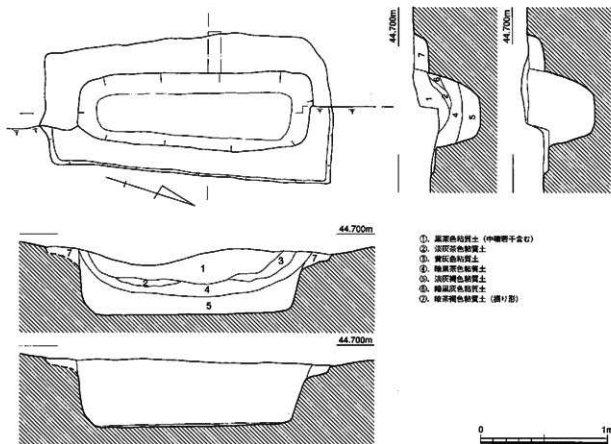
第118图 1号土墳墓玉佩山土状况実測图(1/6)

出土遺物 (図版8、グラフ2)

ガラス玉：墳内南側の埋土中から86個以上出土した。いずれもカリガラスである。大きさは2.3～4.05mm、厚みは1.15～3.3mmとややバラつきがある。色調は成分量の関係で濃淡の違いはあるものの、いずれも淡青色の範疇に含まれよう。

2号土墳墓 (第119図、図版23)

調査区南端で検出した。当遺構以前には墓域は広がらないことから、13号裏棺墓と同様、墓域の南端を示している。一次墓墳の規模は長さ2.24m、幅1.11m、二次墓墳は長さ1.85m、幅0.61～0.4m、深さ0.48mで、北側が若干幅広である。東半分は重機により削平されている。主軸はN-17°-Eをとる。土層の堆積状況から2・3層を木蓋とする木蓋土墳墓の可能性はある。



第119図 2号土墳墓実測図 (1/30)

⑤土坑

1・2号土坑 (第120図、図版25)

調査区南側、1号祭祀土坑の南約1mの地点で検出した。検出時は切り合い関係がわからずに、南北1.58m、東西0.96～1.17mの楕円形の土坑と認識していたが、南北土層により2号土坑が1号土坑を切るものと判明した。

1号土坑上層からは不明土製品が、2号土坑底面からは鑄造鉄斧が出土している。

出土遺物 (第121図、図版41)

1は棒状の粘土を中心から曲げたもので、V字を逆さにした形状の不明土製品である。長さ4.2cm、最大幅4.5cm、厚さ2.4cmである。

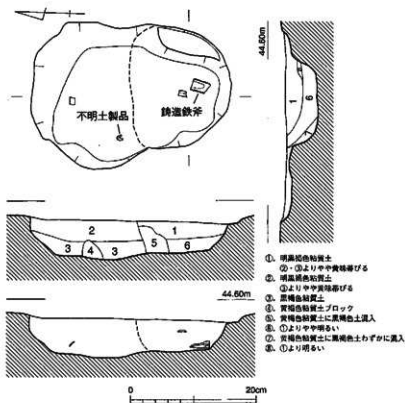
全体指押さえにより成形したもので、折り曲げ部には径6mm程の孔が貫通しているが、用途は不明である。A面は黒灰色、B面は淡褐色を呈し、表裏で色調が異なる。胎土は精緻である。

2は土坑底面から出土した鑄造鉄斧で、長さ12.6cm、幅9.0cmである。基部の端の一部を欠損するがほぼ完形である。錆ぶくれが著しく肉眼観察では不鮮明であるが、レントゲン撮影により形状と断面形態を判断することができた。基部から刀部へはほぼ直線的に開き、基部に突帯が巡らないタイプである。

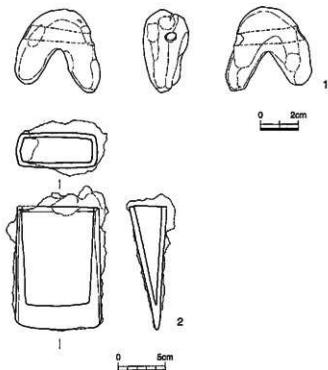
3号土坑 (第122図、図版25)

調査区中央、東壁近くで検出した。北側へ1mの地点には6号祭祀土坑が、西側には小児用壺棺墓が点在している。

掘り形は東西約0.82m、南北約1m、深さ約0.2mで歪な円形を呈し、北西および北東側にテラス状の段差が見られる。断面土層は大きく上下2層からなり、下層は色調の異なる粘質土がブロック状に堆積し



第120図 1・2号土坑実測図 (1/30)

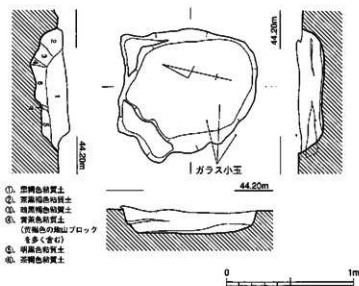


第121図 1・2号土坑出土遺物実測図 (1/2・1/4)

ているのに対して上層は黒褐色粘質土のみである。恐らく二次的に掘り返されたものであろう。遺物はガラス玉が5点出土しているが、祭祀土坑的な遺構であったかは不明である。

出土遺物 (図版 8)

遺構内から4点、遺構外から1点、計5点のガラス玉が出土した。遺構内出土分はいずれも下層に含まれるものと思われる。その中には淡い緑色の非常に脆い製品が1点あり、引き延ばし法によるものであろうか、孔に平行する気泡の筋が顕著に観察できる。



第122図 3号土坑実測図(1/30)

⑥祭祀遺構

1号祭祀土坑 (第123～125図、図版24)

本遺構は調査区南側に位置し、東西に長く溝状を呈し、長軸4.33m、短軸1.74m(最大)を測る。東側は現代の水路掘削によって大きく破壊されている。1段ずつ丁寧に下げたところ、西半では深さ12.6cmで地山を検出したが、東半では長軸2.33m、短軸1.76mの歪な楕円形を呈する土坑が現れ、西半がテラス状となった。東半の床面は椀状となり、大型甕に合わせてもう1段掘削される。

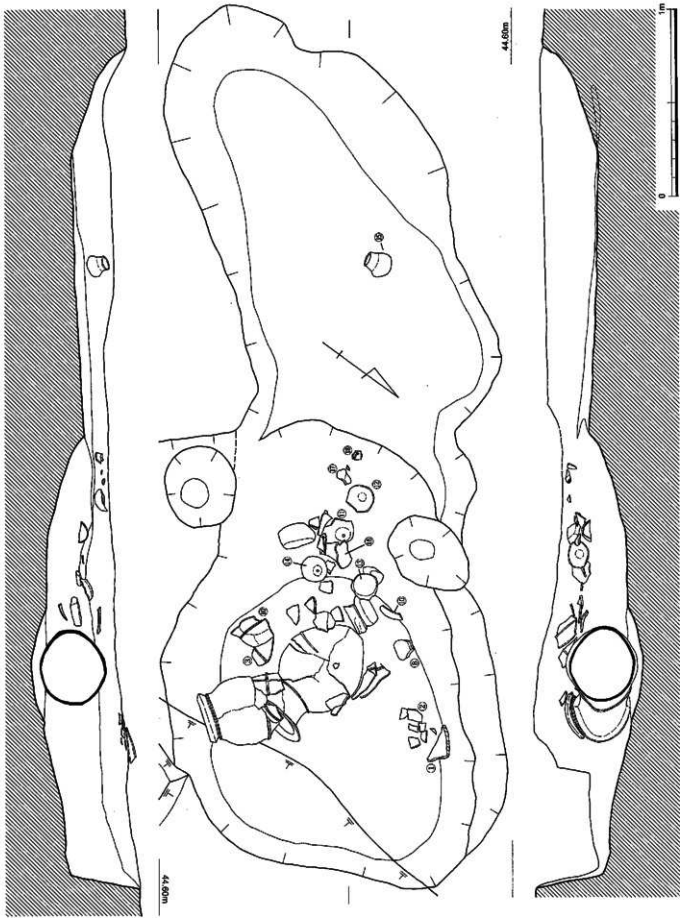
遺構検出時に両者の新旧関係について注意を払ったが、平面的につかむことができなかった。西半からは長頸蓋が1点出土し、東半の十坑からも、複合口縁甕、高杯、大型甕、鉄斧等が出土した。このうち大型甕からは77個のガラス小玉を検出している。大型甕の口縁部上面には、複合口縁甕1個体の約1/2の破片が被せた状態であった。棺内には流土が充填していたため、上面から丁寧に下げていったところ、棺内付近からガラス小玉が出土し始め、出土傾向として棺底から浮いているものが多い。

問題はこの大型甕が裏棺かどうかであるが、この東半から出土した土器群は上層から出土し、大型甕の上面と同じレベル且つ近接して検出されたため、新旧関係があればどちらかが破壊されているはずであり、同時期と考えられる。よって、この場合、裏棺蓋とすれば裏棺を設置した後に墓室内に祭祀土器が供献されることになり、祭祀土坑と考えれば、大型甕にガラス小玉を人れ供献する祭祀形態が存在することになるが、現段階の状況証拠では判断が難しく、今後の検討課題としておきたい。

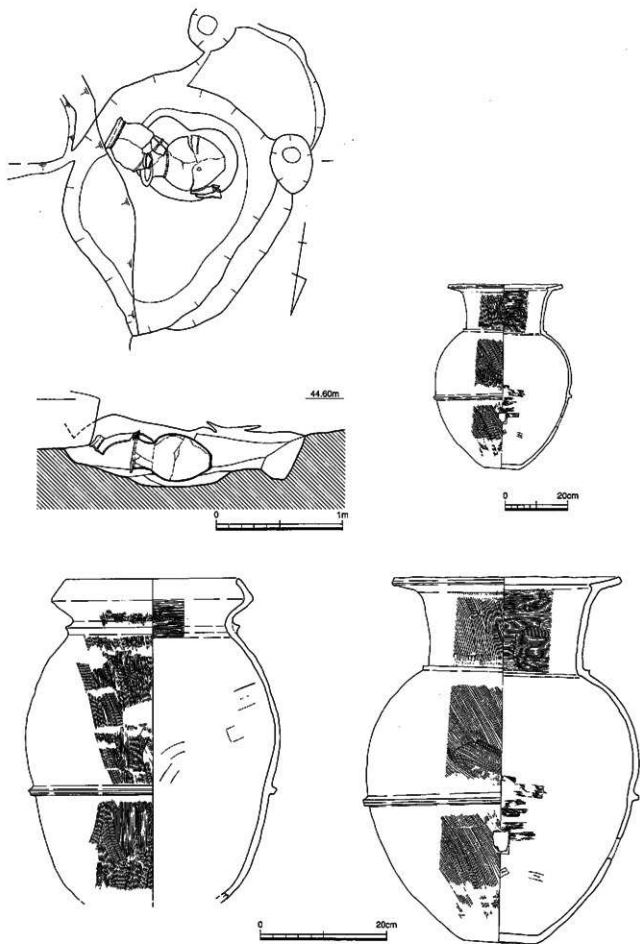
出土遺物 (第126図、図版42、8-3)

大型甕 口縁上面に三角状の粘土帯を貼付し、内傾する鋤先状口縁を持つ中形甕である。肩が若干張り、胴上位に最大径を持つ。頸部と胴の境に三角状突帯を1条、胴最大径よりやや下がったところに台形状突帯を1条巡らしている。底部は若干上底気味である。器面調整は、外面が縦方向の刷毛目を基調とし突帯部分は横ナデを行い、刷毛目をナデ消す。刷毛目は上棺に比べ粗い。口縁上面は横ナデ。内面は頸部が縦方向の刷毛目、胴部が横方向の刷毛目の後ナデ消すが、胴中位に僅かに刷毛目を残す。胴下位は板状工具によるナデを施す。胴下位には3cm×2.5cmの穿孔が見られる。

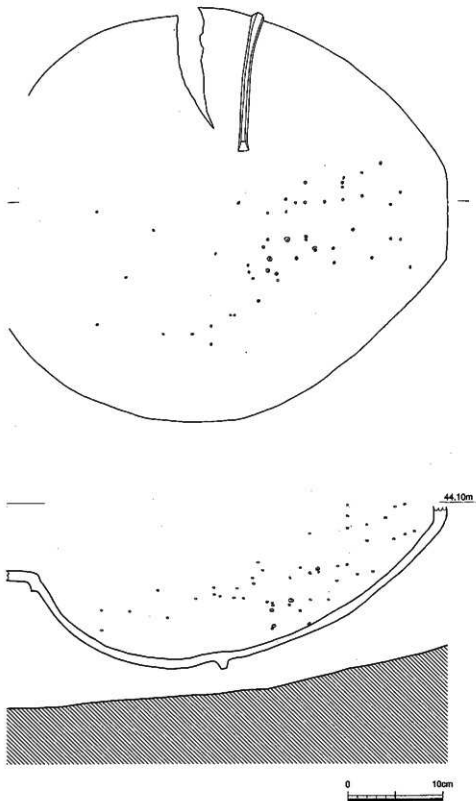
複合口縁甕 底部が欠損し、胴上位に最大径を持つ長胴な複合口縁甕である。頸部と胴の境に二角状突帯を1条、胴下位に台形状突帯を1条巡らしている。器面調整は、外面が細かい縦方向の刷毛目を基調とし突帯部分は横ナデを行い、刷毛目をナデ消す。内面は頸部が横方向の刷毛目、胴部が板状工具によるナデを



第123图 1号祭祀土坑实测图(1/20)



第124図 大型壺出土状況実測図及び大型壺実測図及び楕体実測図 (1/30、1/6)



第 125 図 大型壺玉類出土状況実測図 (1/4)

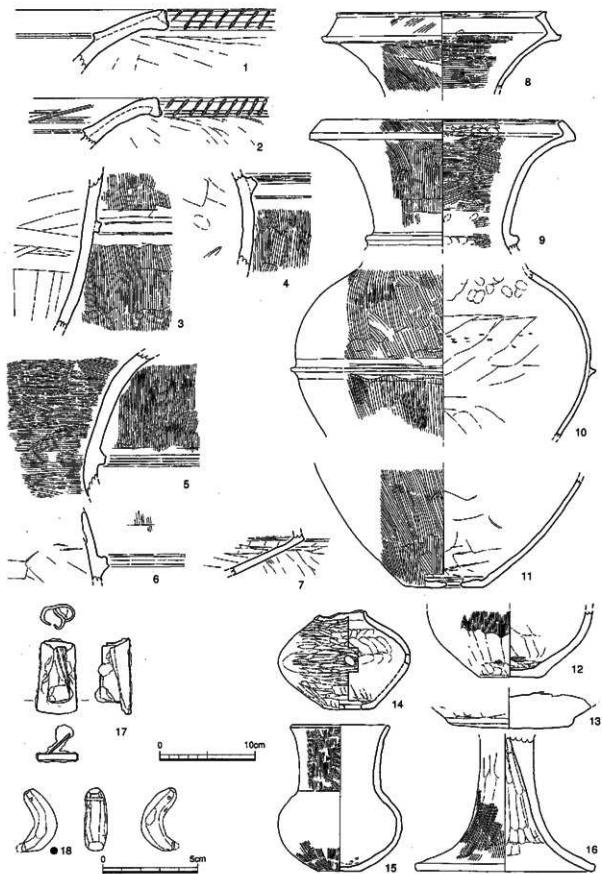
施す。

1 は底部が欠損し、胴上位に最大径を持つ長胴な複合口縁壺である。頸部と胴の境に三角状突帯を1条、胴下位に台形状突帯を1条巡らしている。器面調整は、外面が細かい縦方向の刷毛目を基調とし突帯部分は横ナデを行い、刷毛目をナデ消す。内面は頸部が横方向の刷毛目、胴部が板状工具によるナデを施す。2 は口縁上面に三角状の粘土帯を貼付し、内傾する鋤先状口縁を持つ中形壺である。肩が若干張り、胴上位に最大径を持つ。頸部と胴の境に三角状突帯を1条、胴最大径よりやや下がったところに台形状突帯を1条巡らしている。底部は若干下底気味である。器面調整は、外面が縦方向の刷毛目を基調とし突帯部分は横ナデを行い、刷毛目をナデ消す。刷毛目は上脛に比べ粗い。口縁上面は横ナデ。内面は頸部が縦方向の刷毛目、胴部が横方向の刷毛目の後ナデ消すが、胴中位に僅かに刷毛目を残す。胴下位は板状工具によるナデを施す。胴下位には穿孔が見られる。

3、4 は大型壺の口縁部片。3 は口径復元で75.6cm、残存器高6.2cmを測り、口縁がきつくと内傾し、口唇部に刻目を施す。内外面ともナデ調整。4 は口径復元で67.6cm、残存器高5.0cmを測り、3よりもさらに内傾する。口唇部に刻目を施し、内外面ナデ調整。5、6 は大型壺の胴部片。5 は胴中位の部分で台形状突帯を1条巡らす。器面調整は、外面突帯部分が横ナデ、他は粗い縦方向の刷毛目、内面は上位が横方向の板状工具によるナデ、下位が縦方向の板状工具によるナデ調整である。6 は胴上部片で台形状突帯1条を確認できる。器面調整は5と同じ。7 は大形壺の頸部片。頸部と胴部との境の台形状突帯が1条巡る。外面が縦方向の粗い刷毛目、内面が横方向の粗い刷毛目を施す。8 も大形壺の胴部片か。外面上方に縦方向の刷毛目がわずかに残り、内面は板状工具によるナデ調整。9 は高杯の杯部片で、直線的に立ち上がり、わずかに肩曲部が残る。外面は刷毛目の後ナデ消し、内面も丁寧な放射状のナデを施す。10 は複合口縁壺の口縁～頸部片で、くの字に屈曲し、さらに口縁を外方にはねあげる。頸部外面は斜方向の刷毛目、口縁部は刷毛目をナデ消し、頸部内面は横方向の刷毛目を施す。復元口径24.2cm。11 も複合口縁壺の口縁～頸部片で、頸部の台形状突帯まで残存。外面頸部は縦方向の刷毛目、口縁はわずかに刷毛目を残し、頸部内面は横方向の刷毛目である。推定口径25.2cm、器高13.4cm残存。12 は複合口縁壺の胴部片で、二角上突帯のやや上がったところに胴部最大径がくる。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面は強いナデを施す。13 は壺の胴～底部片で、底部は若干の丸みを帯び、外から内への穿孔がある。外面粗い刷毛目、内面へら状工具によるナデを施している。14 は長頸壺の頸部を打ち欠いたもの。底部を除く全面に丹塗りを施し、横及び縦方向の磨きを施す。底部は外から中への穿孔、内面はナデ調整。15 は球形の胴部をもつ壺で胴中位～底部まで残存。胴中位は縦方向の刷毛目、下位はナデ消す。16 は大形壺の底部片でレンズ状を呈する。17 は西平で出土した長頸壺。胴中位に最大径をもつ球形の胴部にやや外反する長い頸部につながる。底部は平底で、底部内外面に丹が付着する。頸部外面に縦方向の刷毛目が残る。18 は高杯の脚部片で、裾部が広がる。外面上位は刷毛目をナデ消すが、下位は残る。底径で19.0cmを測る。19 は袋状鉄弁で、基部から刃部に向かって広がる形で、刃部はU字形である。基部3.5cm、刃部4.2cm、基部の厚さ1.9cmを測る。袋部の中に別個体の袋状鉄弁が入っていたが、サビが進行しており、取り外すことができなかった。20 は土製勾玉で先端を欠損する。形としては歪なL字形で、長さ3.2cm、幅0.7cmを測る。

ガラス玉：カリガラスの小玉で、青紺色76点、淡青色1点の計77点が出土した。径は2.65～3.65mm、厚みは1.1～2.8mmで、平坦なもの、筒状のもの、球状のもの、若干ではあるが形態がバラつく傾向がある。青紺色小玉の中に1点だけ径3.65mm、厚み2.85mmのやや大きめの玉が含まれる。一連に縦ってみると、プレスレット程度の量であるが、出土状況からは装身具として使用していたとは考えにくい。

1号祭祀土坑から出土した土器群のうち、主体となるのは弥生時代後期中頃であり、一部は弥生時代後期後半に属している。このことから、祭祀行為が行われたのは弥生時代後期中頃～後半時期と考えられる。また、この祭祀の対象については、同時期である13号塚墓と約10m離れており、現状からの判断は甚だ困難であるが、この部分においては東側に現代水路に伴う掘削が広がっており、推測ではあるが既に破壊されている可能性も否定できないであろう。



第126图 1号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4、●は1/2)

2号祭祀土坑 (第127図、図版5・24)

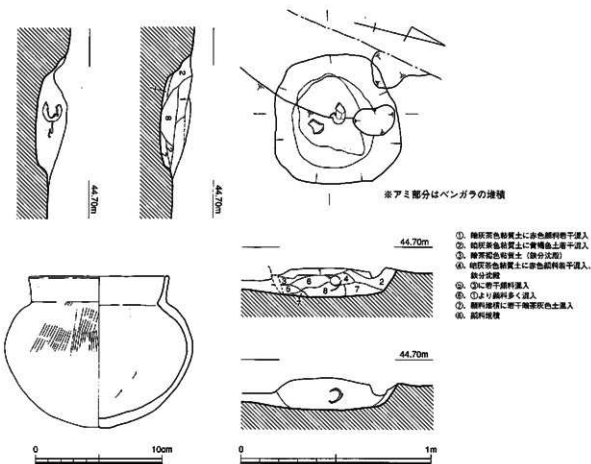
1号祭祀土坑の西1m、調査区西壁沿いで検出した。掘形は南北0.7m、東西0.7m、深さ0.2mの歪な円形を呈す。東側を重機により削平されている。

上層より赤色顔料(ベンガラ)を含む埋土が確認され、ベルトを残して掘下げたところ、底面より5cm浮いた状態で小型壺が検出された。壺は胴部が割れており、壺に入っていた赤色顔料がこぼれたのか、底面から10cmの厚さ(6、8層)で赤色顔料が堆積していた。

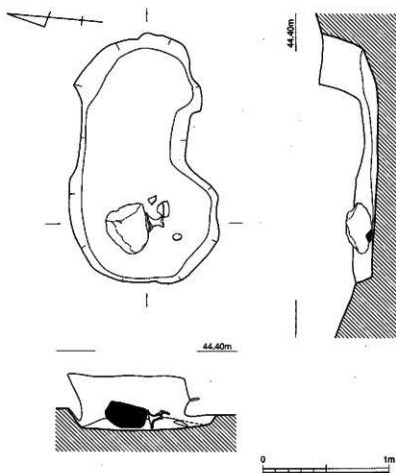
本調査区では木棺墓を中心に赤色顔料が検出されているが、大半は水銀朱である。現時点でベンガラとして確認しているのはこの2号祭祀土坑の他は6号祭祀土坑のみであり、時間的相違あるいは使用目的の相違があったのかも知れない。

出土遺物 (第27図、図版42)

土坑内で唯一出土した直口の小壺である。口径11cm、胴最大径14.8cm、器高11.9cmで底部はわずかに平底を残す。口縁屈曲部内面には稜を有する。外面は胴部上半に縦方向の刷毛目が残る。内面は板状工具によるナデを施す。赤色顔料堆積層である6、8層にかかっていた部分の特に内面に顔料が付着している。



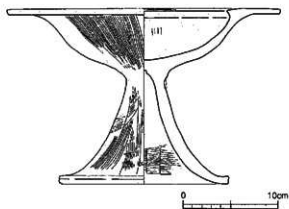
第127図 2号祭祀土坑及び出土遺物実測図 (1/30、1/4)



第128図 3号祭祀土坑実測図(1/30)

3号祭祀土坑(第128図、図版4、24)

4号祭祀土坑の西側で検出された祭祀土坑で西側を重機で削平されている。傘な楕円形を呈し、長さ1.96m、最大幅1.17m、最大深で44cmを測る。底面は略水平となり、西側には滑石と高杯が出土したが、滑石のほうは祭祀土坑を切り込む新しい遺構に伴うようである。高杯は4号祭祀土坑で出土した高杯片と接合したため、3号と4号は一連の祭祀土坑と考えられる。



第129図 3号祭祀土坑出土遺物実測図(1/4)

出土遺物(第129図、図版42)

鋤先口縁をもつ丹塗り磨研の高杯で、口径28.6cm、器高18.6cm、定径17.8cmを測る。鋤先口縁はほぼ水平を保ち、脚部は大きく裾を広げる。器面調整は外面が口縁部上面～脚部にかけて縦方向の刷毛目を施し、そのまま残している。杯部内面は刷毛目をきれいにナゾ消し、脚部下位には横方向の刷毛目が明瞭に残る。丹塗りは杯部内面～脚部外面まで認められ、一部脚部内面にも丹が付着している。弥生時代後期前半に属する。

4号祭祀土坑 (第131図、図版4・24)

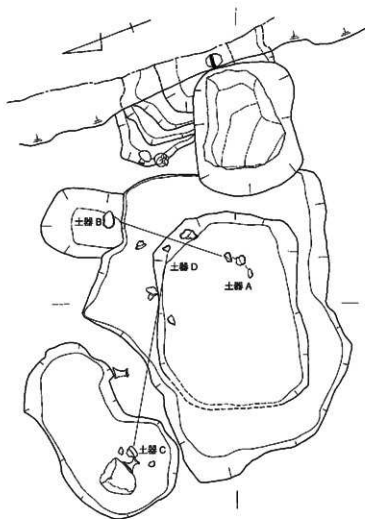
調査区の中央よりやや南側で3号祭祀土坑の南側、4号祭祀土坑の西側に位置し、東側を現代の攪乱によって破壊されている祭祀土坑である。当初は木棺墓の可能性を考慮して調査を行っていたが、1段目掘り方の底面のレベルが西と東で大きく異なること、2段目の掘り方内の埋土が自然堆積による埋没過程を示していたこと、木棺の痕跡を明確にできなかったことなど木棺墓と考えるには不自然な点が見られた。加えて検出された土器群の中には、隣接する祭祀土坑と接合関係が認められたため、一連の祭祀土坑と判断した。

掘り方の平面形は西側が狭な長方形で、長軸 3.18 m、短軸 2.58 m を測る。深さは西側が低く掘削され、東側で標高 44.080 m、西側で標高 43.620 m と 40cm の比高差がある。2段目の掘り方は隅丸長方形を呈しており、長軸で 2.08 m、短軸で 1.52 m、深さ 32cm を測る。土層観察では、2回の埋没過程が見られ、まず黒色土による自然堆積によって2段目の掘り方が埋まり、その後茶灰色土によって完全に埋没する。土器は北側から流れ込んだような出土で、その接合関係については、底面から出土した土器A(壺)と本遺構と一連と考えられる祭祀土坑から出土した土器Bが接合。3号祭祀土坑の土器C(高杯)と土器Dが接合している。

出土遺物 (第131図、図版42)

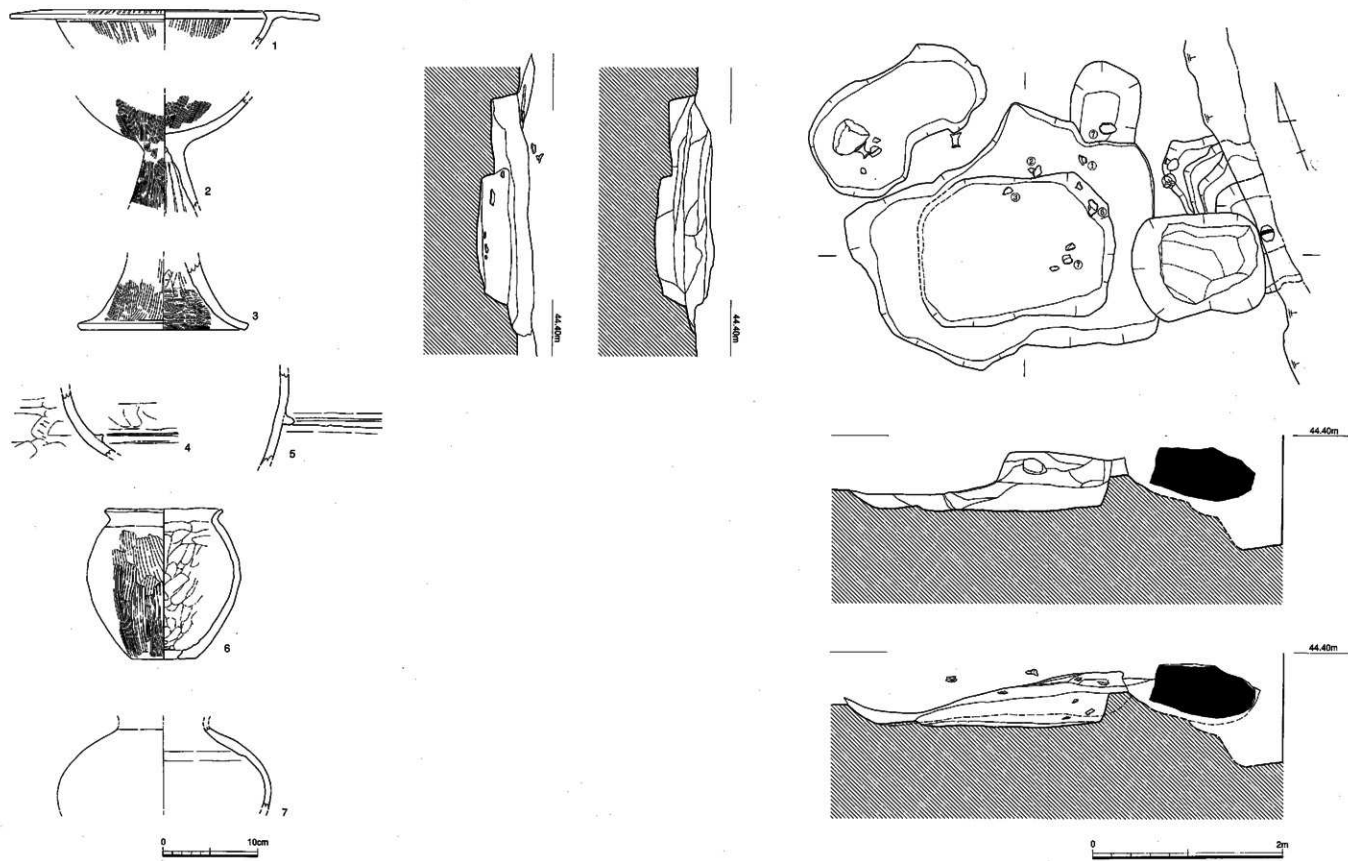
1は高杯口縁部片で、丹塗り磨研である。やや外傾する鈍先状口縁を持ち、内外面ともミガキを施す。2は高杯の杯~脚部片で、杯部が大きく広がる。外面杯部~脚部、杯部内面は縦方向の刷毛目が見られる。

3は高杯の脚部片で、外面及び内面の一部に丹塗りが見られる。器面調整は外面が縦方向な刷毛目、内面が横方向の刷毛目を施す。4は壺の頸部片で頸部と胴部の境に三角突帯が一条ある。内外面とも刷毛目を残さず丁寧なナデ調整を行う。5は壺の胴部片と考えられる。外面は風化が著しく調整不明瞭で、内面ナデ調整。6は小型甕で底部を外から内へ穿孔している。口縁くの字となるが、口縁と胴部の境の稜は弱い。器面調整は口縁部がナデ、胴部が粗い縦方向の刷毛目、内面胴部は指ナデが明瞭に残る。7は壺の胴部片で残存高 9.0cm、頸部径 9.5cm を測る。肩が張り、胴上位に最大径がある。内外面ともにナデ調整である。

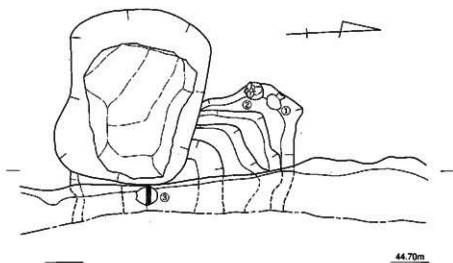


第130図 土器接合関係図 (1/40)

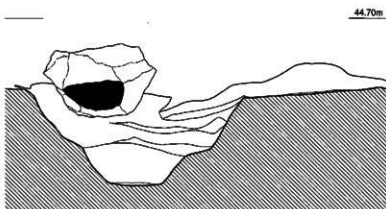
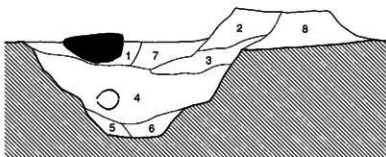
3号、4号祭祀土坑から出土した土器は弥生時代後期前半であり、その土器の接合関係から同じ祭祀土坑と考えられる。その対象として位置関係から6号、7号木棺墓が考えられるが、現状では時間的相違があるため今後の課題としておきたい。



第 131 图 4 号祭祀土坑及出土土器实测图 (1/4, 1/40)



- ① 黄褐色粘質土 (黄色の地山ブロックを多く含む)
石を入れるために人為的な層土。掘削範囲前
 - ② 黄褐色粘質土
(黄色の地山ブロックが少量混じる)
 - ③ 黒色粘質土
 - ④ 黄褐色粘質土
 - ⑤ 黄褐色粘質土
(黄褐色の地山ブロックを多く含む)
 - ⑥ 黄褐色粘質土
 - ⑦ 黒色粘質土
 - ⑧ 黄褐色粘質土
- *黄褐色、黒褐色は刃器より出土。



第 132 図 5 号祭祀上坑出土遺物実測図 (1/4)

5号祭祀土坑(第132図、図版4・24)

4号祭祀土坑の東側に位置する祭祀土坑である。ほ場整備前には陸橋状の陸道があったようで、その陸道の倒壊を防ぐ大石が設置され、また前後して水路設置工事が行われたため、大きく削平を受けている。平面形は北西側に張り出した歪な長方形で、その張り出しが階段状に掘り込まれている。検出長で1.02 m、幅1.76 m、深さ0.86 mを測る。土層観察では、人為的な埋戻し等の痕跡はなく、自然堆積による埋没状況を示していた。2層から短頸壺と長頸壺、4層からは完形の多重突帯の壺を検出した。

出土遺物(第133図、図版4)

1、2は1段目テラスからの出土である。1は丹塗りの短頸壺で、底部を外から内へ穿孔している。丹塗りの範囲は、底部を除けば全面に及ぶ。器面調整は外面口縁が横ナデ、胴上位～胴中位まで横方向のミガキ、胴下位は斜め方向のミガキである。ミガキは口縁内面まで続き、それ以下は刷毛目をナデ消している。良質の胎土を使用している。弥生時代後期前半。2は長頸壺で、底部が凸レンズ状を呈する。口径7.0 cm、器高16.4 cm、胴中位に最大径があり14.6 cmを測る。器面調整は、外面頸～胴部にかけて縦方向の刷毛目の後ナデを施すが、頸部は刷毛目が残るのに対して、胴部はわずかに残る程度である。内面の口縁～頸部はナデ、胴部は他方向の刷毛目を確認できたが、完形で図示できない。弥生時代後期後半。3は4層で検出された多重突帯をもつ壺で、東九州の影響を受けた土器であろうか。口径8.6 cm、器高17.2 cm、底部は中から外への穿孔が認められる。全体的に丸みのある壺で、口縁がやや外反し胴部最大径が胴中位よりやや下がったところにある。突帯はその最大径から上方に7条の突帯を巡らせている。器面調整は底部に刷毛目をわずかに残すのみで他はきれいにナデ消す。内面も強いナデを施す。外面には部分的に丹塗りが認められ、突帯下位から底部まで確認できる。



第133図 5号祭祀土坑出土遺物実測図(1/4)

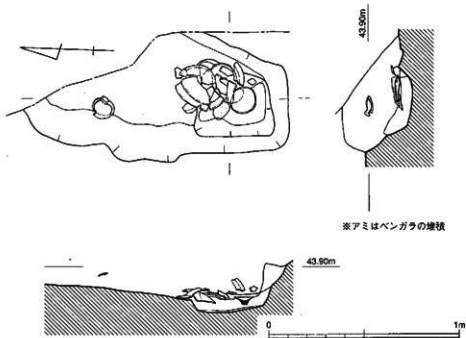
6号祭祀土坑(第134図、図版24)

調査区中央、1号石柙墓南東1.6 mの東壁沿いで検出した。東および北側は調査区外に続いており全容はわからないが、現状での規模は長さ1.4 + a m、幅0.5 + a m、深さ0.25 mの南北に長い隅丸長方形と思われる。土坑内南側には一段低くなった方形の掘り方があり、脚付付鉢や皿に付着した鉄製鋸片が集中して出土し、その同レベルにベンガラ塊が確認された。また、小型壺がやや離れて、ヤリガンナは図示していないが北壁付近から出土している。

出土した土器のうち1,3,4については、井原上遺跡2号祭祀土坑一括土器と同型式であり、弥生時代後期末～終末に比定される。北西側1.6 mには1号箱式石柙墓があり、位置関係からすれば、現状では祭祀の対象として最も可能性が高いと考えられる。

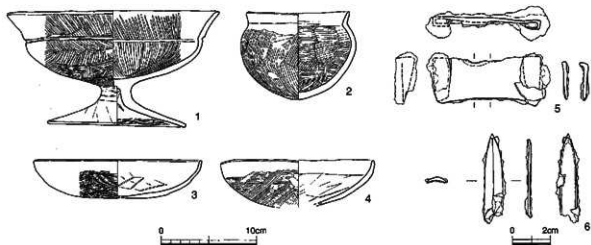
出土遺物 (第 135 図、
図版 43)

1 は御台付鉢で、ほぼ全形を知りうるものである。杯部が内湾しながら直立し、口縁部が外反する。脚部幅は大きく広がり、端客である。内外面と杯部はヘラミガキを施す。具体的には外面口縁部は斜方向のヘラミガキ、杯部下半は斜方向と横方向のヘラミガキを交互に加える。脚部はナデ調整である。内面は、口縁部が斜方向のヘラミガキ、杯部が放射状にヘラミガキを加



第 134 図 6 号祭祀土坑実測図 (1/30)

えている。精良な胎土で、黒斑が杯部 1/3 まで確認できる。2 は小形の丸底壺で、口径 10.8cm、器高 9.3cm を測る。外面は口縁部が横ナデ、胴部は粗い斜方向の刷毛目調整、内面は胴上位が横方向の刷毛目、胴下位が横方向と斜方向の刷毛目を交互に施す。3 は椀で、口径 17.6cm、器高 4.0cm を測り、扁平半球状のものである。口縁部は横ナデ、胴部は横方向の細かな刷毛目を施している。内面は板状工具によるナデである。4 も椀で 3 ほど扁平ではない。外面は口縁部が横ナデ、胴部が横方向の刷毛目の後、斜方向の刷毛目調整。内面はヘラ状工具によるナデである。5 は鉄製鋤先で、長さ 11.3cm、幅 4.7cm を測り、両側面が平行する。両端の折り曲げ部分内には木質が残り、刃部を内湾するほど使用されている。基部の一部に屈曲部分があるが、二次的なものか。6 はヤリガンナ。先端部及び基部を欠損し、残存で長さ 4.1cm、幅 1.0cm、幅 1.5mm を測る。断面 U 字形で先端部が若干反っている。



第 135 図 6 号祭祀土坑出土遺物実測図 (1/4)

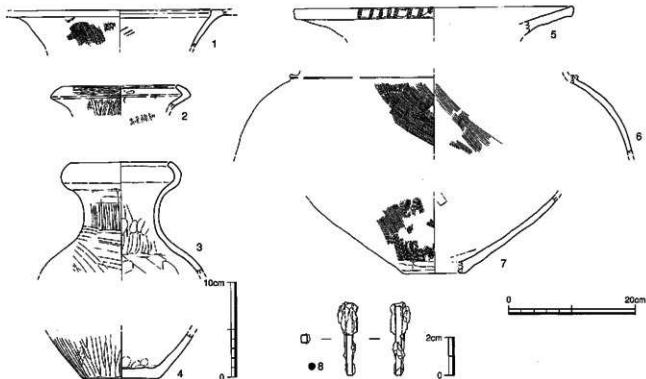
⑦大柱状遺構 (第137図、図版25)

調査区中央よりやや北側で検出された大柱状遺構である。4号土坑及び8号壟柁墓と切りあい関係にあり、4号土坑を切り、8号壟柁墓に切られる。掘り方は長さ2.2 + a m、最大幅1.34 mの歪な楕円形を呈し、1段のスロープをつける。スロープは長さ2.17 + a m、最大幅0.53 mを測り、南から傾斜角度21°で掘削され、柱穴に繋がる。柱穴の平面は長軸57cm、短軸45cmの倒卵形で南に広がる形で、深さ37cmを測る。大柱状遺構としたのは、通常大柱遺構ではスロープ部分に版築層が確認されるが、本遺構は版築層が見られないことから断定できなかったからである。土層からは壺の口縁部片が数点出土している。

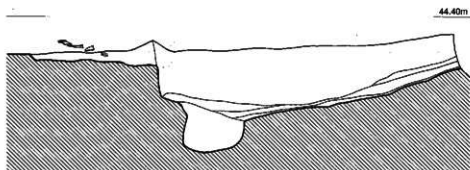
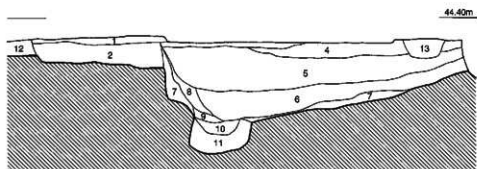
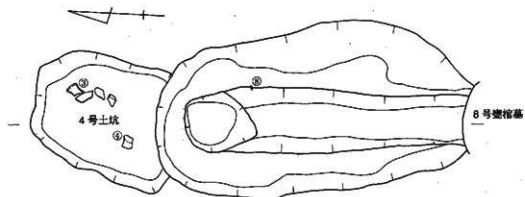
4号土坑は長軸1.08 + a m、短軸0.89 mの歪な長方形を呈し、深さは8～10cmと南側へと傾斜する。丹塗りの壺形土器が出土しており、祭祀土坑であろう。

出土遺物 (第136図、図版43)

1、2、5～7は大柱状遺構の上～中層から出土した土器である。1は大型壺のほぼ水平を保つ口縁部片で、口唇部を欠損する。外面は縦方向の刷毛目、内面はへら状工具による粗いナデを施す。2は中層からの出土で、複合口縁壺の口縁～頸上部まで残存する。器面調整は口縁外面が横方向のミガキ、頸部が縦方向のミガキである。内面には、丹が部分的に付着する。5は内傾する大型壺の口縁部片で、口唇部に刻目を施す。口縁部内外面ナデ調整である。6は大型壺の胴上部片で、頸部の突帯がわずかに残る。内外面は幅広い粗い刷毛目を施し、内面はナデ消す努力をしている。7は大型壺の底部片、1/6程度の残存。底部と胴下位の境が不明瞭で、外面縦方向刷毛目、底部付近はへらケズリ、内面はへら状工具によるナデを施す。8は鉄鏝の基部であろうか。残存長3.9cm、厚さ0.4cm、下部は断面正方形、上部は台形を呈している。3.4は4号土坑からの出土で接合しないが同一個体と考えられる。3は丹塗りの袋状口縁壺で口縁部～頸上部まで残存。肩があまり張らず胴中に最大径のあるタイプ。器面調整は口縁部がナデ、外面頸部が縦方向のミガキ、胴部が横・斜方向のミガキ、内面は縦方向のナデ調整である。丹塗りは外面から頸部内面まで確認できる。4は3の袋状口縁壺の底部片か。底部と胴下位との境の境が弱くなっている。丹塗りは外面胴下位までで、縦方向のミガキを施している。大柱状遺構の出土土器は弥生時代後期前半～中頃に比定され、下限として捉えられる。4号土坑は弥生時代後期初頭の時期が与えられる。



第136図 大柱状遺構出土土器実測図 (1/4、●は1/6)



- ①. 黄褐色土 (やや暗色)
- ②. 黄褐色土 (①よりやや暗く土層を含む。黄褐色ブロックをわずかに含む)
- ③. 黄褐色土 (鉄分を含む。やや濃い)
- ④. 黄褐色土 (②とほぼ同色。鉄分を含まない)
- ⑤. 黄褐色土 (小礫をわずかに含む)
- ⑥. 黄褐色土 (⑤よりやや明るい。小礫を含まない)
- ⑦. 黄褐色土 (礫を含む。⑤→⑥より明るく地山の色に近い)
- ⑧. 黄褐色土 (礫を含まない)
- ⑨. 黄褐色土 (⑥よりやや暗い)
- ⑩. 黄褐色土と黄褐色土の混合層
- ⑪. 黄褐色土 (礫を含む)
- ⑫. 黄褐色土 (小礫を含む)
- ⑬. 灰褐色土



第 137 図 大柱状遺構実測図 (1/30)

⑧攪乱等出土遺物 (第138図、図版43)

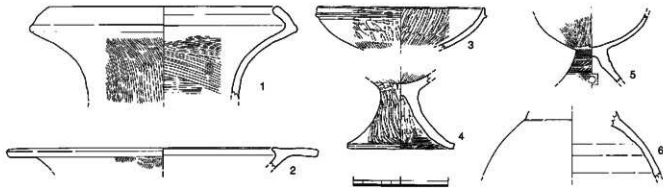
1～4および6はいずれも攪乱出土遺物として一括で取上げたもので、5は出土地不明の遺物であるが、特徴的な遺物を含んでいるためここで報告する。

1は複合口縁甕で、頸部～口縁部のみ残存する。口径24.0cmで外面は縦～斜め方向の刷毛目調整、内面は横～斜め方向の刷毛目調整である。口縁部内外面はナデを施す。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成良好である。2は鋤先口縁を有する高杯である。口径32.6cmで内外面丹塗りを施すが、外面に一部縦方向の刷毛目が残る。細粒をわずかに含み焼成良好である。3、4は同一個体と思われる高杯である。杯部は口径17.6cmで残存高4.5cmである。浅い桶状で口縁端部は丸くおさめる。口縁部下に細くて高さのない断面台形状突帯を1条巡らす。内外面とも丹塗りで縦方向へのミガキ、突帯付近のみ横方向へのミガキを施す。脚部である4は裾部径11.2cm、残存高8.0cmの端脚である。くびれ部から外湾しながら桶状に広がり端部は外側に平坦面を作る。外面全体が丹塗りで、裾端部以外は縦方向に丁寧ミガキを施す。内面は上位が縦方向のナデ、下位は横方向の刷毛目調整で、この部分まで丹塗りである。

6は近世陶磁器の甕である。頸部から上および脚部を欠損する。灰白色の胎土に内面は褐釉を、外面には灰白釉を施す。1～5と共存したもので、いずれも近世水路掘削時に攪乱され混入した可能性がある。

5は東海系の高杯である。残存高は7.4cmで、杯部および脚部の先端を欠損する。杯部は丸みを帯びて立ち上がり、脚部はくびれ部から桶状に広がる。甕面調整は杯部内面が工具によるナデ、脚部は指ナデである。杯部外面は縦方向の丁寧ミガキ、脚部は縦方向のミガキの後に、工具により斜め方向に細かく刺突文を施し、上から3条、2条、2条、3条の沈線を巡らせる。また、欠損してはいるが、3方向に円形の遺かしの痕跡がみられる。色調は灰黄色を呈し、極めて精緻な胎土を使い、高温で焼成されている。

5の東海系高杯に関しては、類例として、三雲遺跡番上Ⅱ-5上器溜りや福岡市雀居遺跡4次調査SD02、SD03、包含層出土例が挙げられる。



第138図 攪乱等出土遺物実測図(1/4)

XIII. 井原ヤリミゾ 2580、2581 番地

1. 調査の概要

本調査区は、井原ヤリミゾ 2582 番地に南接する水田地帯である。2582、2583 番地の調査に先行して、平成 16 年 11 月に、面積約 270 ㎡を調査した。

調査区は南北約 90 m に及び、遺構面レベルは南端で標高 45.9 m を測る。北側 2582 番地で検出した弥生時代後期の墓群の南端が標高 45.7 m なので、高低差は南北で 1 m 強ということになる。

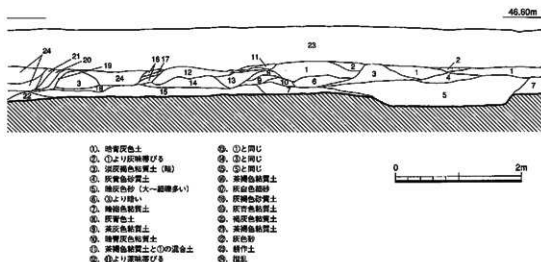
本調査区では、南端で田境石と思われる石列と、中央～北側にかけて近世水路および杭列を検出したのみで、他の時期の遺構は全く存在しなかった。

2. 近世の遺構

①近世水路 (第 139 図、図版 25)

調査区南端より 40～80 m の地点で検出した。水路検出レベルは標高 45.7 m であるが、標高 45.8 m で旧耕作土及び畦跡が確認できた。遺物は、染付け片や播鉢等が出土している。

水路は南東側から緩やかにカーブして北西へ延びている。深さは南端で約 20 cm を測る。一旦流れが二股に分かれるが、北側は浅くなっているため水口状の構造をした支流であると思われる。調査区西壁沿いには、50～60 cm 間隔で定期的に杭が打ち込まれているが、畦との高低差が小さいため、本流は北西調査区外へ出ているものと思われる。よってその後流れは再度北東へ変わり、北側の調査区である井原ヤリミゾ 2582、2583 番地で検出した近世水路へとつながるものと推測されよう。このことは大正時代の旧地籍図と一致するものであり、この水路が、江戸時代以降所在不明となっている井原鍾漢王墓の発見の鍵を握っているのかも知れない。



第 139 図 近世水路付近東壁土層図 (1/60)

XIV. 三雲塚遺跡 282、283 番地、井原七夕 1095 番地

1. 調査の概要

本調査区は東道瑞梅寺池田線の東側拡張箇所に当たり、三雲ヤリミゾ 436、437 番地の対面に位置する。三雲塚遺跡は井原七夕遺跡の北隣地であり、遺跡間を通る道路が字境となっている。両遺跡とも西側には既存の水路があり、幅 2 m 程度の狭い調査となった。調査の結果、井原七夕遺跡では現地表面からわずか 20 cm 程度で黄褐色の遺構面を検出したが、遺構は中世のピットが 2 基、近世水路 1 条のみで、その分布は確らであった。また、調査区全体に重機による深い擾乱が見られた。近世水路は北東側に延びており、井原ヤリミゾ 2582、2583 番地で確認された近世水路の延長方向にあたる。調査面積は 35.7 m²である。

一方、三雲塚遺跡では、遺構面が南側の井原七夕遺跡から北側に向かって緩やかに下っており、窪地状となる。土層においては、現代に水田、畑など繰り返し開発、造成が行われており、遺構面がかなり破壊されている状況であった。1 回目の造成は、黄褐色の地山を削って水田面を成形している。(16,17,19 層) この時点で 3 枚の水田が存在している。その後、この水田は埋められ (12 層)、1 枚の畑となっている。畑の耕作土は 14 層にあたる。南端の重機による廃材の埋め立てはこの時期に行われている。これより上層は県営は増転備による造成である。遺構は古墳時代の住居 1 軒、中世の土坑 6 基、ピット 27 基を検出した。調査面積は 80.2 m²である。

2. 古墳時代の遺構と遺物

① 竪穴式住居

1 号竪穴式住居 (第 140 図、図版 25)

調査区北端で検出された竪穴式住居の一部で、住居角を想定すれば 2.2 m × 2.36 m まで復元でき、おそらく方形住居となるのであろう。深さは約 14 cm のところで、貼り床を検出しその床面直上から高杯が出土している。

出土遺物 (第 140 図 1～3、図版 43)

1～3 までは、1 号竪穴式住居からの出土。1 は高杯で脚部を欠損する。口縁部が外方に開き、口縁部と体部との境に段がつく。2, 3 は高杯の脚部で 1 とは接合しない。2 は、短脚形で裾部が開くもの。内外面ともにナデ。3 は上層より出土した脚部片。外面の縦方向の刷毛目が残る。柳田編年の土師器Ⅲ a 式。

3. その他の遺構と遺物

古墳時代以降に遺構として溝 1 条、土坑 6 基、ピット 36 基を検出した。遺物の出土が少なく、出土しても図示に耐えないものが多い。

① 土坑

1 号土坑 (第 140 図)

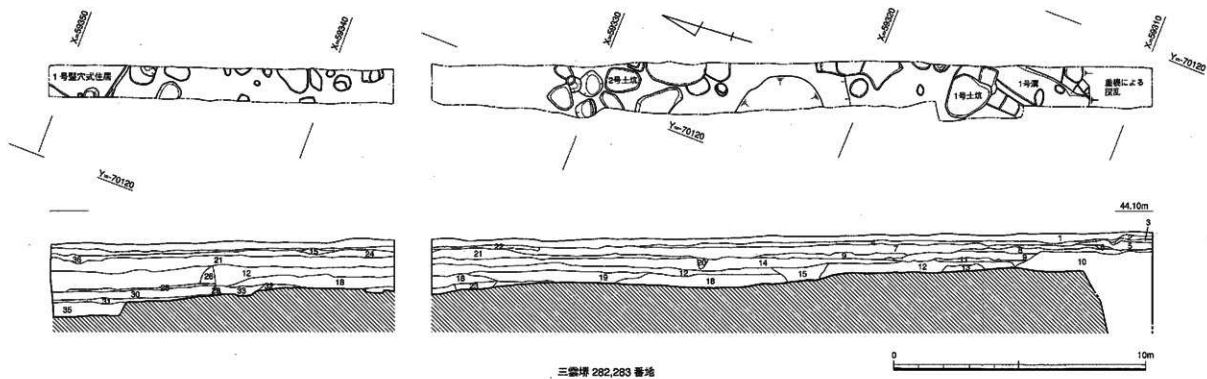
調査区南側で検出された土坑で、長軸 1.82 m、短軸で 1.54 m、深さ 18 cm を測り、底面は略水平となる。

2 号土坑 (第 140 図)

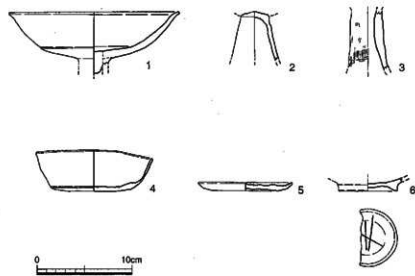
調査区北側で検出され、長軸 1.4 m、短軸 1.02 m、深さ 5 cm 程度の浅い土坑である。土師器の柄が出土している。

出土遺物 (第 140 図 4～6、図版 43)

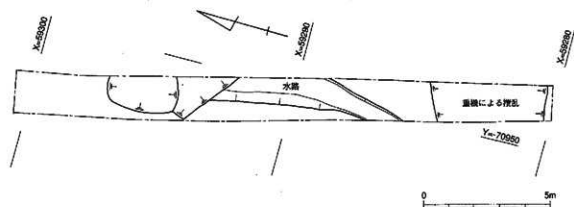
4、5 は 1 号土坑より出土。4 は上層より出土した高台付柄で底部のみである。外面は回転ヨコナデによって成形され、底部にはヘラ記号がある。ヘラ記号は縦方向の 2 本線に斜め方向の 1 本線が交わるものである。5 は、口径 10.0 cm、器高 0.9 cm の土師皿で 11 世紀末～12 世紀代。6 は土師器碗。強い回転ヨコナデによって内外面ともに成形される。



三雲塚 282,283 番地



三雲塚 282,283 番地



井原七ヶ 1095 番地

XV. 三雲井の川 530 番地

1. 調査の概要

本調査は、公民館建設に伴う発掘調査で、三雲井の川 529-2 番地調査地点の南隣接地に位置し、西側には瑞梅寺川が流れている。調査は公民館によって掘削される 135 m²を対象とし、平成 14 年 8 月から開始し、9 月に終了した。調査の結果、調査区の約西側半分は混雑砂層が堆積し、瑞梅寺川の川氾濫原の様相を呈している。東北側には、暗黄褐色の砂質土が広がり、東側約半分から石垣状遺構 1 条、溝 2 条、土坑 10 基、ピット 68 基を検出した。

1 号溝は、幅 2.9 m、深さ 16 cm を測り、長さ 9.1 m を検出した。土師皿は上層から出土し、混入の可能性がある。石垣状遺構は南北の幅約 1 m の溝に石を組んでおり、長さ約 7.4 m にわたり検出した。中央付近では東に分岐する。石垣状遺構は北端では残存が悪く、西へと曲がると思われるが、断定できない。

出土遺物 (第 141 図 1～155、図版 43)

1～12 は調査区中央付近に広がる暗灰褐色土及び礫層からの出土。13, 14 は 33 号ピットからの出土である。

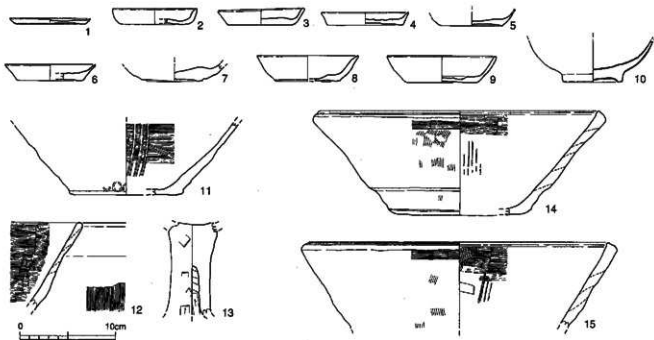
小皿 (1～6) 1 は扁平な小皿で、口径 8.4 cm、器高 0.6 cm。2 は底部の一部を欠損し、口径 8.8 cm、器高 1.7 cm である。3 は底部に糸切りの後、板状工具によるナデを施すもので、口径 9.1 cm、器高 1.7 cm。4 は 1/2 程度残存するもので口径復元 9.2 cm、器高 1.4 cm を測る。5 は口縁を欠損し、底部は糸切りの後ナデ。6 は底部の一部を欠損し、糸切りの後、板状工具によるナデを施す。口径 9.4 cm、器高 1.8 cm である。

杯 (7～9) 7 は口縁を欠損し、底部は糸切り。8 は 1/3 程度残存。口径 10.6 cm、器高 2.7 cm。9 も 1/3 程度残存し、口径 11.5 cm、器高 2.8 cm を測る。

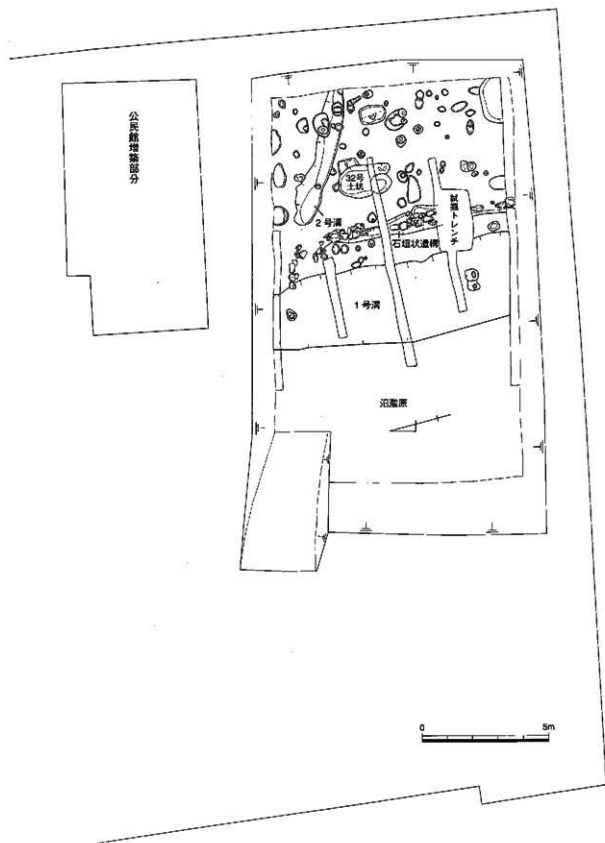
白磁 (10) 口縁部を欠損する白磁の椀で灰白色の胎土に透明釉をかける。

漆鉢 (11～15) 11 は 1/6 程度の残存で粘土紐の巻き上げ成形が明瞭である。12 は外面全体にススの付着が著しく、鍋として使用されている。13 は 1/4 程度残存。外面の風化が著しい。14 は 1/8 程度残存し、外面の風化が著しい。

暗灰褐色土及び礫層からの出土遺物は、白磁を除けば 14 世紀中頃～15 世紀代に比定され、1 号溝も同時期であろう。石垣状遺構はこの層を切り込むことから、近世に近い時期の可能性もある。



第 141 図 出土土器実測図 (1/4)



第 142 図 三發井の川 530 番地 (公民館) 全体図 (1/150)

第4章 科学分析

I. 青銅鏡

福岡県前原市井原ヤリミゾ 2582、2583 番地から出土した銅鏡の鉛同位体比

原 彰吾・角川 茂・平尾 良光 (別府大学)

1. はじめに

福岡県前原市所在の三雲・井原遺跡 井原ヤリミゾ 2582、2583 番地から出土した銅鏡に関する鉛同位体比調査の依頼を前原市教育委員会からいただいた。そこで、資料である銅鏡の鉛同位体比を測定し、材料の産地に関する調査を行った。

2. 資料

鉛同位体比調査の依頼を受けた資料は井原ヤリミゾ 2582、2583 番地から出土した銅鏡 3 面である。

井原ヤリミゾ 2582、2583 番地は福岡県前原市の糸島平野のほぼ中央部に位置している。この平野は南側にそびえる背振山系に源をもつ瑞梅寺川、雷山川、長野川という 3 河川の沖積作用によって形成されている。この遺跡は瑞梅寺川と川原川の扇状地上に所在し、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であり、弥生時代には伊都国の王都であったとされている。資料の銅鏡 3 面は写真 1 左、写真 2 左、写真 3 左でそれぞれ示される破片であり、それらの記載も表 1 に示した。鉛同位体比測定用の試料の採取を具体的に以下に記す。

銅鏡 1 (試料番号 1) は写真 1 右で示されるように発掘時に主破片の他に小断片がいくつか採取され、保存されていた。それ故に主破片からの採取ではなく、これら小断片の中から 1 箇所を選び、分析用試料とした。銅鏡 2 (試料番号 2) に関しては写真 2 右で示されるように鏡の破断面から鏡を回転ドリルで掻き落して採取した。銅鏡 3 (試料番号 3) に関しては写真 3 右で示される位置で破断面からの鏡を回転ドリルで掻き落して採取した。

表 1 福岡県前原市三雲・井原遺跡 井原ヤリミゾ 2582、2583 番地から出土した銅鏡の記載

試料番号	資料名	出土地	時代	詳細
1	銅鏡・1	井原ヤリミゾ 1号木棺	弥生時代後期	内行花文鏡 復元径約 17cm
2	銅鏡・2	井原ヤリミゾ 6号木棺	弥生時代後期	方格規矩四神鏡 復元径 18.6cm
3	銅鏡・3	井原ヤリミゾ 7号木棺	弥生時代後期	内行花文鏡 復元径約 12cm

3. 鉛同位体比法

3-1 鉛同位体比法の原理⁽¹⁾

鉛には ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた ^{238}U は ^{206}Pb に、 ^{235}U は ^{207}Pb に、 ^{232}Th は ^{208}Pb に放射能を出しながら自然に変化 (壊変) する。ウラン (U) とトリウム (Th) が減少した量だけ鉛の量は増えるので、岩石中に初めから含まれていた鉛の同位体にこの量を加えられることになる。この鉛の量は岩石中の U、Th、Pb の量と、岩石中で Pb と U、Th が共存していた時間の長さによってそれぞれ異なる。

この岩石から鉛が地殻変動などで抽出され、鉛の鉱山を形成するが、この鉱山に含まれる ^{204}Pb 量と ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の量はそれぞれの鉛鉱山ごとに異なった値となることが知られている。そして産地によって特徴のある同位体比を示すため、鉛同位体比の違いは鉛の産地を示すことになる。

3-2 測定方法

測定は本学に設置されているサーモエレクトロン社製全自動表面電離型質量分析計 MAT262 で行われた。採取した試料を石英製ビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液に白金電極を加え、直流 2V で電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から 0.2 μg の鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメントに載せ、質量分析計に装着した。分析計の条件を概え、測定温度を 1200°C に設定し、鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛 NBS-SRM-981 で規格化し、測定値とした。

3-3 測定値の表し方

鉛同位体比の測定値を表す方法として、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値である図を A 式図として、縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である図を B 式図として利用する。これらの図において、中国前漢鏡が主として分布する領域を後の資料との比較から中国華北産鉛の領域、中国後漢鏡及び三国時代の銅鏡が分布する領域を後の資料との比較から中国華南産鉛の領域と仮定する。現代日本産の主要鉛鉱石が集中する領域を日本産鉛の領域とした。そして多鈕細文鏡が分布する領域を朝鮮半島産鉛の領域と仮定する。a 領域は弥生時代後期の第 IV 式新段階(突線鈕)銅鐸あるいは広形銅矛が集中する領域である。

今までの弥生時代青銅製品の鉛同位体比に関する研究から、青銅器が用いられ始めた頃(弥生時代前期末～中期初頭)には朝鮮半島産の材料、弥生時代中期には中国華北産の材料が用いられた。そして弥生時代後期になると中国華北産のある特定範囲(a 領域)の材料が用いられたとされている

4. 測定結果

測定した鉛同位体比を表 2 に示した。

表 2 福岡県前原市三雲・井原遺跡 井原ヤリミソ 2582、2583 番地から出土した銅鏡の鉛同位体比値

試料番号	資料名	出土地	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	銅鏡-1	井原ヤリミソ1号木棺	17.796	15.542	38.411	0.8733	2.1584	BP3042
2	銅鏡-2	井原ヤリミソ6号木棺	17.790	15.543	38.399	0.8737	2.1585	BP3043
3	銅鏡-3	井原ヤリミソ7号木棺	17.766	15.531	38.332	0.8742	2.1576	BP3044
測定誤差 (1σ)			± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

この測定結果を解析するために縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値である A 式図と縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である B 式図に示した。図中の番号は表 1・2 の番号を示している。また比較資料として、これまでに鉛同位体比が測定されている内行花文鏡、方格規矩鏡の鉛同位体比をそれぞれ図に示した。比較した資料のそれぞれの出土地、所蔵者、測定値は文献に依存する⁽²⁾。

5. 考察

測定された銅鏡 3 面の鉛同位体比は図 1・2 から中国華北領域に位置した。この結果から今回測定された銅鏡 3 面は中国前漢時代の鏡と類似した材料で作られていると理解できる。この 3 面のうち、2 面は内行花文鏡であり、1 面は方格規矩鏡である。それ故に、内行花文鏡と方格規矩鏡とを別々に考察する。

試料番号1・3の内行花文鏡とこれまでに測定された内行花文鏡の分布を図3・4で示した。内行花文鏡は中国の前漢時代末から後漢時代に製作されている。これらの図の中で本測定資料である試料番号1・3の内行花文鏡が前漢時代の鏡の範囲に含まれたことは出土した時期が弥生時代後期と推定されていることとそぐわない結果と言える。このことは鏡が伝世されたこと、あるいは鏡の製作材料の産地が異なるなどの考え方が必要であろう。

試料番号2の方格規矩鏡の鉛同位体比を、これまでに測定された方格規矩鏡の分布と共に図5・6で示した。方格規矩鏡は今までの分類で前漢鏡が分布する華北領域にそのほとんどが分布している。方格規矩鏡が主として後漢時代以降に製作されていることから、内行花文鏡などは材料の産地、あるいは製作場所が異なるのかもしれない。そうなるとう方格規矩鏡に関してはこれまでの区分が利用できないことを示唆する。これらの問題が含まれてはいるが、本測定資料である試料番号2の銅鏡が方格規矩鏡の主分布領域の中に含まれたことから、この鏡が典型的な方格規矩鏡の1面であると理解できる。出土した遺跡の年代と矛盾することはないが、共存した内行花文鏡の鉛同位体比値にその値が近いことは留意すべき問題かもしれない。

6. まとめ

福岡県前原市三雲・井原遺跡 井原ヤリミゾ2582、2583番地から出土した3面の鏡に関して鉛同位体比を測定した。これら3面の鏡のうち、2面は内行花文鏡であり、1面は方格規矩鏡であったが、両者の鉛同位体比は類似しており、今までの分類から判断すると、前漢鏡と類似した鉛同位体比を示した。

これら鏡が出土した時期が弥生時代後期であり、前漢鏡に用いられたと思われる華北産材料で製作されていることから、その製作過程あるいは流通経路に関して興味深い問題点を示したと言える。

引用・参考文献

- (1) 平尾良光・櫻本淳子：古代日本青銅器の鉛同位体比、『古代青銅の流通と鑄造』、平尾良光編、鶴山堂、p31-39 (1999)
- (2) 平尾良光：鉛同位体比の測定と分析、『考古資料大観6 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』、井上洋一・森田稔編、小学館、p350-368 (2003)

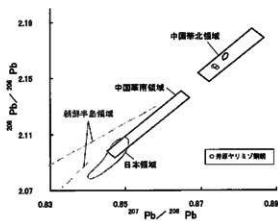


図1 井原ヤリミノ出土銅鏡が示す鉛同位体比 - A 式図

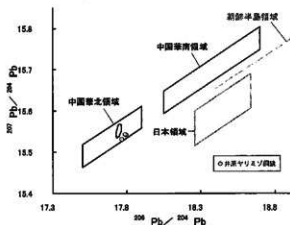


図2 井原ヤリミノ出土銅鏡が示す鉛同位体比 - B 式図

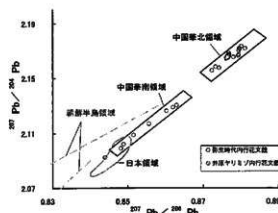


図3 井原ヤリミノ出土内行花文鏡と弥生時代内行花文鏡が示す鉛同位体比 - A 式図

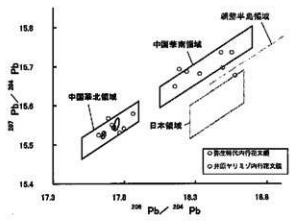


図4 井原ヤリミノ出土内行花文鏡と弥生時代内行花文鏡が示す鉛同位体比 - B 式図

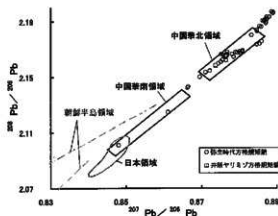


図5 井原ヤリミノ出土方格鏡と弥生時代方格鏡が示す鉛同位体比 - A 式図

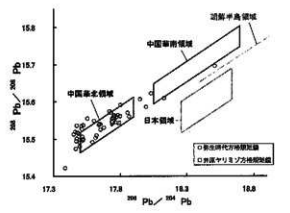
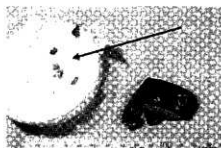


図6 井原ヤリミノ出土方格鏡と弥生時代方格鏡が示す鉛同位体比 - B 式図



銅鏡片



試料採取箇所

写真1 井原ヤリミゾ遺跡出土 銅鏡 - 1
小断片の中から1箇所を採取



銅鏡片



試料採取箇所

写真2 井原ヤリミゾ遺跡出土 銅鏡 - 2
破断面の錆を採取



銅鏡片



試料採取箇所

写真3 井原ヤリミゾ遺跡出土 銅鏡 - 3
銅鏡片裏の破断面の錆を採取

井原ヤリミゾ 2582、2583 番地出土青銅製品の保存処理

今西寿光・越野恵子（株式会社 京都科学）

I. 破損などの状態

遺物番号①：井原ヤリミゾ 1 号木棺墓出土 内行花文鏡

鏡背面は総じて平滑な面を保持しているが、鏡面には腫瘍状の大きな盛り上がりが見られる。鏡背面の結目状紋の凹部に赤色顔料の付着がわずかに認められる。微小断片を伴う。

遺物番号②：井原ヤリミゾ 7 号木棺墓出土 内行花文鏡

遺物番号①と同様に、鏡背面は平滑な面を保持しているが、鏡面には腫瘍状の盛り上がりが見られる。鏡背面の雲雷紋および華歯紋の凹部に赤色顔料の付着がわずかに認められる。

遺物番号③：井原ヤリミゾ 6 号木棺墓出土 方格規矩四神鏡

外見上は比較的保存状態は良好と見られたが、X線による内部構造調査で内区には微細な亀裂が無方向に多数生じていることが確認された（写真1）。特に白虎を含む断片は極めて状態が悪く、鏡面に施されたアクリル樹脂（パラロイド B-72 / Rhom and Hass 社製）とガーゼによる補強でようやく形状を保っていた（写真2）。鏡面鏡背面とも広い範囲で赤色顔料の付着が認められる。

II. 保存処理工程

① 第一次クリーニング

遺物表面を実体顕微鏡で拡大観察し、表面に付着する余分な緑青錆や土砂を筆や竹串、メスなどを用いた機械的方法で除去した。遺物番号③については遺構からの取り上げの際および取り上げ後に実施されたアクリル樹脂などによる補強は有機溶剤で一旦解除した。断片同士の位置に大きなズレが生じている箇所はズレの修正のため、補強用の樹脂を一旦溶解して断片を分離した。また、白虎を含む断片は鏡背面の形状に沿ったシリコン樹脂製の受けを製作し、その上に載せて補強用のガーゼを慎重に除去した（写真3）。

② 溶剤洗浄

資料の状況変化の監視への便宜を図るためテトロンネットを貼りつけた金属製網籠に遺物を収納し、エタノール：キシレン：酢酸エチルの混合溶剤中に浸漬し洗浄した。

③ BTA 処理

ベンゾトリアゾール 3% エタノール溶液の減圧含浸を行った。アクリル樹脂の補強で形状が保持されている遺物番号③の断片は補強用樹脂の溶解による崩落を防ぐ目的から浸漬時間を短く調整した。なお、白虎を含む断片は破損を防止する目的から保存処理工程②および③を省略した。

④ 樹脂含浸

遺物の補強ならびに防錆の目的から、エマルジョンタイプのアクリル樹脂（パラロイド NAD-10 / Rhom and Hass 社製）30% ソルベントナフサ懸濁液の減圧含浸を行った。

⑤ 二次クリーニング

工程①で除去できなかった緑青錆および土砂を追加で除去した。

⑥ 樹脂含浸

工程④で使用したものと同様のアクリル樹脂の減圧含浸を 2 回実施した。樹脂含浸終了後、遺物番号③で変形の著しい断片（方格を含む断片）を有機溶剤の蒸気を充満させた密閉環境に一時とどめ置き、補強用のアクリル樹脂を若干乾燥させて破片同士のズレおよび反り返りを矯正した。

⑦ 樹脂塗布

遺物表面にアクリル樹脂（パラロイド NAD-10 10% ソルベントナフサ懸濁液）を 2 回塗布した。

⑧ 整形・接合・樹脂補填

各遺物とも接合関係が認められた断片同士はエポキシ系接着剤（クイック 5 / コニシ株式会社製）お

よびシアノアクリレート系接着剤（アロンアルファ / コニシ株式会社製）で接合した。

遺物番号③の欠損部や微細な亀裂や破損の恐れのある微小な突起などには補強の目的からエポキシ系接着剤（ケイック5）にフェノールマイクロバルーンを充填したものを充填し、周囲に合わせて形状を調整した（写真4）。強度を必要としない箇所にはアクリル樹脂（バラロイドB-72）にフェノールマイクロバルーンを混入しパテ状に調整したものを充填し、外観を整えた（写真5、6）。白虎を含む断片には部分的に典具貼紙をアクリル樹脂（バラロイドB-72 40%キシレン溶液）で貼り付けて補強した。

⑨ 樹脂塗布

遺物表面にアクリル樹脂（バラロイドNAD-10 10%ソルベントナフサ懸濁液）を1回塗布した。

⑩ 補彩・樹脂光沢の調整

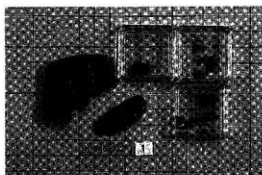
保存処理工程⑧にて補填した樹脂にはアクリル塗料（アクリラ/ホルベイン工業株式会社）にて補彩した。樹脂光沢の調整のため、保存処理工程⑨で使用したものと同様のアクリル樹脂にポリエチレン製微粉末を混入したものを吹き付けた。

⑪ 展示台製作

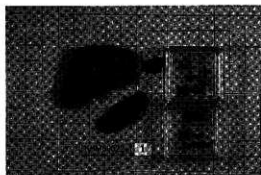
遺物番号③は断片の資料性の保持と外観の回復を両立させるために鏡形の展示台を付加型シリコン樹脂で製作した。

III. おわりに

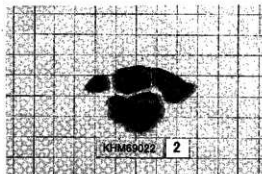
今回、保存処理を実施した方格規矩四神鏡は保存状態が悪かったが、発掘段階で適切な補強処置が施されたことにより断片のほとんどが破損を免れたものと推測される。今後は本件のように発掘後の保存処理を見据えた現場での補強処置法の定着と、より安全に除去できる補強材料と工法の開発が望まれる。



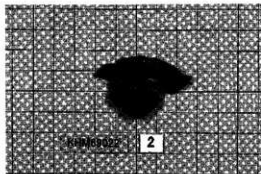
遺物番号① 保存処理前



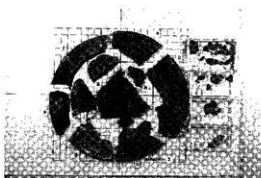
保存処理後



遺物番号② 保存処理前



保存処理後



遺物番号③ 保存処理前



保存処理後

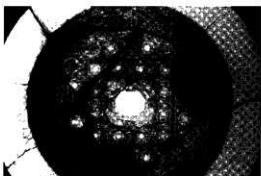


写真 1

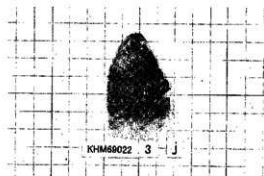


写真 2

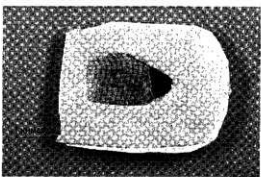


写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比

今津節生（九州国立博物館）・南 武志（近畿大学）

1. はじめに

古代に使用された赤色顔料には、朱（硫化水銀）以外にベンガラ（酸化第二鉄）、鉛丹（四三酸化鉛）、鶏冠石（二硫化二ヒ素）がある。その中でも朱は特に貴重な物質として用いられてきた。朱を埋葬儀式に用いる風習はすでに古代中国の戦国時代の墳墓で見られる。これに対して、我が国では吉野ヶ里遺跡の墳丘墓をはじめとして、弥生時代中期から後期末にかけて北九州・山陰・山陽・丹後地方で多量の朱を埋葬儀式に用いた墳墓が発見されている。この時期は漢鏡の出土が増加することからも明らかのように、中国との交易が盛んに行われた時代であり、埋葬儀式に用いる風習と共に朱も中国からもたらされた可能性がある。一方、朱は火山国である日本で多量に存在する鉱石の一つであり、しかもその主たる鉱山は初期ヤマト政権の領域に存在する。初期ヤマト政権を象徴する前方後円墳は全国に築造され、その葬送儀式には大量の朱が使用されている。このように、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての国家成立過程において、朱は王墓の埋葬儀式に積極的に用いられてきた。私達は墳墓に使用された朱が中国産か日本産かを知ることで被葬者の経済および政治的な背景を明らかにしようと試みている。

2. 分析試料と分析方法

(1) 分析試料

分析用朱サンプルは、三雲井原遺跡をはじめとして福岡県前原市教育委員会より提供を受けた。測定用朱は実体顕微鏡下で、上境部と赤色顔料部分に分けて分析に供した。

(2) 方法

イオウ同位体比分析

朱部分を逆王水に溶解し、塩化バリウムを加え硫酸バリウムの沈殿を得た。得られた硫酸バリウムに五酸化バナジウムとケイ酸を加えて混和し、管に入れて金属銅を上のにせ、真空下で加熱、二酸化イオウガスを採取した。採取したガスを質量分析計（DELTAplus, Thermo Finnigan 社）でイオウ同位体比（ $^{34}\text{S}/^{32}\text{S}$ ）を分析した。別に標準品としてキャニオンディアプロ隕石のイオウ同位体比（ $^{34}\text{S}/^{32}\text{S}$ ）を分析し、この標準品に対する割合を δ ‰で表した。

$$\frac{(\text{サンプルのイオウ同位体比}) - (\text{標準品のイオウ同位体比})}{(\text{標準品のイオウ同位体比})} \times 1000$$

3. 結果

福岡県前原市域の弥生時代・古墳時代遺跡から採取した朱のイオウ同位体比を表1に示す。泊瀬野遺跡、三雲・井原遺跡 井原ヤリミノ地区をはじめ、弥生時代後期から終末の朱は +9 ~ +15 ‰ の高い値を示した。この傾向は、同時期の土墓である福岡県春日市立石遺跡の +9.69 ‰、鳥根県出雲市西谷2号墳 +10 ~ +17 ‰、京都府岩滝町大風呂南1号墓の +8.46 ‰ と共通する値である。ただし、弥生最終末から古墳時代前期に入ると、赤坂今井墳丘墓では -8.36 ‰、兵庫県綾部山9号墳では -4.7 ‰、奈良県桜井市ホケノ山古墳 -2 ~ -4 ‰ などマイナス域になるのに対して、一貴山饒子塚古墳では +15.63 ‰ のプラス域の高い値を示す。つぎに鉱山辰砂鉱石のイオウ同位体比を測定したところ、奈良県大和水鏡鉱山産鉱石は -2.24 ‰、三重県丹生鉱山産鉱石は -8.82 ‰、徳島県水井鉱山産鉱石は -4.56 ‰ であったのに対し、中国貴州省万山特区鉱山産鉱石は +23.92 ‰、陝西省青銅山産鉱石は +7.79 ‰ であった。さらに、朱の産地である中国貴州省、雲南省の辰砂鉱石は +14 ~ +25 ‰ であることが知られている。これらの結果から、今回分析した前原市域の弥生時代後期から古墳時代前期に出土した朱の多くは中国産の可能性が高いと推定される。

表1 福岡県前原市域の弥生時代・古墳時代遺跡から採取した朱のイオウ同位体比

遺跡名	所在地	時期	同位体比	遺構	備考
泊瀬野遺跡 (糸島高校所蔵)	前原市	弥生後期 (1~2世紀)	+14.50	竇(竇) 棺	棺内副葬
出土地不明 (糸島高校所蔵)	前原市	弥生後期 (1~2世紀)	+11.65	竇(竇) 棺	棺内副葬
瀬去井戸遺跡	前原市	弥生後期 (1~2世紀)	+12.70	竇(竇) 棺	棺内副葬
井原ヤリミノ2582、2583番地	前原市	弥生後期 (1~2世紀)	+14.68	6号木棺蓋出土竇	棺外副葬
井原ヤリミノ2582、2583番地	前原市	弥生後期 (1~2世紀)	+1.51	10号木棺蓋	棺内塗布?
井原ヤリミノ2582、2583番地	前原市	弥生終末 (2世紀前後)	+9.43	6号竇出土坑	
真地頭給遺跡	前原市	弥生終末~古墳初期 (2世紀末~3世紀初頭)	+11.20	I区東SD28	玉つくり工房
真地頭給遺跡	前原市	弥生終末~古墳初期 (2世紀末~3世紀初頭)	+10.23	I区東SD15	玉つくり工房
三雲下西遺跡526-1番地	前原市	古墳前期 (4世紀)	+8.02	1号竇棺蓋出土竇	棺内副葬
一山崎山塚古墳 (糸島高校所蔵)	二丈町	古墳前期 (4世紀)	+15.63	竇穴式石室	棺内副葬

4. 考察

私達は朱の産地を推定する方法として、微細構造の違いを見る方法や混在微量元素含有量を比較する方法を試みたが、いずれも確証を得るには不十分であった。そこで朱を構成するイオウの同位体分析を行った。イオウ同位体の中で質量数32と34を用いてその割合を比較する方法は、地質学の分野で広く用いられている。質量数32のイオウは軽く、二酸化イオウや硫化水素のようにガス状化合物に含まれやすい。すなわち、火山性ガスに多く含まれ、火山地帯の鉱石は質量数32のイオウ化合物に富んでいる。一方、質量数34のイオウは重く、硫酸などの化合物に含まれやすい。すなわち海水中のイオウは34Sに富んでいる。この性質をイオウの化合物である辰砂鉱物から生成された朱の産地推定に応用した。

朱は日本に豊富な数少ない鉱物の一つである。しかも三重県丹生鉱山は縄文時代から、徳島県水井鉱山は弥生時代からその存在が知られていたと考えられている。また、奈良県大和水銀鉱山も古い鉱山の一つである。そこでこれらの鉱山と古代中国で採掘されていたと思われる貴州省と陝西省の鉱山から朱鉱石を採取し、イオウ同位体比分析を行った。その結果、火山立国の日本では、標準品(原始マグマのイオウ同位体比を示している)に比べイオウの値を示し、質量数32のイオウが水銀と結合して朱が形成されたと考えられる。これに対し、中国大陸中部に位置する貴州省は太古の昔、大海の下であったことが化石サンゴの存在からあきらかであり、大海中でじっくりと熟成されて形成された朱が質量数34のイオウに富んで、プラスの値を示したことは理にかなっている。

埋葬儀式に朱を用いる風習は、吉野ヶ里遺跡を始めとして弥生時代後期から末の北九州や山陰、山陽、丹後、四国地方の墳墓へ、さらに古墳時代の幕開けとともに大和から全国に広がっている。これまでの私達の分析結果から、弥生時代後期の王墓から出土する朱はイオウ同位体比の高いものが多く(中国産)、古墳時代に入ると急激にイオウ同位体の低い朱(日本産)へ移行する傾向がある。今回、前原市域の弥生時代後期~古墳時代前期の遺跡から出土した朱のイオウ同位体比を測定したところ、古墳時代に入っても中国産の朱を使用していることが推定された。

5. 謝辞

本研究を発表するにあたり、立石遺跡の朱は福岡市埋蔵文化財センターから、鳥根県出雲市西谷2号墳の朱は鳥根大学から、大風呂南1号墓の朱は京都府岩滝町教育委員会から、赤坂今井墳丘墓の朱は京都府埋蔵文化財調査研究センターから、綾部山9号墳の朱は兵庫県摂津郡御津町教育委員会から、ホケノ山古墳の朱は奈良県立橿原考古学研究所から提供を受けました。また、奈良県大和水銀鉱山・三重県丹生鉱山・徳島県水井鉱山辰砂鉱石は産業技術総合研究所地質調査総合センター地質標本館より提供を受けました。ここに謹んで御礼申し上げます。本研究の一部は、平成14・16年度 文部科学省科学研究費基盤研究(B)、平成16・17年度 文部科学省科学研究費基盤研究(C)、および平成17年度 平和中島財団アジア地域重点学術研究の研究費助成を得て行われました。

III. ガラス製玉類の科学的分析

前原市三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ 2582、2583 番地出土ガラス玉の調査について

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

ガラス玉は形状、寸法、色調、製作技法、材質といった諸属性の比較検討による系譜や流通、時代的な変遷などが注目される。井原遺跡跡からは福岡県下では類を見ない量のガラス玉が出土しているが、これらについて若干の調査を行ったので、その所見を記す。

本来であれば、すべての資料において上記諸属性のデータが取得されるべきであろう。しかし総数約 7,500 点に及ぶ資料すべてにおいて詳細な調査を行うことは様々な制約から困難であったため、今回は肉眼および顕微鏡による概観、及び各選構ごとに任意に抽出した資料の材質分析によって、ある程度の傾向を掴むに止めている。分析にはエネルギー分散型微小領域用蛍光 X 線分析装置を用い、完全非破壊による表面分析で、定性分析として行っている。分析の条件は次の通り。

分析装置：エダックス社製・Eagle μ probe / 対陰極：モリブデン (Mo) / 検出器：半導体検出器 / 印加電圧：20kV・電流：任意 / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲 0.3mm ϕ / 測定時間 60 ~ 120 秒

今回出土したガラス玉を遺構ごとに色調や形態で分類すると別表のようにになるが、特に数の多い青緑色や淡青色では、更に微妙な差異を指摘できるものも見られる。また形態上は大部分が小玉に分類されるが、これらは 6mm を超える大粒のものから 2mm 以下の微小なものまである。大型のものは丸玉、微小なものは粟玉といった細分もあるが、藤田等氏も述べているようにこれらの明確な線引きは難しいようで（藤田 1994）、ここでは小玉として一括しておく。以下、各種類ごとに製作技法や材質を見ていきたい。なお材質の分類は肥塚隆氏による研究（肥塚 2003）を元に行っている。

出土遺構	青緑色 小玉	青緑色 管玉	淡青色 小玉	緑青色 小玉	青緑色 管玉	緑青色 管玉	黄色 小玉	乳白(緑?) 環玉	計
2号木棺蓋	1,434 (10)	—	2,092 (10)	—	34 (10)	—	—	—	3,560 (30)
4号木棺蓋	37 (6)	—	38 (4)	—	—	—	—	—	75 (10)
6号木棺蓋	—	—	174 (5)	1 (1)	—	—	—	—	175 (6)
7号木棺蓋	1,063 (5)	—	1,602 (14)	—	—	—	—	—	2,665 (19)
10号木棺蓋	22 (8)	—	2 (2)	—	—	—	—	—	24 (10)
12号木棺蓋	49 (11)	—	6 (3)	—	—	—	—	—	55 (14)
12号環状蓋	3 (3)	—	3 (3)	—	—	—	—	—	6 (6)
13号環状蓋	625 (10)	5 (5)	—	—	—	—	4 (2)	12 (12)	646 (29)
1号土甕蓋	—	—	86 (5)	—	—	—	—	—	86 (5)
3号土坑	—	—	4	—	—	1 (1)	—	—	5 (1)
1号鉄砲土坑 大型壺	72 (10)	—	1 (1)	—	—	—	—	—	73 (11)
4号鉄砲土坑 椀	—	—	3	—	—	—	—	—	3 (0)
椀等	44	—	86	—	—	—	—	—	130 (0)
	3,369 (63)	5 (5)	4,097 (47)	1 (1)	34 (10)	1 (1)	4 (2)	12 (12)	7,523 (141)

()内は分析を行った資料の点数

◎淡青色：小玉

最も数が多く、特に 2号木棺蓋では 2,092 点、7号木棺蓋では 1,602 点と、まとまった数の出土が見られる。大きさは 3mm 程度のものが多い中、6号木棺蓋の資料は 6~7mm と大粒のものが占めている。これは歪みや凹みが見られるといった形状的な共通点と共に数の多さという点で見れば、佐賀県 2 塚山遺跡 22 号土甕蓋出土品に類例を求めることができる（石塚他 1979）。

また大きさに関係なく殆どの資料では気泡が多く凹みや歪みが生じているものが多い中、12号木棺蓋の 6 点は色調が他と比べて鮮やかで、形も整い、気泡も少ないという違いが見られる（写真 03）。逆に 7号木棺蓋の資料では現場担当者側で淡青色を更に緑がかった色調として一併分けたものが、顕微鏡観察によれば

※写真は図版 1・2 を参照

これらは気泡が非常に多く、結果としてやや暗めの色調となって緑色の様に見えると考えられるものもある(写真01)。しかし顕微鏡で気泡の流れを見ると、その多少に関わらず孔の長軸方向に対して平行に並んだり、流れている様子が観察される。中には気泡が細長く引き延ばされた状態にも見られ、引き延ばしによって得られた管ガラスを折って、加熱により断面を整える製作技法が想定される(小瀬 1987)。その様な目で形状を細かく見ると、小口の角が立っているものから、角が溶けたように丸くなったものまで様々有り、比熱の度合いが異なっている様子が見て取れる。

他に特異な状況として、7号木棺墓の資料に鉄片と見られる暗褐色の微小塊が噛み込んで表面に露出したものが複数個(5~6点)存在する(写真02)。この様な例は他の遺跡出土資料でも希に見ることがあり、(比佐他 2000) 状況的に製作時の痕跡と見られるが、何を示すのかなどは現時点では不明である。

分析を行った資料では、大きさ、色調の微妙な違い、気泡の多少に関係なくすべて同じ結果を示している。主成分である珪素の他、カリウムの強いピークが見られる特徴から、カリガラス(K_2O-SiO_2 系)に分類される。また鉄や銅、僅かながら鉛なども検出されており、特に銅が着色に関与していると考えられる。

1点、3号土坑より緑色に見える管玉状の資料が出上している。緑色の管玉とすれば類例の少ない資料であるが、長さは管玉には微妙なところで、しかも著しい劣化により現場でアクリル樹脂が厚く塗布されており十分な観察が行えない。しかし分析では淡青色の小玉と変わらない結果となっており、本来、淡青色のものが光の加減で緑に見える可能性がある(写真11)。

◎青紺色：小玉・管玉

淡青色に次いで数が多く、2号木棺墓、7号木棺墓の他、13号壙棺墓でも大量に出土している。こちらの資料では2mm以下の微小なものから、大きくても4mm程度までで、淡青色の様な大粒のものは見られない。また気泡も極端に多いものではなく、その流れはいずれも引き延ばしの痕跡を示している。淡青色と同様に、同一遺跡出土の一群でも比熱の度合いが極端に異なる資料が混在する場合もあるが(2、4、7号木棺墓)(写真05)、逆に非常に揃っているものも見られる(12号木棺墓、12、13号壙棺墓)(写真06)。やや変わったところでは13号壙棺墓のNo.390で、環の一部が切れた状況が見られる(写真04)。見ると巻付けの不十分な状況と認識しそうであるが、他の資料と同様に引き延ばしの痕跡を示す気泡の流れとなっていることから、管ガラスの状態で何らかの切れ目が生じていたものと考えられる。

分析の結果、やはりここでも大きさ、色調の微妙な違い、気泡の多少に関係なくすべて同じ結果を示している。ガラスの区分としてはカリウムの強いピークからカリガラスに分類される。また鉄やそれに匹敵、或いは上回る強度のマングアンが認められ、またコバルトも不明瞭ながらピークとして確認できるものも見られる。近隣における類例として、前原市三坂七尾遺跡で黄泉を伴った土壌墓出土の430点を調査している(比佐他 2001・岡部他 2004)。

青紺色の小玉に関連して、同色の管玉が13号壙棺より出土している(写真09・10)。細く整った外観で、表面には引き延ばしによって生じたと思われる細かい筋が多数入っている。分析の結果は小玉と同じものであり、これを細分して加熱すれば小玉になる、素材ともいえる資料である。決して類例は多くないが、佐賀県二塚山遺跡26号土壌墓で220点以上が出土している他、時期の大きく異なる古墳後期の福岡市古武S-9号墳(横山 2003)でも多くの玉類に1点混じっている。

◎青緑色：小玉

2号木棺墓のみで見られる一群である。気泡の流れは引き延ばし技法であることを示すなど、色調以外の特徴は他の小玉と特に変わるものではない(写真07)。10点の資料を分析したが、やはりカリガラスであった。しかし着色に関係すると見られる元素は、マンガ、銅、微弱な鉛が検出されており、この様相は淡青色と青紺色両方の要素が混在したものといえる。現実的に可能か否かは別とすれば、色調、組成とも2種類のガラスを混合したように見える。

◎極淡青色：小玉

6号木棺墓の1点のみである。通常の淡青色の資料に比べて明らかに色が淡い。この色調は後期古墳の資料に散見されるようであるが、弥生時代の資料ではこれまでに見た経験を持たない。気泡は少なく透明感が強いが、孔の長軸方向に平行する明瞭な気泡列が観察されることから、引き延ばしによる製作が想定される(写真08)。分析ではカルシウムのピークがカリウムを若干上回っており、一見ソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O}-\text{CaO}-\text{SiO}_2$ 系)のようにも見える。しかしナトリウムは検出されておらず、カルシウムとカリウムのピーク比も拮抗しておりソーダ石灰ガラスのものとは印象が異なる。またそれ以外の元素も鉄が見られる他は特に無く、通常の淡青色のものとは明らかに異なっている。現状では明確な分類が難しいといわざるを得ない資料である。

◎黄色：小玉

13号塚墓より4点出土している。形が球に近く透明感のある特徴は、これまで見てきた弥生の黄色ガラス(扁平で不透明)とは明らかに異質である。また顕微鏡観察では表面に孔を取り巻くように流れる蝕像が観察されるが、気泡は必ずしもそれに沿っておらず散在する(写真12)。決定的な手掛かりはないが巻き付けの可能性が高いと考える。ナトリウムの検出、カルシウムの強いピークなどといった分析結果から、低アルミナタイプのソーダ石灰ガラス($\text{Na}_2\text{O}-\text{CaO}-\text{SiO}_2$ 系)であると考えられる。マグネシウムが比較的顕著という特徴も挙げられる他、着色に関連すると見られる元素としては鉄が非常に強く現れている。

◎乳白(緑?)色：連玉

更に特異な資料が同じく13号塚墓出土の連玉である。破損した個体もあるが12点分が計上されている。同じ前原市では平原遺跡で青紺色の連玉が出土し、ソーダ石灰ガラスで二重構造という特殊な製作技法が報告されているが(肥塚2000)、本資料の場合著しい風化のため気泡の観察は出来ないものの、孔の内部に外面の溝と同じ位置に溝が入っている部分が見られ(写真14)、平坦な環状の小玉を融着するなどして連結した可能性も考えられる。また一部、風化を免れた部分が緑色を呈しており、本来の色調を示すものかもしれない(写真15・16)。材質分析では珪素の他に鉛が特徴的なピークとして現れており、鉛珪酸塩ガラスであることは分かる。この種のガラスでは弥生時代においては鉛バリウムガラス($\text{PbO}-\text{BaO}-\text{SiO}_2$ 系)が一般的であるが、バリウムのピークは認められない。しかし完全非破壊による表面分析のため、これが本来の組成なのか風化による影響かが判断が難しい。ただ、風化を免れた部分をねらった分析でもバリウムは明瞭に検出されていないことからすれば、鉛ガラス($\text{PbO}-\text{SiO}_2$ 系)の可能性が高いといえよう。この他の元素として鉄や微弱な銅も認められる。

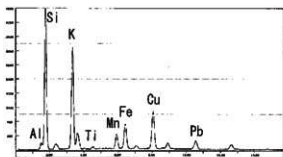
国内ではこれまで類例が知られていないが、材質も含めた詳細は不明なものの、写真で見ると浪速土城址出土とされる資料によく似たものが存在する(大賀2001)。

今回大多数を占めていた青紺色、淡青色の小玉は、個体ごとに微妙な差違が認められながらも、分析した範囲ではいずれもカリガラスであった。同じく全点が調査されていないものもあるが、周辺では佐賀県二塚山や前原市三坂七尾、福岡市カルメル修道院内遺跡(肥塚1997)などの弥生中期末～後期前半頃の墳墓で、同様の色調のカリガラスとみられる小玉が大量に副葬されており、井原鑑溝例も弥生時代後期を中心とする大量保有によく見られる構成の中で捉えられる資料といえる。その一方で2号木棺墓の青緑玉、6号木棺墓の極淡青色玉など他に例の無いあるいは少ない資料も多く、なにより13号塚墓の黄色玉や連玉が目をひく。特に連玉は瀬沼との関連性が指摘できる可能性を秘めており、伊都国という地域性から見て今後の比較調査などが期待される。

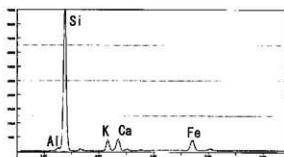
なお、調査にあたっては奈良文化財研究所の肥塚隆保氏、高妻洋成氏にご指導いただきました。文末ながら記して感謝申し上げます。

文献

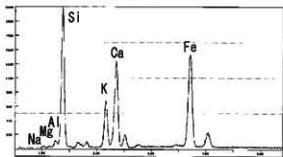
- 石塚喜佐雄・七田忠昭(編) 1979『二塚山』佐賀県教育委員会・新郷上刊行会
 大賀克彦 2001「インド洋の紅い風 mutisalah beadsの東伝」『ガラスのさざやき』八雲立つ風上記の丘
 岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹 2004「三坂七尾遺跡出土貨泉について」『福岡考古』第21号 福岡考古懇話会
 肥塚隆保 1997「カルメル修道院内遺跡出土ガラスの分析調査」『カルメル修道院内遺跡4-カルメル修道院内遺跡第5次調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集 福岡市教育委員会
 肥塚隆保 2000「平原遺跡出土ガラス遺物の調査と保存処理」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 前原市教育委員会
 肥塚隆保 2003「日本出土ガラスの考古学的研究-古代ガラス材質とその歴史の変遷-」『考古学の総合的研究』平成10-14年度科学研究補助金研究成果報告書 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・沢田正昭
 小瀬康行 1987「管切り法によるガラス小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻第2号 日本考古学会
 比佐陽一郎・片多雅樹 2000「長崎県北松浦郡大島村長畑馬場遺跡出土ガラス小玉の分析について」『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第13集 長崎県大島村教育委員会
 比佐陽一郎・片多雅樹 2001「三坂七尾遺跡出土ガラス資料の材質調査」『三坂七尾遺跡 福岡県前原市大字三坂字七尾所在遺跡の調査報告』前原市文化財調査報告書第77集 前原市教育委員会
 藤田等 1994『弥生時代ガラスの研究』名著出版
 横山邦雄(編) 2003『吉武遺跡群XV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集 福岡市教育委員会



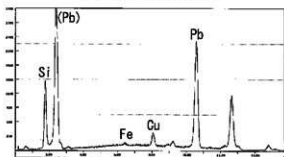
2号木棺墓 青緑色小玉



6号木棺墓 極淡青色小玉



13号雙棺墓 黄色小玉



13号雙棺墓 緑?色遺玉

主な資料の分析結果

第5章 総括

本遺跡は三雲・井原遺跡を南北に縦断する調査であったため、三雲・井原遺跡の西側地域の旧地形や各時期の墓域や集落域の分布、範囲の推定に、貴重な考古学的成果をもたらした。特に三雲ヤリミゾや井原ヤリミゾの調査は、王墓の周辺の歴史的環境を知る上で重要な成果を得ることができたため、ここではその特筆すべき事項について簡単にまとめた。

1) 井原ヤリミゾ 2582、2583 番地

①木棺墓出土後漢鏡について

後漢鏡が出土した木棺墓は3基検出され、1・6・7号木棺墓が該当する。このなかで1号木棺墓からは岡村編年Ⅰ式の内行花文鏡と弥生時代後期中頃の土器が共存している。同じく内行花文鏡Ⅰ式が出土した飯氏遺跡群3次調査7号塚棺墓¹⁾、博多区那珂遺跡群69次調査例²⁾を含めると3例目となり、内行花文鏡Ⅰ式の最古の出土事例に加わる。また、7号木棺墓からも内行花文鏡Ⅰ式が出土したが、主軸方位がほぼ同一なことから同時期の所産と考えたい。

一方、6号木棺墓から出土した方格規矩四神鏡は岡村編年³⁾のⅤA～ⅤB式と考えられる。時期については、塚棺から方格規矩鏡の出土例がなく、塚棺と鏡式の併行関係において不明な部分も多い。現在、最古の方格規矩四神鏡は、桜馬場遺跡の方格規矩四神鏡（岡村編年Ⅳ式）である。桜馬場遺跡出土の塚棺、巴形銅器、方格規矩四神鏡（岡村編年Ⅳ式）の再検討を行った柳田康雄氏⁴⁾は、その時期を「中頃に近い後期前半」に比定されている。高橋徹氏⁵⁾も同様の検討から「後期前葉の新しい段階から中葉」に比定されており、従来の所屬時期よりも下げて考えられている。一方、佐賀県東春塚村松葉箱式石棺出土の方格規矩鏡や同県杵島郡北方町花島山遺跡箱式石棺出土の方格規矩鏡は、十二支銘が記号の擬名帯となっており、ⅤC式またはⅤAの進化形式、時期も弥生時代後期後半と考えられている。よって、大局的に見れば、鏡型式と供獻時期は概ね対応すると見られる。近年、弥生時代の暦年代の提示に当たって、塚棺と鏡式の併行関係を整理、検討された寺澤薫氏⁶⁾は、弥生時代後期末以降の鏡式の乱れを除けば、「方格規矩鏡の型式と副葬時期は整合的」との見解を示している。氏の編年に従えば、後期3様式（新）～4様式の範疇であるが、現状では弥生時代後期中頃前後に位置づけておき、その検証は井原健満王墓を含め、方格規矩鏡を副葬した塚棺が発見された時に行いたい。

②葬送儀礼について

出土した後漢鏡は、その検出状況から破砕鏡と考えられる。棺外の鏡片は、木棺を固定する充填土から検出され、1号木棺墓は足元側、6・7号木棺墓は頭位側より出土していることから、平原王墓と共通する儀礼が行われている。破砕鏡については柳田康雄氏が事例の集成、検討⁷⁾を行っており、「北部九州の限定された地域で醸成された祭祀儀礼に伴うもの」であり、その定着について「後期初頭以後北部九州で普及し、古墳初頭になって東進する」と考えられている。実際、今回の事例は、後期前半の佐賀県二塚山76号塚棺墓例と後期後半である同遺跡29号土壇墓例の間の空白を埋める形となり、この祭祀行為が後期初頭から連続と続いていることを追認した。氏の破砕鏡の分類に従えばC b型となるであろう。

一方、同じ供獻品としてガラス小玉がある。木棺墓のガラス小玉の出土状況には①規則的な配置は見られず、その広がりが被葬者の頭位～腹部付近、一部棺外にまで及んでいること②ガラス小玉の高低差が30cm近くあること③頭位に分布が集中することなど共通する点があり、これらの状況から葬送儀礼における玉のばら撒き行為が想定される。

葬送儀礼を復元的に考えるならば、棺外の鏡片とガラス小玉は棺外充填土から出土し、レベルはほぼ同じであることから、棺を墓域内に設置し、木棺が安定するまで同定土を充填した後、破砕鏡の供獻とガラス小玉のばら撒き行為を同時に行ったと考えられる。ところが、棺内の鏡片やガラス小玉は、棺床面から20～30cmの比高差をもって検出されている。通常、玉類を着装していた場合でも床面から5cm程度で検出され、多少の乱れはあっても着装の痕跡を窺うことができる。この場合、棺蓋搬入前に棺内への玉類のばら撒き行為があったとしても、やはり棺床に近い高さから検出されるであろうから、棺蓋搬入後、棺上にガラス小玉

や鏡片を置いたと考えられる。また、箱外のガラス小玉の検出量が決して多くない状況から、箱上に置くように供献され、それが蓋材の腐朽によって箱内に転落したものと想定される。今回の調査では、層位上確認することができなかったため、今後の木棺墓の調査において丹念な精査、観察が求められよう。

③ガラス玉類の検討

グラフ5に示したとおり、本遺跡におけるガラス玉類の直径は、A：5～8mm、B：径2～5mm、C：2mm以下に分けられ、それ以外にD：特殊形態（管玉・丸玉・連玉）が存在する。大まかな副葬の特徴として、①Aのみ（6号木棺墓）、②Bのみ（2・4・7・10・12号木棺墓、1号土墳墓、1号祭祀土坑大型壺）③B+C+D（13号壺棺墓）がある。

6号木棺墓は大きさもさることながら、銅鏡と共存した唯一の例である。また、13号壺棺墓副葬玉類は、大きさ・形態が非常にバラエティに富むうえ、B・Cのいわゆる小玉は比熱による形状も非常に均一的で注目される。

なお、大半の遺構は②にあたるが、2号木棺墓が3,500点以上、7号木棺墓が2,600点以上と他を圧倒している。それ以外の遺構のなかで階層差を見出すには、数量、色調、製作技法等の総合的な検討が必要であるが、このように多数の遺構へのガラス玉類の副葬状況は、複雑な階層性を示しているといえよう。

④墓域の時期的変遷

今回の調査では壺棺墓13基、木棺墓10基、箱式石棺墓4基、土墳墓2基、祭祀土坑6基を検出した。墓域の変遷については、調査範囲が墓群の一部に限られており、現段階で評価を行うことに躊躇する。また、後期の壺棺墓群においても、本来壺棺の編年を行い、それに沿って時期を設定すべきである。よって、詳しい時期については今後報告する機会があるので、ここでは大まかな時期的変遷を述べるに留めておきたい。

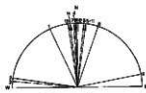
弥生時代後期前半：1・4・12号壺棺墓、3～5号祭祀土坑、4号土坑が該当する。後期前半段階では、壺棺墓、祭祀土坑が点在する形で分布し、副葬品も12号壺棺墓のガラス小玉のみである。祭祀土坑の対象については現在のところ不明であり、周辺に調査に期待したい。

弥生時代後期中頃：1・2・4・6・7・8・10・12号木棺墓、2・3・5・6・7・8・10・11・13号壺棺墓、1号祭祀土坑、大柱状遺構が該当する。後期中頃になると墓域形成の最盛期にあたり、墳墓の検出数が最も多く、副葬品を持つものも増加する。鏡+玉類：6・7号木棺墓、鏡：1号木棺墓、玉類：2・10・12号木棺墓、13号壺棺墓、1号土墳墓、1号祭祀土坑、3号土坑。

主軸方位、埋葬配置を見ていくと、1・2・4・7・10号木棺墓はほぼ同一の埋葬主軸をとっており、南北に配置されている。また、頭位は、南北方向では1号木棺墓が北頭位である以外は、南頭位である。そして、この主軸に直交するものとして6・12・14号木棺墓があり、6号木棺墓が先述したとおり、1号木棺墓に近い時期であることから、南北軸を基本にしつつも、頭位方向が同じもの、直交するもの、対向するものなどが混在する埋葬配置である。4号、7号を除けば、木棺墓同士が切りあうことはなく、主軸方位は南北向きで振幅範囲13°、東西向きで3°の範囲で集中する。また、壺棺墓や土墳墓においても南北に点在する形で配置され、主軸方位は、南北向きで振幅範囲27°の範囲に集中しており、主軸方位や頭位、配置における一定の規制がうかがえる。鏡を副葬する1号木棺墓と6・7号木棺墓周辺には墳墓が集中して営まれる傾向にあり、2号壺棺墓は6号木棺墓に、1号土墳墓は1号木棺墓に伴うものである。また、位置関係から一連の可能性のあるものとして5・6・7号壺棺墓と1号木棺墓、14号壺棺墓と10号木棺墓、2・10号木棺墓と6・7号木棺墓などが挙げられる。

弥生時代後期後半～終末：5号木棺墓、1～4号箱式石棺墓、2・6号祭祀土坑が該当する。この時期から箱式石棺墓が出現し、ある一定の間隔を持って2基ずつ配置され、主軸方位は後期中頃の木棺墓と重なり、依然、南北軸が保たれている。6号祭祀土坑は1号箱式石棺墓を対象とし、2号祭祀土坑の対象については今のところ不明である。

本調査では調査北端で谷を跨ぎ13号壺棺墓から南側では墳墓が検出されなかったことから、弥生時代後期の墓域は南北約100mに及ぶと考えられる。墳墓の中心時期は弥生時代後期中頃であり、当該期の木棺墓の副葬率は77.7%、壺棺墓では15.3%、墳墓全体で44%と非常に高いことが分かる。また、「鏡+玉類」「鏡のみ」「玉類のみ」「副葬品をもたないもの」と同一墓域内でも副葬品の格差が見られた。鏡・玉類の供



グラフ2：井原ヤリミノ2582、2583番地
壘形墓主軸方位



グラフ3：井原ヤリミノ2582、2583番地
壘形墓遺跡方位



グラフ4：井原ヤリミノ2582、2583番地
木棺墓主軸方位

献や高い副葬率は、これら被葬者が特定家族墓または中心被葬者に対するエリート家族と考えられ、副葬品の格差は、その内部により生じた複雑な階層差を反映していると考えられる。

当地は、江戸時代の天明年間（1781～1788）に発見され、現在、所在が不明となっている井原鑑清王墓の推定地内である。方格規矩鏡については、富岡謙蔵氏に注目され、さらに梅原末治氏による復元的研究から、これら鏡群が王莽鏡とされ、岡村秀典氏もⅡ式のⅠ面を除いて、全てⅢ式としており、桜馬場式鍔棺と併行すると考えられてきた⁵。しかし、柳田康雄氏は井原鑑清出土の巴形銅器および方格規矩鏡の再検討のなかで、鏡の流雲文の幅狭、便化していることから、弥生時代後期中頃としている。また、寺沢薫氏も同様の検討から鏡群の中にV B～V C式が含まれる可能性を指摘しており、この年代順に沿えば今回の墓群が井原鑑清王墓と重層的関連をもつ可能性が高いが、階層的な墓地構造の解明には井原鑑清王墓の発見、検証が必要であろう。

2) 三雲ヤリミノ地区の調査成果と三雲南小路王墓について

今回調査を行った三雲ヤリミノ地区は426番地から434番地まで、南北約100mに及ぶ。そのうち429番地および434番地においては、県道拡幅に伴う建造物移設予定地を合わせて、比較的面的な調査を実施することができた。この地区は、三雲南小路王墓から半径70mの範囲にあり、王墓周辺の様相を知る上で非常に重要な意味をもつ場所である。

下記のとおり幸運にも王墓と同時期あるいは近接する時期の遺構をいくつか検出することができた。

- ・祭祀土坑（弥生時代中期末葉）・・・426番地
- ・祭祀溝（弥生時代中期後～末葉）・・・429番地
- ・SD04（弥生時代中期後葉？）・・・429番地
- ・V字溝（弥生時代中期末葉）・・・434番地
- ・4号壘形墓（弥生時代中期末葉）・・・434番地
- ・土坑（弥生時代中期末葉～後期初頭）・・・434番地

まず、祭祀土坑および祭祀溝は、南小路王墓からそれぞれ60m、45m北東に位置する。これらは恐らく壘形祭祀に伴うものであろうが、周辺（429番地）では弥生時代中期中葉の壘形墓3基を確認したのみである。当該期の墓群は調査区外に展開すると想定される。

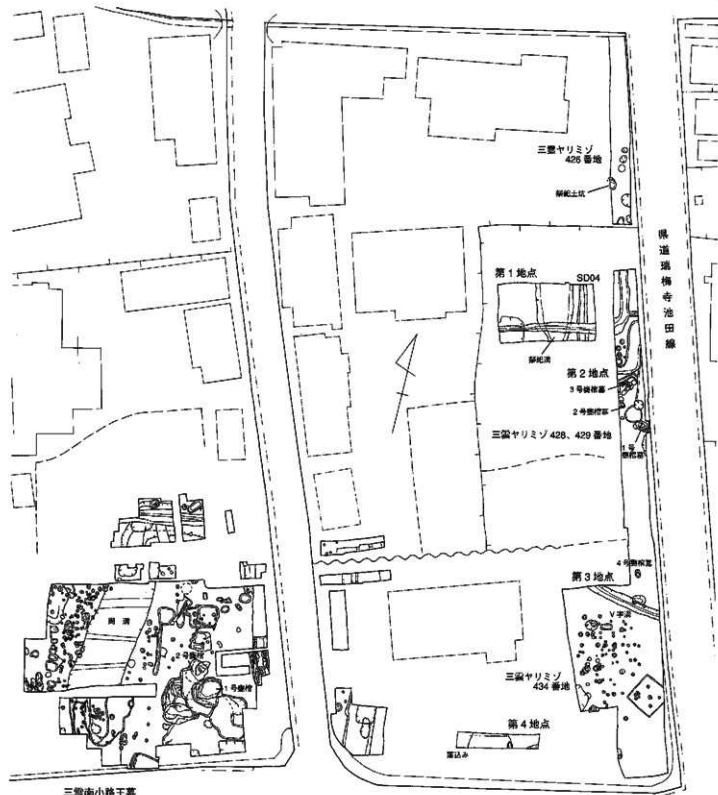
ここで、祭祀溝の性格が問題となるが、溝の底面は平たく台形状を呈していることや、幅4mを越す大型の溝であることは、南小路王墓の周溝と非常に近い形態であることがわかる。出土遺物の中に日常的な遺物が含まれないことも注目すべきことである。もし本遺構が周溝の一部であれば、426番地および428、429番地の県道拡幅部分は検出していないことから、東ではなく西に曲がる可能性が高いといえる。さらに、溝幅が南で狭まることはコーナー部に近いことを示唆しているのかもしれない。ただ、祭祀溝の西側は礫を主体とする地山が広がっており、周溝を持つ墓として適当な選地であったのか疑問である。

次に434番地で検出したV字溝である。東西とも調査区外へ延びており、南小路王墓との直接的な関連は不明であるが、もしそのまま延長していれば王墓の北10m程の場所を通ることになる。現状では、V字溝の南には当該期の遺構は存在せず、北で壘形墓が検出されたことから、南北を区画するためのものであったと推測されよう。遺物は上～下層から出土しているが時期幅は小さく、後期初頭には埋没していたようである。

これら遺構の性格決定は今後の周辺調査に拠らなければならないが、いずれにせよ、王墓と大差ない時期の遺構の存在は、伊弉国王墓と周辺の墓群の展開、ひいては集落構造を解明する上で極めて重要であるといえる。

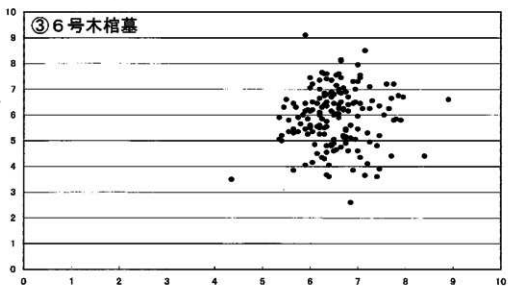
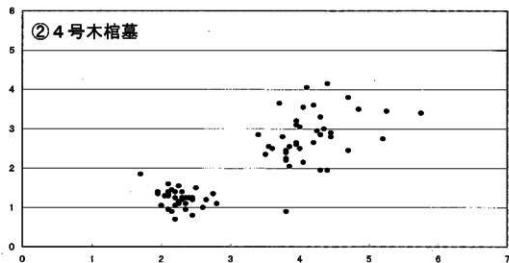
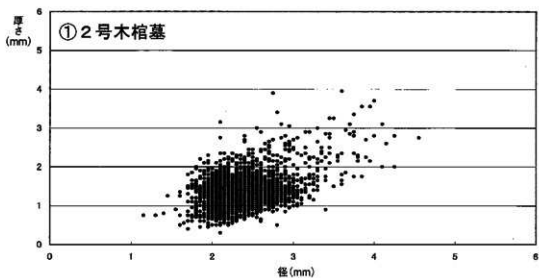
(参考文献)

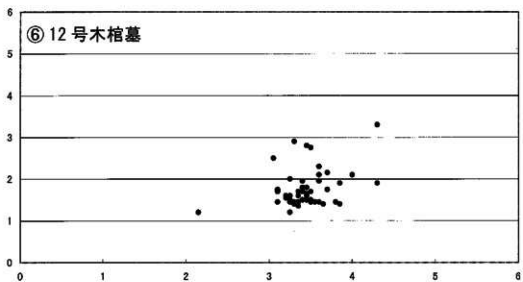
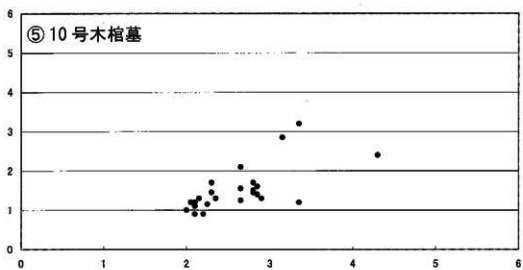
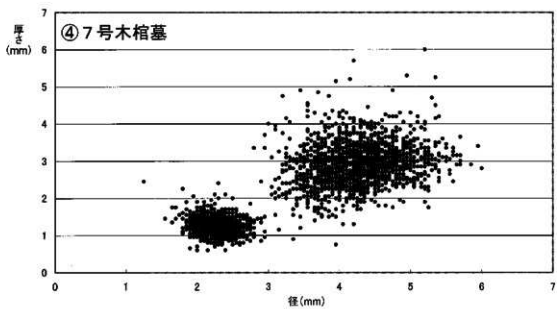
- i 富井義則ほか 1994 『加茂遺跡群 2』 『福岡市埋蔵文化財調査報告書第 390 集』 福岡市教育委員会
- ii 長塚 伸 2004 『加戸 34 - 五河遺跡群第 69 次調査報告』 『福岡市埋蔵文化財調査報告書第 800 集』 福岡市教育委員会
- iii 岡村秀良 1993 『絵巻館の編年』 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 55 集
- iv 藤田山雄 1996 『書道館の創作と経緯』 『九州考古学』 第 60 号
- v 高橋健 1994 『板野橋遺跡立上り井筒跡遺跡跡の研究 - 調査古銅器、出土中国製の型式的検討を踏まえて -』 『古文化談叢』 第 32 集
- vi 竹内眞 2004 『考古資料から見た弥生時代の銅年代』 『考古資料大観』 第 10 巻
- vii 藤山雄雄 2002 『九州弥生文化の研究』 学芸社
- viii 藤山雄雄 2005 『弥生時代における銅器の産地』 『東アジアにおける銅器の産地とその展開』 国学院大学 21 世紀 COE プログラム考古学・神道シンポジウム予稿集
- ix 岡村秀良 1985 『中央の鏡』 『弥生文化の研究』 6 藤山雄雄監
- x 藤山雄雄 1995 『伊勢川 - 二新遺跡群 -』 『季刊考古学』 51

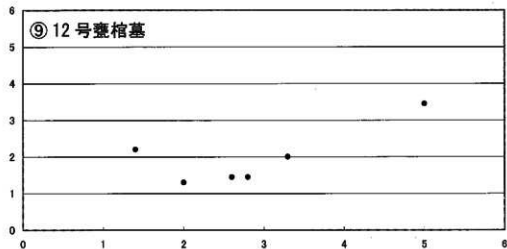
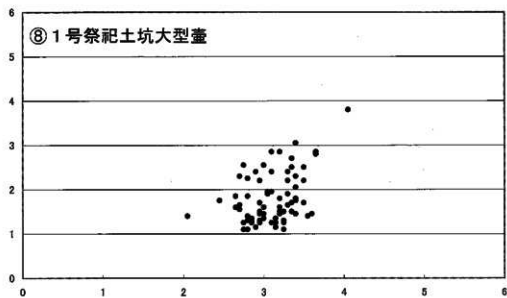
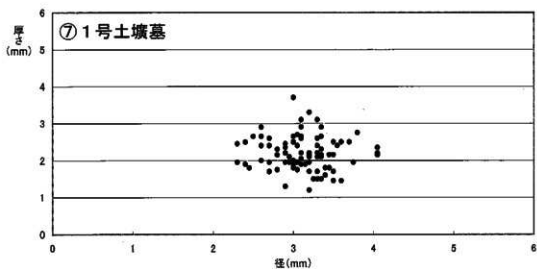


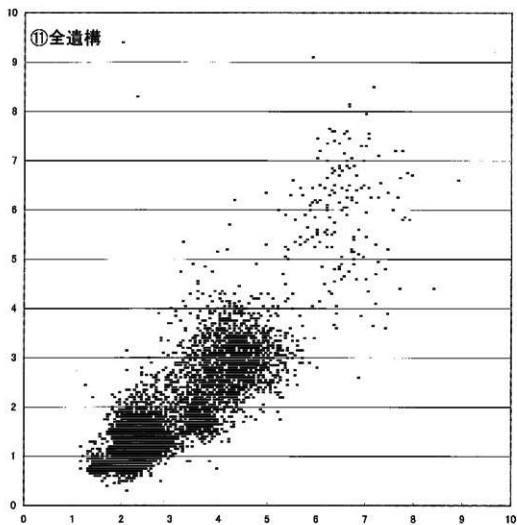
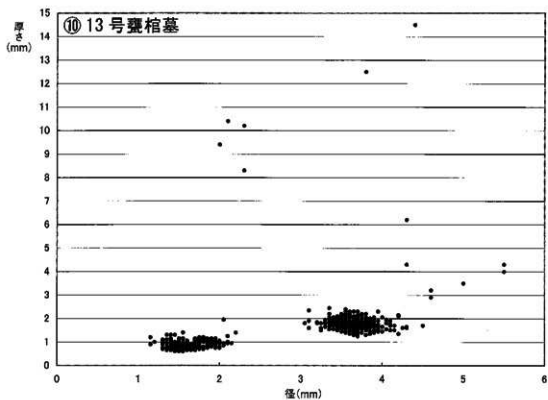
第 143 図 三雲ヤリミソ地区調査地点及び三雲南小路墓位図 (1/500)

グラフ5 井原ヤリミゾ遺跡 2582、2583 番地出土ガラス玉類度数分布









第1表: 壟墓一覽表

三雲下西526-1番地

番号	墓域形態	墓域の規模(m)			器種	合口形態	主軸方位	埋置角度	副葬品	時期
		長さ	幅	深さ						
1	楕円形	1.30	0.83	0.41	長胴壺	-	N-11°-E	27°		終末
2	長方形	1.61	0.59	0.13	上二重口鉢壺 下壺	香口	N-26°-W	-	破鏡 1	古墳前期

三雲下西533番地

1	-	1.60	0.35	0.22	長胴壺	-	N-16°-W	-		終末
2	台形	0.97	0.82	0.39	上壺 下壺	香口	N-19°-W	50°		中期中葉
3	楕円形	1.14	0.64	0.61	上壺 下壺	接口	N-10°-W	-		中期中葉
4	円形	0.69	0.62	0.13	上高坏 下壺	接口	N-75°-W	38°		中期中葉
5	楕円形	1.14~	0.81	0.36	上鉢 下壺	接口	N-79°-E	-		中期中葉
6	楕円形	(0.84)	0.43	0.10	上鉢 下壺	接口	N-71°-W	-		中期中葉
7	楕円形	0.75~	0.55	0.14	上鉢 下壺	香口	N-84°-E	-		中期中葉
8	楕円形	2.51	0.98	0.84	壺	-	N-86°-E	-	石戈 1	中期中葉
9	楕円形	1.77	1.11	0.38	上壺 下壺	接口	N-77°-E	40°		中期中葉
10	長方形	1.92~	1.10	1.07	上鉢 下壺	接口	N-82°-E	10°		中期中葉

三雲ヤリミノ428, 429番地 (第2地点)

1	楕円形	2.18	1.07	0.50	上鉢 下壺	接口	N-66°-W	-		中期中葉
2	楕円形	1.02	0.64	0.14	上壺 下壺	接口	N-58°-W	-		中期中葉
3	楕円形	0.90	0.52	0.09	上壺 下壺	接口	W-1°-S	-		中期中葉

三雲ヤリミノ428, 429番地 (第3地点)

4	楕円形	1.03	0.60	0.27	上高坏 下壺	接口	N-18°-W	-		中期末葉
---	-----	------	------	------	-----------	----	---------	---	--	------

井原ヤリミノ2582, 2583番地

1	楕円形	0.68	0.82	0.23	下壺	-	N-24°-W	53°		後期前半
2	円形	1.94	1.65	0.36	上壺 下壺	接口	N-19°-W	50°		後期中頃
3	倒卵形	0.91	0.83	0.32	下壺	-	N-84°-W	40°		後期中頃
4	楕円形	0.56	0.52	0.22	下壺	-	N-1°-W	45°		後期前半
5	円形	0.52	(0.57)	0.23	下壺	-	N-8°-E	56°		後期中頃
6	楕円形	0.72	0.59	0.17	下壺	-	N-6°-E	15°		後期中頃
7	楕円形	0.52	0.46	0.18	下壺	-	N-3°-W	35°		後期中頃
8	楕円形	1.10	0.73	0.36	下壺	-	N-19°-E	60°		後期中頃
大型壺	-	-	-	-	下壺	-	-	-	ガラス小玉 77	後期中頃
10	楕円形	0.75	0.39	0.25	上壺 下壺	覆口	磁北	27°		後期中頃
11	円形	0.33	0.38	0.15	下壺	-	N-8°-E	49°		後期中頃
12	楕円形	1.54	1.17	0.74	上鉢 下壺	覆口?	N-1°-E	48°	ガラス小玉 6	後期前半
13	楕円形	1.27	0.70	0.53	下壺	-	N-8°-W	58°	ガラス小玉 618~ ガラス連玉 12 ガラス管玉 5 ガラス丸玉 4	後期中頃
14	楕円形	0.52	0.60	0.15	下壺	-	N-6°-W	35°		後期中頃

第2表:木棺墓一覧表

井原ヤリミ/2582, 2583番地

番号	墓域・棺の規模(m)	墓域の規模(m)			主軸方位	副葬品	時期	頭位	備考
		長さ	幅	深さ					
1	墓域	2.94	2.33	0.16	N-12°-E	内行花文鏡 1	弥生後期中頃	北	頭部に朱
	棺	2.10	0.89	0.05					
2	墓域	2.33	1.75~	0.28	N-1°-W	碧玉製管玉 2 ガラス小玉 3560~	弥生後期中頃	南	頭部に朱
	棺	1.86	0.58	0.14					
4	墓域				N-8°-E	ガラス小玉 75~	弥生後期中頃	-	
5	墓域				N-1°-W	銅鏡 1	弥生後期 後半~終末	北	頭部に朱
6	墓域				N-82°-W	方格規矩四神鏡 1 ガラス小玉 176~	弥生後期中頃	西	
7	墓域				N-8°-E	内行花文鏡 1 ガラス小玉 2685~	弥生後期中頃	南	頭部に朱
8	墓域	1.78	1.12	0.07	N-21°-W	-	弥生後期中頃	-	
棺	1.33	0.62	0.13						
10	墓域				磁北	碧玉製管玉 1 ガラス小玉 24~	弥生後期中頃	南	頭部に朱
棺	2.05	0.60	0.18						
12	墓域				N-79°-W	ガラス小玉 55~	弥生後期中頃	東	
14	墓域				N-63°-W	-	弥生後期	-	石組み
	棺	1.16	0.45	0.15					

第3表:石棺墓一覧表

井原ヤリミ/2582, 2583番地

番号	墓域の規模(cm)	墓域の規模(cm)			主軸方位	副葬品	時期	頭位	備考
		長さ	幅	深さ					
1	墓域	2.13	1.21	0.17	N-2°-E	-	弥生後期 後半~終末	南	
2	墓域	2.04	0.7	0.05	N-1°-W	-	弥生後期 後半~終末	南	
3	墓域	2.06	0.72	0.16	N-6°-E	-	弥生後期 後半~終末	北	
4	墓域	1.34	0.88	0.16	N-10°-E	-	弥生後期 後半~終末	-	

第4表:土壇墓一覧表

三沢ヤリミ/434番地

番号	墓域の規模(cm)	墓域の規模(cm)			主軸方位	副葬品	時期	頭位	備考
		長さ	幅	深さ					
1	墓域	1.48	0.71	0.45	E-81°-N	-	古墳	-	

井原ヤリミ/2582, 2583番地

番号	墓域の規模(cm)	墓域の規模(cm)			主軸方位	副葬品	時期	頭位	備考
		長さ	幅	深さ					
1	墓域	1.23	0.73	0.29	磁北	ガラス小玉 86~	弥生後期	南	
2	墓域	2.24	1.11	0.51	N-17°-W	-	弥生後期	-	

第5表:出土土器観察表

群団別	種別	種別	数量	注		色調	構成	調査・平皿	備考
				①口縁②器底③底面④脚部⑤全表面	⑥				
10	1	弥生土器	②3.8	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(礫石、灰石を多く含む)	良	内外面ともコナナ	
10	2	弥生土器	②3.5	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(礫石、灰石を多く含む)	良	内外面ともコナナ	
10	3	弥生土器	②5.6③7.5	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(1mm程度の砂粒を含む)	やや良	内面:ナダ+磨研さえ 外面:なでハケ(磨研のため不明)	
10	4	弥生土器	②6.3③8.3	内:黄褐色 外:黄褐色		黄	やや良	外面:タテハケ磨研はナダ+磨研さえ 内面:ナダ+磨研さえ	
10	5	弥生土器	②6.7	内:黄褐色 外:黄褐色		やや黄(礫石、灰石を多く含む)	良	外面:タテハケ磨研はコナナ 内面:ナダ+磨研さえ	
10	6	弥生土器	①28.0②9.1	黄褐色		黄(灰石、金雲母、石英、黒色砂粒を含む)	良	外面:口縁部はコナナ+コナナ後ナダ磨研に ヘラ状工具によるキズあり 内面:ナダ	
10	7	弥生土器	①27.0②18.8	明褐色		黄(灰石、カクラン石を多く含む)	良	口縁部コナナ、脚部にはコナナ後キズ目	
10	8	弥生土器	①12.0②1.3	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(灰石、カクラン石を多く含む)	良	外面:口縁部コナナ磨研ナダ(黒化が強い) 内面:コナナ	
10	9	弥生土器	②2.3	内:黄褐色 外:黄褐色		やや黄(灰石を少量含む)	良	内外面ともコナナ	
10	10	弥生土器	②2.3	内:明褐色 外:黄褐色		黄(灰石を多く含む)	良	内外面ともコナナ	
10	11	弥生土器	②4.1	内:明褐色 外:明褐色		黄(灰石を多く含む)	良	内外面ともナダ	
18	1	弥生土器	②2.9	内:黄褐色 外:明褐色		黄(灰石、石英、金雲母を含む)	良	内外面ともコナナ	
18	2	弥生土器	②2.8	黄褐色		黄(灰石、石英、金雲母を含む)	良	内外面ともコナナ	
18	3	弥生土器	②1.2	黄褐色		黄(φ0.5mm程度の灰石を含む)	良	内外面ともコナナ	
18	4	弥生土器	①31.6②3.7	黄褐色		やや黄(灰石、石英を含む)	良	外面:口縁部コナナ磨研タテハケ 内面:コナナ	
18	5	弥生土器	②4.9③9.4	内:明褐色 外:黄褐色		やや良(灰石、カクラン石を含む)	良	外面:ナダ+磨研底面 内面:ナダ+磨研底面	
18	6	弥生土器	②4.1	黄褐色		黄(φ1mm程度の灰石、石英を含む)	良	外面:コナナ+タテハケ 内面:コナナ	
18	7	弥生土器	②3.1	明褐色		良(φ0.01mm程度の灰石を少量含む)	良	内外面ともナダ	丹塗り
18	8	弥生土器	②2.5	内:黄褐色 外:明褐色		良(金雲母を多く含む)	良	外面:磨研さえ 内面:ヘナナ	
19	1	弥生土器	②3.36	明褐色		良(石英、灰石を含む)	良	内外面ともコナナ	
19	2	弥生土器	②10.4	内:黄褐色 外:明褐色		やや良(カクラン石、灰石を含む)	良	外面:磨研はナダ 内面:磨研底面	
20	1	弥生土器	②2.7	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ1mm程度の灰石、1-2mm程度の石英を含む)	良	内外面ともコナナ	一箇丹塗り
20	2	弥生土器	①20.4②5.3	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ2mm程度の灰石、石英を含む)	良	口縁部コナナ 脚部は内外面ともナダ	
20	3	弥生土器	②2.8	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ1-2mm程度の灰石、石英を含む)	やや良	外面:コナナ 内面:黄化のため不明	丹塗り
20	4	弥生土器	②4.6	黄褐色		黄(φ1-2mm程度の灰石、石英を含む)	良	内外面ともコナナ	全箇丹塗りのだが外面は部分的に灰石
20	5	弥生土器	②4.9	黄褐色		黄(φ1-4mm程度の灰石、石英を含む)	良	内外面ともコナナ	全箇丹塗りのだが外面は一部のみに灰石
24	1	陶磁器	②(残部)1.7③14.8	内:灰色 外:黒色(スチール)					
24	2	陶磁器		黄白色				内外面とも黄化	
25	1	弥生土器	①24.6②11.0	明褐色		やや良 外面化粧仕上	-	外面:口縁部コナナ磨研タテハケ 内面:コナナ	
25	2	弥生土器	①25.3②8.9	にじみ黄		やや黄(化粧ナダ)	良	外面:口縁部コナナ磨研タテハケ後コナナ 内面:コナナ	
25	3	弥生土器	①24.6②6.0	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ2mm程度の灰石、石英を含む)	良	外面:口縁部コナナ磨研タテハケ 内面:口縁部コナナ磨研ナダ	
25	4	弥生土器	①27.5②6.2	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ3mm程度の灰石、石英を含む)	良	外面:コナナ(一部黄化) 内面:ナダ	
25	5	弥生土器	②7.5	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ3mm程度の灰石、石英を含む)	やや良	外面:黄化のため不明 内面:ナダ	
25	6	弥生土器	①29.5②5.9	内:黄褐色 外:黄褐色		黄(φ3mm程度の灰石、石英を含む)	良	外面:コナナ+タテハケ 内面:黄化のため不明	
25	7	弥生土器	①26.0②3.5	黄褐色		黄(φ5mm程度の灰石、石英を含む)	不良	内外面とも黄化のため不明	
25	8	弥生土器	①17.2②26.6	黄褐色		黄(φ5mm程度の灰石、石英を含む)	良	内外面とも黄化のため不明	

彫刻

25	9	弥生土器	焼	②04.0②4.4	内:黄褐色 外:褐色～褐色	内:説明彩色 外:褐色～褐色	底(φ4mm)の長石、石英を含む	不良	内外面とも風化のため不明		
25	10	弥生土器	焼	②08.4②8.0	内:灰褐色～緑褐色 外:緑褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ2mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダフタハク 内面:口縁部コナダ胴部コナダ		
25	11	弥生土器	焼	②6.5	内:灰褐色～明褐色 外:明褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ5mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク 内面:口縁部コナダ胴部コナダ		
25	12	弥生土器	焼	③11.6③7.6	内:灰褐色 外:褐色～灰褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ4mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダ 内面:口縁部コナダ胴部コナダ		
25	13	弥生土器	焼	③08.8③8.7	緑褐色		底(φ4mm)の長石、石英、φ2mmの角閃石を含む	良	外面:コナダ 内面:コナダ		
25	14	弥生土器	焼	③09.0③9.8	褐色～緑褐色		底(φ3mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部コナダ、袋縁よりタハク袋コナダ胴部コナダ 内面:口縁部コナダ胴部コナダ		
25	15	弥生土器	焼	③25.0③9.0	緑褐色		やや中底、断面は化粧土で丁寧に仕上	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダ 内面:口縁部コナダ		
25	16	弥生土器	焼	③02.6③6.0	内:灰褐色 外:赤褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ2mm)の長石、石英を含む	良	内外面ともナダ		
25	17	弥生土器	焼	③05.0③9.8	内:灰褐色 外:赤褐色～灰褐色 ～黒色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ3mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダ 内面:口縁部コナダ胴部コナダ		
25	18	弥生土器	焼	③09.8③7.7	内:灰褐色 外:灰褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ5mm)の長石、石英を含む	良	外面:コナダ口縁部胴部コナダ 内面:風化のため不明		
25	19	弥生土器	焼	③08.4③10.0	内:灰褐色 外:赤褐色～灰褐色 ～赤	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ2mm)の長石、石英を含む	良	外面:口縁部風化のため不明胴部コナダ 内面:風化のため不明		丹塗り
25	20	弥生土器	焼	③03.0	灰褐色		やや中底	良	内外面ともナダ		
25	21	弥生土器	焼	③07.5	灰褐色		やや中底	良	内外面ともナダ		
25	22	弥生土器	焼	③07.0③23.7	内:灰褐色～緑褐色 外:灰褐色～緑褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底	良	内外面ともナダ、口縁部部にキズあり		丹塗り
25	23	弥生土器	焼	③33.0③4.7	内:褐色 外:緑褐色～褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	底(φ3mm)の長石、角閃石を含む	良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダ 内面:コナダ		
25	24	弥生土器	焼	③23.0③5.8	内:灰褐色 外:灰褐色～灰褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底	良	口縁部はコナダ胴部は内外面ともナダ		
25	25	弥生土器	焼	③04.4③16.3	灰褐色		良	良	外面:タハク袋のヘラミヤシ、口縁部部にキズあり 内面:口縁部タハク袋コナダ		③04.4③16.3③04.4③16.3③04.4③16.3③04.4③16.3
25	26	弥生土器 焼	焼	③22.2③6.5	にがい色褐色		やや良	良	内外面ともコナダ		
25	27	弥生土器	焼	③9.0	内:灰褐色 外:灰褐色～灰褐色 ～黒色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底(φ3mm)の長石、石英、角閃石を含む	良	外面:コナダ口縁部コナダ 内面:コナダコナダ		黒塗り
25	28	弥生土器	焼	③25.4③6.7	内:赤褐色～黒褐色 外:赤褐色、黒褐色、灰褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底(φ3mm)の長石、石英を含む	不良	外面:口縁部コナダ胴部タハク袋コナダ 内面:コナダ		
25	29	弥生土器	焼	③6.2	内:灰褐色 外:灰褐色～明褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底(φ2mm)の長石、石英を含む	良	内外面ともコナダ		
25	30	弥生土器	焼	③00.4③11.2	赤茶、灰褐色		長石、石英を含む	良	外面:タハク袋 内面:コナダ		丹塗り
25	31	弥生土器	焼	③21.6③8.8	内:灰褐色～赤褐色 外:赤褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底	良	外面:タハク袋のヘラミヤシ、口縁部部にキズあり 内面:コナダコナダ一箇横方片のヘラミヤシ		丹塗り
25	32	弥生土器	焼	③05.9③14.5	灰赤、黒		やや中底	良	外面:タハク袋(横方片) 内面:コナダコナダ一箇横方片		丹塗り
25	33	弥生土器	焼	③04.4③10.7	内:黄赤、赤、赤、灰褐色、灰褐色		やや中底	良	外面:横方片コナダコナダ 内面:コナダコナダ一箇横方片		丹塗り
25	34	弥生土器	焼		緑褐色		やや中底	良	外面:コナダ 内面:コナダコナダ一箇所をえりコナダ		
25	35	弥生土器	焼	③23.2③6.3	にがい色褐色		やや中底	良	外面:コナダコナダコナダコナダ 内面:コナダ		
25	36	弥生土器	焼	③03.6③9.8	淡茶		やや中底	良	外面:風化のため不明 内面:コナダ		
25	37	弥生土器	焼	③14.4③8.5	内:灰褐色～緑褐色 外:茶褐色	内:説明彩色 外:説明彩色	やや中底	良	外面:コナダ 内面:コナダ		茶外丹塗り
25	38	弥生土器	焼	③11.9③7.5	灰褐色		やや中底	良	外面:タハク袋のヘラミヤシ内面:コナダ		黒面に赤塗りあり
25	39	弥生土器	焼	③15.5	内:灰褐色、赤褐色、赤褐色 外:赤褐色、黒褐色		やや中底	良	外面:コナダ 内面:コナダ		
25	40	弥生土器	焼	③019.6③7.2	にがい色		やや中底	良	外面:コナダ 内面:コナダ		
25	41	弥生土器	焼	③07.2③9.8	内:灰褐色 外:明褐色		やや中底	良	内外面ともヘラミヤシ		
25	42	弥生土器	焼	③3.2③8.2	内:灰褐色 外:赤褐色 ～灰褐色		やや中底	良	外面:コナダ 内面:コナダコナダ		丹塗り
25	43	弥生土器	焼	③6.4③8.5	赤褐色		底(φ2～3mm)の長石、石英を含む	良	外面:コナダコナダ 内面:風化のため不明		黒面に黒塗りあり
25	44	弥生土器	焼	③07.0③7.0	内:灰褐色 外:灰褐色～赤褐色		底(φ4mm)の長石、石英を含む	良	外面:コナダ 内面:風化のため不明		

27	45	粘土土層	黄	②6.1Q7.4	内:黄褐色 外:淡黄褐色~黒色	中や硬(φ1mmの長石、石英を含む)	中や不良	外層:クマハク産部にスズ付層 内層:風化のため不明	
27	46	粘土土層	黄	②5.0Q6.2	内:黄褐色 外:淡褐色~赤褐色	中や硬(φ4mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	外層:クマハク産部 内層:風化のため不明	
27	47	粘土土層	黄	②6.2Q7.2	内:淡黄褐色 外:淡黄白~灰褐色	中や硬(φ1mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	外層:風化のため不明だが一部クマハクが 内層:風化のため不明だが一部クマハクが	
27	48	粘土土層	黄	②7.2Q6.8	内:黄褐色 外:淡黄褐色	中や硬(φ1~2mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	外層:クマハク 内層:クマハク	
27	49	粘土土層	黄	②6.8Q8.2	内:淡黄褐色 外:暗赤褐色~暗褐色	中や硬(φ4mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	外層:クマハク 内層:風化のため不明	
27	50	粘土土層	黄	②6.6Q7.6	内:褐色 外:淡褐色~淡黄褐色	中や硬(φ2mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	外層:粗いクマハク 内層:クマハク 産部にスズの付着	
28	51	土層	高坪	①G1.0Q2.0	淡黄褐色	中や硬(3mm程度の長石、石英を含む)	良	内外面とも風化のため不明	
28	52	土層	高坪	①29.8Q4.4	淡黄褐色	中や硬(長石を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	53	土層	高坪	①29.0Q4.5	淡褐色	良	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	54	粘土土層	高坪	①27.7	淡黄褐色	中や硬(φ2mm程度の長石、石英、角閃石を含む)	中や不良	外層:風化のため不明 内層:口縁部クマハク産部ヘラミギ	
28	55	粘土土層	高坪	①26.0Q26.5	淡黄褐色 外:淡褐色	中や硬(φ3mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	内外面とも風化のため不明	
28	56	粘土土層	高坪	①21.5	内:淡赤 外:淡赤、赤褐色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:風化のため不明 内層:粒状	丹塗り
28	57	粘土土層	高坪	①20.0	黄褐色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	58	粘土土層	山坪? 高坪?		内:明褐色 外:暗黄褐色~赤褐色	中や硬(φ4mmの長石、石英を含む)	良	内外面ともクマハク	
28	59	粘土土層	高坪?	①28.2Q11.0	淡褐色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	60	粘土土層	高坪	①27.8	内:淡褐色 外:淡褐色、灰褐色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	61	粘土土層	高坪	①13.3Q10.5	内:明褐色~暗褐色 外:暗褐色~灰褐色	中や硬(φ3mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	底部にコゴ?痕あり
28	62	粘土土層	高坪	①9.8Q7.1	淡黄褐色	中や硬(φ2mm程度の長石、石英、金雲母を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	63	粘土土層	高坪	①10.1	淡褐色	中や硬(φ5mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:粗粒状 内層:風化のため不明	
28	64	土層	高坪	①22.8Q17.1	淡褐色	中や硬(φ2mmの石英、長石、雲母を含む)	中や不良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	65	粘土土層	高坪		暗褐色(片)	良	良	内外面ともクマハク	金雲母丹塗り
28	66	粘土土層	高坪		内:明黄褐色 外:明黄褐色	中や硬(φ3mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	67	粘土土層	高坪		内:淡黄褐色 外:赤褐色	中や硬(φ1mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	※外丹丹塗り
28	68	粘土土層	高坪	①12.4Q3.7	淡黄褐色	中や硬(長石、石英、金雲母を含む)	良	外層:口縁部クマハク 内層:口縁部クマハク	
28	69	粘土土層	高坪	①6.7Q26.0	赤褐色	中や硬(φ4mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	70	粘土土層	高坪	①11.6Q29.4	内:黄褐色~淡褐色 外:淡褐色	中や硬(2mmφ石英、長石を含む、外縁に紅土で覆う)	良	外層:クマハク 内層:産部のため不明	
28	71	粘土土層	高坪	①9.8Q28.4 つまみ径6.3	黄褐色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:産部をクマハクが覆う	
28	72	粘土土層	高坪	①19.8	淡黄褐色	中や硬(φ5mm程度の長石、石英を含む)	中や不良	内外面とも風化のため不明	黒塗りの
28	73	粘土土層	高坪	①45.8Q11.3	明赤	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	74	粘土土層	高坪	①43.2Q11.7	内:明赤 外:明赤 ~褐色~灰褐色	中や硬(φ3mm程度の長石、石英を含む)	良	外層:口縁部クマハク 内層:口縁部クマハク	
28	75	粘土土層	高坪	①57.8	内:淡黄褐色 外:明赤	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
28	76	粘土土層	高坪	①18.6	暗赤色	中や硬(長石、石英を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	詳細な大粒に黒の産部(7.432)痕あり
30	1	粘土土層	高坪	①30.4(産部) ②5.7(産部)	内:黄褐色 外:黄褐色	中や良(1~2mmφの長石を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	
30	2	粘土土層	高坪	①32.6(産部) ②19.0(産部)	暗褐色(片縁) 淡黄褐色	中や良(1~2mmφの長石を含む) 表面は粗粒状で覆う	良	外層:クマハク 内層:クマハク	丹塗り
30	3	粘土土層	高坪	①23.8(産部) ②18.8(産部)	暗褐色(片) 淡黄褐色	中や良(1~2mmφの長石、石英を含む) 表面は粗粒状	良	外層:クマハク 内層:クマハク	外層:クマハク 内層:クマハク
33	1	土層	高坪	①25.3Q9.3	淡黄褐色	中や硬(1mmφの白色砂状を含む)	良	外層:クマハク 内層:クマハク	黒塗りの
33	2	土層	高坪		黄褐色	中や硬(粗粒状白色砂状を含む)	良	内外面とも風化のため不明 外層:クマハク 内層:クマハク	

48	7	赤生土層	堆	①26.4②19.3	黄褐色	頁	頁	外:ロコナダ+タケノコ層の頂ナダ 内:ロコナダ+梅押石+後:ロコナダ	高低、浮石あり
48	8	赤生土層	堆	①11.4②33.8	外:黄褐色 内:赤褐色	頁	頁	外:ロコナダ(厚さ不明のため詳細不明) 内:梅押石+ロコナダ	丹塗り
48	9	赤生土層	堆	①11.4②13.9	黄褐色+暗褐色(丹)	頁	頁	外:梅押石+暗褐色のタケノコ層 内:ロコナダ+梅押石	丹塗り
48	10	赤生土層	高坪	①27.0②11.8	黄褐色	頁	頁	外:ロコナダ 内:梅押石+梅押石	丹塗りあり
48	11	赤生土層	高坪	①29.9②8.6	黄褐色	中々頁(2mmφ長石、石英含む)	頁	外:ロコナダ+梅押石+ナメハクナダ 内:花押石	帯状にメス付層(丹塗りなし)
49	12	赤生土層	堆	①11.4②9.7	内:淡黄褐色 外:黄褐色	頁	頁	外:タケノコ(大)ナダ 内:梅押石+ナダ	
49	13	赤生土層	堆	①(厚さ)11.2②7.4	内:淡黄褐色 外:黄褐色	中々頁(1mmφ長石、石英含む)外:梅押石+タケノコ層	頁	外:メタハクナダ(表面はナダ) 内:梅押石+ナダ	赤塗りあり
49	14	赤生土層	堆	①(厚さ)11.8②6.3	赤褐色	頁	頁	外:メタハクナダ 内:梅押石	武部以北丹塗り層
49	15	赤生土層	堆	②9.3③9.0	外:黄褐色 内:黄褐色	中々頁(2mmφ白色砂粒含む) 全体スリツク上	頁	外:メタハクナダ 内:梅押石	原料残
49	16	赤生土層	堆	②6.9③7.1	黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	外:梅押石(タケノコ層の間に埋) 内:梅押石	
49	17	赤生土層	堆	②12.3③10.4	黄褐色	中々頁(1mmφ長石、石英含む) 全体に丁寧なスリツク上	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:梅押石(タケノコ)	原料残
49	18	赤生土層	砂付堆	①18.2②15.9 ③(復元)12.2	黄褐色(丹塗り) 深部(丹塗り)	中々頁(1mmφ長石を含む)	頁	外:ロコナダ+ナメハクナダ+タケノコ層 内:ロコナダ	全層丹塗り (12cmほど)
53	1	土層	高坪	①(厚さ)4.2 ②(復元)22.2	黄褐色		頁	外:工具によるタケノコ層 内:梅押石	
55	1	土層	堆	①25.4②25.2 ③27.2	黄褐色	中々頁(2mmφ石英長石含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ 内:ロコナダ+メタハクナダ+メタハクナダ	
55	2	土層	堆	①16.2②23.0	黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:ロコナダ+メタハクナダ	高低あり
55	3	土層	堆	①18.8②24.4	黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	内:梅押石+ロコナダ	
55	4	土層	高坪	①(厚さ)2.7②(復元)23.0	黄褐色	中々頁(1mm長石、2mm石英含む)	頁	外:梅押石	
55	5	土層	高坪	①(厚さ)2.7②(復元)23.0	黄褐色	中々頁(1mmφ長石、石英含む)	頁	外:梅押石	
55	6	土層	高坪	②13.7③7.6	黄褐色	中々頁(2mmφ石英、7mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	7	土層	高坪	①8.6②5.3	黄褐色	頁	頁	外:ロコナダ+メタハクナダ 内:ロコナダ+梅押石	
55	8	土層	高坪	①(厚さ)18.9 ②(復元)2.0	外:黄褐色 内:黒色	中々頁(1mmφ白色砂粒含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ	高低あり
55	9	土層	高坪	①8.9②26.1	黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:梅押石	
55	10	土層	高坪	①11.6②25.1	黄褐色	中々頁(1mmφ白色砂粒、5mmφの小石含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	11	土層	高坪	①10.9②25.8	黄褐色	中々頁(1mmφ白色砂粒含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	12	土層	高坪	①12.6②8.3	黄褐色	中々頁(3mmφ石英、石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ+梅押石+メタハクナダ	
55	13	土層	高坪	①9.7②(復元)5.6	黄褐色	葉(5mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ+梅押石	高低あり
55	14	土層	高坪	①14.2②4.7	黄褐色	中々頁(2mmφ石英、石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	15	土層	高坪	①14.8②4.8	黄褐色	中々頁	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	16	土層	高坪	①14.1②29.8	黄褐色(丹塗り) 内:黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	高低あり
55	17	土層	高坪	②13.0	外:黄褐色 内:黄褐色	中々頁(薄大粒の砂を含む)	頁	外:メタハクナダ	
55	18	赤生土層	高坪	①13.8②16.1(復元) ③(復元)5.6	外:黄褐色(丹塗り) 内:黄褐色	中々頁(石英、石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ+メタハクナダ+メタハクナダ	丹塗り 口縁部は黄褐色
55	19	赤生土層	高坪	①28.8②4.3	黄褐色	中々頁(2mmφ石英含む)	頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	20	赤生土層	高坪	①23.2②7.3	黄褐色	頁	中々頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ 内:メタハクナダ	一部原料残
55	21	赤生土層	高坪	①25.3②6.7	黄褐色	頁	中々頁	内:梅押石+メタハクナダ	
55	22	赤生土層	高坪	①25.6②6.8	黄褐色	頁	中々頁	外:メタハクナダ+メタハクナダ(厚さ不明のため詳細不明) 内:メタハクナダ	丹塗り
55	23	赤生土層	高坪	②6.4	黄褐色	中々頁(1mmφ石英、石英含む)	頁	内:梅押石+メタハクナダ	
55	24	赤生土層	高坪	①(厚さ)7.8②(復元)2.0	黄褐色(一部原料残) 内:黄褐色	中々頁	頁	外:メタハクナダ 内:メタハクナダ+メタハクナダ	原料残
55	25	赤生土層	高坪	①28.1②9.3	黄褐色	中々頁(1mmφ石英含む)	頁	内:梅押石+メタハクナダ	口縁部は丹塗り+口縁部から下は丹塗り
55	26	赤生土層	高坪	①(厚さ)10.8②(復元)3.4 ③(復元)3.7	黄褐色	頁	中々頁	外:メタハクナダ 内:メタハクナダ	
55	27	赤生土層	高坪	①(厚さ)13.4 ②(復元)3.7	黄褐色	頁	中々頁	内:梅押石+メタハクナダ	丹塗り

50	10	養生土留	変	②5.9②6.8	鉄黄褐色	やや良(1mmφ 石英含む)	良	外面:タテハケ 内面:ナデ	丹持岩
50	11	養生土留	変	②4.3②7.4	内:明褐色 外:明褐色	良	やや悪	外面:タテハケ 内面:ナデ	外一内の骨孔あり
50	12	養生土留	高坪	①27.0②31.5	暗褐色	やや並(1mmφ 石英、長石含む)	やや悪	外面:厚膜、砂礫により不明 内面:コナデ	全面に丹持り
50	13	養生土留	高坪	①13.5 ②6.0②34.8	内:鉄褐色 外:鉄褐色	やや良(1mmφ 石英、長石含む)	やや悪	外面:ナデ+フメ+細砂またはハケ 内面:ナデ+粗骨	丹持り
66	1	補石壁	小積	①(積元)16.0②7.3 ③(積元)8.4	内:灰褐色 外:灰褐色	—	—	外面:丁馬(とじとケツ) 内面:コナデ	スス付着
66	2	土留壁	直	①3.6②1.4③6.4	内:鉄褐色 外:灰褐色	やや並(白色砂粒、金雲母を含む)	良	内外面ともナデ	
66	3	土留壁	直	①10.3②2.1	内:灰、黒灰、鉄褐色 外:黒灰、鉄褐色	やや中(白色砂粒、金雲母を含む)	小良	内外面ともナデ	
66	4	土留壁	直	①11.0②1.4	鉄褐色	やや並(白色砂粒、金雲母を含む)	良	内外面ともナデ	
68	1	土留壁	並	①26.0②3.6	鉄黄褐色	やや並(3mmφ 長石含む)	良	外面:コナデ後ナデ 内面:コナデ後ナデ	
68	2	土留壁	並	①12.1②14.6	鉄褐色	やや並(2mmφ 石英、長石、3mmφ 石英含む)	良	外面:コナデ+タテハケ 内面:ナデ+タテハケ	
68	3	土留壁	前	①16.0②6.1	鉄灰色、鉄褐色	やや並(2mmφ の白色砂粒、金雲母を含む)	良	外面:コナデ+タテハケ後ナデ 内面:粗骨3mmφ	へツ取等あり(底面)
68	4	土留壁	前	①10.6②4.1	灰褐色	良	非常な 良	外面:コナデ+タテハケまたはハケ 内面:コナデ+粗ナデナデ上げ	
68	5	土留壁	前	①12.7②6.1	鉄褐色	良	やや悪	外面:ナデ+ハケ+タテハケ 内面:後ナデ	外一内の骨孔あり
74	1	養生土留	変	①22.8②6.8	鉄黄褐色	やや良(1mmφ 石英、石英含む)	良	外面:コナデ+タテハケ 内面:コナデ+ナデナデ上げ	
74	2	養生土留	並	①16.0②8.1	に5%程度黄土色に 内側を細く丹持り	やや並(2mmφ の白色砂粒を含む)	良	外面:丹持りに細くハケ 内面:ナデ	骨孔あり 丹持り
76	1	養生土留	直	①26.8②6.0	明褐色	良(石英、長石を含む)	良	外面:コナデ 内面:コナデ+タテハケ後ナデ	
76	2	養生土留	変	①27.0②2.8	内:明褐色～明褐色 外:鉄褐色	良(細砂粒を少量含む)	良	内外面ともナデ	
76	3	養生土留	広口積	①24.8②4.0	暗褐色	やや良(石英、長石を中々多く含む)	良	内外面ともナデ	丹持り
76	4	養生土留	壁	②3.9	明褐色	良(石英を含む)	良	内外面ともナデ	
76	5	養生土留	変	②6.0	内:明褐色 外:明褐色～明褐色	並(石英、長石を多く含む)	良	内外面ともナデ	
76	6	養生土留	高坪	①38.0②6.0	緑黄褐色(丹持り、 砂赤褐色)	良(石英、長石を含む)	良	内外面ともナデ	丹持り
76	7	養生土留	高坪	①25.0②1.8	内:赤褐色～明褐色 外:明褐色	良(石英を少量含む)	良	外面:コナデ+コナデ後タテハケ 内面:コナデ後ナデ+コナデ	丹持り
76	8	養生土留	狭口積	①10.4②6.2	内:鉄褐色 外:明褐色	良(石英、長石を含む)	良	外面:コナデ 内面:ナデ	丹持り
76	9	養生土留	狭口積	①6.6②11.2	内:鉄褐色 外:赤褐色～褐色	良(石英、長石を多く含む)	良	外面:コナデ+コナデ後ナデ 内面:粗骨3mmφ	丹持り
76	10	養生土留	斜	①6.6②14.0	内:鉄褐色 外:赤褐色	良(石英、長石を含む)	良	外面:ナデ+コナデ 内面:ナデ	丹持り
76	11	養生土留	斜	①14.8②4.8	内:明褐色 外:暗褐色、 丹持り、暗赤色	良(石英、長石を含む)	良	外面:ナデ+タテハケ(集化のため不明瞭) 内面:コナデ後ナデ	丹持り
78	1	養生土留	変	②6.8	茶褐色～明褐色	やや良(石英、長石を多く含む)	良	外面:タテハケ後ナデ 内面:後ナデ後ナデ	
78	2	養生土留	変	②6.1	内:明褐色 外:明褐色～黒色	良(石英、長石を含む)	良	内外面ともナデ	外面にスス付着
78	3	養生土留	変	②3.4	明褐色	良(礫石、石英を含む)	良	口縁部コナデ 断面の内外面ともナデ	
78	4	養生土留	変	①26.7②4.4	内:黄褐色 外:赤褐色	やや良(石英、長石を多く含む)	やや悪	外面:タテハケ+フメ+粗砂ハケ後コナデ 内面:ナデ	
78	5	養生土留	変	①6.5②7.0	内:明褐色 外:赤褐色	良(石英、長石を含む)	良	外面:ナデ+粗骨3mmφ、粗砂ナデ 内面:粗ナデ後ナデ+粗骨3mmφ	丹持り
78	6	養生土留	変	①7.2②6.6	内:鉄褐色 外:明褐色	やや良(石英、長石を多く含む)	良	外面:タテハケ後ナデ 内面:ナデ+粗骨3mmφ	
79	1	養生土留	変	②4.7	内:鉄褐色 外:鉄赤褐色	並(1mmφ の石英、石英、金雲母の細粒を含む)	良	外面:コナデ+ナデ 内面:ナデ	
79	2	土留壁	高坪付 側	②3.8	明褐色	並(2mmφ の長石、石英、金雲母の細粒を含む)	良	内外面とも粗コナデ	丹持り
79	3	養生土留	壁	①9.3②6.3	鉄赤褐色	並(1~2mmφ 石英、石英、金雲母の細粒を含む)	良	外面:コナデ+ナデ(底面) 内面:ナデ	
82		養生土留	斜	①16.4②7.0 ③6.0	に5%石褐色	並(1mmφ の白色砂粒を含む)	良	外面:コナデ+タテハケ+タテハケナデ(底面) 内面:コナデ+タテハケ+タテハケナデ+粗骨3mmφ	丹持り
94	1	養生土留	直	①(積元)22.8	鉄褐色	並	—	外面:コナデ+タテハケ 内面:コナデ+コナデ	
94	2	養生土留	直	①(積元)22.2	褐色	並(1mmφ の白色砂粒を含む)	良	外面:コナデ+タテハケ 内面:コナデ+コナデ	

126	1	赤生土層	広口皿	①(復元)~75.6	黄褐色	並(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデキタナデ 内周:ロコナデ	
126	2	赤生土層	広口皿	①(復元)~67.6	灰茶褐色	良	良	外周:ロコナデキタナデ 内周:ロコナデ	ロ線輪郭にT.属に よるキズ
126	3	赤生土層	皿	②16.5	内:黄褐色 外:黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナデ	
126	4	赤生土層	皿	②10.5	灰褐色	並	良	外周:ナデキタナデ 内周:ナデ	
126	5	赤生土層	皿	②15.2	黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ナデ 内周:ロコナデ	
126	6	赤生土層	皿	②7.5	黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:タテハナデ 内周:ロコナデ	
126	7	赤生土層	高坪		内:黄褐色 外:赤褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデキタナデ 内周:ロコナデ	外周:ロコナデキタナデ 内周:ロコナデ
126	8	赤生土層	皿	①(推定)24.2	黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ロコナデ	
126	9	赤生土層	皿	①(推定)25.2	黄褐色	並(3mmφの白色砂粒、5mm角の石灰を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	
126	10	赤生土層	皿		灰褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着
126	11	赤生土層	皿	②8.4	にがい黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	穿孔あり
126	12	赤生土層	皿	②9.6	黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	穿孔あり
126	13	赤生土層	皿	②13.2	明黄褐色	並(~2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	
126	14	赤生土層	皿	②5.2(最大)13.8	赤褐色	並(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:タテハナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着 底面打ち欠き
126	15	赤生土層	皿	①(復元)10.05 ①(最大)13.0 ①(最大)7.9	灰褐色	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着	
126	16	赤生土層	高坪	②19.0	黄褐色	やや中(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:タテハナデ 内周:ナメキタナデ	
127	1	赤生土層	皿	①10.0②1.9 ②14.5(最大)	灰褐色	良	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	顔料付着
130	1	赤生土層	高坪	②18.0②17.8	茶	内(灰石、石灰を含む)	良	外周:タテハナデ 内周:ナメキタナデ	丹塗り
131	1	赤生土層	高坪	①32.4	赤褐色	並(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	丹塗り
131	2	赤生土層	高坪	②12.2(最大)	黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:タテハナデ 内周:ナメキタナデ	
131	3	赤生土層	高坪	②18.0	並(2mmφの白色砂粒を含む)	良	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着
131	4	赤生土層	皿		黄~茶褐色	並(白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	
131	5	赤生土層	皿		黄褐色	並(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:不明確、突部部分はロコナデ 内周:ナメキタナデ	
131	6	赤生土層	皿	①12.3②16.0 ②6.8	黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	底面打ち欠き
131	7	赤生土層	皿	②9.5(最大)②9.9 ②22.4(最大)	内:赤褐色 外:暗褐色	やや中(石灰、石灰を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	丹塗り 底面打ち欠き(最大)
131	8	赤生土層	皿	②7.0②16.4②3.8 ②14.6(最大)	にがい黄褐色	やや中(2mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	
131	9	赤生土層	煎茶皿	①11.0②13.4②3.8	内:赤褐色 外:黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	丹塗り 打ち欠き(底面)
131	10	赤生土層	皿	②6.0②17.3②6.8	黄褐色	やや中(砂粒と燐を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着 底面打ち欠き
131	11	赤生土層	高坪	②22.2	黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	底面あり
131	12	赤生土層	鉢	①10.8②9.3	黄褐色	やや中(黄褐色白色砂粒を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ロコナデ	底面あり
131	13	赤生土層	皿	①(復元)17.0②4.0	赤茶褐色	砂(1mmφ以下の石灰、石灰、金燐の燐を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	底面打ち欠き
131	14	赤生土層	高坪	①16.1	黄褐色	やや中(1mmφの白色砂粒と燐を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	底面あり
131	15	赤生土層	皿	②35.2②6.2	明黄褐色	良(石灰、石灰を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	
131	16	赤生土層	皿	①12.0②2.8	内:暗赤褐色 外:暗褐色	やや中(石灰、石灰を含む)	良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	丹塗り
131	17	赤生土層	皿	①10.6			良	外周:ロコナデ 内周:ナメキタナデ	
131	18	赤生土層	皿	②8.0(最大)	内:灰褐色 外:黄褐色	良	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	赤色顔料付着 (同一個体?)
131	19	赤生土層	皿	②9.0②3.0	内:暗褐色 外:暗褐色	やや中(石灰、石灰を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	
131	20	赤生土層	皿	②12.5	赤褐色	良(石灰、石灰を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	
131	21	赤生土層	皿	②11.9②9.6	内:暗褐色 外:暗褐色	良(φ1mm以下の燐砂を含む)	良	外周:ナメキタナデ 内周:ナメキタナデ	

138	1	養生土留	広口蓋	①24.0(標準)	ぶい黄褐色	並(1mmφの白色砂粒含む)	良	外周:コナダ+ナメダのハク 内周:コナダ+ナメダのハク	
138	2	養生土留	高环	①32.6(規定)	茶褐色	やや並(2mmφの石英、長石を含む)	良	口縁上:コナダ+コナダ 外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	丹塗り
138	3	養生土留	高环	①28.8	茶褐色	やや並(1~2mmφの白色砂粒含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	丹塗り(内外面)
138	4	養生土留	高环	①11.2(ほぼ全周)	茶褐色	やや並(1~2mmφの白色砂粒含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	丹塗り(内外面)
138	5	養生土留	高环	①27.4(標準) ②14.0(標準)	灰青色	良	概	外周:全体をタテダ+コナダ 内周:(環部)コナダ、脚部(環ナダ)	脚部3方にスパン
138	6	脚部(環部)	環		灰白			外周:純粋(灰白) 内周:純粋(はたけ)	
140	1	土留部	高环	①17.9(標準)②6.5(標準)④4.9	淡赤褐色	並(1mmφの長石、2~4mmφの石英、金雲母の細粒を含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ後ナダ	
140	2	土留部	高环	①(標準)5.2	外:淡赤褐色 内:淡黄褐色	やや並(2mmφの長石、石英、金雲母の細粒を含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
140	3	土留部	高环	①(標準)7.1	淡赤褐色	並(1mmφの長石、金雲母の細粒を含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
140	4	土留部	高环	①2.5②4.0③6.5	外:黄褐色 内:淡赤褐色	やや並(1mmφの長石、金雲母、細赤色を含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
140	5	土留部	高环	①(標準)10.0②0.9 ③(標準)7.1	黄褐色	やや並(1mmφの長石、石英、金雲母の細粒を含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ	
140	6	環部	高环	①(標準)1.4 ②(標準)6.2	外:淡褐色 内:灰褐色	やや並(1mmφの長石、金雲母の細粒を含む)	良	外周:同部コナダ+コナダ 内周:コナダ	底面にヘリ記号
141	1	土留部	小皿	①8.4(標準)②0.6 ③(標準)7.2(標準)	淡黄褐色	並(長石、石英含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	2	土留部	小皿	①8.8(標準)②1.7 ③6.8(標準)	淡黄褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	3	土留部	小皿	①9.1②7.0③6.9	淡黄褐色	並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	4	土留部	小皿	①9.2(標準)②1.4 ③7.8	淡赤褐色	並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	5	土留部	小皿	①1.5(標準)②6.4	外:茶褐色 内:淡赤褐色	並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	6	土留部	小皿	①9.4(標準)②1.9 ③6.8(標準)	淡赤褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	7	土留部	皿	①1.9②6.9(標準)	淡赤褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	8	土留部	皿	①16.6(標準)②2.7 ③6.6(標準)	淡赤褐色	並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	
141	9	土留部	皿	①11.5(標準)②0.8 ③7.4(標準)	淡赤褐色	並(長石、金雲母含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ	
141	10	白磁	高环	①4.3(標準) ②8.2(標準)	淡灰白色	やや並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	他の土留を重ねた 残りが若干ある
141	11	土留部	高环	①7.5(標準) ②11.8(標準)	淡黄褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ 内周:コナダ	
141	12	土留部	高环	①9.3(標準)	外:黒色 内:淡黄褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ	外周金網にスパン付 内周:コナダ
141	13	土留部	高环	①9.7(標準)	茶褐色 外周:淡赤褐色 内周:淡赤褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
141	14	土留部	高环	①30.6(標準)②11.0 ③14.0(標準)	白みを帯びた淡黄色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
141	15	土留部	高环	①33.0(標準) ②9.1(標準)	白みを帯びた淡黄色	やや並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
141	9	土留部	高环	①11.5(標準)②2.8 ③7.4(標準)	淡赤褐色	並(長石、金雲母含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ	
141	10	白磁	高环	①4.3(標準) ②8.2(標準)	淡灰白色	やや並(長石、金雲母含む)	良	内外面とも同部コナダ 底面は赤切りコナダ	他の土留を重ねた 残りが若干ある
141	11	土留部	高环	①7.5(標準) ②11.8(標準)	淡黄褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ 内周:コナダ	
141	12	土留部	高环	①9.3(標準)	外:黒色 内:淡黄褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:同部コナダ 内周:同部コナダ	外周金網にスパン付 内周:コナダ
141	13	土留部	高环	①9.7(標準)	茶褐色 外周:淡赤褐色 内周:淡赤褐色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
141	14	土留部	高环	①30.6(標準)②11.0 ③14.0(標準)	白みを帯びた淡黄色	並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	
141	15	土留部	高环	①33.0(標準) ②9.1(標準)	白みを帯びた淡黄色	やや並(長石、石英、金雲母含む)	良	外周:コナダ+コナダ 内周:コナダ	

9	上	大 形 林	器高	52.4	粘土	1mm大の長石、石膏、金雲母の副産物を多量に含む。	白磁地は磁器、その下にやや硬質の灰色砂の一次焼成層を有する。表面は、肌面を覆うへんを含有する砂の層が厚く、その下の層は赤い。ナマメ。内面は口縁部付近までナマメ、口縁上段へまで赤いナマメ、底面ナマメを被る。
			口縁外径(直径)	79.8	色調	暗褐色	
	胴径大径	—	構成	—	—		
	底径	19.4	焼成	焼成	—		
下	壺	器高	118.9	粘土	~2mm大の長石、石英及び金雲母の副産物を少量含む 内外ともに暗赤褐色	黒褐色土質の土質に、白粉外層(厚さ)2mm以内、肌面中央には0.5mm以内の長石、金雲母、石膏、黄鉄石、赤銅、鉄屑、銅屑、口縁上段へまで1~3mm厚の赤銅が1~3mm厚の土質、黄銅は外層とナマメ、口縁部、尖部には赤銅ナマメ、黄銅は肌面を中心に分布。器上段へまで1mm以内の長石、金雲母、石膏、黄鉄石は、内外ともに暗褐色土質。内面のナマメはナマメが多量に、外層には少量を含有する。	
		口縁外径(直径)	77.8	色調	—	—	
胴径大径(直径+黄銅厚)	73.4	構成	—	—			
底径	19.4	焼成	焼成	—			
10	上	林	器高(焼成)	32.2	粘土	—	水平に置いた平部白磁地を伴った中で、口縁下位に、一次焼成層を有する。器高調整は共にナマメ調整。
			口縁外径	59.8	色調	外側: 赤褐色~赤褐色 内側: 暗褐色~赤褐色	
	胴径大径	—	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	大 形 壺	器高(焼成)	73.6	粘土	~1mm大の長石を多量に含む。1~3mm大の石英、金雲母の副産物を少量含む。1~3mm大の赤石をわずかに含む。	黒褐色土質の土質に、肌面中央に0.5mmの暗褐色土質の土質、器高の厚さは1~3mm、器高は肌面とナマメに調整して、口縁下位にかけて黄銅ナマメが多く残る。一次焼成層。	
		口縁外径	69.3	色調	—	—	
胴径大径	69.6	構成	—	—			
底径	—	焼成	焼成	—			
			底径欠欠	—	—	—	

③三雲ヤリミノ428、429番地第2地点

番号	器種	法量(cm)	粘土	色調・構成・残存	特徴	分類	
1	上	大 形 壺	器高(焼成)	39.0	粘土	赤黄、長石や黄銅含む 暗褐色	外側: ナマメ土質ナマメ土質に白磁地を大径に2本の白形焼成層を2重に被る。肌面中央に: コロナデ、円孔大きに伴う副産物あり。
			口縁外径	67.8	色調	—	
	胴径大径	—	構成	—	—		
	底径	11.3	焼成	焼成	—		
下	壺	器高	118.9	粘土	1~2mm大の長石、金雲母の副産物を多く含む。	外側: ナマメ 口縁下に1mmの三角尖角、胴中央に2本の白形焼成層、胴中央付近に: 細片焼成層。内面: 赤ナマメ	
		口縁外径(直径)	70.2	色調	—		
胴径大径(直径+黄銅厚)	70.2	構成	—	—			
底径	13.0	焼成	焼成	—			
2	上	壺	器高(焼成)	5.0	粘土	~1mm大の長石をわずかに含むが、厚いスリッパ状の暗褐色(片)	内外面: コロナデー月節
			口縁	31.7	色調	—	
	胴径大径	—	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	壺	器高	18.1	粘土	~1mm大の石英、長石をわずかに含むが、表面は丁字型のスリッパで仕上げ。	外側: ナマメ土質ナマメ土質にナマメ土質、輪縁のみあり。	
		口縁	40.4	色調	—		
胴径大径	41.0	構成	—	—			
底径	10.1	焼成	焼成	—			
3	上	壺	器高(焼成)	18.9	粘土	~1mm大の石英、長石を多く含む。	外側: ナマメ土質コロナデ土質にナマメ
			口縁	30.0	色調	外側: 暗褐色 内側: 灰褐色	
	胴径大径	29.5	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	壺	器高(焼成)	37.9	粘土	1~2mm大の長石、石英を多く含むが、表面は1mm以内のスリッパ仕上げ。	外側: ナマメ土質土質に: 底縁近くは暗褐色	
		口縁(直径1/2程度)	31.8	色調	—		
胴径大径	31.9	構成	—	—			
底径	—	焼成	焼成	—			

④三雲ヤリミノ434番地第3地点

番号	器種	法量(cm)	粘土	色調・構成・残存	特徴	分類	
4	上	高 杯	器高(焼成)	16.9	粘土	暗褐色 外側: 灰褐色 内側: 赤褐色(片焼け)	外側: ナマメ、器高はナマメ土質に: ナマメ土質を伴う。輪縁には赤褐色
			口縁	32.8	色調	—	
	胴径大径	—	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	壺	器高	54.9	粘土	暗褐色	外側: ナマメ土質コロナデ土質に: コロナデ、肌面中央には工具によるナマメ土質ナマメ土質、口縁はコロナデ、肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。片焼けあり。	
		口縁	41.1	色調	暗褐色		
胴径大径	43.4	構成	—	—			
底径	10.4	焼成	焼成	—			

⑤井原ヤリミノ2582、2583番地

番号	器種	法量(cm)	粘土	色調・構成・残存	特徴	分類	
1	下	壺	器高	48.3	粘土	やや灰(φ 1mm)の長石、石英を多く含む。	胴上段に最大径あり、中央には1本の白形焼成層。肌面には「逆丁」角の磨りならした。外側は中央部に灰褐色が厚く、外側が厚く、外側が厚く、内面は肌面まで磨りならした。胴上段に肌成焼成層がある。
			口縁外径	58.0	色調	暗褐色	
	胴径大径	48.6	構成	—	—		
	底径	9.0	焼成	焼成	—		
下	壺	器高(焼成)	56.7	粘土	黄(φ 1mm程度)の長石、カクソ石を多く含む。	胴上と胴部の間に白形焼成層を2層持つ。胴中央よりやや下あたりに2重に0.5mmの白形焼成層を持つ。外側はナマメ土質、内面は口縁へ肌面まで調整してナマメ土質。	
		口縁(直径)	55.2	色調	暗褐色		
口縁外径(直径)	55.2	構成	—	—			
底径	8.6	焼成	焼成	—			
2	下	壺	器高	87.0	粘土	暗褐色	外側: 全面に磨きナマメ土質を施し、口縁部にはナマメ土質あり。肌面と肌面共に白形焼成層を持つ。内面は工具によるナマメ土質、口縁はコロナデを有する。
			口縁	33.2	色調	—	
	胴径大径	94.1	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	壺	器高(筋のみあり)	41.3	粘土	1~2mm大の長石、石英をわずかに含む。表面はスリッパに仕上げた。暗褐色	外側: 下半に磨きナマメ土質、上半にはナマメ土質ナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面中央にはナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。	
		口縁	28.1	色調	暗褐色		
胴径大径	29.2	構成	—	—			
底径	—	焼成	焼成	—			
4	下	壺	器高(焼成)	38.3	粘土	暗褐色。~1mm大の長石や黄銅をわずかに含む。	外側: 下半はナマメ土質、上半はナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。
			口縁	14.6	色調	暗褐色	
	胴径大径(実高)	27.6	構成	—	—		
	底径	—	焼成	焼成	—		
下	壺	器高(焼成)	33.0	粘土	1.5cm大の石英や黄銅の石が少量混入。表面はスリッパで丁字型仕上げ。	外側: ナマメ土質ナマメ土質に: ナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。肌面は外側、外側中央にナマメ土質に調整してナマメ土質。	
		口縁外径	40.0	色調	暗褐色		
胴径大径	40.0	構成	—	—			
底径	8.6	焼成	焼成	—			

番号	器種	注量 (cm)	胎土・色調・痕成・残存	特徴	分類
6	下 皿	胎高(残存)	45.2	胎成、わずかに $\sim 1.2\text{mm}$ の石を含む 赤褐色 やや軟	外面: 腹下平でタテハ、中 \sim 上平腹いワテハののちナメムク。内面: 丁寧なコナダ。腹筋の一部にコナダが残る。胴中位や中下に1条の台形突起あり。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	41.5		
7	下 皿	胎高(残存)	39.1	胎成 暗褐色 良	外面: ナダ、一部タテハが残。内面: 腹ナダ、細く見られる。底筋に外一帯の穿孔。胴最大径に1条の台形突起あり。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	35.8		
8	下 皿	胎高(残存)	39.0	胎成 赤褐色 良	基本的に内外ともにきれいにナダ滑す。胎筋付近のみナダ目を残す。胴の腹からわずかに下がった部分に2つの平形突起。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	46.2		
10	上 皿	胎高(残存)	55.3	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	—		
10	下 皿	胎高(残存)	33.4	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	—		
11	下 皿	胎高(残存)	33.1	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径(両者含む)	28.4		
12	上 皿	胎高(残存)	55.3	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	—		
12	下 皿	胎高(残存)	33.4	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	—		
13	下 皿	胎高(残存)	35.0	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径	—		
14	下 皿	胎高(残存)	35.0	胎成 赤褐色 良	胴筋に1条の台形突起があるが弱んでいる。胎筋は内外面ナダで突起部付近はコナダ。突起内側はやや段差する。
		口縁外径	—		
		胴筋最大径(復元)	41.6		



写真01：7号木棺墓 淡青色小玉
気泡が非常に多く濁って見える



写真02：7号木棺墓 淡青色小玉
鉄片が噛み込んでいる

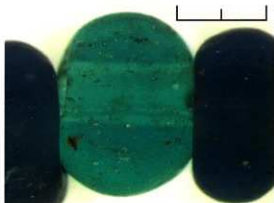


写真03：12号木棺墓 淡青色小玉
鮮やかな色調で気泡が少ない

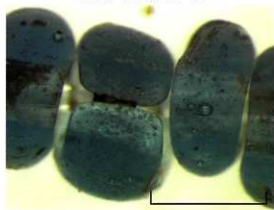


写真04：13号壺棺墓 青紺色小玉
隙の一部が切れているが気泡は整列している



写真05：7号木棺墓 青紺色小玉
破断面の丸みが個体によって大きく異なる



写真06：12号木棺墓 青紺色小玉
微妙な色調や気泡の量が個体によって異なる

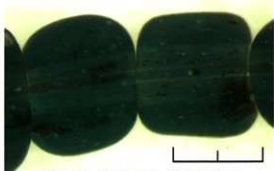


写真07：2号木棺墓 青緑色小玉
気泡が整列している



写真08：6号木棺墓 極淡青色小玉
気泡は少ないが整列している



写真09：13号壺棺墓 青紺色管玉
引き延ばし痕跡の筋が多数はいる



写真10：13号壺棺墓 青紺色管玉
小口面の状況

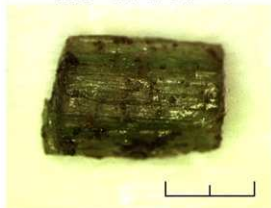


写真11：3号土壙墓 淡青?色管玉
引き延ばしによる筋が見られる

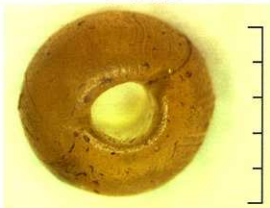


写真12：13号壺棺墓 黄色小玉
螺旋状の蝕像が観察できる



写真13：13号壺棺墓 連玉
風化により乳白色に変色している



写真14：13号壺棺墓 連玉
孔の内面に漆が見られる

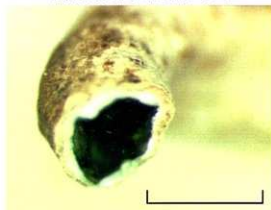


写真15：13号壺棺墓 連玉破片
破断面に本来の色調が残る



写真16：13号壺棺墓 連玉破片
同左



井原ヤリミゾ 2582・2583 番地全景（南から）

図版4



4-1 1号木棺墓周辺遺構（真上から）



4-2 3～5号祭祀土坑周辺遺構（真上から）



4-3 1号祭祀土坑周辺遺構（真上から）



4-4 6号木棺墓（西から）



4-5 7号木棺墓（北から）



5-1 1号木棺墓棺内朱堆積状況(南から)



5-2 1号木棺墓内行花纹鏡出土状況(西から)



5-3 6号木棺墓方規矩鏡出土状況(西から)



5-4 7号木棺墓内行花纹鏡出土状況(東から)



5-5 12号喪棺墓玉類出土状況(真上から)



5-6 13号喪棺墓玉類出土状況①(真上から)



5-7 13号喪棺墓玉類出土状況②(真上から)



5-8 2号祭祀土坑土層(東から)

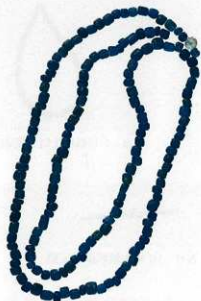


6号木棺墓出土方格規矩四神鏡

鏡面



鏡背



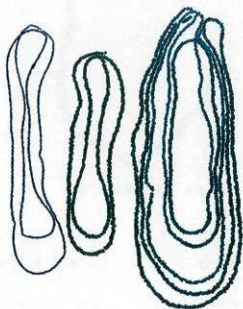
7-1 6号木棺墓出土玉類



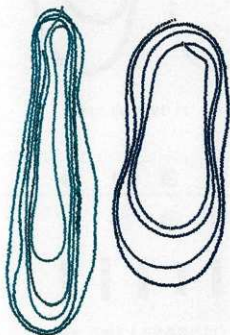
7-2 1号木棺墓出土内行花纹鏡



7-3 7号木棺墓出土内行花纹鏡



7-4 7号木棺墓出土玉類



7-5 2号木棺墓出土玉類



7-6 4号木棺墓出土玉類

図版8



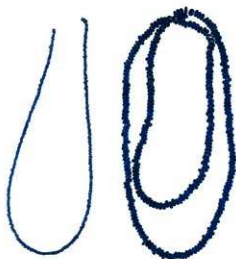
8-1 5号木棺墓出土銅鏝



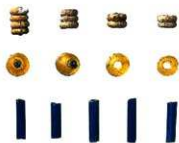
8-2 12号木棺墓出土玉類



8-3 1号祭祀土坑大型甬出土玉類



8-4 13号喪棺墓出土玉類①



8-5 13号喪棺墓出土玉類② ※ほぼ原寸



8-6 10号木棺墓出土玉類



8-7 12号喪棺墓出土玉類



8-8 1号土塚墓出土玉類



8-11 2号喪棺墓出土破鏡

三雲下西 526-1 番地



8-9 3号祭祀土坑出土玉類



8-10 3号土坑出土玉類

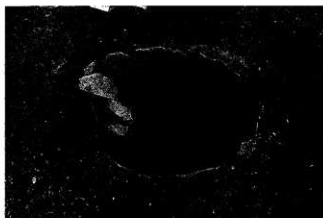
井原ヤリミノ 2582、2583 番地



9-1 三雲下西 526-1 番地全景（北から）



9-2 1・2号塚墓（南から）



9-3 1号塚墓（北から）



9-4 破綻出土状況（北から）



9-5 落込み（南西から）



9-6 三雲下西 533 番地全景（南から）

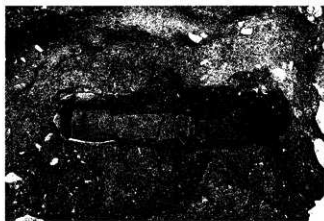


9-7 三雲下西 533 番地全景（西から）



9-8 1号塚墓上壁（東から）

図版10



10-1 褒棺転用土城墓（東から）



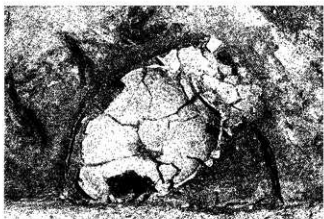
10-2 2・3号褒棺墓（西から）



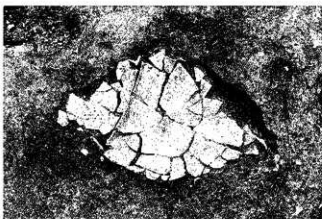
10-3 4号褒棺墓（東から）



10-4 5号褒棺墓（南から）



10-5 6号褒棺墓（東から）



10-6 7号褒棺墓（南から）



10-7 8号褒棺墓（南東から）



10-8 石支山土状況（東から）



11-1 9号塚(北から)



11-2 10号塚(南から)



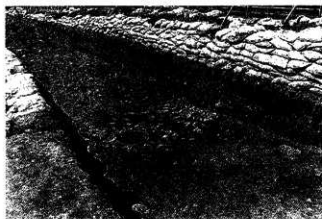
11-3 三雲下西 533 番地市道確認調査地点全景(南から)



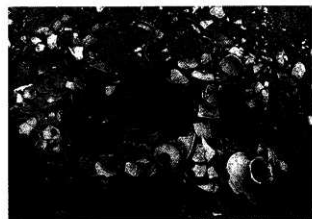
11-4 三雲中川屋敷 478-1, 479-1, 537-2 番地全景(北から)



11-5 三雲中川屋敷 478-1, 479-1, 537-2 番地全景(南から)



11-6 土器溜り(南から)

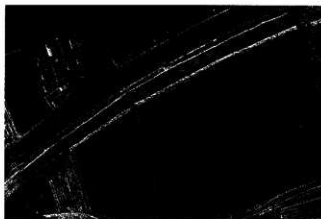


11-7 土器溜り(東から)



11-8 SD10・13(北から)

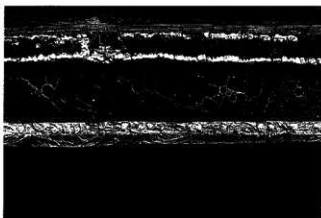
三雲下西 533 番地②及び中川屋敷 478-1, 479-1, 537-2 番地



12-1 三雲中川屋敷 480-1 番地全景 (真上から)



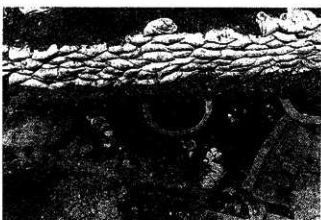
12-2 住居群北 (真上から)



12-3 住居群南 (真上から)



12-4 3号住居跡 (東から)



12-5 4号住居跡 (西から)



12-6 5号住居跡 (北から)



12-7 8号住居跡 (西から)



12-8 10号住居跡 (北東から)



13-1 三雲中川屋敷 471、482-1 番地上層全景 (北から)



13-2 SB01・02 (南から)



13-3 SB03 (南から)



13-4 1号住居跡 (北から)



13-5 2号住居跡 (東から)



13-6 3号住居跡 (南から)

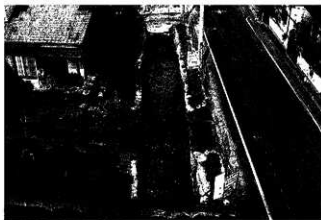


13-7 4号住居跡 (北から)



13-8 掘立柱建物 (北から)

図版14



14-1 三雲ヤリミゾ426番地全景(南から)



14-2 祭祀土坑(東から)



14-3 祭祀土坑出土土器近景(北東から)



14-4 三雲ヤリミゾ428、429番地全景(真上から)



14-5 第1地点近景(真上から)



14-6 第2地点全景(北から)



14-7 第1地点土器掘り遺物出土状況(南から)



14-8 第1地点鉄刀出土状況(南から)



15-1 第1地点祭祀滑遺物出土状況(東から)



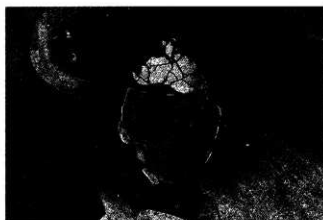
15-2 第2地点1~3号塚柏墓(真上から)



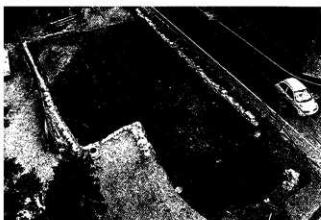
15-3 1号塚柏墓(南東から)



15-4 2号塚柏墓(南東から)



15-5 3号塚柏墓(東から)



15-6 三雲ヤリミゾ434番地(第3地点)全景(南西から)



15-7 SB 01(北から)

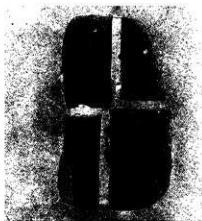


15-8 1号住居跡(南から)

図版16



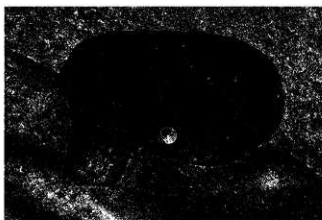
16-1 1号土坑(南から)



16-2 1号土坑墓(東から)



16-3 4号塚柏墓(南から)



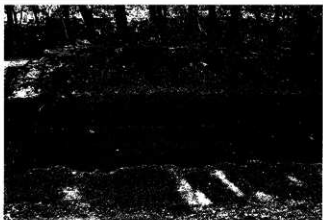
16-4 2号土坑(南から)



16-5 SD01 (V字溝)(南東から)



16-6 三雲ヤリミゾ434番地第4地点全景(南西から)



16-7 北壁土層(北から)

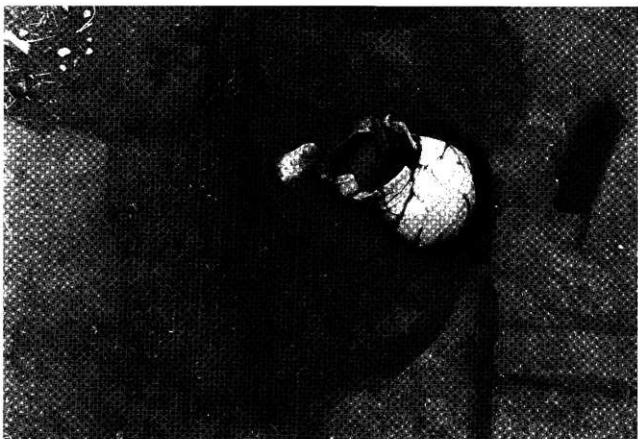


16-8 1号土坑(西から)

三雲ヤリミゾ434番地(第3地点)②及び434番地(第4地点)



17-1 1号塚棺墓（西から）



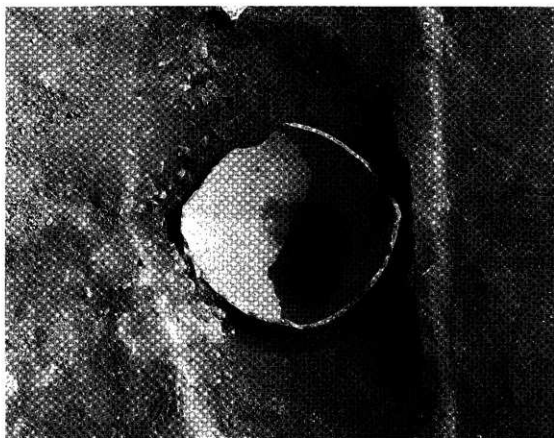
17-2 2号塚棺墓（南から）



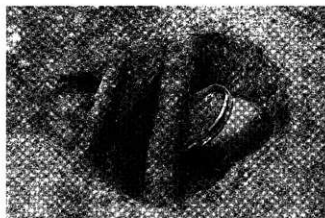
18-1 8号表棺墓（西から）



18-2 12号表棺墓（西から）



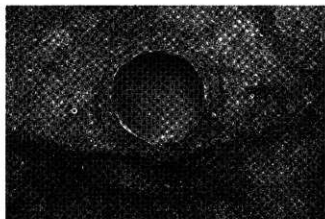
19-1 13号裏棺墓（北から）



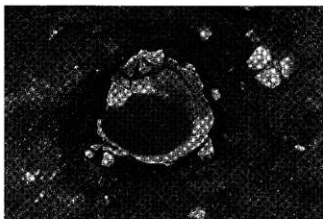
19-2 3号裏棺墓（南から）



19-3 4号裏棺墓（西から）

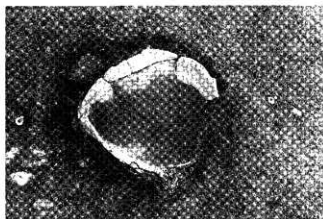


19-4 5号裏棺墓（西から）



19-5 6号裏棺墓（西から）

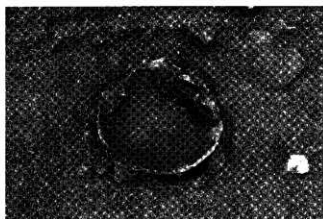
図版20



20-1 7号喪棺墓（西から）



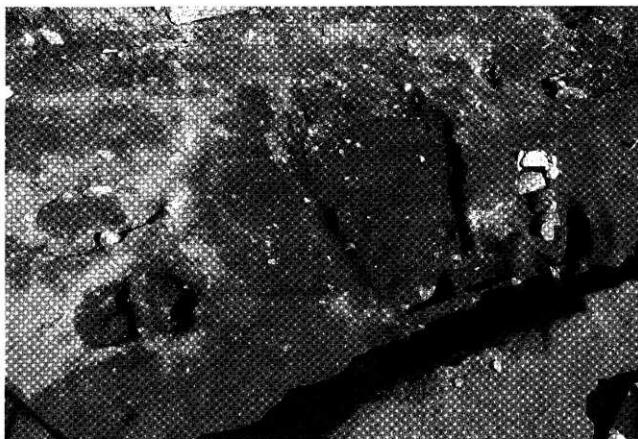
20-2 11号喪棺墓（西から）



20-3 14号喪棺墓（東から）



20-4 近世水路（南から）



20-5 1号木棺墓（西から）

三雲ヤリミゾ 2582、2583 番地④



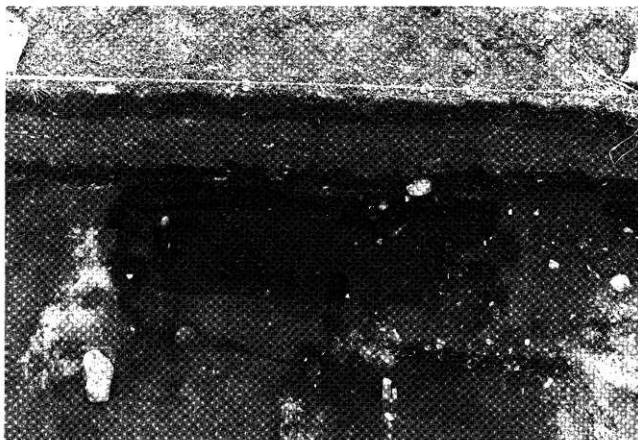
21-1 2号木棺墓（西から）



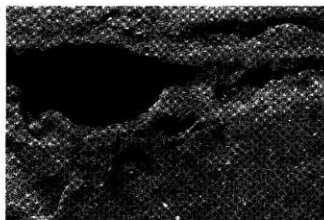
21-2 4号木棺墓（北から）



22-1 5号木棺墓（南から）



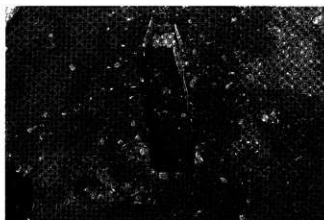
22-2 10号木棺墓（東から）



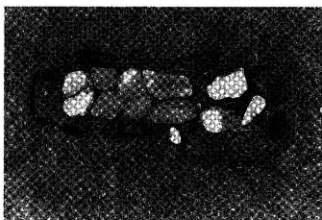
23-1 12号木棺墓(東から)



23-2 14号木棺墓(西から)



23-3 1号石棺墓(南から)



23-4 2号石棺墓(西から)



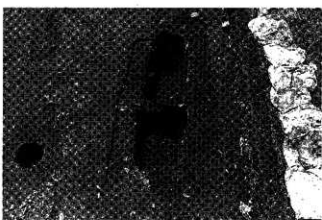
23-5 3号石棺墓(西から)



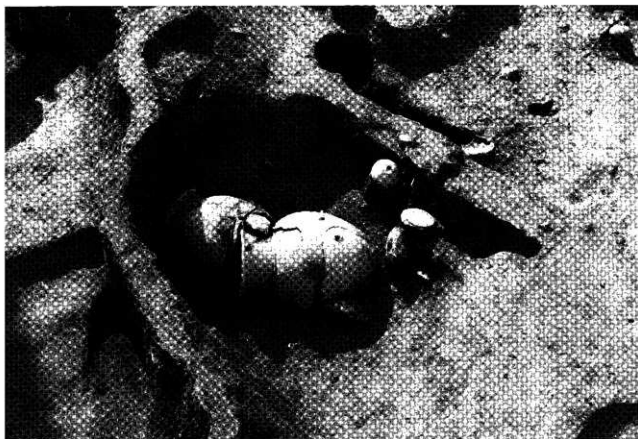
23-6 4号石棺墓(南から)



23-7 1号土坑墓(北から)



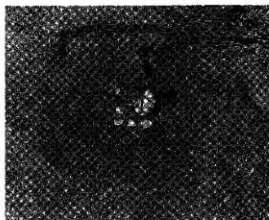
23-8 2号土坑墓(北から)



24-1 1号祭祀土坑① 大型壘山土状況(北から)



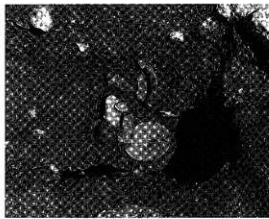
24-2 1号祭祀土坑②(北から)



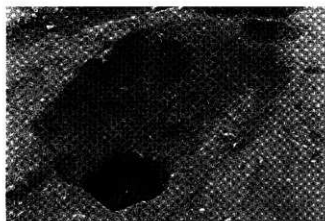
24-3 2号祭祀土坑(東から)



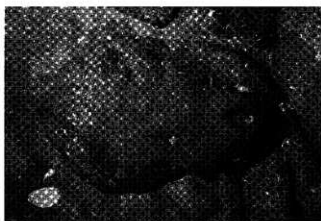
24-4 3~5号祭祀土坑(西から)



24-5 6号祭祀土坑(西から)



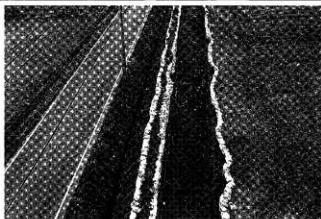
25-1 大柱 (北西から)



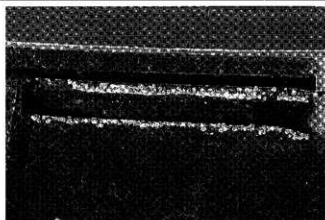
25-2 1,2号土坑 (西から)



25-3 3号土坑 (西から)



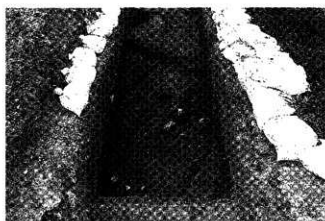
25-4 井原ヤリミゾ 2580、2581 番地全景 (北から)



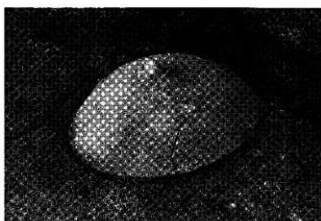
25-5 三雲峠 282、283 番地全景 (東から)



25-6 東壁土層 (南西から)



25-7 竪穴式住居跡 (北から)



25-8 住居内高杯 (南から)

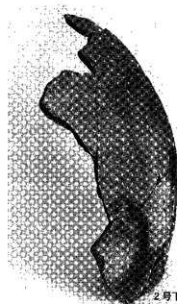
三雲ヤリミゾ 2582、2583 番地⑨及び井原ヤリミゾ 2580、2581 番地及び井原峠 282、283 番地



1号下



2号上 (B)



2号下 (C)



2号上 (A)



10-1



10-2



10-6



10-9



10-7



10-10



10-11



10-8

落込み



10-12



10-13



10-17



10-14



10-15



10-16



10-18

落込み

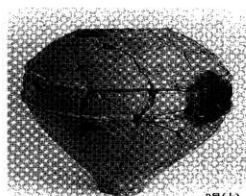
三雲下西 526-1 番地



12-2

集納私用

三雲下西 533 番地



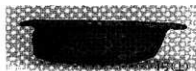
2号(ト)



2号(下)



3号(上)



4号(上)



4号(下)



3号(下)



5号(上)



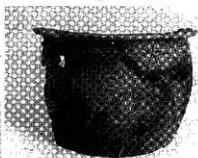
5号(下)



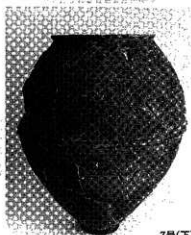
6号(下)



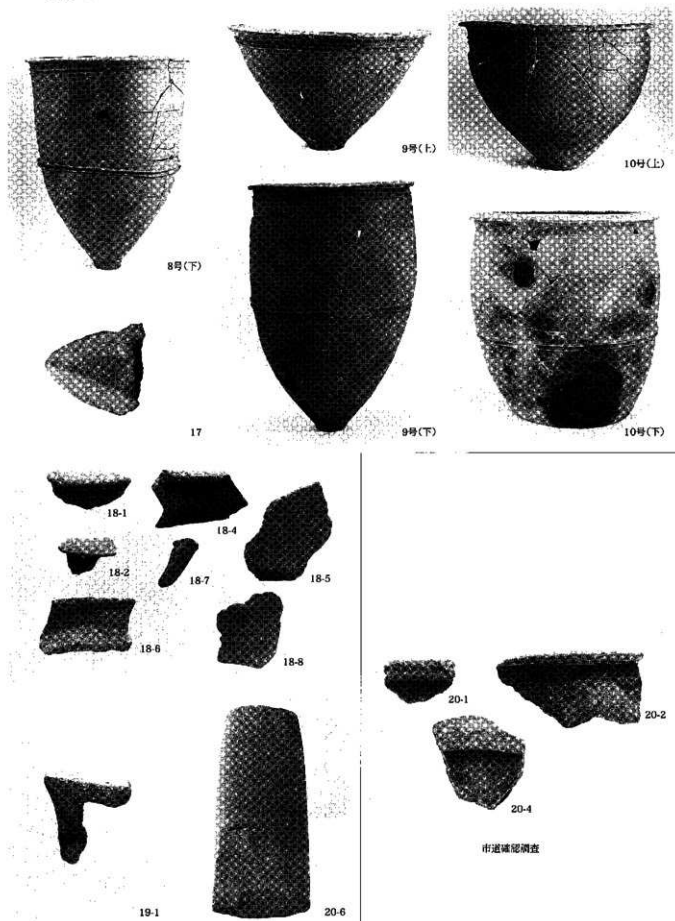
6号(上)

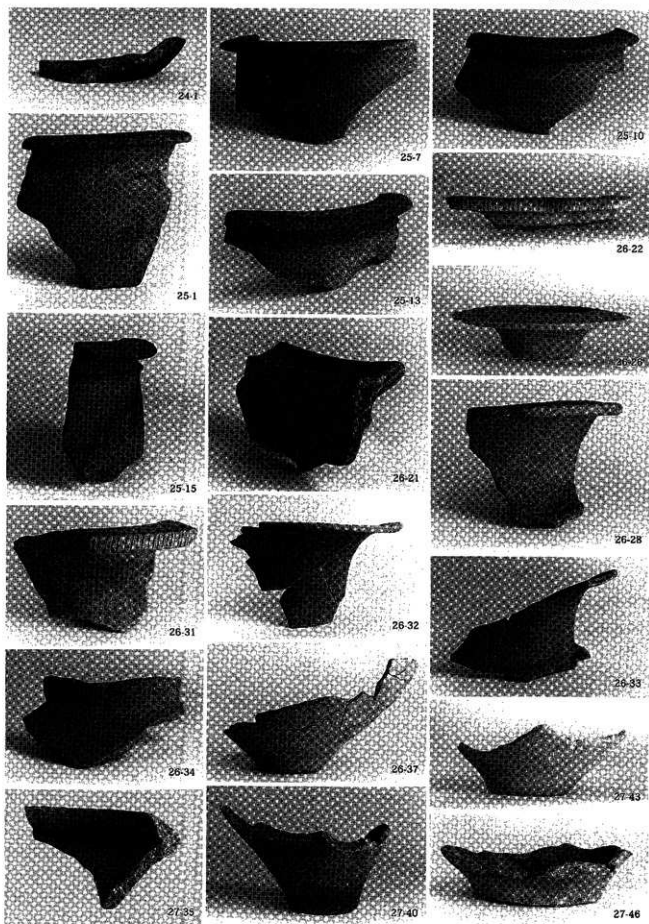


7号(上)

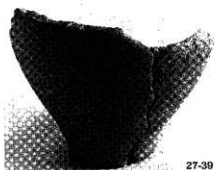


7号(下)





図版30



27-39



27-44



27-49



27-50



28-55



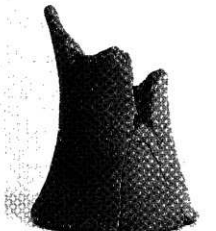
28-59



28-56



28-57



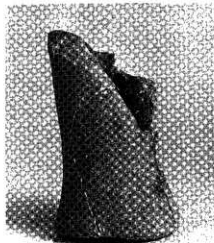
28-61



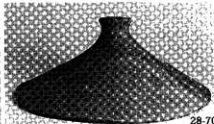
28-64



28-72



28-63



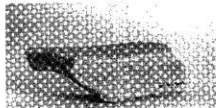
28-70



29-73



28-71



29-75



30-1



30-2



30-3



33-1



33-4



33-12



33-13



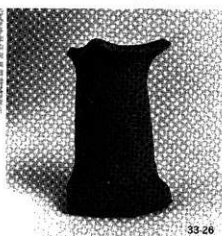
33-16



33-18



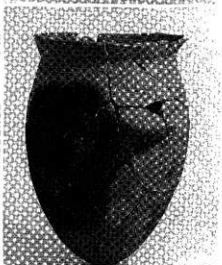
33-20



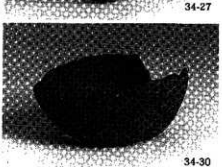
33-26



33-17



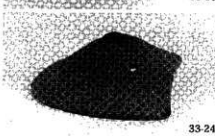
34-27



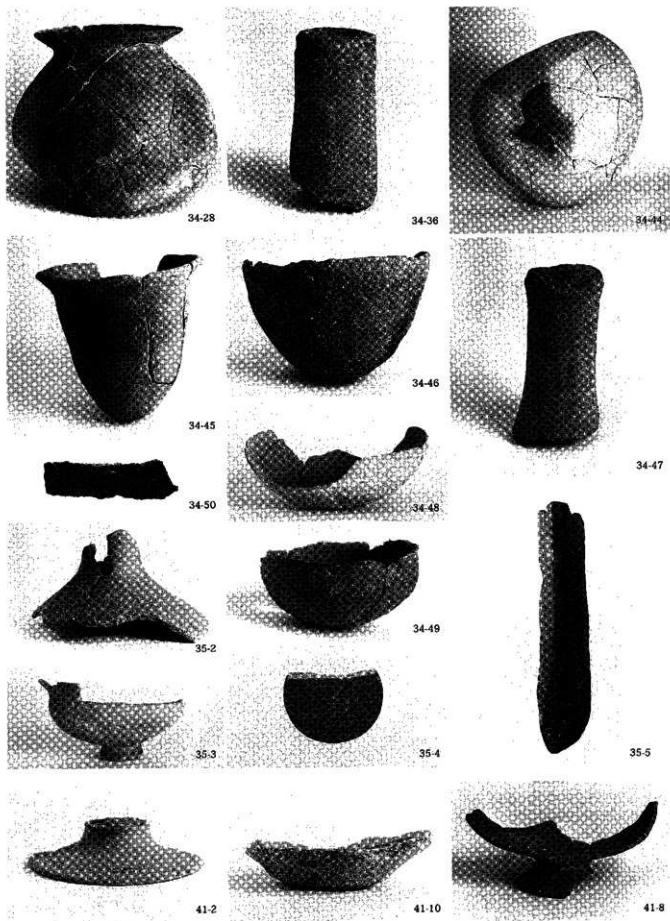
34-30

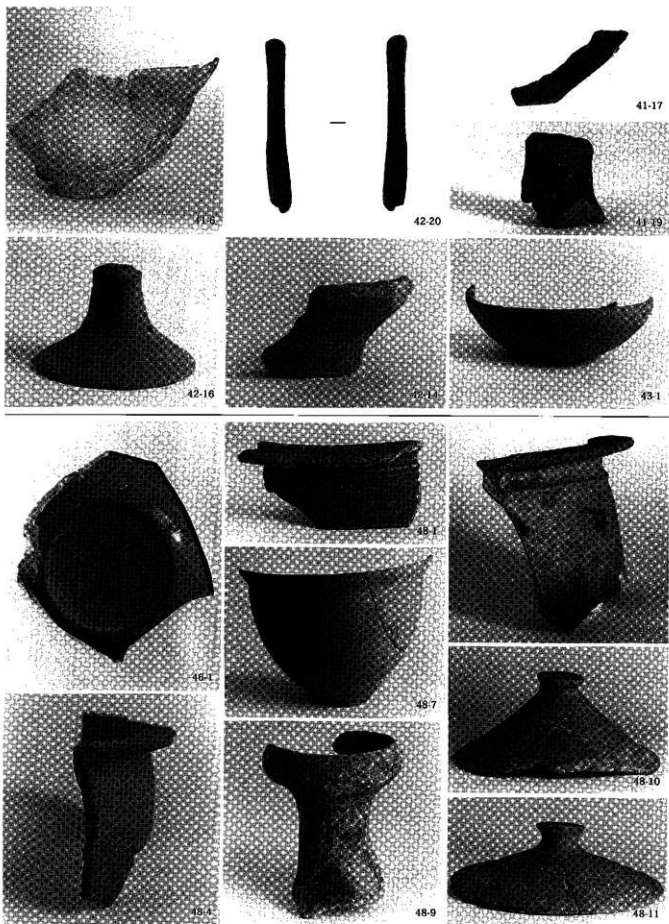


33-16

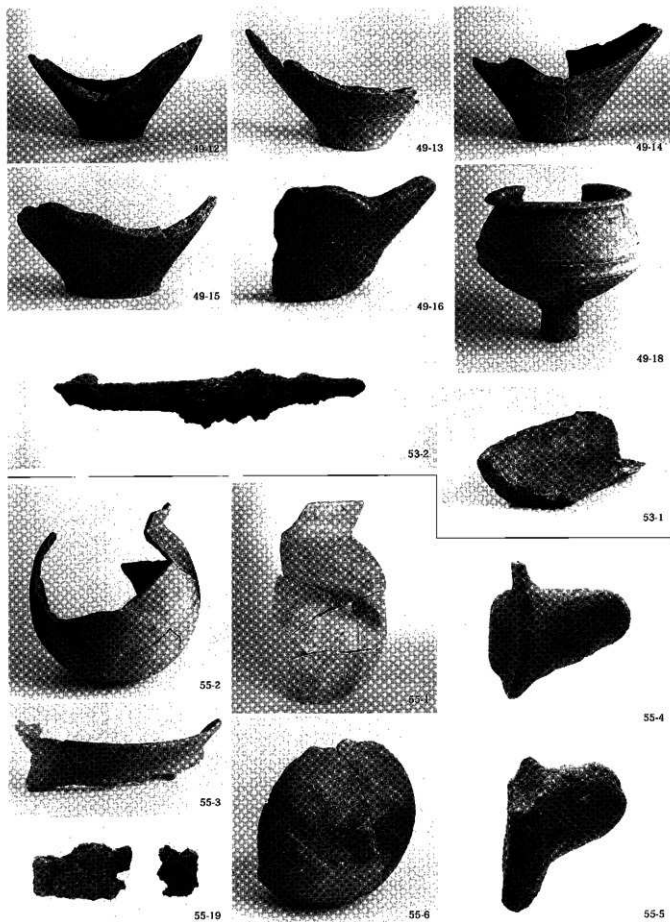


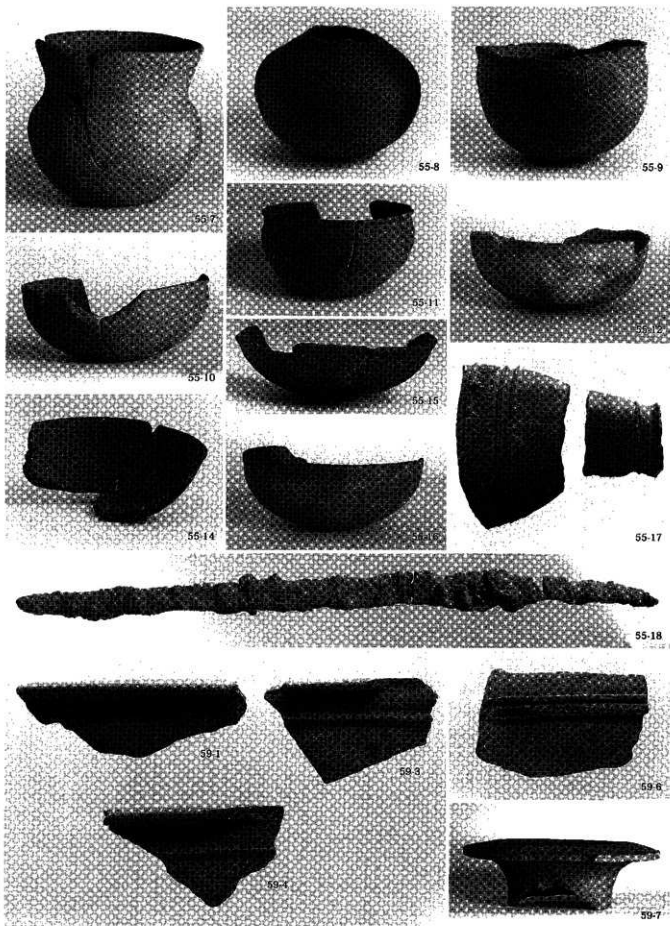
33-24

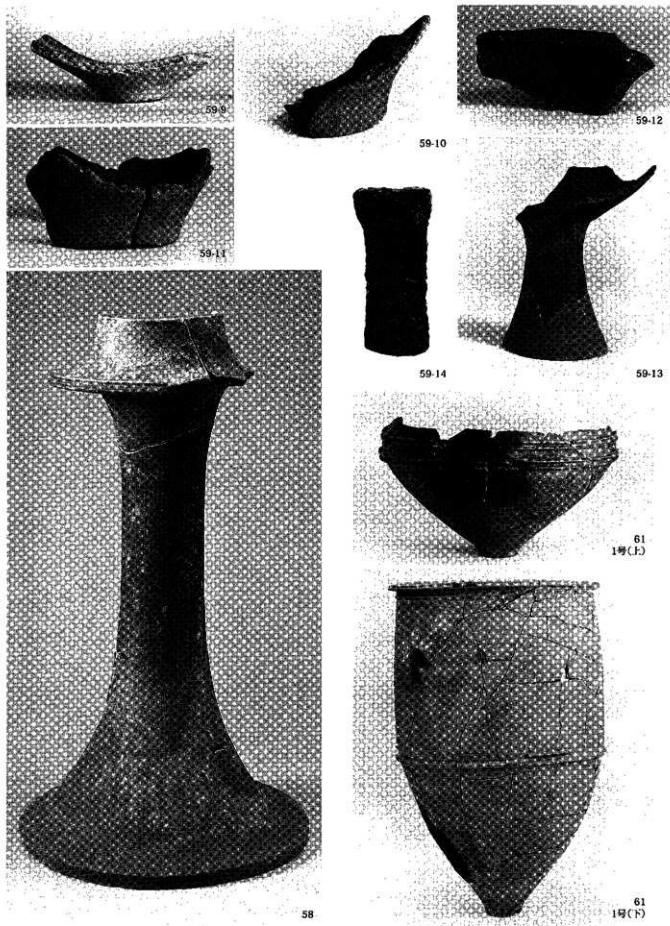


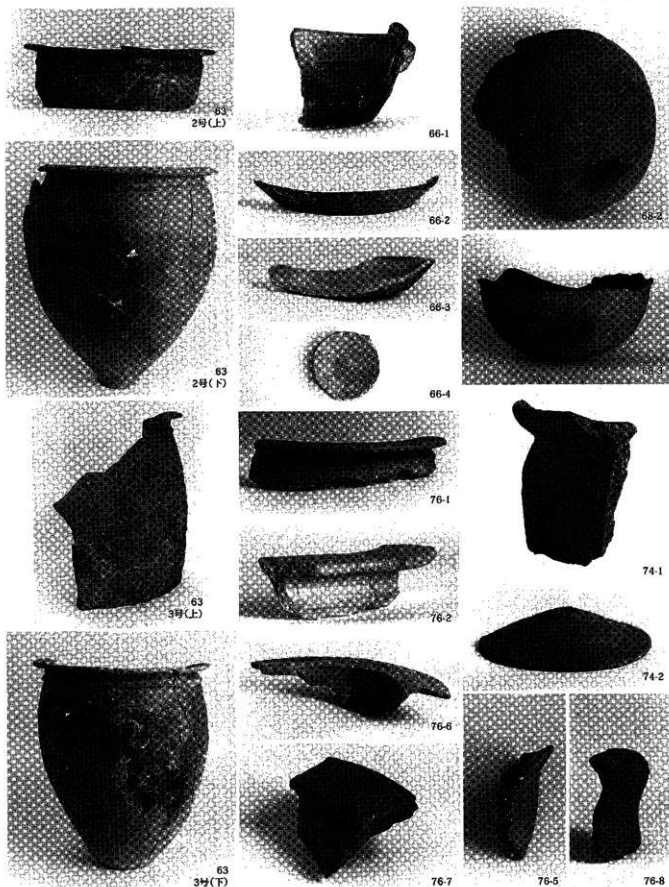


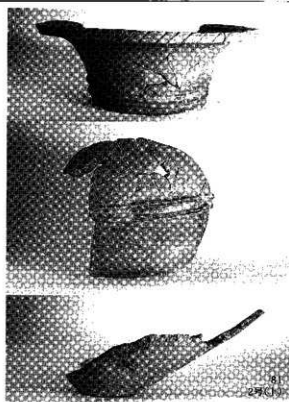
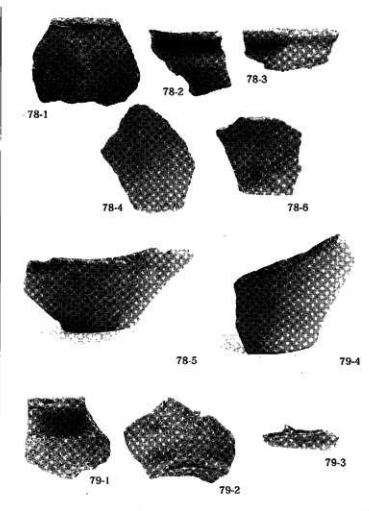
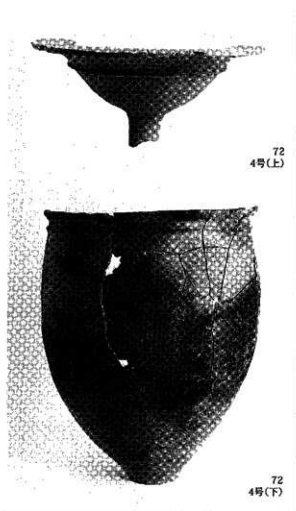
図版34

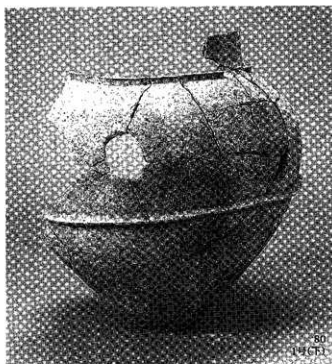




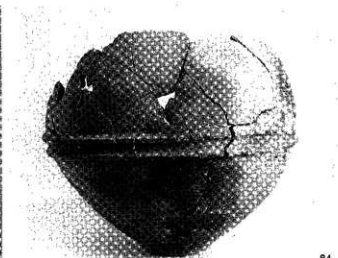








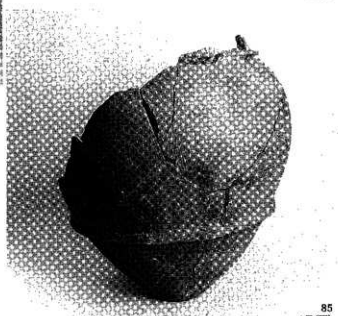
80
4号(上)



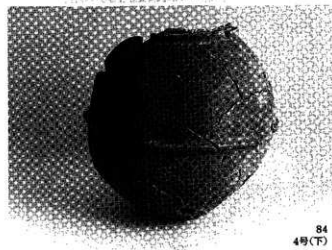
84
5号(下)



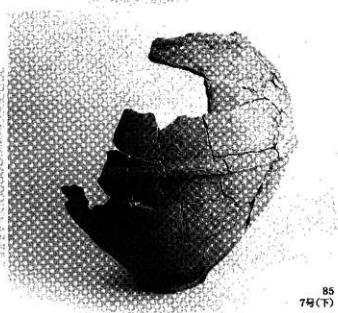
83
3号(下)



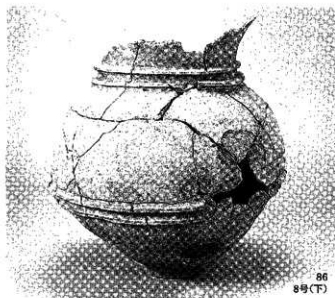
85
6号(下)



84
4号(下)



85
7号(下)



86
8号(下)



124-1



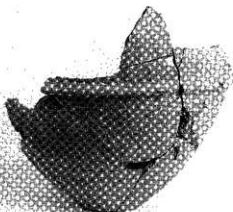
124-2



87
10号(上)



87
10号(下)



87
11号(下)



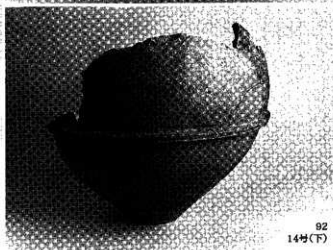
88
129(上)



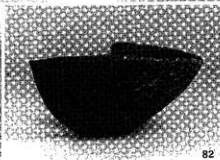
89
139(下)



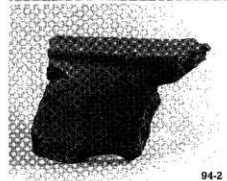
88
129(下)



82
149(下)



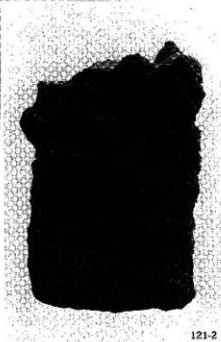
82



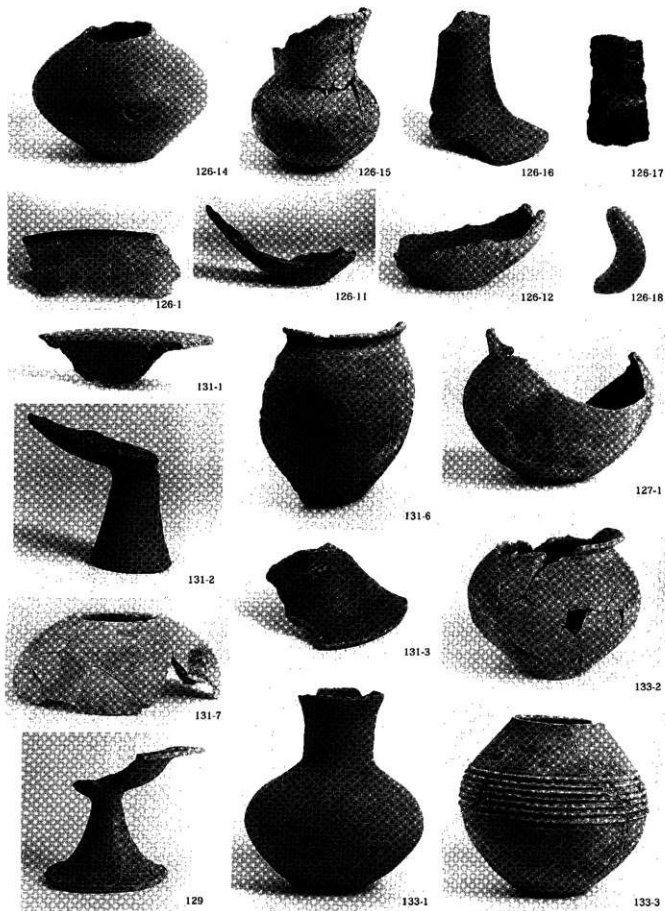
94-2

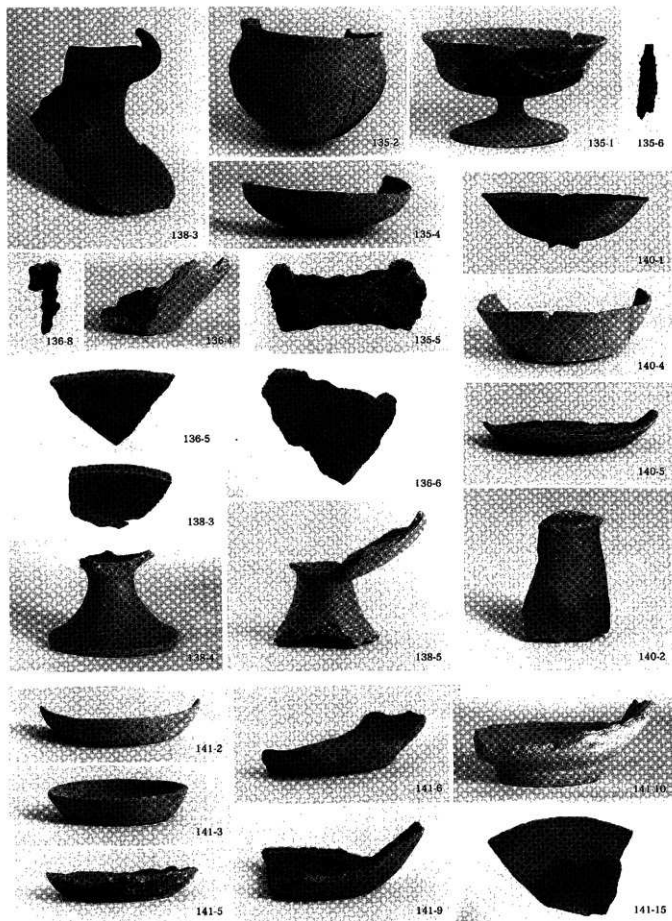


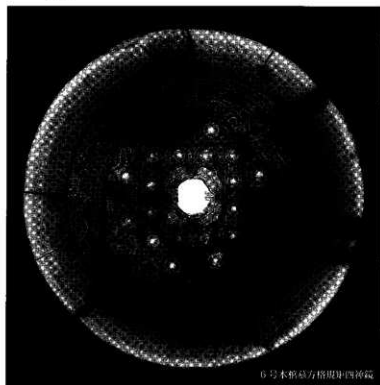
121-2



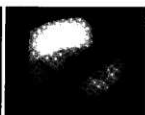
121-2







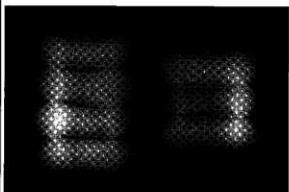
0号木棺墓方格規矩四神鏡



1号木棺墓内行花文鏡



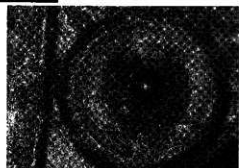
7号木棺墓内行花文鏡



蓮下・CR



方格規矩四神鏡
「L」ケズリ痕



方格規矩四神鏡
乳ケズリ痕



1号木棺墓
内行花文鏡
ケズリ痕



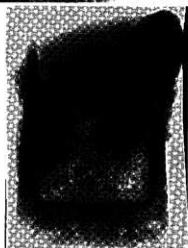
1号木棺墓
内行花文鏡
四葉所ケズリ痕



428番地
7区 銅鏡片



429番地
8区 銅鏡片



2582番地
8区 鑄造鉄弁

報告書抄録

ふりがな		みくも・いわらいせき							
題名		三雲・井原遺跡							
副書名		泉道瑞庵寺池田除道路拡張工事に伴う文化財調査報告書							
巻次									
シリーズ名		新原市文化財調査報告書							
シリーズ番号		第92集							
著者名		江崎靖隆・植崎直子							
編集機関		新原市教育委員会							
所在地		〒819-1117 福岡県新原市約敷西一丁目8番14号							
発行年月日		西暦 2006 (平成 18) 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
三雲・井原遺跡	三雲字井の川 529-2	40222		33° 31' 50" ~ 33° 32' 09"	130° 14' 33" ~ 130° 14' 43"	2003	15 m ²	県道拡張	
	三雲字下西 526-1					20040512 ~ 20041131	63 m ²		
	三雲字下西 533						84 m ²		
	三雲字中川屋敷 478-1、 479-1、537-2						140 m ²		
	三雲字中川屋敷 480-1						193 m ²		
	三雲字中川屋敷 471、 482-1						108 m ²		
	三雲字中川屋敷 426						64 m ²		
	三雲字ヤリミノ 428、 429						20050427 ~ 20050731		225 m ²
	三雲字ヤリミノ 434								310 m ²
	井原字ヤリミノ 2582、 2583						20041201 ~ 20050331		556 m ²
	井原字ヤリミノ 2580、 2581								270 m ²
	二雲字堺 282、283								35.7 m ²
井原字七夕 1095		80.2 m ²							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
三雲字井の川 529-2	集落	弥生	谷						
三雲字下西 526-1	墓地	弥生 中世	竪穴墓、落ち込み、溝		破鏡、弥生土器				
三雲字下西 533	墓地	弥生 古墳	竪穴墓、竪穴用土坑墓		石戈				
三雲字中川屋敷 478-1、479-1、	集落	弥生 中世	土器溜り、落ち込み、溝、土坑		弥生土器、土師器、青磁、白磁、滑石製石 剣、刀子				
三雲字中川屋敷 480-1	集落	弥生 古墳	竪穴住居跡、溝		弥生土器、土師器				
三雲字中川屋敷 471、 482-1	集落	弥生 古墳 中世	竪穴住居跡、竪穴建物跡、土坑		弥生土器、土師器				
三雲字中川屋敷 426	墓地	弥生	竪穴土坑		弥生土器				
三雲字ヤリミノ 428、 429	墓地	弥生 古墳 中世 近世	竪穴溝、土器溜り、竪穴墓、溝、土坑		弥生土器、土師器、須恵器、滑石製石 剣、鉄片				
三雲字ヤリミノ 434	墓地	弥生 中世	竪穴墓、溝、土坑、竪穴建物、竪穴住居 跡		弥生土器、土師器、白磁、滑石製石 剣、				
井原字ヤリミノ 2582、2583	墓地	弥生 近世	竪穴墓、木棺墓、石棺墓、土坑墓、竪穴十 字、土坑、水路		方格規矩四神鏡、内行花文鏡、ガラス玉 (小 玉、管玉、丸玉、連玉)、鋳造鉄片、條状 鉄片、弥生土器		井原藤原王墓 と関連する可 能性あり		
井原字ヤリミノ 2580、2581	集落	近世	水路		陶器、磁器				
二雲字堺 282、283	集落	古墳 中世	竪穴式住居跡、土坑		土師器				
井原字七夕 1095	集落	中世 近世	ピット、水塔						

三雲・井原遺跡

興道理梅寺池出線道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書 第92集

2006年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

印刷 有限会社 システム・レコ
福岡市東区土井1丁目11番21号
TEL 092-691-6150 FAX 092-691-6269

